



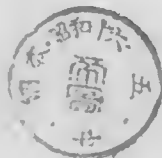
289
H77
2

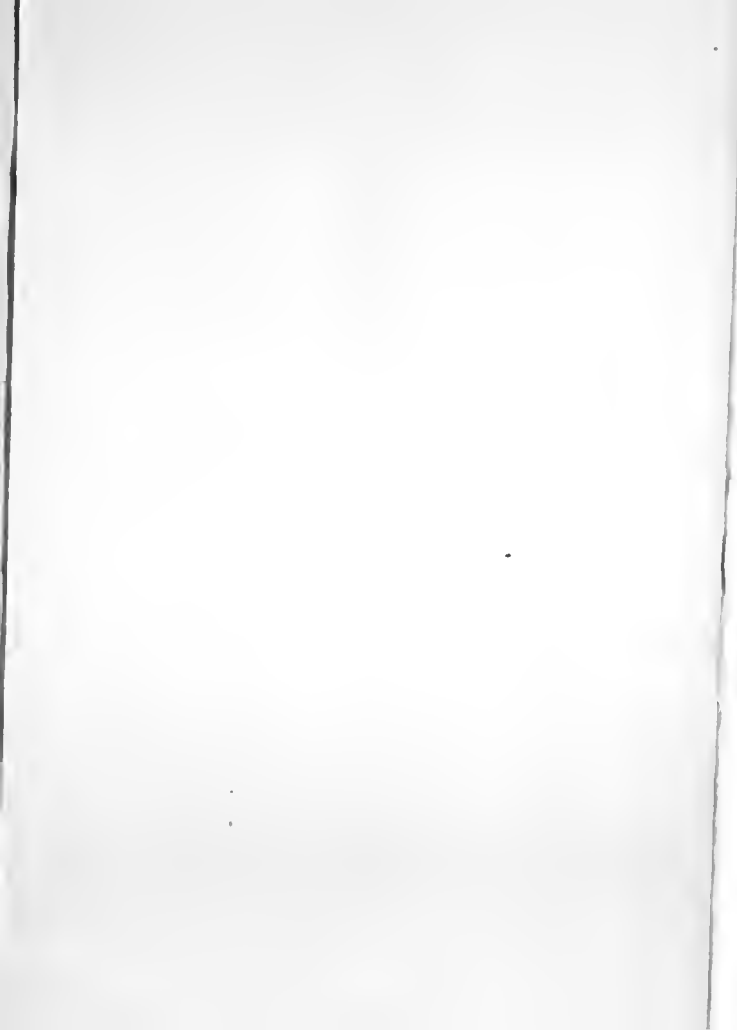
黒田禮二著



總統ヒツトラア

新潮社出版





序　　言

茲にヒットラーの傳記を書き上げた積りで、やつと一氣呵成のペンを擱いて——さて初めから舊地に讀み返して見たら……これは又變挺なヒットラー傳だなと自分ながら妙な氣がした。

變挺ではある。然し私は出來損ひとは思つてゐない。寧ろこれだつて惡かないと自信してゐる。といふのは元來私は人間の傳記を調べたり書いたりすることとは至つて好きな質だが、ヒットラーの如くまだ今年四十七歳にしかならない——謂はゞ畢生の大業中のまだやつと緒に就いたばかりの人物の——經歷を筆に物するやうなことは、實に生れて初めてなのだ。蓋し過去の英雄、例へばクロムウェルとかナポレオンとかの生涯を探索するのとは違つて、これから將來

がまだどう變るか分らぬ生存中の人間の「傳記」を拵へるといふのは、豫言ごとの下手な私にとつては怖ろしく荷が勝ち過ぎる。

それぢや餘計な野心は捨てゝ、素直にヒットラアが生れてこの方今日にまでの年代記クロニジを詳しく並べ立てりやいゝだらう……それなら又それだけで世人の參考にはなるだらう、と考へ直しても見たが、結局又それも止した。何故かといふに、今日ヒットラアに關する書物はそれこそ汗牛充棟もので、一々應接に遑はないに拘らず、昨日まで一介無名の士なりし彼が呱呱の聲を擧げてより大戦の終りに至るまで（即ち彼の三十歳に至る迄）の長い生立の記は、たゞ彼自身に依つて著された『我が戦ひ』を措いて他に一冊の文獻も存在してやしない。所謂汗牛充棟組は、假令どんな良書にまれ、それがヒットラアの生立の年代記略に關する限り、孰れもこの唯一の文獻を敷衍するか、焼き直すか或は孫引したかに相違ない筈だ。我國に於てもさういふ意味に於ける書物は、もう澤山世

に出てゐる。私の知つてゐる範圍でも、例へば澤田謙氏の名著『ヒットラー傳』の如きは『我が戦ひ』を克明に讀みこなし殆ど剩す所なく繰述してゐる。尤も私は同書が單に『我が戦ひ』を忠實にバラフレーズしただけのものとは言はない。否、寧ろ該著書自身が一個の燃ゆるが如き信念を持つて、ヒットラーの一舉一動を悉くその信念に合致するやうな英雄的な型に仕立て上げてゐる。それも一種の極めて良い觀方だし、同時に澤田氏の書物はさういふ目的によく叶つてゐるといふ點に於て、稀に見る良書に相違ない。

ちや私が今更改めて『我が戦ひ』を下手に敷衍し直すのも意味はないし、『英雄ヒットラー』の業績を一貫した理想の下に纏め上げるのも、もう蛇足以上の何でもあるまい。だからそいつは止さう。たゞ然し私には又私としての一種のヒットラー觀があり得る。勿論さう自慢するほど纏まつたものぢやないが、幸ひヒットラー氏には新聞記者として二度ばかり直接にお目にかゝつたこともあ

り、又國會やその他諸種の會議などで彼の得意の演説も可成り丹念に聴いた關係上、私としての印象、感想又は判斷といふものが切れくながら無いでもない。それを書き連ねたら、——假令固有の意味に於ける傳記としては邪道でも——慥くとも一種のヒットラアの「評傳」らしいものは書けるだらうといふ自信があつたのだ。それが即ち本書なのである。

「評傳」——と言つた所で、一個の人間の熱烈な意志と感情との火花をさう冷たい客觀的なメスで解剖して、ツベコベ皮肉や反語の文句を並べ立てることはこの際の私には出来ない。私も矢張りヒットラアは到底一種の「英雄」だと仰歎してゐる一人なのだから。で、英雄と言へば誰しも雲を呼び風を起す體の所謂風雲兒、即ち一個の龍みtainなものを想像するだらう。そしてその龍が颯爽として本當に龍らしく立派に見えるのは、その周圍の風雲を御してゐるからであつて、風雲なしに龍が地上を匍つてゐたら、單に蜥蜴か山椒魚の親方みたい

に間の抜けたものかも知れない。要は龍を描くためには、矢張りそれが乗つてゐる風雲からして判然浮き出させる必要がある。その意味に於て餘計なこととは想ひながらも、大戦後に於けるドイツの周囲の社會的政治的、事情を其處此處へ黒く塗りたくつて、その間からヒットラーといふ人物を浮かし出すことに苦心した。

それが私一流の觀方に據るこのヒットラー傳である。だが、そいつがうまく浮き出てるかどうか……。

昭和十一年一月

澁谷の寓居にて

禮 二 生

改版への序

わたしが獨裁王ヒットラーの題名で、その傳記をわたし流に書いたのは、彼が政權を獲得し總統となつたばかりの時であつた。それから今日まで相當の年月が経ち、世界狀勢も全く一變した。と同時にヒットラー總統によつて率ゐられたナチス・ドイツも、その當然斯くあるべき必然の道を辿つて、遂に今日の素晴らしい發展をとげた。その最近の華々しい發展の過程は、もはや讀者諸君の知悉するところである。今度新潮社の勧めによつてヒットラー傳を改版するに當つて、わたしは從來のものに、總統となつて後のことを現在に至るまで、極く簡單ではあるが加筆した。然しわたしの興味は猶依然として、苦難と戦ひ抜いたナチス黨勃興史にあることは言を俟たない。

今日ヒットラーが世界を動かす大きな一つの力となつてゐることを、誰しも否定は出来なからう。彼の一舉手一投足は世界の注視するところだ。しかも彼は、今日わが日本帝國の盟邦の元首である。彼が今後どういふ風にその理想を實現してゆくか、こゝにも亦彼の未來への興味、否、興味以上の大きなものが確かに存在する譯である。

目次

フィジオノミイ	三
運命	一五
後産の苦しみ	三三
一揆……叛亂……暗殺	四五
軍人主義	六六
所謂オベレック革命の真相	七九
出獄の直後	九六
民を知る者	一〇五
Schlagwortの都	一三三
議會制否定のための選舉戦	一五一

第一黨へ……………一七

大統領戦の表裏……………一三

ヘ・フォン・パーベン……………二七

「力」を缺いた獨裁……………一八

「忍び寄る危機」……………一九

一月三十一日……………一〇三

國民的高揚時代……………一〇〇

國民的革命時代……………三六

二十世紀の中央集權——アリア人條項——五月來れり——血と土——
一黨治國——叢書

S・Aの行方……………二六

「指導者」アドルフ・ヒットラー……………二六

ザールの勝利へ！	二七五
矢継早の爆彈宣言	二八五
ライン進駐	二九〇
日獨伊防共協定へ！	二九四
チエコスロヴァキアの潰滅	三〇一
獨ソ不可侵條約とポーランド殲滅戰	三〇六
宣言されたる平和	三一五
ノルウェー電撃作戰	三二〇
世界新秩序への巨歩	三三三



總統ヒツトラア

—大衆の閉せる心の扉を開けるには相當な鍵が要
る。それは客観性即ち怯懦でなくつて、寧ろ意志と
力の謂だ！

アドルフ・ヒットラー（『我が戦ひ』第一版三七一頁）

一、フィジオノミイ

それは確かに一九三一年ももう暮に押詰つた或る寒い晩のことであつた。

「ぢや、愈々聖誕節も近付いたな……これでベルリンの聖誕節を一體何度繰返すことになるんだらう？……十回目かしら、それとも十一回目かな？」などと、私はボンヤリした歳の暮らしい感慨に耽りながら、部屋の中から今やつと灯の點りかゝつたばかりの街頭を、じつと眺めてゐたものだ。二重窓越しに見える小さな廣場の片隅には真黒な外套の襟を立てた露店商人が、そこいら一面に並べたてた櫛の樹を指差しながら、頻りに通りすがりのお客を呼んでゐる。

付ると部屋の中の卓上電話が消魂しく鳴り響いた。受話機を執つて耳に當てがふと、案に違はずアッゲルーフ紙のG氏からだつた。

「ハロー、此方はGですが……實は只今ミュンヘンの鳶色館から電話がありましてね、例の一件に就いて……」

「例の一件といふのは、私がヒットラー氏に會見を申込んである件なんでせう？……でその結果はどうだと言ふんです？」

「結果は非常に良いのです…指導者^{フュルツァ}は喜んで貴下にお會ひしようと言はれる…だが會見の場所はベルリンぢやない。ミュンヘンなんですよ…ミュンヘンのブリエンナ街の鳶色館で…」

「さうですか？…だつてヒットラー氏は我々外國新聞記者に對しては、ベルリン「カイザーホーフ」の事務所以外ぢや會見しないことに極つてゐる筈でせう？」

「左様。指導者もその積りで昨日までベルリンにゐられたのですがね…所が大變な急用が出来て先刻^{さう}もう飛行機でミュンヘンの方へ發つちまはれました。」

「大變な急用？…何です？…シュトラッサー氏の態度にでも關する…」

「いや、そんな事はどうでも宜しい。私の使命は鳶色館からの言告^{ことづひ}を單に貴下にお傳へすることだけなのです。要するに御迷惑でも貴下は今夜の夜行で、早速ミュンヘンへお立ちになつて下さい…そして會見に關する詳細は、鳶色館の情報部長ドクトルHと前以てよく打合せて下さいとの事です。私の要件はそれだけ…ぢやこれで失禮します…ハイル・ヒットラー!!」

で、私はG氏の勧めのまゝに早速アンハルター停車場からミュンヘン行の特急に乗ることとした。實はその當時のアドルフ・ヒットラーと言へば、まだ政權こそ取つてゐないが、ブラウンシュバイクに於て私軍「突撃隊」の大群を閲兵し、ハルツブルグに於てフリーゲンベルク一派とブリュニンング内閣打倒の同盟を結んで、大統領ヒンデンブルグと第一回の會見をやつたばかりの

際とて、尠くとも世間的には、もう慥かにセンセーショナルな話題の對蹠ではあつた。それも昨日までは一介の政治的野武士として、ベルリン人の諸諺や冬のカフェー又は舞踏會裏の休憩時間などに話の種を提供する以外、殆ど常識的には眞面目な問題にならなかつた彼が、今日この頃ちや國民社會主義の一舉一動をして、政界一切の動向を示唆する唯一のパロメータに變へしめた感さへあるのだ。ムツソリーニの「ローマ進出」に匹敵すべきヒットラの「ベルリン進出」は孰れ近いうちに起るだらう……などの知つたかぶりな豫想は、もう役に立たぬ昔の夢となつてゐた。だつてヒットラは現に今ベルリンの中央政府の鼻ツ先にある「ホテル・カイザアホーフ」の二階を全部占領し、國民社會黨の交渉本部を設置してゐるのだ。それはヒットラの「私政府」であつた。一介の野人ヒットラは今やS・Aといふ「私軍隊」を持つばかりか、政權を掌握しない前からもう國家の中に國家を作つて、一個の立派な「私政府」を拵へてゐるのだ。その中には内務、大藏、經濟、文部は言ふに及ばず、更に外務省に該當する部分さへあつて、現にその當時は、外交使節としてローゼンベルグをロンドンへ派遣してゐるのだから凄い。

そのヒットラが「カイザアホーフ」に所謂私政府を立てて以來、本來人に會ふのが大嫌ひの彼が、初めて外國の諸新聞記者に會見を許し始めた。それは國民社會主義を外國人に正しく理解して貰ふための、一種の宣傳だつたには違ひない。然し如何に宣傳とは言へ、その當時のヒット

ラアはまだ誰にもかれにも總花を振撒くやうなお愛想は決してしなかつた。第一フランスの記者なんかには絶対に會はない。フランスにポアンカリズムの支配する間、ヒットラーはフランスを不俱戴天の敵と考へてゐたからである。それからソヴィエトの記者にも全然會はなかつた。それは共產黨撲滅を天職と考へる彼としては勿論當然の話だらう。その上矢鱈に小さな國のヤクザ新聞の代表者や、又假令新聞は大きくつても代表者がユダヤ人である場合には、絶対に引見を肯じなかつた。單に皮肉やセンチシヨンに題材を提供する以外何等得る所がないからである。實は彼の好んで會見を許したのは、たゞイギリスとイタリアの一流記者だけだつたのだ。

ちや「日本」を彼は一體どう取扱ふだらう……といふのが特に私の興味を引いたものだから、私はアングリッパの記者でヒットラーの秘書の一人なるG氏を通じて「カイザアホーフ」で一つ會つて下さらんかとの申込みをしておいた次第である。所が前にもいふ通り、會ふには喜んで會ふが然しミュンヘンでとのこと……

でミュンヘンへ到着した。

早速ブリエンナア街のグリプトテークに近い寓色館を訪問すると、制服禁止の當時なるに拘らず、半制服に長靴の壯漢が物々しく警戒の任に當つてゐる。階段の下や廊下を往來するこれ等の

巨漢が左右から會ふと、まるでベネ仕掛の鋼鐵人形の如く、靴の踵をカチンと合せ、左手で腹の革紐をしツかと掴み、眞直ぐに伸ばした右手を空高く差上げて「ハイル・ヒットラー！」と双方から叫び合ふ。叫ぶといつたつていゝ加減の聲ぢやない。まるで鼓膜も破れるやうな、咽喉^{のど}も飛び出すやうな怒號なのだから吃驚^{びくろ}して度膽を抜かれた。うつかり聞いてゐると Helldorado ともも言つてゐるかのやうに響く。これが所謂黨員の挨拶で「やア今日は」とか「よオ君、どうだい」の代りに使はれるんだな。それにしちや怖ろしく堅苦しい挨拶だなとホト／＼感心した。總^{まづ}て赤字に鈎十字^{かぎじ}の幔幕、旗幟^{はたのぼす}、壁掛の濃厚な彩りの中を潜つてやつと事務所の部屋へ遣入つてみると、ベルリンから照會してくれてあつたといふ H 氏が姿を現はした。

「折角來て下さつてお氣の毒千萬だが、實は指導者はミュンヘンに歸ると二時間ばかりこゝに居て、それから又飛行機で急にベルリンに引歸されましたよ。矢張りそれも黨の大變な御用件だから萬^{ばん}已^いむを得んです。貴下が會見をお急ぎなら、又そのまゝベルリンへお引揚げになつてもいい、が指導者は遅くも明後日迄には必ず此方へ歸つて來られるさうですから、宜しかつたら、それ迄緩^{ゆる}くりミュンヘンに待つてゐて下さい。宿^{しゆく}はヘアツォークウィルヘルム街の「ライヒスアードラア」といふ所へ、取つておきましたから……」

落膽^{おちだん}した。まるで謎^めごつこみたいになつて後から／＼追ひ掛けてゐたつて際限がない。まゝよ、暫く

ミュンヘンに御輿を据ゑて久し振りに寒いイザール河畔の河風にでも吹かれたあと、あのヒット
ラーが一揆を起し損ねた麥酒店「ビュルガアブロイ・ケラア」に這入つて、黒ビールに揚腸詰の
御馳走にでもあづかつてゐようかと決心した。外にはもうチラ／＼粉雪が降つてゐる。街頭では
スキーを擔いで、停車場に急ぐ眞赤な頬べたの少年達の大群に出會ふ。乾庭すつとガルミシュ・バルテ
ンキルヘンのシャンツェにでも行くんだらう……。

決められた宿を出て、序ながら私は兼々から畏敬するミュンヘン大學地理學教授ハウスホーフ
ア將軍たし（慥か四五年前故人となられた）をお訪ねした。將軍は實に酔へるが如き「日本の歎美者」
であり、學問界のラフカヂオ・ヘアンであつた。嘗てバイエルンより駐在武官として日本に來り、
伏見聯隊附外國將校として勤務する傍ら――慥かその時分、後の滿洲で驍名せうめいを馳せた本庄大將の大
尉時代の親友であつたといふが――徹頭徹尾ドイツ人らしい學問的良心を以て、我國の地理學を採
究ちゆうきゆう研究した。その結果を纏め、それに且つオリヂナルな體系を立てて學界に發表されたのが、か
の世界的名著「太平洋の地理政治學」である。その頭腦明晰にして創意的なるに驚いたミュンヘ
ン大學は、辭を低うしてこの碩學せきがくを全大學の地理學教授に迎へた。蓋し現に將軍の肩書ある陸軍
將校で、然も大學の正教授を兼ねた人物は追のドイツにも初めてであつたらしい。

將軍御夫妻の手厚き饗應もてなしを受けて恐縮した私は、自分がミュンヘンに來てゐる理由が國民社會

將軍御夫妻の手厚き愛戀を受けて恐縮した私は、自分がミュンヘンに來てゐる理由が國民社會

主義指導者ヒットラーに會見するためであることを打ち明け、一體その際は彼にどういふ質問を提出したらいいだらうか、といふことを参考のために訊いて見たりなどした。

やがて將軍邸を辭して宿に歸つた私は所在なさに小さなレヴェー劇場をひやかし、そこで退屈な冬の夜長を無難に空費することに決めた。劇場に掲げられた外題は「ワイス・ス・エッス白い小馬」となつてゐる。それなら既にベルリンで一度見たことのある有名なオペレッタだなどと思つたが、その内容はバイエルンの方言だらけな會話と歌との滑稽な交錯なんだから、或は本場のミュンヘンで、味ひ直してみても却つて面白からう。よし斷然這入つてやらう、と私は切符を求めてその劇場のボックスに收まつた。

すると儘か二幕目か何かの幕が下りた頃だと思ふ。場内案内の男が突然バイエルンの田舎者らしい無遠慮な大聲で「日本の紳士の方ツ：日本の紳士の方ツ：この常劇場へ日本の紳士の方が見えてゐられるなら、玄關に御面會人がありまゝすッ」と嗷鳴りやがつた。勿論、周圍の觀客は振返つてジロ／＼私の黄色い顔ばかり見てゐる。私は苦笑しながらコソ／＼劇場の入口へ出た。

見ると外にはH氏が外套の襟を立てて、一人寒さに顫へながら立つてゐる。實はもつと早くお傳べしようと思つたが、御遊興のお邪魔をしちや濟まんと思つて、幕間の休憩時間が来るまでこ

こにじつと待つてゐたといふ。それは寔にお氣の毒なことをした……一體何の御用です……と訊いて見ると、いや、指導者がベルリンへ往つたかと思ふと、又飛行機で今ミュンヘンへ歸つて來られた所なんです……今度は早速お會ひしますから明朝九時半に鳶色館へ御足勞を願ひたい……いろいろ手違ひで貴下に冗な時間を使はせて濟まなかつたと宜しくお詫びを言つておいてくれ、とのことでしたといふ。

それは何とも忝けない、でも貴下が態々こんな劇場まで夜遅く足を運んで來られなくとも、一寸電話で宿へさう傳へておいて下すつても宜かつたでせうに、と恐縮すると、いや宿へも電話はかけて通知しておいてはあるが、なほ念のため直接お傳へした方が貴下も安心されるだらうし、それに又何か手違ひが起りでもすれば、貴下みたいな外國の紳士にドイツ人といふ奴は約束を重んじない誠に當にならん人間だとの印象を與へるのが辛いので、矢張り直接にやつて來たのです……宿の番頭の話ぢや何でも貴下は芝居でも見に行つてくると言つて出られたといふ……それぢやどつかに屹度さつとゐられるだらうと思つて、今迄ミュンヘン中の劇場から寄席から活動に至るまで、眞潰しに覗いて歩いてゐたんです、との返事である。

H氏は今ぢやヒットラー内閣で、押しも押されもせぬ錚々たる政治家だと考へるにつけても、その時の薄汚ないニッカアを穿いて、寒さうにレヴェー小舎の外に立つてゐたH氏の姿が今更の

やうに想ひ出される。

で翌日の朝の九時半。私は今鶯色館の「指導者の間」で大きな桌子を中へ挟んで、初めてアドルフ・ヒットラーなる人物に對坐した。

今私の眼前には――日本人なら勿論大男の部類に入るのだがドイツ人としては――先づ中肉中背の壯年紳士が、鈎十字の腕章と鐵十字の勳章一つ以外には裝飾は愚か、まるで贅も弛みもない茶色地の折襟、詰袖式上着をキチンと身に着けたまゝ、些かの愛嬌もなく黙つて坐つてゐる。

ドイツ人の中肉中背と言ふからには、私は勿論實際に量つた譯ぢやないから責任は持てぬが、先づ目方にして百四十封度（七〇キロ）、身長にして一米七〇から七二くらゐのものかとの見當をつけた。この見當は後になつて多少ぐらつきはした。私が第二回目に宰相となつて後のヒットラーと會見した時（一九三四年の春）には、双頬から肩の圓味から腹の恰好までまるで見違へるやうに肥つてゐたから、それから更に五六年を経過した今日この頃では或は七〇キロくらゐぢやきかぬかも知れぬ。それでも彼がゴエリングみたいな肥大漢の側に竝んで立つと今でもなほお話にならぬ程細つそりして見えるだらう。又彼がヘッスだの、乃至はシャハトやローゼンベルグなどといふ見上げるやうな幕僚を左右に従へた時は、殆ど頭だけ小さいやうな氣がするし、反對に

飛び抜けて小男のゴエッベルスと一緒に歩いたりすると、まるで一米七五どころぢやきかないやうな大きさに印象される。先づ無難な評價としては、イタリアのムッソリーニよりは少しく大きい。かそこいらかの背丈と見れば、大體間違ひがないだらう。但しムッソリーニの方が脚が短くつて、まるで四角な重箱を立てたやうな感じがするのに反し、ヒットラーは頭と胴體と四肢との割合が餘りにも、よく取れすぎてゐるので、従つてグロテスクな魁偉性には乏しい。要するに、良く言へば均整のとれた、悪く言へば特長のない軀幹の持主なのだ。

顔から受ける印象も亦それと同様である。その圓味ある鼻、その切目の割合に狭い唇、その聳え立たない耳、そのなだらかな楕圓に消えた二重顎等、孰れも割合に判然した線を劃してゐるやうに見えて、その全體を統合してみると、不思議にもすべてが平凡に見える。だから彼は決して「好男子」ぢやない。勘くとも「好男子」の特長たる感官的な魅力が總體的に缺けてゐる。彼の髪は毛は房々しく一種の特長ある平たさにピツタリ額を覆つてはゐるものの、それは後天的に撫でつけた彼の下手な嗜好だらうし、第一その色が眩しい金髪でもなければ、漆の黒髪でもなく、極めて鈍い栗色なのだ。又彼の髪はとみれば刷毛の如く兩端を短く刈取つてある。世間ではよくヒットラー型などといふものもあるが（然も最近には下から上へ逆に撫で上げてゐるので一寸以前のカイゼルを髣髴させる面影はあるが）、一體刷毛型は大戦直後のドイツに於ける十中八九の

有鬚男子が蓄へるのを常とした平凡極まる立て方であつて、米國式の童顔や、有鬚ならばマンジュー式のチヨボ髭くらゐが横行する現下の情勢から判斷して、一時は甚しく時代後れの感さへあつた。

要するに彼には鬍氣た所も間の抜けた愛嬌もない代り、又反對に秋霜烈日の如く犯し難い表情もない。従つて彼といふ人間は普通一般の勞働者であつてもよいし、又企業家の手代であつても差聞へない。：或は麥酒屋やレストランの主人だと言つても通用するだらうし、いや相當なお役人だと言つても別に可笑しくないだらう。然り、彼は平均した「人民」である。ふと私はドイツ人をみんな寄せ集めて、その全數で割つた商を求めたら、屹度ヒットラーみたいな恰好の人間が出来あがるに違ひないと思つた。だからこそ彼は今、眞の「人民指導者」だ！

と考へながら、私はなほつく／＼と彼の顔を讀めてゐた。所がその茫洋たる無輪廓の平凡さの中から、不意に私は彼の特長ある性格を如實に物語るに足る二つの驚くべき例外を發見した。それは彼の瞳だつた！それから彼の聲だつた！げにこの二つのものこそ彼のフィジオノミーの一切を零細に表徴する。

彼は實際言ふに言はれぬ獨特の瞳を持つてゐる。それは單に炯光爛々たる準の鋭さを現はす、と言つただけぢや物足りない。それ以上にそこにはなほ無限の理想に憧れる潤ひが漂つてゐる。

一方彼の音聲はたゞ破鐘やれがねの如く大きなバリトンで、Rの顔音けんおんが耳觸りに強く、又B、P等の發音に鋭い唾を飛ばすウィーンの訛だといふ特長以外に、これ又言ふに言はれぬ一種の調子が響き渡る。それは確かに無限の彼方への呼掛けだ。彼は到底イデアリストである！彼の臍は彼の心臓の影であり、彼の言葉は彼の魂の反響へんきやうに過ぎない！私は彼の臍を睨め、その音聲に耳を傾けてゐるだけで、もうこの人物は天成の詩人であり藝術家ではあり得るが、決して理論家でも科學者でもないことを斷定した。さればにやテオクラシイの世にあつて、神の豫言者だけが一流の政治家たり得たといふ意味に於ては、彼もまた最大級の政治家だらう……聖賢の世の支那にあつて、眞の文人墨客のみが嘗て政權の廟堂に立ち得たといふ意味に於ても、また彼は稀世の政治家たるに相違ない……。

これが私のヒットラー總統に、初めてお目にかゝつた時の、今にも忘れがたない強い印象なのである。

二、運

命

アドルフ・ヒットラーは一八八九年四月二十日墺太利側に屬する（ミュンヘンから東に當る）國境の小邑ブラウナウに生れた、幼にしてカトリック的な初等教育を受けた後、上墺太利の小都會リンツで實科中學の課程を経たといふ。

父は些ちやかな恩給暮らしの小税關吏であつたため、將來の彼を官吏に仕立てよう并希望したに反し、小アドルフは十一歳の子供心にも執拗にこれを嫌ひ、美術家か建築技師になりたがつて、常に父親と爭論を續けたものらしい。然るに父親は彼が十三歳の時この世を去り、然も十六歳にして最愛の母をも失つた。要するに一介の孤兒だ。

そこで天涯に寄る邊なき身の彼は、家財を賣つた五十グルデンの金のみを懷にして墺太利の首都ウィーンにやつて來た。この地で彼は漠然として繪描きになるために繪畫學校の入學試験を受けたのであるが、旨くパスしなかつた。それぢや繪がいけなければ、何かそれに近い圖案かそれとも建築に係した職業に依つて身を立てようと決心はしたもの、さう言ふ方面の學校に遣入る金がない。仕方なく彼は建築師の見習工又は臨時勞働者として激しい苦惱の五年間を送つた。

「飢餓こそは私の側を片時も離れぬ惨酷な親友であつた」と、彼自身に述懐してゐる程だから、その間餘程酷い生活をやつてゐたものと見える。

然しそれでも彼は餘程風變りな青年であつたと見えて、ドン底の労働者に有りがちな酒色に身を持ち崩すやうな趣向や興味が全然なく、たゞパンを節約する少量の給金で以て手當り次第に書物や新聞雑誌を購讀し、又唯一の娯樂としてワグナーもののオペラの立見に熱中したものゝ如くである。そのうち知識慾が次第に増大して、或は宮廷博物館の繪畫館を見物し、或は奥匈國の國會議事堂を訪ねたりなどするうち、いつとはなしに、彼はゲルマニズムに對する熱愛的信仰を握み、同時にユダヤ人問題、社會政策、國家組織の基礎知識等をセルフメード式に修得することが出来た。従つて彼は二十三歳の頃にはもう彼の今日の性格と知識とを基礎づける汎ゲルマニズム、排セミチズム、排議會主義、反マルキシズム等の熱心な信者になつてゐた。

一九一二年、彼は奥匈帝國の國家的生活に希望なきと、又ウィーンの廢癩氣分に嫌氣がさしたため兼々から懂れてゐたバイエルンの首都ミュンヘンに移り住んだ。それから一九一四年に大戰が勃發する迄、彼はこの町で雑誌や新聞にカットや挿繪を描いて生活してゐたのである。

懷ふにブラウナウ生れだといふからには、彼は正しく舊奥匈帝國國民だつたに違ひない。

彼は正しく舊奥匈帝國國民だつたに違ひない。

然しブラウナウの附近は地理的・文化的環境から見て、どうしても純粹の南獨系統に屬する。一體奥太利のドイツ人は人情習慣その他の傳統から判斷すると、ウィーン系統の人間とバイエルン・ヴュルツテンベルグ・リッポルト系統の人間に區分することが出来るだらうと思ふ。例へばブリュン、リンツ、グラーツ、プレスブルグ等の附近に散らばつた地方のドイツ人は、どう見てもウィーン文化の影響を受けて骨の髄までウィーン人式であるが、一方ヒットラーの郷里たるブラウナウからザルツブルク、インスブルック等の一帯にかけてのドイツ人は、どう見てもウィーン系ぢやない。骨格から態度から物腰から性癖まですべて純然たるミュンヘン系だ。勿論ヒットラーの言葉には今日もなほウィーン訛があるが、それは彼がリンツやウィーンに住んだことのある後天的な名残であつて、彼の本質は到底バイエルン人かシュワベン人か、それとも一步譲つてチロールあたりの人間の型を代表してゐる。そして彼にはスラヴ系のプロイセン臭い所が微塵もない。頑固に見えても、その物腰に一寸柔かな融りがある。だがその柔かさはウィーン式のエレガンスではなくつて南獨式のそれなのだ。その點でヒットラーは矢張り純粹のバイエルン人と見た方が穩當であらう。ヒットラーがウィーンを嫌つてミュンヘンに來たがつたのも無理はない。世にはヒットラーを奥匈國民として節操なき脱走者の如く罵倒するものもある。然しそれは脱走ではなくて極めて自然のオクソドスだ。ミュンヘンといふ故郷に歸つてこそ彼には眞のドイツ民族

的愛國心が天啓の如く復活し始めたのである。

次に若き日のヒットラーの傳記を読むと、表面彼の教育の貧弱さが眼立つ如く見える。従つて、共產黨の碩學（オーストリア）や市民階級のインテリなどは、まるでヒットラーを無學文盲（オーストリア）の労働者かなどの如く笑ふ。又ヒットラー自身もその點を時々痛感すると見えて、單に名目だけの學歷持を反語的に激しく罵倒するを常とする。然し私はヒットラーを無學の労働者とは思はない。彼は寧ろ立派なインテリだ。實際から言つても一體ブラウナウのやうな片田舎で中等教育を―全部卒業しなかつたにしろ―受けたぐらゐの青年なら、寧ろ珍らしいぐらゐなインテリでなければならぬ。あの邊の普通の子弟は小學校以上の教育をやることなどはまづないといつてもいい。それからヒットラーは、大學の講義こそ聴かなかつたけれど、彼の知識慾の旺盛な年頃にそれ自身藝術文化の中心であり、社會科學や政治的生活の研究所たりし戦前のウィーンに五ケ年、ミュンヘンに二ケ年を送つたといふことは寧ろ羨ましい限りで、それは又と得難き「生きた學校生活」だつたに違ひない。勿論彼はその間賤しい職業を執つてパンを稼いだ。然しそれは中欧の「學生」にとつては當り前のことだ。學生と言へば親の腰を贅（オーストリア）つてスポーツをやつて、カフェー遊びをするもののやうに考へるのはアメリカ人流の間違つた觀念である。彼はそんな他人に教へて貰ふ學生々活こそ送らなかつたけれど、自分で自分を教へる學問の生活をやつたので、その結果は矢張り良い意味でのイ

かつたけれど、自分で自分を教へる學問の生活をやつたので、その結果は矢張り良い意味でのインテリとなり得たのだ。彼の著した『我が戦ひ』の中に出て来る内容―北歐主義を理解し、ドイツの外交的地位を洞察し、異邦思想とセミチズムを解剖する鋭利な筆致―は到底學びたることなき人間に出来る業ぢやない。無學文盲どころか、ヒットラーにあれだけの學力があればもう澤山だ。それ以上は彼の鋼鐵の如き意思と信念と熱誠と、稀に見る組織統卒の能力と政戰的賢明とが一切を補ひ得るので、従つて一朝風雲に乗ずる機會をさへ捕ふれば、彼は必ず今日ある運命を豫約されてゐたのである。

*

*

*

前大戰はヒットラーにとつて一個の偉大なる啓示であつたに違ひない。

一八一四年八月三日彼は志願兵としてバイエルン第十六歩兵聯隊に編入せられ、ランゲマルクの猛襲を始め四ケ年間戰線に在つて、つぶさに硝煙彈雨の間を潜つた。その間一回は脚部に負傷し、更に他の一回は毒瓦斯に依つて失明に近き苦惱を嘗めつゝ、十一月十日に帝政の没落、共和國の成立、國內混亂等の飛報を病院に於て受取つたといふ。

「普通の人間だつたら斯ういふ渾沌に直面して運命論者となるだらう。無條件に或は理窟をつけて、周囲の環境に順應するだらう。大戰の眞最中に於ては敢てヒットラーのみ勇敢に奮戦し他の者は卑怯未練な態度を採つてゐた譯ぢやない。皆な一樣に狂人のやうになつて、祖國のために一

切を抛棄つてゐたのだが、さて平和が来て周囲の事情がガラリと變つて了ふと、大抵の者は頭が冷靜になつて、周囲の成行に自分の搬を合せることを考へるものだ。平和主義やポリシェヴィキの流行は、丁度さういふ人間の心境の弱點に旨く附け込んで榮えたものである。だがヒットラーは盲目的なイデアリストだ。周囲の事情が變つたから従つて自分の心境をもそれに合致させるやうに、何等かの合理を考へ出すやうな頭の持主ぢやない。自分が愛國のために奮起しようと、大戦の初めに啓示の如く把握した觀念は戦争が済んでも、ドイツが負けても、又平和の時代がやつて來ても、少しもお構ひなく、同一の形で彼の魂から離れようとしなない。悪く言へば、彼は時代思潮に對して誠に融通の利かぬ男である。然し彼の把握せるものは、彼が他人から受賣したり、學校で教はつたりしたものではなく、彼のセルフメードに依る創造物なのだから、融通を利かせる餘地もかけ替へもない。彼の愛國心は *Invader—Oder* (これかそれか) の餘裕を持つものでなくつて *Alls oder nichts* (一か、バチか) の狹量なものだつた。だから世の中はもうデモクラシイと、左翼革命思想の澎湃たる大海原の眞只中にあつて、彼ヒットラーだけはただ獨り、まるでドン・キホーテが瘦馬に乗つて彷徨ひ出たやうに、ゲルマニズムといふ當時の人の眼には一笑にも値せぬやうな「理想」をじつと睨みつけてゐたのである。』

所が、ヒットラーの瞳には狂ひがなかつた。彼には渾沌たる雲霧の彼方が判然よく見えてゐた

所が、ヒットラーの瞳には狂ひがなかつた。彼には渾沌たる雲霧の彼方が判然よく見えてゐた

のだ。懐へ一九一八年の末から二十二年頃のドイツ人は、程度の相違こそあれ大體一種のマルキストであつた。労働者の中で過激な世界革命を明日の朝來るか、明後日の晩來るか、正確に議論し合ふものがあつても別に不思議ぢやなかつた。否プロレタリアートばかりか普通の市民階級や、かなり大きなブルジョア連中の頭まで先づ八割ぐらゐは大體—假令共產黨ぢやなくても尠くとも—社會民主黨式ぐらゐの物の考へ方はしてゐたものである。だからそれ以外のものは何にも見えなかつた。有つても氣がつかなかつた。たゞヒットラーだけは獨特の眼で、じつと執拗にそればかり睥睨してゐたのである。曰く、ナシヨナリズム!!

で世人が誰も氣のつかないうちに儘かに存在してをり、然も渾沌の霧が霽れたら必ずパン種の如く膨れ出す筈だつたナシヨナリズムの姿を等閑に附す限り、ヒットラーの擡頭は單に奇蹟であると思議がる以外に、全然何にも理解されるわけがない。故にヒットラーの破竹の如き勢で風雲を叱咤し得た行き方に妥當の韻きを與へるためには、面倒臭くつてもその當時のナシヨナリズムの姿を再検討して見る必要がある。由來ナシヨナリズムとは何ぞや? : : : なんてそんな抽象的な理論はこゝで知る必要がない。それよりも、その當時の世間の八割までが見過して、たゞヒットラーだけがじつと睨みつけてゐた大戦直後のドイツのナシヨナリズムは、一體どこにどんな形で躍り、どんな待遇をうけて忍び歩いてゐたか、といふ經緯を判然掴むことだけが大切だ。

だからさういふ意味で、私は大戦直後に於けるドイツのナチ・ナリズムの歩んだ道を歴史的に検討し、そこからヒトラーが風雲を御して、天下を叱咤するに至つた妥當性の鍵を發見することにしよう。

三 後産の苦しみ

げにも前歐洲大戰直後の姿はドイツ民族にとつて、まるでかの希臘神話に於けるイリアスの武勇談にも比喩される部分がある。イリアスの次には必ず悲しきオディセウスの物語が続いて起らなければならぬ。然り、大戰が済んだ後のドイツ人の魂は、まるで英雄オディセウスがトロヤを後に船出してから、まるで十年間荒波逆巻く大海原を右に…左に…東へ…西へと的途もなく放浪し漂泊したのと同じやうに、ぢやこれから何か仕なくちやならぬ…總てが行動だ！…と腕き焦つては見たが、その爲す所には歸趨する點がなかつた。夢遊病者の如く、たゞ闇の夜を彷徨するに等しかつたのだ。

オディセウスは諸々の民族と激しい戦ひを産んだ後に來る後産の苦しみに悩みつゝ、手當り放題な冒險に飛び込んで行く。そして久しく留守にしておいた故郷に辿り着いて見ると、こはそも奈何に故郷はもとの故郷ぢやない。風物がまるで一變してゐる。だが彼にはその一變した故郷の環境に順應しようとする意思はないのだ。たゞ以前に在りし故郷を奪還するために、血潮に滲んだ魂の眼をカツと物凄く開いて躍りかゝらうとする。依然として習慣性の暴力だ！

それと同じやうに五年の間、引切りなしに毒瓦斯の蝕み、手榴彈の炸裂し、戦車の呻つてゐた戦線で、急に休戦の喇叭が鳴つて……さアこれから平和だ、皆な銃を捨てて歸るんだ……と言つて見た所で、つい先刻まで阿修羅の如く暴れてゐた戦士の頭が、一遍に冷靜に返られるものぢやない。まだ戦ひに飽き足りないのだ。まだ後に何か爲すべき戦ひが残つてゐるやうな氣がするのだ。恰も餘りにも激しい陣痛に苦しんだ妊婦が、難産の後に更に後産の苦しみを豫想して、その心構へをするのにも等しい。鐵兜を脱ぎ銃器を放り出し、さて暫く着馴れなかつた背廣の平服を身に着けて、それで心の奥底まで平和に打ち寛いだやうな氣持になれるものぢやない。そんな氣持になれる爲めには、この戦闘は餘りにも大規模で永引き過ぎた……餘りにも激烈で殘酷過ぎた。

その邊の心理的な消息を餘程機微に理解して置かないと、結局ヒットラー運動の眞諦が掴めないことになる。尠くともあんなにつまらなさうに見えた無茶な運動が、何故に基礎揺るぎなき偉大な業績を現はしたか……といふその妥當性が分らぬこととなる。

然り、戦線から歸つた兵隊たちの魂が荒れて心がすさび、昔の正業に就かうとしても就き得ない焦躁の念——いやまだ平和は本當に恢復しちやゐない、戦争はまだどこかに残つてゐるといふやうな落着かない態度に關しては、かのレマルクの如き平和主義者と雖も正しく認識してゐるからゐだ。

だが、それかとて今まで生死の境を彷徨しつゝ狂人のやうに戦場で暴れ廻つてゐた兵隊達が、誰もかも皆な戦争を呪詛し、嫌惡し、そして總てが世界の恆久平和の讚美者に早變りしたやうに考へる政治家があつたとすれば、それは恐ろしく事物の真相に觸れぬ空論家の譏りを免れまい。その點で戦後のドイツの政權を、恰も有卦に入つた投機業者の如く成金的に振き集めた民主主義的第三階級乃至マルキシズムの爲政者達は、既にそのスタートからして誤謬の足を踏み出してゐたとも言へる。だから彼等の政策は假令人間の合理に叶ひ、又彼等の理論は社會哲學の緻密な絲に編上げられてゐたに拘らず、萬事鵠の嘴と喰ひ違つて、すつと後から駈け出して來た國民社會主義者に追ひ抜かれてしまつたのだ。否、追ひ抜かれたどころか、拔差しならぬ泥沼の中へ驅飛ばされて、生命まで失くしてしまつたのだ！

要するにドイツ共和國の爲政者は、戦線から引揚げた戦線兵士の心理を解し得なかつた。これ等の戦線兵士の胸の底に嵐の如く荒狂ふ心理——「戦争はまだ繼續して決して歇んでゐないぞ」といふ落着きのない焦躁の念慮——にピンとを合せ得なかつた。假令政治理論の目安を單に女子供や老人のみが喜ぶやうなセンチメンタルな、平和の鳩に置いてみた所で、又人間の物質的幸福を経済現象に基く數字で説明してみた所で、更に又世の戦ひを、悉く階級争闘の範疇に叩き込もうと努力した所で……所詮はこれ等の拗くれた幼稚な魂を抱く荒くれ武者の殘黨に、ピンと来るやうな

政治でなけりや何にもならない。彼等を馴致し支配することが、そのまゝドイツの政治のコツである。彼等即ちその當時二三十歳臺で、その次の十年間には國民の中堅となるべき壯漢達の抱いてゐる意嚮と要求とが、勘くともこゝ暫くは、そのまゝドイツ全體の政治意思を表現するのだ。民主主義者と社會民主黨とは、不幸にも一向その點に氣がつかなかつた！

由來軍人と普通の庶民とはその生活の態様がまるで違ふ。勿論それは日本にも當て嵌まることだし、又大體強制徴兵制度の布かれた國では孰れも同じことではあるが、取分け軍國主義の旺盛だつたプロシヤ中心の戦前のドイツ即ち獨逸帝國に於ては、この現象が特に著しかつたことを、念頭に入れておく必要がある。そして大戦の結果、獨逸帝國が滅びて民主主義の共和國になつても、永い間の習慣と情性とで以て、兩者の間には矢張りどこかに違つた所がある。一度軍人だつた者は何時まで経つても矢張り軍人臭いのだ。

で數百萬を算するドイツの戦線兵士も、郷里へ歸つて來た頃は皆な戦場の古垢を落して、普通の平和な庶民に復歸する積りだつたものが多いであらう。然し彼等が戦場を捨てて歸る時は、自分達の戦線に、總崩れの破局が來てゐる瞬間なのであるから、その忌々しさ遺瀨なさの氣持は、到底イギリスやフランスの凱旋兵士のそれと同一に律するわけには往かなかつたらう。やがて故郷に着いて見れば――まるでオディセウスが放浪十年の後に歸つて來た時みたいに――郷土の世界觀

はまるで違つてゐるのだ。村役場の施政方針でも地方新聞の論調でも、もう浦島太郎が吃驚したほど一變してゐるのだ。昔だつたら彼等は在郷軍人の一團として、彼等は普通の正業に復し、時以前の戦友達と村の居酒屋などに落ち合つて麥酒の杯でも擧げながら、懷舊の數刻を過すくらいで、程度の團結して居れば宜かつた。即ち軍隊生活上の軍人臭い經驗は社交的に結合されるだけで澤山だつたのだ。それは庶民社交的ではあるが非政治的なるを常とした。

然しながら大戦後の戦線兵士が敗戦軍人の烙印を捺されて不平滿々で歸村してみると、郷里の風物は一變し、自分達の五年間の惰性的な習慣の生活は、社交的には一笑の價値だにない程の待遇を受けた。それかとて彼等の全部が、變化した時代に迎合したり、風變りな流行に適應し得るユダヤ人や知識階級の出身ばかりぢやない。否、純真で樸訥で融通の利かぬ職人や百姓が、その大部分を占めてゐる。彼等は今その周囲が世を擧げて軍閥打倒だの、總罷業だの、共和國の新憲法だのと騒いでゐるので、自分達も世間に遅れまいとして、兵卒委員會や何かに出席して、一緒に調子を合さうとするが、それ等の會合を支配する者は、自分達の今迄の生活とは、まるで縁のないロシア人臭い又ユダヤ人臭い型の人間ばかりであり、それ等の人間の狂氣の如く絶叫する所謂イデオロギーとか言ふものも、全然頭にピンと來ないのである。考へて見ると變な話だ。君のため又祖國のために血を流して奮戦し、そしてまだ一度も敗けたことがなかつたのに、有耶無耶

のうちに敗れたといふことに決められてしまひ、そして各自國へ歸つて見ると、自分達の今まで眞摯に戰つて來た犠牲と獻身の行爲全體を、自ら嘲笑し惡罵するやうな態度だけが、適法として又道德として通用するのだ。そこにはどこか間違ひが在りはしないだらうか？ 誰か狡猾い奴に欺されてゐやしないだらうか？

と彼等は幼稚ではあるが、同時に至純であるだけに、眞直ぐな疑ひを挟み始めた。さうなると彼等の戰爭に基く尊い體驗は、戰線の後方でコソ／＼商賣をやつてゐたやうな人間達の口車に乗せられて、冒瀆さるべきものぢやない、との自覺が起ると同時に、逆に一種の反感が彼等を驅つて、戰爭に携はらなかつたやうな人間の到底窺知し得られない内部の崇高な使命を、感ぜしめるやうになつたのだ。單に感じただけで黙つてゐたものもあるだらう。同志と語り合つて、何等かの運動の形に進み出ようとしたものもあるだらう。いづれにしてもさう云ふ態度になつた以上、それは既に立派な政治的意思表示の萌芽なのである！そしてその中の比較的積極的な中核だけは、密々に地方の居酒屋の奥や集會所の片隅に集つて、脱走兵士の裏切行動に基く革命騒ぎと、鼻持ならぬ國內の不秩序に對し、愛國者としての執るべき態度を協議し合つてゐた。

斯様な團體はその當時では、殆ど表面に現はれてゐなかつたけれど、今から考へると、その數は想像以上に多かつたものらしい。その證據には中央の革命政府が、國內の紛擾を彈壓し清掃す

るために「義勇團」(Freikorps)なるものを募集した時、全國の壯丁が待つてましたとばかり飛び立つて、倉然としてこれに應じた現象が、真相を如實に物語つてゐる。何故、そんなに應募したか？ 戦争に疲れて故郷に歸り、然も世は擧げて軍閥を攻撃する時代に變つてゐる。然も彼等を雇ひ入れようとする革命共和國の政府自身が、軍隊の英雄的行爲を罵倒し嘲笑する立場に依つて、政權を顛倒しておきながら、今や自分が共產黨との内紛で二進とも動かなくなつたと言つて、警察力の仕事を舊戦線兵士に哀願して來たのである。そんな蟲のいゝ話があるか？ 假令彼等が欺されて義勇團員となつて見た所で、大して名譽ある軍人として取扱つてくれる譯ぢやない。まるで安い賃銀で土方同然に利用され、そのうち要らなくなつたら、又嘲罵を以て放り出されるだけの話だ。それなのに彼等は、文字通り倉然として、鎌倉武士の如く馳せ参じた！

先づ最初の烽火の如く見たのは、中部獨逸に於ける「鋼兜團」の旗頭である。

鋼兜團は當時大戦に重傷を負うて、懊惱のうちに病を養つてゐた在郷將校フランツ・ゼルテに依つて提唱せられたもので、舊戦線兵士中、國民主義的政治を理想とする愛國者を糾合した祖國擁護團體なのである。でもこの團體は、當時の國民主義的な範圍に於ける、一番末頼もしい地の鹽であり、世の光であつたといふだけで、亂暴な直接行動に訴へたり、一揆を起したりするものではなかつた。同時に彼等は初めから殆ど自立的で、他人の庇護や援助に依つて成立してゐな

つただけに、假令その存在は地味でも、相當に永續性を持つてゐたと言へる。

それでは他人の庇護援助の下に騒起した團體には、如何なるものが在つたか？ それは大抵極右翼中の直接行動派に屬するものであつた。

由來その當時雨後の筍の如く派生してゐた軍人の祖國愛的運動―その時分には自由運動と唱へてゐた―その自由と言ふ意味は階級の桎梏を自由に斷鎖する謂ではなく、全然祖國を外來の異分子から解放するといふ謂に於ける「自由」であつて、ギリシヤ又は古代ゲルマンの民族的自由に應ずる内容のものであるが―是等の人々の中には、ブルジョアジイ中の保守階級に依つて、金錢的な保護を受けてゐたものが多いやうである。然しそのやうな保守分子的バトロネたちは、側面的な同情以上に出て、彼等を指導するだけの勇氣は持つてゐなかつた。大戰に依つて脊椎の折られてゐるプロイセンの地主階級や官僚の殘滓が、當時破竹の勢を持つて全獨を襲斷してゐる自由主義體制を打倒するなどといふことは、殆ど想像もつかぬ時代なのである。

從つて一九三〇年に至る迄に、國民義勇軍中の行動派は、これ等の舊式な保守階級の後楯を得て、二度ばかり亂暴を働いてみたけれど、孰れも物にならないで社會から葬り去られて了つた。そんな頼りない連中の生半可な援助ぢや、大事を爲すに足りなかつたのだ。すつと後になつて、初めから保守主義の地主や官僚を當にせず、寧ろ社會主義的な色彩を鮮明にして、勞働大衆の心

囂へ吶喊して行つた者だけが、無爲無能にしてワイマア式イデオロギーの泥沼に二進とも動けなくなつてゐる政權を、本當に叩き落すことが出来たのだ。ヒットラー總統の成功の鍵はそこにある。然しその事情はもつと後に譲らう。

さて保守主義者の後楯に依つて、反動の直接行動を執つたうちの尤なるものは、先づ海軍少佐エーアハルトの「海兵旅團」であらう。

この團體は、矢張り舊國民義勇軍の崩れから、一九一九年に成立したものである。指導者たるエーアハルトは「力の人間」だ。彼はドイツ人の間に於てさへ稀に見るやうな、鋼鐵の意志を持つた氣骨稜々の熱狂的愛國兒だつた。彼は同志を率ゐて十一月革命の本據と呼ばれた北海及び東海の岸邊に出沒し、殊にヴェーザ河口に猖獗を極めた赤色水兵の本據を奇襲して、共產黨の幹部連を戰慄せしめたのを手始めに、その年の春にはミュンヘンに現はれて、共產黨狩りに神出鬼没の偉勳を立て、その夏にはベルリンへやつて來て、勝手に舊王宮の正門へ、舊帝國の軍旗を掲揚したりなどして、道が同じく共產黨狩りに熱中してゐるノスケをさへ怒らせたことがある。それがベルリンを去つたかと思ふと、今度は邊境シュレジュンの山奥に閉ち籠り、ポーランドの侵入軍に手痛き損害を與へたりした。彼の寧日なき全獨内の隱顯出沒は、殆ど一種の神祕である。彼が水兵服の襤褸々に破れた壯漢數名を引具して、突然姿を現はすと、海岸の若き漁師や耕地

の屈強な百姓青年達は、殆ど憑かれし者の如く、網を棄て鋤を抛つてこれに追従した。だから彼は到る所で、必ず新しい兵隊を連れて歩き得た。そして彼に従ふ面々には、催眠術師の如き權威を以て血盟を強要し、規律を素す者は用捨なく銃殺の刑に處した。實にその當時不秩序な世の中に、どこを探してもこの男ほどの、軍規整然たる有能の私兵を、蓄へてゐた人物はゐなかつたであらう。

だから眞純で感激性の強い田舎の青少年の間に、エーアハルトの名前は、エーベルトやノスケの名前に對し、比較にならぬ程ポピュラに響いた。無心な小兒までが、社會民主黨出の巡警の苦笑してゐるのを餘所に、街頭で聲張り揚げて英雄エーアハルトの歌を唱ふ――

“Hakenkreuz am Stahlhelm,
(鐵の兜に鈎十字、

Schwarzwiesrotes Band,
黑白赤の紐締めて

die Brigade Ehrhardt
エーアハルトの一團と

werden wir genannt”
我等は誇り名乗りてむ。)

然りエーアハルトは神祕的な英雄であつた。まるで義賊の親方のやうに、非合法の裏面から突然躍り出て、數多の敵を殺傷し、その心膽を寒からしめた。彼は祖國の爲めに行動し、又行動の爲めに祖國を愛した。戦争の世なら、彼は鑑とするに足るべき軍人だつたであらう。然し彼の

缺點は、その行動に未來を感知する政治的本能の伴はなかつたことである。彼の眼中には、大戰以前の光榮あるプロイセンの軍國主義と、燦爛たる君主制度の幻影とが、徂徠してゐたばかりである。彼は忠實なるカイゼルの奴隸であつた。彼はその血腥い行動に依つて、十一月革命の裏切が、如何に醜怪にして嫌惡すべきものなるかの憎しみの感情を、眞摯な愛國者の胸中に植ゑ付けることに於ては、怖ろしく成功した。だがそれ以上に互つて彼の運動には、何等新しい社會の進展に、寄與すべき指針が示されなかつた。そはこの好漢エーアハルトばかりぢやない。凡そその當時の義勇軍團の落武者を指揮する首領連に、共通した缺陷であつたとも言へる。その國を想ふ熱狂の程度に於ては、敢てエーアハルトもヒットラーも甲乙はない。だがその著しく遠つた點は、前者には後者の如く國民主義的秩序恢復に對する狂信フアンタズム以外に、その秩序の意義及び目的に關する、確かりした新しい考へが、足りなかつたといふ一事である。

その點では、エーアハルトの一團と同様に、バルト海の沿岸で鬼神をさへ泣かしめるやうな、悲壯な又勇敢な活動をしてゐた所謂「バルチックム」(Baltikum)の一群の如きも、矢張り同じ範疇に屬するものと思ふ。

この一群は東海の邊境外で、リトアニアやラトヴィアの地に、純粹なドイツ主義を擁護し、祖國が赤色のイデオロギーに凌辱されるのを視るに忍びず、奮然武器を執つて立つたものである。

由來これ等の昔からドイツ人が移住してゐた地方には、ゲルマン種族の純性を保つて、異民族の思想を排擠する家族が極めて多かつた。

この東普境外に中世紀の騎士領及びハンザの傳統を墨守して、ドイツ理想主義の忠僕を以て自任した「バルチックム」の農民の一團は、大戰直後ラトヴィア及びリトニア民族の居住する真中で「大戰未だ終熄せず」との豪語の下に、移住地の引揚げを峻拒し、先づラトヴィア共和國と協定し、後には自暴になつて白系の露人と提携しながら、澎湃として漲り来るポリシェヴィキの侵入を、チューナ河の岸邊で完全に喰ひ止めてしまつた。今日のナチス・ドイツで神様の如く讃美せられる勇敢な砲兵大尉シュラーゲタアの武勇傳も亦、その當時に於ける語艸の一つではある。

四、一揆……叛亂……暗殺

以上の部分的な又地方的な舊戦線軍人の「冒險」を、もつと大きな舞臺の上で演出せしめた戯曲が、かの有名な「カッパ一揆」である。

一體カイゼルがアメロンゲンへ蒙塵し、ドイツの全軍が戦線からの總引揚げを終つた後——即ちヒンデンブルグ元帥が最高司令官の地位を辭して後——の「帝國陸軍」は、誰が一體指導してゐるのか、一寸見當のつかぬ妙な形の存在であつた。存在はしてゐる、然し誰が統帥してゐるのか、主腦部が無い。勿論新しい臨時の革命政府には、軍部全體を統べる資格が缺けてゐる。軍務を指揮する筈のノスケは、やつと僅かばかりの義勇國軍を募つて、共產黨の討伐に従事はしてゐたが、嘗て世界を震撼させた「帝國陸軍」の全體の眼から見ると、まるで玩具のやうに他愛がなくなつて、然もそれは全然別個の存在なのである。

して見ると「帝國陸軍」には頭が無かつた。各軍管區の司令官が、宛も私兵を蓄へた群雄の割據せる如く對峙してゐた。

その中でもベルリンの軍管區司令官であつたフォン・リュットヴィッツ將軍といふ人物は、そ

の群雄中でも一番人望があつて、資格の上ではさうでもないが、事實の上ではこの將軍が、全軍の總指揮にあたるやうな外觀を呈してゐた。革命臨時政府の軍務委員ノスケに、共產黨討伐の出来るやうな獻立をしてやつたのもこの將軍である。従つて鼻つ柱の強いノスケ自身でさへ遠慮して、自分の手柄は結局リュットヴィッツ將軍のおかげであつた。將軍は實に「義勇團の父祖」であると、稱讃してゐたくらゐだつた。

所がこの將軍は初めはノスケを助けて、或る程度までは仕事をさせてやる雅量を示してゐたものの、内心を割つて見れば、結局現政府を叩き潰して、最後には自分が軍部專制の獨裁官になつてやらうと、算段してゐたもののやうである。一體その「クーデター」の時期は、何時がいゝであらうか？ 曰く、ワイマアの「國民總會」^{ナチナル・フレイゲンムンデ}が、共和國政府と一緒にベルリンへ引揚げて來た瞬間を措いて他にない……と將軍は考へてゐたらしい。

一九一九年の薄ら寒い冬が始まりさうになつた頃、社會階級戦は峻烈を極め、共產黨の暗中飛躍は眼に見えて著しくなつて來た。その儘に傍觀して居れば、ポリシェヴィキは必ず暴力の一揆を起すだらう。さう考へるとリュットヴィッツ將軍を取捲く軍部の策士連は、もう氣が氣でなく、今のうち先鞭をつけて、國民主義的クーデターを敢行し、^{モスクワよきでんどう}赤色煽動者の脊骨を高飛車に叩き折ると共に、エーベルト・ルシャイデマン内閣それ自身をも掃蕩して了ふに如くはない、と決心したの

である。

そこで前以て極く内密に、右翼の政治家へ相談を持ちかけ、その賛成を得ようとしたが、いくら右翼でも、議會制度の下に選舉されてゐる連中のこととて、孰れも肝を潰すか尻込するかで、斯かる軍人の吹く暴舉の笛に踊り出さうとはしないのだ。所がたつた一人だけ妙な老人がゐた。

その名をカップと呼ぶ。身分は東プロイセンの地方長官で、見るからに融通の利かぬ舊官僚式な野心を抱藏せるものの如く、以前からチュートン主義の研究に従事し、この主義の宣揚のために、一族擧げたい希望を持つてゐたといふ。この老人が「ぢや私がその反動革命の旗印となつて、一つ諸君を御指導申上げませう」と豪いことを言ひ始めた。然もリュットヴィッツ將軍はこの老人を全部信頼した上、「然らば宜しくお願い申す」と安請合に約束して了つたのである。

それを知つた參謀の若い將校連は、皆な小首を傾けた。そいつは少し劍呑だ……そんな無鐵砲な組合せぢや、効果が擧がる譯はない……そしてそんな輕率な將軍の御計畫なら、我輩初めから賛成が出来ん……と味方の内でさへ、氣の進まぬ者が多かつた。然るに將軍は一向そんな批評に頓着なく、先づ最初の手始めとして、エーアハルトの海兵旅團に聯絡を執つた。

海兵旅團は別に思慮ある政治團體ぢやない。血腥い争鬭さへ起れば、喜んでこれに参加するだけの武裝團であるから、今中央で何か大事が起るらしいと嗅ぎつけるや否や、約一千名の荒くれ

武者を結束し、いつの間にかベルリンに進出して來た。そして郊外のドエベリッツといふ所に天幕を張つて、銃器の手入をしながら物凄く示威運動をやつてゐる。

海兵旅團の一千名が、ベルリンに押寄せて來た表面の理由は、近頃社會民主黨の政府が一九二〇年三月迄に「義勇團」を解散し、國防軍の全數を半減する法律を出してゐるやうだが、そんなことをされちや海兵旅團も勿論全滅の厄に遭ふ譯だから、この際その法律を撤回して貰ふやうに、大舉してベルリンへ陳情に來たといふのである。

そこでリュットヴィッツ將軍は態々ドエブリッツへ出馬して海兵旅團の上京を搞わづらひ、彼等を激勵した後、ウィルヘルム街の共和政府へ敢然次の最後通牒を叩き付けた、

「我等は國民總會の解散を、専門家大臣のみを基礎とする新内閣の組織の爲めに、現政黨大臣の總辭職を要求す！」

社會民主黨の政府は勿論驚愕した。生れながらの軍閥嫌ひだつたシャイデマンの如きは、憤然色をなし、そんな不屈ふくま千萬けんな將軍連は、人民の敵として早速放逐しなければならぬと敦いそめく。然し口先だけで敦いそめてみたところで、彼等には軍人連と抗爭するだけの武力の持合せが無いのだ。僅かに政府部内では國防相のノスケが、多少警察的な武力を持つてゐるし、又以前から舊軍閥の將軍連と、色んな聯絡をつけてゐた。従つてノスケだけは、リュットヴィッツ將軍の一揆計畫を、

大體前から知つてゐたものの如くである。でシャイデマン老人始め黨の幹部連が、餘り八釜しいものだから、ノスケも今は板挟みとなつて了つた。黨の面目を立てようとすれば、將軍連は本黨に一揆を敢行するだらうし、將軍連の肩を持てば、彼は軍閥に降伏する黨の裏切者となる。そこで進退谷まつたノスケは、一方シャイデマンなどを宥め^{なだ}め、同時に將軍連を説き廻つて、こゝ暫く短氣なことはして下さらぬやうにと哀願するのだが、その妥協的交渉が中々旨く往かない。遂にリュットヴィッツ將軍は業を煮やし、エーベルト大統領の面前で、威嚇の態度を以て、斯く申す自分は現政府を轉覆し獨裁内閣を組織することにしてゐるから、閣下もその積りでゐて貰ひたい、と激語して了つた。

追^おがに弱腰の政府も、體面上腹を据え兼ねたであらう。早速リュットヴィッツ將軍から、ベルリン軍管區司令官たるの現職を概奪^{もたつ}して了つた。だが將軍はもう政府の命令なんか、全然聽かうとはしないのだ。平氣な顔で依然として、現職の椅子に止つてゐる。然も着々として暗中飛躍を續行し、政府轉覆の陰謀を逞^{たくま}しうしてゐる。社會黨内閣は累卵の危機に迫つた。流言蜚語^{うわさ}が亂れ飛ぶ。リュットヴィッツ將軍は、昨夜ベルリンのヘーアシュトラッセで、エーアハルトと密會し、愈々最後の手筈を決めたいらしい。三月十二日の晩を期し海兵旅團はドエブリッツからベルリン市内に進撃して來ることになつたさうだ、など。

政府は早速カッブ及び同人と共に陰謀を逞しうする軍閥の殘黨に、逮捕令を出した。が一人も捕ら^{とら}ない。捕へるだけの實力が無いのだ。皆な風を喰つて遁^とげたといふ。尤もその際國防軍の將校達は、大部分中立の態度を執り、陰謀團と事を共にしようとしなければ、又敢て政府に忠誠を誓^{ちか}つて一臂^{ひとひ}の力を藉^かさうともしない。

一方エーアハルトの海兵旅團は、今ドエブリッツの駐屯地を引揚げ、威風堂々とベルリン市内へ乗込んで來た。ブランデンブルタ凱旋門の西方で、一列に幕舍^{まくや}を張つて動かうとしない。聞けばエーベルト大統領に會つて、惡法撤回に關する詰詰談判をやるのだといふ。チーアガルテンの朝霧は、その糧食部の焚火^{たきび}の煙と溶合^{とけあ}つて、朦朧たる次の瞬間の謎を窺はせる。その中にはエーアハルト、リュットヴィッツ、カッブの面々が、額^{まへ}を鳩めて密議を凝してゐるのだ。激しい霧の切間には、將軍ルーデンドルフの緒顏^{そがへ}さへ、チラ／＼そこに見え隠れる…。

事態がそこまで進むと、矢張り口先ばかりで腕力の伴はぬ社會黨内閣は、案の定腰^{こし}が抜けて了つた。ぐづ／＼すると本當に生命が危いと、その前の夜中に閣僚一同自動車に飛び乗り、御大のエーベルトを連れて、ウィルヘルム街の裏口から、雲を霞と遁^にげ出した。落ち行く先はドレスデンだ！ ドレスデンにはその地方の軍管區司令官メルカア將軍がゐる。この將軍はワイマア憲法に忠誠を誓ふと口外してゐたさうだから、この際政府を助けて暴徒を鎮定してくれるかも知れない。

い、といふので交渉して見ると、將軍は困つた顔をして、拙者は今度の紛争に就いては一切中立を嚴守する積りだから、軍隊を動かして閣下等を擁護する譯には往かぬ、と餘り色よい返事をしてくれぬ。ぢやドレスデンも餘り頼りにならぬらしい。彼等は再び自動車を飛ばして、遁げられるだけ遁げた。そしてヴュルッテンベルグの首都スツットガルトに落着いて、一先づホツと一息安心したのである。スツットガルトはドイツ民主義の搖籃地なのだ、「自由はヴュルッテンベルグの山間に在り」とさへ俗稱される。

一方ベルリンの方では、ウイルヘルム街の政府の官舎が、空巢になつてゐるのを知つたエーアハルトの海兵旅團は、別に刃に^{あから}刺さずして、これ等の宰相官邸外務省その他の主なる官衙^{くわんが}を占領し、その門前には銃劍附の警護隊を^{いふ}厳しく列べ立てた。そしてカッパは宰相となり、軍最高司令としてはリュットヴィッツ將軍が就任したのである。然しこの「反動内閣」には、本當の意味の内閣が組織し得られなかつた。各省に大臣を任命しようにも、武骨一遍のお互ひの中には、そんな適任者が一人もゐない。専門家を招集しようとしたが、皆な尻込^{しりこ}して進んで引受けてくれる者がない。それぢや或る省の大臣は、そのまゝ空位にして置くとか、この際政黨者流でも仕方がないから採用するとか、議論が多岐に分れて、殆ど歸趨^{きすう}する所がないのだ。結局宰相と軍の最高司令といふ大頭が二人決つただけで、胴體も手足も出來上らない。

でも宣言だけは立派なものが出来た。曰く「今や新たに秩序、自由及び行動の政府樹立せられたり」と。そしてこの新政府の成立を見て、ドイツ國內には愁眉しゅうびを開いて喜んだものも澤山あつた。その點には特に注意を要する。世の「カッブ一揆」を論ずるものは申合せたやうに、カッブ一味が世間から同情されず、全然孤立の地位に立つてゐたことを、嘲笑の種にするけれど、事實はこの「冒險」に對して、未來の曙光と希望とを認めてゐたものが尠くなかつたのだ。例へば東プロイセンの地主及び農民、「土地同盟」ランド・アライアンスの幹部連、その當時各所に設置されてゐた保安自治の有志團體、及び一部の司法官連は、いづれも双手を舉げて新政府の成立を祝福した。又前に述べた國民主義的な義勇軍の大部分も、獻身的に武裝して隨所に參集し、「十一月革命犯罪者」が反抗の氣勢を揚げたなら、必ずそれに應戰して、一泡ひとふかふかせる用意をしてゐたといふ。だから問題は、カッブの新内閣が電光石火の果斷を以て、マルキシストに根本的な彈壓を加へ、リュットヴィッツ將軍の豫想したやうな、軍事獨裁の本來の目的に向つて、蕩進はうしんする勇氣があるか否やに依つてのみ決定された筈だ。

社會民主黨出身の諸大臣は、この破局に直面し、最後の智慧を絞つて、全國の勞働組合に總罷工を命令した。曰く、「斯くの如き反動の一味には、呼吸すべき空氣をさへ送るな：彼等の爲めに一指をも動かす勿れ：全線に互り總罷工を敢行せよ：プロレタリアーよ、聯合して反革命を打

倒せよー」

カップはこの有様を見て慌て出した。勿論総罷工に携はる者は嚴罰に處すべし、との布告を發しはしたが、然し軍人側がストライキ煽動の幹部連を銃殺しよう、といふ提議を出した時、そんな手荒なことをすれば民衆の同情が失くなると、遂巡躊躇してお茶を濁してゐる。だからそのうち総罷工は、實際その効果を現はし始めた。瓦斯がない、電氣がない、水道がない、交通具がない。政務を執らうにも一切の機關が、運轉を停めて眠つて了つた。軍隊は脾肉の嘆を洩らしながら、上に立つ奴等があんな果斷のない拙劣い遣り方ぢや駄目だ、と不平の呟きを始めた。カップ一揆はとう／＼失敗だ……との氣持は萬人の胸に感ぜられるやうになつた。

そこでカップ等はもう大汗になつて仲介者を選び、社會民主黨の幹部に了解を求めて、破局救済の妥協工作に没頭し始めた。エーアハルトはそれを見て、切齒して言ふ「俺はそんな『兵卒委員會』ごつこみみたいな相談に加はるのは、胸糞が悪いから御免だ、そんなことは『ユダヤ人の學校』へでも任しときや宜いぢやないかい」

内閣を乗取つてから四日目に、カップの新聞班は群がる記者連に、次の情報を傳へた「新政府は目下前政府と、或種の妥協をなすべく商議中なり。その商議は良好に進展しつゝあり。」

併し進展しつゝありしものは、たゞ渾沌のみであつた。結局二進とも身動きがとれなくなつた

親方のカップは、遂に匙を投げて、突然外國へ逃亡した、エーアハルトも手兵を纏めて、ベルリンを退去しようとする。途すがら彼は軍隊に向ひ、砲車を背にして悲壯な一場の演説をした、「我等の目的は達せられなかつた。…その罪は悉く庶民階級の怯懦に基く！ 今より我等は共產主義者に對して本當の戦ひを開始するであらう！」

一同は肅然として、聲涙共に下る萬歳を三呼した。

*

*

*

カップ一揆の失敗は、暫さへ混亂したドイツの社稷に、大變悪い影響を與へた。

先づ極左の共產黨と獨立社會黨とが、奔放の勢を以て、猖獗を極め始めたのである。彼等はカップ一味の掃蕩よりも、寧ろその背後に中立の形で控へた國防軍全體に反對し、又カップ等の爲めに、一時酷い目に遭はされたエーベルト・ノスケの社會民主黨政府に反對し、總罷工を政治革命の形に建て直さうとして、猛火を煽り立てるやうな煽動工作に移つたのである。だから社會民主黨の政府は、カップ及び過激な反動軍閥を追ひ拂ふために、自分から總罷工を起したものの、今やその藥が餘りに利き過ぎて、労働大衆のお株を、却つて共產黨に奪られて了ひさうになつたのだ。斯くしてドイツ國內は反動主義のナシ・ナリストと、社會民主主義の現政府と、極左翼の共產黨及び獨立社會黨とが、三つ巴となつて相闘ぎ争うた。又新しく内亂の堰が切れたのである。

孰れにしても當時のプロレタリアが、カッパ一揆を契機として怖ろしく過激化し、大舉協同戦線を張つて、軍部の擡頭に挑戦し始めたことは、特に著しい現象だつた。その爲めにベルリン、中部獨逸及びルーア地方は、まるで地獄の釜の蓋を開けたやうに沸騰した。殊にルーア炭田地方では、義勇團及び國防正規軍と、新たに武裝した炭鑛夫の赤衛軍とが、合計百基米に互るバリカードを挟んで、一週間以上も激戦を交へ、都合三千人の戦死者を數へた程である。然も國防正規軍が一氣にこれ等の武裝共產軍を剿討しようとして欲しても、生憎その地方は非武裝地帯なので、フランス側の干渉が八釜しくつて、思ふやうな行動がとれないといふ始末なのだ。

一九二〇年十一月、中獨に於ける擾亂の策源地たるハレに於て、獨立社會黨の黨大會が行はれた時、コンミンテルンの議長ジノヴィエフが、そこに姿を現はしたことは、その當時に於ける異常のセンセーションであつた。彼の狂信的な「世界革命」への煽動演説は、其處で嵐の拍手を以て迎へられた。彼は何よりも革命には規律が必要だ！革命の規律は自由と民主主義に立脚するものであると教へる。ロシアではレーニンが「自由とはブルジョアジイの經濟的奴隸制度を撤廃せんがために發明せし言葉のみ」と述べてゐるが、そんなことはジノヴィエフにとつてはどうでもない。彼は言葉を續けて叫ぶ―「諸君は世界革命の前衛闘士である：その戦ひに必要なものは、軍なる綱領に非ずして、プロレタリアート式の軍隊制度だ：武裝せし階級争闘は、勝利に誇るド

イツ赤衛闘士が、ロシアの赤衛軍と交際の握手をなすに至るまで繼續さるべきものであらう」
斯くしてハレに集中した獨立社會黨の大部分は、ジノヴィエフの指令を採用して、完全にモスコウ化して了つた。勿論ドイツ官憲は、これ等國外から闖入した異邦の煽動者に、退去を命じはしたものの、その時以來「獨逸共產黨」(D.A.P.)なる政黨の創立を、合法的に許容せざるを得なかつた。ワイマア主義の中央政府は、自分達のイデオロギーにいくら近い左翼過激派よりも、寧ろ右翼の反動の方が怖かつたので、權力の均衡をとるために、或る程度まで共產黨の成立を寛大に取扱つた傾向さへある。従つて反對に、右翼の反動團體には、遠慮會釋もない彈壓と取締りとを嚴重にした。共產黨がモスコウの援助を得て、重々しく武装してゐるのを、見て見ぬ振りをしてゐながら、一方「鋼兜團」や「青年獨逸騎士團」その他の右翼團體には、杖以外に身寸鐵を帯びることをさへ許さなかつたのである。

そんな有様だつたから共產主義者は、得意となつて武裝的訓練に着手し、北獨及び中獨の全般に亘つて「プロレタリア百人組隊」の組織を、網の目のやうに張つたのである。それは後の有名な「赤色戦線闘士團」の前身と見ていい。そしてこれ等の「軍隊」の參謀本部は、モスコウのクレムリン宮に鎮座し、外交使者の聯絡に依つて行動の指令が傳達される。その數は多い時には二十萬人あつたといふから、當時の正規國防軍よりもすつと多かつた勘定だ。數のみならず又そ

の武装の内容に於ても、百人組隊は拳銃小銃の外、連射砲、機關銃、地雷、手榴彈、毒瓦斯等をさへ備へてゐたといふから凄^{こわ}い。それにも拘らず政府は、保安警察の力に依つて、時々申し譯的に共產主義の指導幹部を拘引するだけで、武装團體それ自身には殆ど手をつけなかつたのである。

だからカッブ一揆から一ヶ年経つた後のドイツは、暫く共產主義者の思ふ存分な跳梁跋扈^{しやうりやうこ}を許した。殊に一九二〇年の三月にはそれが極端となつて、ベルリンの戦捷塔^{レイプツグイレ}は爆彈で破壊されさうになるし（やつと爆破しないで難^{がた}を脱れた）、ハレでは貨物列車と急行の客車とが轉覆させられるし、ライプチヒ及びドレスデンの裁判所は、手榴彈のお見舞を受けて、建物を酷く毀されなどした。有名なロイナ大工場の労働者が、全部共產黨に加擔し、武器を執つて「工場占領」をやつたのもこの時分のことだ。又マンスフェルド地方では、ギヤング式の亂暴者マクス・ホエルツが民屋に放火し、銀行の金庫を掠め、市役所の記録を破壊した上「我等はブルジョアと見れば老幼を問はず男女を區別せず悉くこれを屠殺せん！我等は彼等の麗屋宮殿^{れいぐきゆうてん}を地面に平たく爆破すべき本務を有す！」などとの有名な宣言書を發したりしたのも、亦矢張りこの時のことだつた。

這^こにプロイセン政府も、この有様を默視することが出来なくなつたと見えて、國內に戒嚴令を布き保安警察を總動員する他、嫌々ながら國防軍にもその討伐方を依頼した。斯くして國防軍はザンガアハウゼンの激戦に於て、ホエルツの赤衛匪軍を徹底的に撃破した。その殘黨は退却に

際し、到る所に鐵道及び鐵橋を破壊し、或者は村落に殺到して掠奪を逞しうした。それから一方、警察軍も亦工場に立て籠つたロイナの赤色武裝労働者を包圍し、従つてハレとライプチヒの間では、毎日銃火の交換が行はれた。結局、中獨に於ける共產軍は全線に亘つて掃蕩されて了つた。それから少し後れて、ハンブルグ及びルーア地方にも亦共產黨の暴動が起り、それも大事に至らぬうち警官と國防軍とのために鎮壓されたのである。

これ等「三月の赤色暴動」が一應片付いて以來、共產黨は暫時鳴りを靜めて武器を捨てた。それは彼等の本據たるモスコウが、その當時丁度經濟上の危機に遭遇したので、御大のレーニンが、當分世界革命實現の可能なきを知り、寧ろ世界資本主義との暫定平和を希望する方針を執つたからであつた。

*

*

*

國民主義の反動團と、世界革命主義の共產黨との跳梁は、相互に因果關係を以て、時計の振子の如く交代に繰返される。

で、カップの一味が凋落したので、共產黨が中獨の反亂を起す……その共產黨の赤禍が鎮壓されたので、今度は又國民主義の右翼が暴れなければならぬ、といふ順序になつてゐる。

果せるかな、一九二一年の五月に至つて國民主義者は、突然上シレジアに於て血腥い機關銃の

煙をあげ始めた。然しその戦争は、今迄のやうな階級戦ぢやなくつて、異邦人の侵入を防禦する祖國擁護の戦ひであつた。その顛末は斯うである。

ヴェルサイユの條約で舊ドイツ領上シレジアは、ドイツに復歸するか、ポーランドに併合されるかを、一九二一年三月に決定することになつてゐた。然るにポーランドの愛國者連は、フランス軍閥の後援を得て、人民投票を待つまでもなく、該地域が事實上ポーランドの占領地帯なることを主張するために、擅にドイツ領内に侵入して來たのである。ドイツは當時國運疲弊し、且つ共產黨の内亂で寧日なき有様だつたから、大した反抗はないだらうと、高を括つてゐた爲めであらう。

然るにこの有様を見てドイツの國民主義者は、期せずして反抗の氣勢を擧げ始めた。上シレジアにはドイツ人防衛委員會が組織され、義勇兵の大規模な募集が行はれた。するとドイツの田舎の隅々から、嘗て戦線にゐた經驗のある數多の青少年が、祖國の危機を救ふべく、急遽として馳せ参じたのである。勿論例の「バルチウム」の農民兵も姿を現はした。ルーア炭坑の若い坑夫の顔も見えた。彼等は不完全な武器を手にながら、たゞ鐵の如き意思と焰の如き祖國愛の感激とのみを唯一の頼りとして、雲霞の如きコルフアンティの關入軍を、物の見事にアンナベルグに撃破し得たのである。

だが斯様な勇敢なナシ・ナリストの獻身的努力にも拘らず、その結果は泣くにも泣けぬ程惨めなものであつた。ドイツの中央政府は聯合國側の酷い叱責を受けたため、まだその事業が半なるに拘らず、義勇團の解散と歸國とを命令して來たのである。そればかりぢやない、上シレジアの經濟的に重要な大部分は、聯合國の横紙破りな陰謀で、遂にポーランドに併合されて了つた。勿論ドイツ政府は形式だけの抗議はしたが、そんなものを戦勝に誇つてゐる聯合國政府が、顧みてくれる筈がない！

で、この上シレジアの失地事件を契機として、ナシ・ナリストの胸の中には、排外思想が鉛のやうに沈澱したのはさることながら、同時に彼等の怨恨の對蹠は、當時の政府の要人達の上に向けられた。あんな卑怯な弱蟲の政府ぢや、祖國は見す／＼滅亡に瀕する！否、政府が怯懦なばかりぢやない、政府部内には外國の利益を計つて私腹を肥す賣國奴さへ澤山ゐる！

といふ憤懣の情が、當時の齢若いナシ・ナリストの腹の中を煮えくり返させた。同時にさういふ考へで妙に拗くれた過激なナシ・ナリストの秘密結社が、到る所に簇出し始めたのである。彼等の結束は、嘗て戦線に於て生死の境に感じ合つた「友情」の紐である。彼等は古代ゲルマン人の傳統に則り、互に血を爰つて兄弟の誼を誓ふ。裏切の酬いは慘殺の私刑である。非ドイツ式な僭越者に對する盲目的な復讐と、容赦なきテロリズム——それが彼等の行動だ。

こんな秘密結社が方々に出来て以来、血腥い暗殺沙汰のみが流行の魁をなすに至つた。世人はその當時を「秘密死刑の時代」と呼ぶ。彼等の犠牲となつて、義の中や牧場の片隅で、人知れず射殺された人間の數は殆ど枚舉に違がない。そのうち世間を戦慄せしめた一番大きな出来事は、エルツベルガ暗殺のそれであらう。

ヴェルサイユ條約調印の責任者たる前藏相のエルツベルガは、もうそれよりずっと前から、過激なナシヨナリストの拳銃口で、絶えず附け規はれてゐたものである。彼等の腦裡に映じたエルツベルガは、不倶戴天の賣國奴であつた。榮耀榮華な富有階級で立派な教育を受けてをりながら、祖國を敵に渡して大臣の地位を贏ち得る如きは、ドイツ人の面汚しである。そんな奴は飢渴に血迷つて何も知らずに、赤旗を擔いで歩くやうな、無智なプロレタリアに較べて、その罪寧ろ萬死に値する。しかもこの男の財産は、悉く政商と結託して捲上げた不淨の富だ。といふやうな理由で、方々から呪詛はれてゐた譯だ。それが一九二一年八月二十六日に實現し、エルツベルガは、シュワルツワルドの保養地で、拳銃の亂射を受けて、非業の最期を遂げてしまつた。エルツベルガの無二の親友で、時の宰相たりしウィルトは、その追悼會に於て、故人を「比類なき愛國者」と歎美すると共に、「嘗て十一月九日には、隅の方の鼠の穴みたいな所に、小さくなつて隠れてゐた卑怯者どもが、國民の寛大な態度につけ上るとは何事ぞ」と、古きドイツの軍國

精神を猛烈に攻撃し、それと共に全國の國民主義運動を、具體的に彈壓するやうな臨時國令を發布した。

又戰線に使用した軍服の平時着用、武器の携帯等を禁止し、又「セダンの記念祭」等の愛國的な催しをも、全然許可しないことにきめた。

それにも拘らず、引續く一九二二年六月二十四日には、外相ラーテナウがグルーネワルトの私邸の附近で暗殺されたのである。自動車を飛ばしてゐた際、傍の森林から亂射した機關拳銃に見舞はれて、致命傷を受けたのだといふ。

所がラーテナウは、別に賣國奴として規はれてゐた譯ぢやない。犯罪の嫌疑者として檢舉された或る零落の休職軍人が告白する所に據れば、ラーテナウはユダヤ人の百萬長者であつたから、當然殺されたのだといふ。して見るとナシヨナリストの憎惡は、單に政治的原因ばかりでなく、この當時既に人種的原因に基いて、醸成されてゐたことが分る。ドイツに於ける具體的なユダヤ人排斥の現象は、ヒットラー一派の國民社會主義者に依つてのみ極端に發露したものではない。ナシヨナリスト一般の間には、既にこの時分から人殺しをする程にも、強い根を張つてゐたものだといふ事實に、注意を向ける必要があるだらう。ラーテナウは決して祖國を敵に賣ることに、興味を持つた人間ぢやない。唯彼は、後にヒットラーが特に強調したやうな「血と土」に根

ざした國民主義には全然關係のない、人類理想主義者だつたのだ。假令人類としては崇高な人物だつたかも知れぬが、國民としては三文の値打もない存在であり、しかもそんな人間が「ドイツ國民」を政治的に支配しようとしたところに、彼の滅亡があつたのだ……と國民主義の連中は主張した。

だが當時の爲政者は、誰一人として國民主義者ぢやなくつて、皆な一樣に民主主義の代表者だつたのである。だからラーテナウの死に依つて、民主主義者が國民主義者を極端に憎惡するやうになつたのは、當然の歸趨であらう。彼等はナシヨナリストが血迷つて人殺しをしなければならぬやうになつた社會惡や、國家惡それ自身を反省することなく、反對に血潮滴る殉教者ラーテナウの死骸を通して、ナシヨナリズムといふ一個の「恐怖」を、盲目的に唾棄し嫌惡しはじめた。宰相ウィルトは、新共和國の標語として有名な「國賊は右にゐる」——なる激越の口調を敢てし、社會民主黨の諸新聞は昂奮して「獨逸國民主義の不逞漢を、法律の保護外に置け！」と極論したのもこの前後のことだ。否單に言葉ばかりぢやない。セーヴェリングの警察は、非共和國的な連中を黒白の區別をさへ立てないで、手當り次第に檢舉し、逮捕し、拘引し、全國に互つて比類のない大規模な家宅搜索を行つた。そしてマルキシストが、その際同情罷工をやつたに對し、寧ろそのストライキ破りの方が常とは反對に却つて警官に逮捕されなどした。又ラーテナウ

暗殺の嫌疑者と附け規はれた男は、ザールエックの廢址に立つてゐる古塔の中で、警官と暴民のために取捲かれ、私刑同然に撲殺されて了つた。

斯くの如くラーテナウの暗殺事件の結果、民主々義的中央政府は、右翼に對する斷然たる彈壓態度を執り、殊に中央政府よりも、もつと左翼共和主義的獨裁の傾向が濃厚だつたプロイセン政府では、更にそれが極端であつたものだから、一時暗夜に輝く炬火行列の如く盛んに見えたナシ・ナリズムは、特にプロイセンに於ては、急に俄雨に遭つたやうに、表面から消えてしまつた観がある。尤も社會の表面では消えても、議會に於ける右翼政黨の特殊のフラクシオンに於ては、その焰は燄の形で根強く保存されてゐたと見ることは出来る。

所が民主々義的な彈壓の中心地たる北ドイツを離れて、眼を南方バイエルンの地方に向けると、その光景はまるで異つてゐた。換言すると、當時の北獨の民主々義者が、常に嘲笑してゐた「バイエルン王國共和國」の首都ミュンヘンでは、例の赤色革命のソウィエト式獨裁に懲々して以來、寧ろ國民主義的精神の培養さるゝ苗床になつてゐた感があつた。既にカップ一揆の當時に於ても、眞にリュットヴィッツ將軍に同情を表し、今少しの所で本當に大軍を北上させてベルリン進出の舉に出ようとしたのは、バイエルンの國防軍である。そんな工合でベルリンの中央政府、及び北獨のプロイセン政府では、ウィルトやセーヴェリング見たいに、尠くとも民主々義的な見榮を切

獨のブロイセン政府では、ウィルトやセーヴェリング見たいに、尠くとも民主々義的な見榮を切

つて、戰線軍人の精神を罵倒したり、右翼反動の愛國者を風潰しに檢舉し得るやうな人物でなければ、政權がとれなかつたに反し、バイエルンでは、反對に少しでもポリシェヴィズムの惡口を言つて、國民主義を高揚するやうな態度に出ない限り、政治上の實權を握ることは、不可能であつたと見てもいい。

五、軍人主義

だから一九二〇年の三月―デモクラシイの大波が、ドイツ全般に澎湃^{はうはい}として漲^{たか}つてゐる真最中に―不思議にもバイエルンだけには、フォン・カールといふ反動政治家が、衆望を負うて首相に挙げられ、そして純然たる右翼内閣を成立させてゐた。

カールは舊王黨に屬する愛國者である。王黨と言つても、カイゼルの舊獨逸帝國に忠誠を誓ふ意味のモナークリストではなくつて、單に舊バイエルン王國の復活を希望するだけの、保守的なシヨヴィニストであつた。だから彼が頻りに國民主義的反動團體の肩を持つて、これに保護を加へてゐたのは、汎獨^{はんどく}的國民主義^{てきみんしぎ}の精神に、透徹した理解を持つたがためと言ふよりも、寧ろ彼がバイエルンのシヨヴィニストとして、ベルリン又はプロイセンの遺^や口^{ぐち}を憎んだ反映であつたに過ぎない。

カールと一緒にバイエルンで反動的保守主義を代表してゐた有力者に、ミュンヘンの警視總督ボエーナアといふ人物がゐた。彼も亦「腐敗した泥沼」(ベルリン)が何よりも嫌ひで、従つて當時續々プロイセンの警察から迫害を受けてゐる舊義勇團の闘士や、暗殺の嫌疑で搜索を受けてゐ

る過激ナシヨナリストなどを歡び迎へ、平氣で彼等を匿まつてやつたものである。それがため恰も戦前の無政府主義者の遁場所が、スイスであつたと同じやうに、この當時の脛に疵もつ反動主義者は、どし／＼ミュンヘンに集つて來た。例のルーデンドルフ將軍もこゝに寓居を構へるし、お尋ね者のエーアハルトその他の政治犯罪人も亦大手を振つて、麥酒店「ビュルガアプロイ」などに、熱柿臭い氣焰を擧げてゐた。假令プロイセン警察から逮捕狀が廻つて來ても、ボエーナは全然それを受けず——こゝは治外法權だ——とばかりに空囀いて知らん顔をしてゐる。

然しバイエルンに於ける國民主義の龍頭は、右に述べたやうに、單にお役所の上に立つ素い人達が、偶然にも保守思想の持主であり、従つてナシヨナリストに好意をもつてゐた、といふだけの現象ぢやなかつた。寧ろバイエルンの人民全體の胸の底には、結局は國民主義的に變つて往かなければならぬ、と自覺する深い歴史的な根柢があつたのだ。

由來北獨、殊にプロイセン人の間に、根を張つてゐた舊の地主貴族的ナシヨナリズムなるものは、主として既存國家の現實に則し、従つて舊てフリードリヒ大王やビスマルク宰相の完成した黃金時代を標準として、もとのプロイセン王國或は獨逸帝國の文物制度を再現しようとする努力に向つてゐた。だからこれ等の人々にとつては、社會主義者や民主主義者の實現しようとする國家築造上の新しい初めての試みが、危かしくつて見てゐられないのだ。そんな試みはまるで國家

の滅亡を賭けて、投機をやるにも等しいとしか考へられない。何となれば「人民の國家」だの、「恒久の平和」だの、「プロレタリアの獨裁」だのといふ觀念は、全く現實政治に出縁のない夢に等しい。そしてプロイセン政治家は、手に握み得る力を頼りにこそすれ、大體夢を見ることが大嫌ひなんだ。

それに較べると、南獨のドナウ河畔を中心とした地方の人々は、同じ保守思想を懐くにしても、昔から一種の不思議なロマンチズムの夢を見たがる。彼等は神聖な「全獨逸」の信仰に酩酊する、中世以降嘗てこれ等の地方に於てのみ絢爛を競ひ、偉大を誇つた文化の華は、今でも彼等の腦裡には慕はしい憧憬の霞と棚曳く。だからウィーンとシュワーベンとの間には、昔から「大獨逸主義の理想が強い根を張つてゐた。ビスマルクの獨逸帝國時代に於てすら、頑固に我を立て通したバイエルンのバルチクラリズムの如きも、矢張りその考への流れを汲んだものである。彼等の胸にはビスマルクのプロイセン中心な「小獨逸主義」が、何となくピンと來ないといふ不満があつたからだ。それは餘りにも無味乾燥で現實過ぎて華やかな夢がなかつたからだ…。

それぢや一九一九年の革命で、沒趣味な權力崇拜のプロイセン主義が沒落し、その代り寧ろ理論と觀念と夢とが支配する民主主義の獨逸共和國が出現してゐるのに拘らず、何故彼等はそれに合流することを嫌つたか！ 曰く、夢は夢でもワイマア共和制の夢は、「國家」築造に關して新

合流することを嫌つたか！　曰く、夢は夢でもワイマール共和制の夢は「國家」の建設に關して新

しい經驗をしようといふ未來の夢なのだから駄目だ。それに彼等の甘き夢は「國家」の上に存在しない。「プロレタリアの國家」だとか、「ブルジョア民主主義の國家」だとか、そんなものはどうでもいい。彼等は純正なる國民的又は民族的——ドイツ語で謂ふ *volkliche* ——な革命に依つてのみ、ドイツ人の高揚を夢見ようと思ふのだ！！

然らば右の兩ナショナリズム、即ち北獨のプロイセン主義と南獨の大獨逸主義との兩者のうち、果して將來孰れがより多き勃興の可能性を持つてゐたか？　勿論戰敗直後のドイツは世を擧げて

民主主義乃至社會民主主義の思想に浸潤してゐる際であり、又極端な共產黨の理論だつて、流行的な強いポピュラリティを持つてゐる時代なのであるから、殆どその當時は保守的な國民主義などと言ふものは、識者の間には眞面目に議論する値打もない程、その内容は貧弱であり、その將來は暗かつた。その問題にもならなかつた運動が、僅か十年の後にはいつの間にか、フウスト

博士の**竜犬**みたいなに怪奇にふくれ上つて、民主主義、社會民主主義、共產主義の立派な殿堂を一切**合財根太石**から震り倒さうとは、どんな賢人でも想像しなかつたらう。が、さういふ後の事實の検討は別問題として——翻つてその當時、若しもドイツのナショナリズムに、相當の輝かしい未來があつたものと假定すれば——南北兩ナショナリズム中の、果して孰れに希望が多かつたか？

プロイセン主義か、將た大獨逸主義か？

その答へは簡單である。曰く、結局勝利は大獨逸主義の手に歸すべかりしであつた！

何故かといふに、北獨の國民主義的反動主義者の諸運動は、單に軍閥本位の專制國家を樹立するだけの策動であつて、そこには何等の國民の人心に訴へる標語も、イデオロギーも存在しなかつたからだ。精々の所で、以前の「良き古のブロイセンの傳統」を再現するといふ思想的魅力の背景を持つてゐたに過ぎない。然るにドイツ人は、民族として意氣軒昂であつても、ブロイセン主義の「力」は、大戰と革命とに依つて、文字通り殲滅の厄に遭つてゐるのだ。彼等には力が缺けてゐた。力のみならず、そこには前にも述べたやうに「夢」すらも存在しない。彼等の努力は、單に權力爭奪若しくは支配への技術をどうするか、といふ點に在つた。悪く言へば一種のマキアヴェリズムなのだ。カップー接の失敗が、その缺點を如實に物語つてゐる。彼等には力が足りなかつた上に、假令その技術が旨く往つて成功した所で、それは人心を收攬するに足りる魅力ぢやない。

それに較べると、南獨の「フュルケツシュ」な運動には、尠くとも民主主義の「自由」とか、マルキシズムの「共產的理想郷」とかに對抗し得る人心收攬の夢を持つてゐた。たゞその當時に於て、まだ足りなかつたものは力だけなのだ。何等かの方法に依つて、その力さへ養成されれば、當時の爲政階級の權力に對抗し得るだけの資格が、十分にあつた筈である。従つて當時の南獨のニーベル

ンゲンの魂に返らんとする訴へ、則ち社會的民族的な途への警鐘には、初めから多少なりとも、希望の未來が約束されてゐたものと私は考へる。

でアドルフ・ヒットラーが、丁度その場合に彼の「國民社會主義」を南獨のミュンヘンから出發させたことは、寔に重大な意義があつた！

*

*

*

大戰直後のヒットラーが、ナチヨナリズムを中心とする政治界に乗り出さうと決心した際、恰もよしミュンヘンには、彼を社會へ押出するための契機となり、濫觴らんしやうとなり、準備となり、背景となつてくれた忘るべからざる二つの運動——然もその當時には誰の眼にもつかぬやうな、些ちやうかで貧弱な運動——があつた。

その一つは「獨逸労働黨」ドイツ労働党であり、他はミュンヘン國防軍内に計畫された祖國思想鼓吹の講習會なのだ。

「獨逸労働黨」といふと、名前は何にも堂々としてゐるが、實はドレクスラーと呼ぶ鐵道の鍵工が數名の同志を集めて、ミュンヘンの麥酒屋ビールヤの奥で、政談を交換するだけの群ぐんの謂いわであつた。ドレクスラーといふ人物は、單に技術工上りの名もない男だが、それでも矢張り南獨人特有の夢を抱いて、大獨逸主義のみが、困憊こんぱいした労働者の前途に光明を與へるものと、狂信する眞摯な理

思想家だつたやうである。それが同志數名と相談つて、その間に共通した祖國愛の精神を、何等かの實行若しくは行動に表はさうといふことになり、同時にこれに「獨逸労働黨」といふ大それた名前をつけたのだ。當時の人民主權を基礎とする議會制度は、多數政黨主義に依つて運用され、誰でも共通の世界觀を中心にして同志を糾合したものは、必ず「政黨」の名前をつけることが流行したのだから、ドレクスラアも矢張りこの流行に従つて、このやうな堂々たる名前を掲げ、そして氣休めのために、たつた六人の黨員名簿及び黨員證を作つて澄ましてゐたものらしい。その時分にはたつた二三人で何々立憲黨だの、何々獨立黨だの、との名稱を持つた所謂政黨が、雨後の筍の如く發生してゐたことから、敢てこの六人の獨逸労働黨の存在ばかりが、可笑しかつた譯ぢやない。但し彼等が労働者を目標にして、労働黨と言つて見た所で、一般の労働者はマルキシズムの大波に揉まれて、ストライキだのサボタージュだのと、一齊に酩酊してゐる場合なのだから、彼等はたゞ麥酒屋の奥まつた部屋の中で、靜かに手をあてて溜息をつきながら、一體どうすればこれ等の血迷つた労働大衆を、眞に獨逸的に覺醒せしむるかを想ひ悩み、そしてお互に何事かヒソ／＼語り合ふだけなんだ。實行と言つた所で、何をどんな形で實行すればいいのか？ 彼等には殆ど成案がない。彼等の乏しい腦味噌から漸くにして了解し得たことは、ドイツの覺醒のためには、如何なる勢力と抗爭する必要があるか、といふ點だけであつた。具體的に言ふとド

のためには如何なる勢力と競争する必要があるか、といふ點だけであつた。具體的に言ふとド

イツの覺醒には、猶太主義ユダヤイズムと加特力主義イムベリタムスと投機資本ディカルゼンカピタルと労働者國際主義インテラナショナルイズムとの四つを徹底的に遣つ付けるより外にない、といふ極めて消極的な認識だけであつた。

次に一方ミュンヘンの國防軍の中には、祖國精神を鼓舞するために、有志の軍人達に依つて、これ又些かな講習會が開かれてゐた。これなどは、北獨プロイセンでは見られない現象だ、プロイセンの軍隊的な傳統精神からいふと、軍人の政治に参加することは勿論二三の野心家の存在は別として一般的には排斥すべきものの如く、考へられてゐたからである。然し時代は今や不正常なのだ。軍人に誠忠を誓ふべき中心が缺けてゐる非常時の際とて、黙つて居れば軍隊内に、祖國を裏切る國際主義が、大手を振つて浸潤して來る惧れが多い。だから志ある者は、一體どうすれば軍隊自身の本來の面目に立ち歸つて、外來思想などに迷はされないか、といふことを眞面目に考へ始めたものである。それには軍人一般が、もつと國民主義に基く政治的知識の涵養を必要とする考へたものだから、これ等の有志は上官の許可を得て、否寧ろ幹部の獎勵の下に、種の講習會若しくは講演會の如きものを作つた。

でもそれは軍人だけで出來る事ぢやない。矢張り愛國の至誠を持つた民間の有志とも聯絡を執つて、或は講師の派遣を頼んだり、或は又反對に民間のさういふ風な集會に軍人側の代表を送つて、軍隊の方ぢや今かういふ考へを持つてゐるといふ風な意見をも、披瀝ヒレキする必要があるのだ。

さういふ意味でミュンヘンの衛戍司令部からは、教化班士官と名付くるものが組織され、そして折々民間の愛國團體や、國民主義的「政黨」の集會を訪問し、或はその講演を聴き、或は反對に此方が辯士となつて、向うの講演會を助けてやつたりなどした。斯様な軍部と民間との聯絡係、又は思想交換の代表者の一人として選定されてゐたのが、アドルフ・ヒットラーである。彼はバイエルンの戰時義勇歩兵として大戰に参加し、戦線に於ける名譽の負傷者としての資格で、身分は伍長相當官だつたにも拘らず、なほ依然としてミュンヘン軍管衛戍部に籍を置き、そして軍人としては、恐ろしく演説が旨いといふので、右に述べた政治的教化班の一人に指命されてゐたものだ。

斯くして彼がさういふ資格で、例のドレクスラーの獨逸労働黨の集會を訪問した時、彼はその黨員を眼の前に置いて、滔々^{たうく}と自己の所信を述べたものと見える。同黨の人々はそれを聴いて非常に感激し、この男を黨に引張り込んでおけば、必ずや將來黨の方針實現のためには、有力な執行者となつて呉れるだらう、と見込みをつけたものだから、早速彼に入黨の勧誘状を送つた。で、ヒットラーは暫く熟考した結果、矢張りドイツの大衆に喰ひ込んで行くには、民間の民族解放運動に籍を置いた方が、效果的だと信するに至つたので、遂に意を決して、その獨逸労働黨なるものに入黨の承諾を與へ、そしてその黨の第七番目の黨員といふことになつたのである。その偶然

が、ヒットラーのためには非常な幸運であつた。否、その偶然が、ドイツ全體の民族的自由解放の運動には、驚くべき未來を決定し約束したのだ!!

*

*

*

アドルフ・ヒットラーが獨逸労働黨の新黨員として、その黨の主催にかゝる政見發表講演會で、公衆に向つて最初の演説を試みたのは、恰も一九一九年十月のことである。その席上で彼はヴェルサイユ屈辱講和に反對する焰^{はのほ}の如き熱辯を揮つた。

今迄その黨の講演會といふのは、極めて氣勢の昂らぬ柔和^{やわやわ}しいものであつた。一方共產黨や社會民主黨に屬する労働者の演説會では、辯士の鐵腕に演壇が跳飛^{はんと}んだり、聽衆の喝采と彌次の怒號とが嵐の如く沸き返つたりするやうな、物凄い景氣が普通なのだが、右翼の人々の演説會といふのは、一般に不景氣で萬事控目なのが多かつた。素より右翼の連中には、本當の喧嘩になると、腕つ節の強い豪の者はゐる。又祕密結社を作つて刺客を放つたりする場合には、義務のために生命を何とも思はぬ健氣な若者にも乏しくない。然し一般に彼等は口が重いので、演説會など催した時は、共產黨のガラ幹がやるやうな、景氣のいゝ芝居が打てないのだ。偶々^{たぐ}保守的な大學の休職教授などと呼んで來て、ナシ・ナリズムの精神とは何ぞや、といふ風な講釋をさせて見ても、内容に新味がなくつて、小さな聲でくどくどしく消極的な辯解ばかりして、意氣が極めて昂らな

い。然るにヒットラーの演説は、全然それと段違ひだ！　まるでマルキシストの煽動専門屋も、
跳足で遁げるやうな、焰の辯の十字砲火が、見るからに至誠そのものの如き彼の逞ましい全身か
ら降り注いで来るのだ。遠慮も糞もない、随分無茶も言ふ。然しこれに耳を澄ます人々が、頭の中
で順序を立てて、その矛盾だの不合理を考へて見る暇も餘裕もあらばこそ、感激の血に燃ゆる
聴衆の心臓は、恰も鋭い水の刃で刺貫ぬかるゝが如き、又若き青年の純真な魂は、まるで息も吐
けない程に咽喉輪を締められる感じがする！　彼の演説は文字通りの「戦ひ」だ！　鮮血淋漓た
る、ランゲマルクの肉弾戦そのものだ！

従つてそれは誰よりも先づ軍人の胸を搏つた。就中ドイツ國防軍に屬するロエーム大尉の如き
は、痛く心を動かし、將來ヒットラーが「獨逸労働黨」を提げて立つ場合には、その若い運動に
對し、屹度軍除側の保護を與へる約束をさへした。ロエーム大尉は歐洲大戰の瘴風彈雨を潜つて、
身に十一傷を蒙りながら、なほ屈せざる體の豪の者で、根が親分肌の人物であつたから、彼の命
令には水火をも辭せざる屈強の部下を澤山持つてをり、従つて彼を力のバトロンとしたことは、
ヒットラーの初期の些かな運動には、千鈞の重味を加へた感がある。

否「力」の保護ばかりぢやない。その當時のヒットラーには頼みとするに足りる二人の「ブレ
イン・トラスト」がゐた。一人は民族的文化政策者で、社會改革に一家言を有し、又詩人として

天分の豊かだったディートリヒ・エッカートであり、他は技術者上りながら、経済學の理論的方面に異常な卓識を持つてゐたゴットフリード・フェーダである。この兩名はヒットラーを得なかつた以前には、その勝れた頭腦も、徒らにギラ／＼したマルキシズムの流行理論に掻き消されて、その牙えを見せることが出来なかつたが、ヒットラーに思想上の滋養の糧を與へるやうになつてからは、間接ながら彼等自身の世界觀にも、油の乗つた確信が出来た。従つて熱血沸る獨特の表現と、創意に充ちたエビグラム以外に、なほヒットラーの演説中、屢々敵をも肯かしむるに足りる社會理論や意想外に美しい詩句の類はれるのは、黒幕に研鑽するこれ等兩名の不斷の努力を想ひ起させるに足りた。

もつと具體的な適例を見ると、例へば未來の政黨の指針と目的を定むる綱領二十五箇條の如きは、日頃議論してゐたエッカート及びフェーダの思想そのものが、在りの儘に羅列されたものである。

この二十五箇條は一九二〇年二月、ミュンヘンの麥酒レストラン「ホーフブロイ」に於て公開された黨綱領發表大演説會で、ヒットラーに依つて朗讀され、且つ逐條的説明が加へられたものである。その日早くから會場に入込んで、喧々囂々（けんけんがうがう）の妨害を與ふる政敵の壯士連を尻目にかけつゝ、ヒットラーは自己の兼々から眼目とする意見、則ち國民の救済には、極端な過激な内政改革

の荒療治が要る旨を、怯ず慮せず獅子吼した。後にナチスの有名な標語となつた「公益は私益に先行す」といふ信念に基く必然として、「利子奴隷制の打破」を叫んだ時は、聴衆一同呆氣にとられ、このナショナリストの一團は、頭が狂つて階級争闘の社會主義へ轉向したのぢやないかと、自分達の耳を疑つた。するとヒットラーは愈々本然に還る結びをつけて「たゞ純正な血筋に基くドイツ人のみが、將來の自由な大獨逸的帝國の國民たり得る資格を持つゝ。そして嚴の如く巍然たる權力の統一國家は、腐敗せる議會制度の全廢、新しい社會的勞働法規及び生活法規を確立する實務があるのだ」と傲語した。

このラヂカリズムには、一道の光明が射してゐる。恰も社會民主主義に對抗するコンムニストのラヂカリズムには、社會的觀念の闇夜を迷ひ悩む人々にとつて、思はず駆け寄りたゝい誘惑の鬼火がチラ／＼してゐると、尠くとも同じ程度で、ヒットラーの指さす荒浪の遠い彼方には、仄かながらも望みの燈臺の灯が見える。その點でヒットラーの指さしは、カップ一揆を繞る反動團體の目的みたいに、その前途が暗くない。カップの人々も反動的にラヂカルな程度に於ては、敢てヒットラーのそれに譲らなかつたかも知れぬ。然しそれは單に方法上のラヂカリズムだつた。その方法が齎す目的は、單に大戰以前の、否、十九世紀式の昔に還るといふだけなんだ。それは復古であつても、所詮新理想の樹立ちやない。精々のところ再興若しくは恢復であつても、決して

てそれ以上の跳躍でもなければ進歩でもない。然るにヒットラーのそれは、たつた今滅亡するだけの理由があつて滅亡した廢址^{はし}を掘り返すのぢやなくつて、古いと言へば大昔の、然も中世紀の、否更にずつと以前の、古代ゲルマン式世界―則ち現代人が、まるで交渉を忘れて了つた筈の美しい理想社會―を描き出すのだ。由來人間の社會心理の動き方といふものは、まるで帽子や着物の流行に對する趣味の變遷に、髣髴^{はふふ}たるものがある。誰だつて昨日流行^{はや}つて、今日はもう時代後れになつてゐる品物に對しては、たゞ嘲笑と嫌惡があるばかりだ。なぜあの時分にはあんな變挺^{へんてい}なもの喜んで身に着けたか、自分ながら今更不思議に思はれて、殆ど振向く興味さへ起らない。所が昨日や一昨日の流行ぢやなくて、ずつと以前の大昔の時代服裝に對しては、誰しも普通の流行後れを憎み嘲るのと全然異つた心理で、これを迎へるのが常だ。その類推でも分るやうに、同じ反動の思想でも、ついこの間顛覆して滅びたばかりの不評判なドイツ帝國を恢復しようといふのと、現代に關係のない太古の美しい理想を示さうといふのとは、てんで迷へる大衆を吸引する魅力が違ふ。

で、ヒットラーがそれから進まんとする道筋は、十九世紀式のナショナリズムとは全然、姿の變つた、古代ゲルマン人の集團生活に應^{こた}はしい「社會性」を「國民性」に結びつけた觀念からスタートする。それは「社會性」と「國民性」とを、機械的に接續詞で結合したやうな、則ち、

national und sozial ぢやなくいつ、寧ろ兩者が一個の nationalsozial といふ言葉で、有機的に融合した觀念である。更にこの觀念は國際的に普遍し、人類共通の理想を豫定したものでなく、單に純粹なドイツ人種だけが把握し理解し得るゝもの、則ち einheitlich なる性質を持つたものでなければならぬ。最後に又それは單なる抽象的な理論でなくつて、階級に差別なき國民全體を綜合的な勞働者と看做し、その全部の所謂勞働大衆が、國民生活完成の努力に、積極的な参加をするといふ意味で、これから愈々政黨を立てるなら、一種の「勞働者政黨」即ち Arbeiter-Partei である筈だ。

さう考へた結果、ヒットラーは他の同志と合議の末、今迄の政黨を Nationalsozialistische Deutsche Arbeiter-Partei (國民社會主義獨逸勞働黨) と改稱した。短稱して N.S.D.A.P. である。

この政黨の事實上の首領、即ち指導者は、言ふ迄もなくアドルフ・ヒットラーであつた。尤もその初めは、名目上他人の名義になつてをり、そして幹部の中には、ヒットラーの切れ過ぎる才幹の芽えを嫉むやうな競争者が—そしてこれ等の競争者の大部分は、所謂社會革命主義者の臭ひが強かつたが—多少ゐたやうである。だがヒットラーは、本來天才的に人を見抜く能力を持つてをり、従つてその當時單なる名目上の黨首争ひなどは、殊更に避けてゐた感がある。又彼の主張するラヂカリズムの如きも、愈々實際運動に向はうとした場合には、一定の常識的制限を持つて

をり、他の社會革命的思想に醗酵した同志みたいに、單に空想のユートピアを説いて、亭々として往く所を知らぬ如き、頼りなさは無かつた。由來ラヂカリストには、相手のことなんか念頭に置かぬ奇矯な變人が多い。それに較べるとヒットラーは、決して變人ぢやなかつた。眞直ぐに慷慨はするが、決して皮肉な拗者ぢやなかつた。だから彼は周圍の者から好かれ愛せられ、又頼もしがられたのである。彼あるがために、この新政黨は多方面からの同情を聚めた。

誰よりもバイエルン地方政府首相のフォン・カールが、この新しい政黨の成立を知つて、非常に喜んだ。彼は地方議會で公然これを稱讃し、その運動の將來が多幸ならんことを希望したのである。そしてミュンヘンの警察も亦盛んに好意を示してくれ、殊にヒットラーが先頭に立つて、「マルキシズムを打倒せよ……祖國なき金融閥の高利貸的搾取を排撃せよ」といふ示威運動をやつた時などは、左翼からの妨害が入らないやうに、武裝の警官で保護してくれた程だ。

斯くしてヒットラーの新政黨は、一九二〇年の末に約三千名の黨員を獲得した。三千人と云へば大した數ぢやないが、黨員内の結束が極めて鞏固なため、孰れも一粒選の積極的闘士なのだ。そしてヒットラーが後に天下をとつて、國民社會黨が全國に絶對權力を握るに至る迄、彼等は忠實にその指導者ヒットラーの手足となつて、辛さに苦樂を偕にした。だから、現在飛ぶ鳥をも落とすやうな地位にゐるヒットラーも、未だにその時代のことだけは忘れないと見えて、今にその時

の黨員を「古い護衛」若しくは「古い闘士」と名付けて、特別な待遇を與へ、よく／＼の事が無い限り、輕々しく清黨行爲の犠牲になどしないのである。で、この三千人を糾合し、それに水も洩らさぬ訓練と組織を與へた上、一體どれだけの仕事が出来るか、試金石としたのが、一九二一年二月の政治的示威大集會である。その日ミュンヘンの集會場で、一番大きな曲馬館たる「チルクス・クローネ」は、立錐の餘地なき迄に滿員となつて、嘗て他の如何なる政黨と雖も企て及ばなかつた程の大成功を収めた。

だがヒットラーが、初めから一番力を入れてゐたのは、黨内の年少氣鋭な分子に、一種の軍隊的な訓練を與ふることであつた。それがために彼は、黨の擴大運動に平行して、所謂「突撃隊」俗稱 S・A なるものを編成したのだ。その初期の具體的任務から言ふ時は、S・A は政敵を威嚇して、黨の運動を擁護する機關であり、同時に將來大規模な國民的解放戰に参加する闘士の精神的豫備訓練をなす施設なのである。一體ドイツの有力な政黨の特色は、黨それ自身と、勞働組合と、青年運動との三要素を組合せることに依つて―換言すれば政治戰、經濟戰、イデオロギー戰の三段構へに依つて―例外なく構成されてゐた點である。例へば當時の共產黨にしろ、社會民主黨にしろ、又中央黨にしろ、議會のフラクシオンを基礎とした黨それ自身の外に、必ず各自の勞働組合と各自の青年團とを具有してゐた。否、左翼若しくは中央のみならず、右翼の政黨（人

民黨又は獨逸國權黨等)でさへ、矢張りそれらの労働組合臭いもの、及び青年團臭いものを手なづけてゐたのである。

従つてヒットラーが純粹な政治的政黨を作つた場合にも、右に述べたやうに、特にそれに労働者黨といふ名前までつけて、労働者團體の獲得に努力したのは――又現に後には全國の労働組合を獨占して、獨特の組合「労働戦線」を作つたのであるが――極めて當然であると共に、一種の青年運動としての突撃隊を(又後にはヒットラー少年團を)設けたことは、別にヒットラーの政黨のみに見らるゝ獨創的現象ぢやない。たゞヒットラーの青年運動が(共產黨の「赤色戦線闘士團」だけを例外として)他の諸政黨の青年運動と、著しく異なるところは、全然軍隊式であつたといふ點である。

勿論突撃隊は、その後政府の壓迫に依つて、武裝のみか制服まで禁止され、ヒットラー自身も、屢々突撃隊の軍隊に非ざること^をを公言してゐるし、又國民的革命が完成して後の一九三四年八月に、ロエーム大尉の謀叛事件^のがあつてからといふものは、一般徴兵制度に因る正規の國軍^{以外}に、補助軍隊の存在を認めないことになつて了ひはした。

それに拘らず突撃隊の生成は、ヒットラーの軍隊趣味の著しい現はれである。彼はこの突撃隊を軍隊式に命令し、その絶対服従の力に依つて、嘗てビスマルクすら手の下しやうがなかつたマ

ルキシズムを、暴力的に剷滅しようと考えたと同時に、若しも彼の「反ヴェルサイユ主義」が禍して將來外國の侵入があつた場合には、その防衛として僅か十萬しかない國防軍だけの力を頼むことが出来ないのを豫想して、斯様な一種の私軍を集めたものに違ひないと思ふ。それは又彼の趣味でもあつた。勿論彼は職業的な士官でもなければ、高級な將校でもない。僅かに義勇兵として大戰に参加し、伍長格の兵隊として一個の鐵十字章を得ただけの人間なのだ。然し彼の性格と言行、その生活の態様、その單純で眞直ぐなイデオロギ―、その政治戦線に應用する戰術、その政權獲得後に於ける國家統制の形式等を綜合し判斷するに、彼の爲し又爲さんと欲することの一切は、總てこれ理想的な軍人のそれである。

敢てそれはヒットレリズムだけに限つた現象ぢやないかも知れぬ。戦後ドイツの反動運動は、實際軍人に依り軍隊的に起されたものばかりである。人民黨とかドイツ國權黨とかの、幾らか十九世紀式自由思想（若しくは進歩思想）を加味した議會主義の保守團體は、必ずしもさうでなかつたが、尠くとも前に模倣した過激な反動運動は、ゼルテの「銅兜團」にしろ、「バルチクーム」や「エーアハルト隊」にしろ、又カップを繞る一揆の一味にしろ、その行動の樞軸は別として、例外なく戦線兵士の戰鬪的精神が、絶望的に暴れ出た結果なのである。これ等の亂暴者が果敢なくも犠牲になつた疊々たる死屍を土臺にして、その間から斷然頭角を擡げて來たヒットラーであ

るから、彼のすること爲すことが、總てこれ「軍人精神の發露」であつたとて、敢て異とするに足りないだらう。

*

*

*

ヒットラーの遺口は萬事「軍人主義」(軍人本位と混同しては不可い)であるから、彼の生涯は、その自叙傳「我が戦ひ」の標題が示す通りの、戦闘そのものである。彼は何時でも眼前に敵を假想し、その目的物を攻撃するために、勇敢に然も我武者羅に突貫して行く。

但しその攻撃の目標は、必ず誰の眼にも見え、又手に觸れ得らるゝ手近な所にある。その點で彼の一見我武者羅と見えるものは、共產主義の横紙破りと、大にその趣きを異にする。共產主義者は眼に見えぬ觀念的な範疇、例へばブルジョアジイとか世界革命とかが、果して何處にどう存在してゐるか分らぬし、又假令それを叩き潰して見ても衆愚の頭にその後がどうなるか、何だかピンと來ない目標のために、血眼になつて流血し奮戦することを要求する。だから幾回となく失敗と犠牲を重ねてゐるうちには、餘程なファナチストでない限り、大衆はいつの間にか馬鹿々々しくつて、厭になつて來るのだ。然るにヒットラーの横紙破りの目標なるものは、敢行すれば必ず陥落しさうなものばかりである。當時ドイツの國民大衆は、貨幣價值の崩壊に依つて困憊窮乏の極に達し、誰しもユダヤ人の投機業者や俄か成金に向つて、意識的無意識的に忿懣と反感を懷

いてゐた。するとヒットラーは、國民社會主義労働者黨の名に於て、「創造に従事する民族大衆の膏血^{きうけつ}を絞つて、然も恬^{てん}として恥ぢざる一切の投機業的搾取者を死刑に處すべし」との要求を提示した。この標語は國民の間に、大波の寄せ返す如き反響を引起し、それがため下層の中産階級中に、夥しい黨員及び支持者を擁めることが出来たのである。その際彼が漠然として有産階級を全部撲滅すべしなどと怒號したと假定すれば、中産階級は愚か妻子を抱へて解雇に怯えてゐる工場労働者まで、胸に手を當てて逡巡躊躇したであらう。然るに難しい社會理論などには一向に理解のない大衆一般でさへ、實際怨み骨髓に徹してゐる世の投機者流や成金連などといふものは、金にあかして威張つてゐるやうに見えても、實際は忿懣^{ふんらん}の堰^{せき}を切つた大衆の暴力で威嚇すれば、みんな蒼くなつて、必ずこそ／＼遁げ出すに極つてゐる。又ドイツには傳統的に毛嫌ひされてゐるユダヤ人の如きも、表面は文化の擔當者みたいな顔をしてゐるけれど、實はドイツ六千萬の總人口中僅かに六十萬しかゐないし、それに根が腕力をもつて反抗することの出来ない弱蟲だから、少し無茶をやる積りなら、そんな者を追つ拂ふのは造作もない。そこでヒットラーはさういふ具體的な、そして我武者羅に突貫さへすれば必ず陷落するに違ひない所へ、攻撃の目標を据ゑて、どし／＼巨彈を放ち始めたのである。彼は矢張り立派な戰術家である！畢竟するに一種の名將である！

だから彼は一九二三年一月に至つて、自分の部下として聚めた突撃隊を、堂々とミュンヘンで閱兵した。私人の「閱兵式」といふのは珍らしいので、當時の世人がセンセーショナルに聳動したのも無理はない。それが普通の正規軍隊組織と異ふのは、その編成が中隊とか大隊とかの名目に據らずして、たゞ「スタンダルド」(基準隊)の形になつてゐるだけである。その基準隊が軍隊のみ専用するを常とするマルスフェルド練兵場で、隊伍堂々一絲紊れざる歩武を描へ、指導者の前に最敬禮を行ひ、そして絶對の服従を誓ふと言ふのだから、追がの政府も、左翼及び民主黨の猛烈な反對に慌て氣味となつて、遂にこれを禁止することにした。然るに今度は本當の正規軍中の、有力な軍人が中々聽かない。「そんな政府の禁止令なんか我々が横についてゐる限りは、斷然實現させないから大いに遣り給へ」……とヒットラーを激勵したものだから、この「閱兵式」は極めて盛會裡に行はれて了つたのである。この日指揮者ヒットラーの兩側に従つて、この閱兵に参加した軍人の中には、ミュンヘンに於けるドイツ國防軍司令官のフォン・ロッソオ、歩兵軍管長フォン・エツプ將軍及び前記のロエーム大尉の三名の顔が異彩を放つて見えた。

斯くして「突撃隊」は事實上の力となり、前大戰の空襲に勳功を樹てて「ブルー・ル・メリッ
ト」の佩用を許されてゐた飛行士官で、ヒットラーの片腕となつたヘルマン・ゴエーリングに依つて、司令さるゝこととなつた。更にその新隊員の徵集には、國防軍の將校が参加し、まるで正

規軍の壯下の徵集と同じことをやつた。それから突撃隊は又、警察的任務にも執掌せんが爲め、マルキシストの「五月祭」には、自發的に警察官の先頭に立つて、眞向からその示威行列を攪亂し、中途で阻止して了つたものだ。するとこれも左翼及び民主黨の八釜しい抗言に遭つて、政府はヒットラーの責任を問ひ、これを逮捕せしめることとしたが、それ以上刑罰を加へる手段がない。何となればそんなことをしようものなら、その時分の突撃隊は實際ミュンヘンの衛戍營舎に寝泊りし、且つ國家の武器庫から勝手に兵器を持ち出して完全に武裝してゐるので、指揮者の一令に依つて、どんな流血の慘事が勃發するかわからぬやうな情勢になつてゐたからである。懷ふに突撃隊の變遷史中、その當時ほど鼻息があらくつて、實力があつて、従つて暴力一揆の危険を孕んでゐた時期はないだらう。正規軍もこれを助けるし、バイエルンの爲政者も擧つてこれに聲援を與へるのだ。則ち、ヒットラーの突撃隊を中心として、バイエルンの上下一般が、ワイマア憲法に謀叛を起し、中央政府の政治方針を打破しようといふ氣分に充ち満ちてゐたのである。だから當時のヒットラーが、ベルリン進軍を敢行するだらうとの當時の風評には、信するだけの根據があつた。ベルリン進軍は時期の問題であつたとも言へる。

六、所謂オベレッタ革命の真相

で實際ヒットラーは、一九二三年十一月に、ベルリン進撃を目的とする一揆^{プツ}を決行した。そしてその場合は一敗地に塗^ぬれ、國民社會主義運動の前途に、暗澹たる影を投げはした。ヒットラーもそれに依つて、得難い經驗をしたことだらう。立派な生きた學問をしたことだらう。

世にヒットラーの十一月一揆を戲畫化して、「オベレッタ革命」といふ。成程その當時の常識から判斷すると、隨分輕率な無謀な行動であつたことは事實だ。然し今日から判斷すると、あの種の「暴動」は、若しヒットラーがやらなければ、必ずや他の者が先廻りをしてやつてゐたに違ひない。ぢや誰が一體實行したであらうか？ 又それをヒットラーが引受けるに就いては、前後にどんな政治的社會事情が在つたであらうか？

それを考へるためには、どうしても當時のドイツ共和國の政權を握つてゐた中央政府を土臺として、その周圍に展開した國民生活的苦惱を、よく腹に入れておく必要がある。私は便宜上ヒットラーが、政界に擡頭し始めた時期、即ち一九一九—二〇—二二年頃を短命なりしドイツ共和國史の第一期と見、更にヒットラーが一揆計畫に失敗した前後、即ち二十一年から二十三年迄

をその第二期と看做してゐる。勿論共和國は二十四五年から八九年の第三期を經、二十九年より三十二年の第四期（破局期）を以て、その最後を終るものであるが、第三期以後のことはこゝに述べないで、折に觸れて後に説明することとしよう。

第一期は共產黨の世界革命を中心として、ドイツの上下が惱み苦しんだ時期である。だから共產黨に反抗し得る者は、微々たりと雖もなほ殘存した國民的武力より外に何にもなかつた。

所が第二期に入つて來ると、周圍の事情がもつと複雑になつてゐた。今迄の共產主義者は、依然として暴れることは暴れてゐるが、彼等の理想たる世界革命への未來の夢は、第一期に較べて餘程絶望的となつてゐる。だから共產黨は血腥い武裝革命主義よりも、寧ろ議會主義に據つて、ドイツの政權に割込む運動をやるやうに變つて來たのだ。それと同時にドイツは、又怖ろしく外國からの壓迫に苦しみ惱んだ。その惱みは特に第二期だけの問題ではなかつたが、第一期に於ては何しろ戰敗の後をうけて、殆ど降伏狀態でゐたので、聯合國の言ひなり放題な要求に對し、ただ唯々諸々と頭を下げるだけで、殆ど獨立國として外交的交渉などといふものはなかつた。然るに第二期に至つては、尠くともワイマール憲法に據る共和國政體が完成し、假令消極的でもこれから愈々獨立國としての外交政策に移らうとすると、一方聯合國（殊にフランス）が、頭からこれを壓し付けるのだ。何かしら救助を求めるための手を出す一方の端から、敵はサーベルの首をガ

チヤつかせて、頭こなしにその手を拂ひのけるのだ。だから、この第二期の特徴相は――共產黨の世界革命に憚んだ第一期、若しくは國際金融の攻撃に憚んだ第三期以下に比較して――聯合國の武斷外交的威嚇に散々苦しみ抜いた點にある、と言ふことができる。

その間のヒットラーの國民社會主義運動も亦、この特徴相に平行して、經緯し行動した。換言すれば、（一）フランス軍國主義の冷酷氷の如き賠償金の要求とルーア占領。（二）東境に於けるフランス附屬國の領土慾的覬覦。（三）共產主義者の政權獲得への努力。（四）セバラチストの擡頭等が、入り亂れてドイツの内政を麻の如く亂し、然も政府は優柔不斷、その孰れに對しても一種の妥協政策を執つたものだから、これ等の外因を免除するためには、結局中央の鶴の如き弱少政府を顛覆し、國民的強力内閣を樹立することが焦眉の急だ、と考へて實行に移つたのが、例のミュンヘンに於けるヒットラーの「ベルリン進撃」の一揆なのである。

大體今迄の反動主義者の運動には、攻撃の目標がはつきりしてゐなかつた。勿論カッパ一味の輕舉の如く、カイゼルの獨逸帝國復活を目的としたものの如きは別物だが、その後ドイツ民族全體の傳統精神を土裏にして、本然ゲルマン式ドイツを創始しようと努力する者の意憤は、單にドイツを敗戦に導いた裏切者や脱走兵士に對する復讐とか、共產主義の世界革命に反抗する絶望的な示威運動とか、要するに攻勢的な政治目標を漠然たる精神的、倫理的方面に置き過ぎた觀があつた。

然るに共和國史の第二期に入つて、ルーア占領や分離主義者の跋扈等の現象を見てゐるうち、問題は單に精神的な宣傳や、倫理的の強化に依つて、解決せらるべきものでなく、結局政府の方針それ自身が悪いのだから、この政府を打倒しなければドイツが救へない、といふことに目醒めて來たのである、今迄は政府の精神をそのまゝ右翼化さへすれば、事足りると思つてゐたものが、今や政府の組織それ自身を打破しなければならぬ—即ち、ワイマア憲法に則つて立つ政治機構全體、今一つ換言すればヒットラーの所謂“System”を全部掃除しなければならぬ—といふ點に、主要な目標を置くやうになつた。ワイマア憲法の System に基く政府が、ドイツに樹立され得る形式になつてゐる限り、假令それが多少右翼化するにしても、結局その政府は普選的人民意思に依つて、左顧右眄しなければならぬ弱點を持つてゐるので、國內に於ては共產黨を憎みながらも、斷然たる彈壓が出来ないのみか、時には自分の立場の均衡を保つために、それを利用することさへある。又、外に對してはクノーの「消極的抵抗」だとか、ストレーゼマンの「積極的了解」だとかいふ風に、外觀は立派だが、結局ヴェルサイユの桎梏を、御無理御尤もと承認した上での小細工的な、その日過しの政策（若しくは無政策）でゐるものだから、頻々として聯合國の侮辱を受けるのだ。だから本當に共產主義を叩きつけ、又、外國からの不合理な壓迫に對抗するために、單にマルキシズムの排除ぐらゐでは足りない。寧ろその本源に溯つて、ワイマア共和憲法

は、單にマルキシズムの排除ぐらゐでは足りない。寧ろその本源に溯つて、ワイマール共和憲法

の System に基く、一切の政府を排除することが第一の急務だ、といふ方針に變つたのだ。そこにその當時に於ける反動主義者の、特に一揆^{ゾッパ}を急いだ理由がある。

だからヒットラーのその頃に於けるミュンヘン一揆を、全然無謀で輕薄で眼先の利かぬ「オベレッタ革命」と、嘲笑し去るのは間違つてゐる。ヒットラーだけが前後の時期を見ないで、無謀に計畫したのぢやない。クノー内閣からストレーゼマン内閣の初期にかけては、實際さういふ一揆の空氣が充満し、時期から言へば、もう爛熟してゐた觀さへある。共產黨がツァイグナ地方政府を擁立したのも、分離主義者が本國から離れようと計畫したのも、所詮は中央政府の基礎が餘りに脆弱^{ヤンビヤク}だつたものだから、一寸冒險をやれば、必ず中央政府が倒れることを信じた結果であつたらう。否、國民主義者自身の中にも、ヒットラー以外になほ一揆の計畫をしてゐたものは尠くない。例へば世間に餘り知られてないがブフルツカア少佐の率ゐた「黑色國防軍」の一揆がそれである。

然らば、ヒットラーの所謂「暴動」は、何故に見事失敗に了つたか？ その経緯をとくと考へて見よう。

*

*

*

ストレーゼマンのフランスに對する「積極的了解」政策は、ドイツのポアンカリズムに對する

形式的のみならず精神的の絶對降伏であつて、それに依りドイツは僅かばかりの物質的復興といふ代償で以て、ヴェルサイユの獨裁原則を本質的に承認し、且つ忠實に遵奉することとなり、同時にストレーゼマンの内政も亦、ドイツの有産階級全體をして、ワイマア憲法から永遠に離れられないやうな鋸を打ち込んで了つた。彼の標榜する所は「ワイマア憲法から永遠に離れられないやうな鋸を打ち込んで了つた。經濟的全權委任法」の獨占にある。

經濟的全權委任の政策は、社會主義者の産業社會化や、國民主義者の國家資本主義と形だけは似てゐても、結局、自由主義の大ブルジョア階級の行詰りのみを打開するに役立つ經濟統制の方法である。この政策とワイマア憲法とを巧みに併用する限り、社會主義者は反抗の目標を失ふし、國民主義者は否が應でも、永遠にワイマアのシステムに捲き込まれて、立つ瀬がなくなつて了ふ。だからこの政策に對しては、先づ自分のお株を奪はれる形の社會主義者が不平滿々たるのみならず、國民主義者も亦その方針の惡右轉なるに對し、却つて非常な反抗を示した。換言するとストレーゼマンが、狡猾な手段で、左翼にも右翼にも文句を言はせないやうな形式で採用した經濟的全權委任政策は、大聯合内閣（舉國一致内閣）成立の條件となつてゐたに拘らず、實はこのストレーゼマンの大聯合内閣の時ほど、議會的紛争の熾んであつたことはない。内閣の危機はこゝ暫く慢性的に永續し始めた。

ベルリン中央政府の腰の弱さに對し、特に憤懣の烽火を擧げたのは、國民社會主義の一味であつた。彼等はヒットラーを中心として、政黨制度そのものの解消を主張し始めた。その示威運動のため、ヒットラーは國民社會主義者の全部を^{ひつさ}掲げて、十一月にニュルンベルク市で「獨逸の日」なる集會を催したが、それにはバイエルンの國防團體の主なるものが、欣然として参加してくれた。そこでヒットラーはその「政治行動の指導者」、又ルーデンドルフがその「軍事行動の指導者」となつたのである。

一方バイエルン政府もミュンヘンに於ける排政黨の傾向に影響されてか、選舉に基く責任內閣制の持續し難きを悟り、もと首相であつたフォン・カールを迎へて「全國總統監」なるものに任命し、これに非常時全權を委任したのである。だから中央政府の方では、在野の國民社會主義者團體とミュンヘン國家の執行部とは完全に提携したもの、換言すればヒットラーとフィン・カールとは、一身同體になつたものと觀察して、非常に速^{すみ}てだした。無理もない話だ。

然るに幸か不幸か、この協同動作を執つてゐたヒットラーとカールとは、國家の改造に關し全く違つた目標を睨んでゐたのである。カールはバイエルン王統、即ちヴィテルスバッハ家の復辟に依つて、以前の君主制官僚國家を再現せんとし、従つて中央政府のワイマア憲法に依る人民主權國家と違つた政體が、バイエルンで行はれる可能性さへあるならば、敢て大獨逸主義に基く民

族國家を主張してまで、ベルリンを轉覆する必要はないと考へてゐた。所がヒットラーの方はドイツに政黨組織を全廢して、一個の新しい國民統一を假定し、それが實現のためには、人種的且つ社會的な革命を不可避なりと信じてゐる。だから兩者が提携したのは、初めから間違ひであつて、ある點の岐路まで來ると、兩者は必然的に敵味方となる運命を持つてゐたのだ。故に兩者の誤謬は、兩者雙方共に、相手は大體自分の鼻のものと早合點し、多少の見解の相違はあつても、孰れそのうち相手を自分の領域に引入られるだらう、と獨斷し合つた點に在るとも言へよう。

當時のカールを擁護し、ヒットラーを罵倒した多くの評者のやうに「カールが是でヒットラーが非か、或はその反對かは誰か鳥の雌雄を知らんやだ」然しその際、カールはたゞ中央政府への反抗に合法の途を辿らんとし、ヒットラーは非合法の手段を選べんとしたと見るのは全然正しくない。兩者の相違はそんな手段の甲乙に在つたのではなく、前にも言つたやうに根本の目的に在つたのだ。だから、カールは自分の目的を達成せんが爲め、既に以前からバイエルンの共和國防軍を手なづけ、一旦緩急あらばバイエルン地方政府獨立のために、誓言を立てさせてゐた。これは明かに共和國憲法に對する非合法手段なのだ。彼は畢竟一個の分離主義者で、その功罪はかのドルテンやホフマンやオルビスの徒にも等しかつた譯である。彼は非合法的な陰謀に依つて國防軍をバイエルン獨立のために宣誓させ、一方その範圍に於て國民社會主義者を、バイエルン

獨立のために利用してゐたと觀ても差しつかへない。だからこそ、カールは十一月六日に、バイエルンの共和國々防軍司令官フォン・ロッソ將軍と一緒に、國防團體の指導者連を悉く呼び集め、各自別々に勝手な行動を採らないやうに、内々の禁令を發したのだ。彼はその當時既に一種の獨裁官の積りでゐた。従つてその時の言葉にも――「總て用意が出来たら行動に移る……その命令は我輩が與へる――」と斷言してゐる。たゞその際ヒットラーが、カールを押退けてまで、仕事をするやうな氣配が見えたので、彼は自分の獨裁官たるの地位よりするも怪しからんことだと考へて、寧ろヒットラーを嫉怒した譯である。で私は若しもカールが悪者であるとするなら、それは初めから目的の違ふヒットラーを單に利用してゐた、といふ狡猾い態度に在りと信するものだ。そして世間普通の人の言ふやうに、カールはヒットラーと一揆を約束して置きながら、その間際になつて怖氣がついて、急にヒットラーを裏切つたのは誠に男らしくない腰抜けだとのみ見る説には、尠くとも私は不賛成である。

然しまた一方、ヒットラーの執つた行動も強ち輕率だとは言へまい。何故ならカールと一緒になつて以來、十一月の初めにはもう彼の運動は、國民社會主義の行くべき途とは凡そ縁の遠い、違つた方向に引きずられてをり、そのまゝグズ／＼してゐては、全く取返しのかねことが判然したので、彼としては當然危い瀬戸際から身をかはして跳躍する必要があつた。彼は焦慮しつゝ

その機會を待つてゐた譯だ。

恰も宜し十一月八日の晩、カールはミュンヘンの料理店「ビュルガアブロイ・ケラア」で、大勢の民衆を寄せ集めて、政治演説をやることになつてゐた。でその演説は、察するに民衆の激昂を、寧ろ鎮撫するやうな内容のものだつたに決つてゐる。ヒットラーの方はそんなことをされたら困るから、何等かの形でそれを妨害して、大勢を自分の方に引張り込む必要があつたに違ひない。では一體何故にその時カールが、民衆を鎮撫し、時期を待つべき演説をしなければならなかつたか？ 單にヒットラー一派の單獨行動に反感を持つて、それを阻止するために、全然一揆の計畫を放棄してゐた爲めか？ 否、私はさう思はない。カールの胸中では、慥かに當時のストレーゼマン内閣が、近いうちに崩壊することを描いてゐたに違ひない。(また實際同内閣は、今日明日にも潰れさうな危機に立つてゐたことは事實である！)それで若しもストレーゼマンが辭職すれば、次期内閣の組織難に直面し、ベルリン政界は當分擦つた揉んだの大騒ぎをすることだらう。その機會を利用し、カールはバイエルンを中央より離脱させ、突然その獨立を宣言する段取りでゐたものと見える。だからカールがその晩、民衆に慎重の態度を採るやうに、勧める演説をしたにしても、敢てカールがその時、既に全然一揆をやる腹がなかつたと攻撃することは出来ない！ 孰れにしてもヒットラーが、その晩自分の突撃隊員を武裝させ、ドヤ／＼とその集會場に闖入

して來たことは事實である。でこの一隊は件のビュルガアブロイの裏口及びその他の要所々々に物々しい警衛に立ち、その中からヒットラフだけは、そこに群がる彌次馬を掻き分けて、集會場の中へ這入らうとする。だが、群集が押すなぐとぎつちり詰めかけてゐるので、中々容易でない。するとヒットラフを信用してゐる警官連は大聲で、「入口を開けた…入口を開けた」と叫んで群集を後に退け、また突撃隊の數多のものが、そこへ機關銃を据ゑたものだから、彌次馬は吃驚してサツと場所を開いた。ヒットラフはその間を悠然として通り抜け、聴衆の一杯になつてゐる集會場の真中へ來て、矢庭に天井に向け、轟然たる一發の拳銃を放つた。皆の注意を自分の方へ集中さす爲めであつたらう。それから彼は演壇に飛び上つた。そこには演説の途中を断ち切れ、呆然として蒼白な顔をしたカールが棒立ちとなつてゐる。ヒットラフはそのカールを尻眼にかけながら、聴衆に向つて叱咤呼號した―「諸君、只今國民主義の革命が突發した…國防軍と地方警察とは總て鉤十字の旗の下に立つてゐる!!」

不意の出來事なので聴衆は怪訝な顔をする者…驚愕色を失ふ者…感激の昂奮で喝采する者…とりどりに入り亂れて大混雜である。その間にヒットラフは尙ほ片手に拳銃を握つたまゝ、その集會の立役者たるカール、ロツソオ及び警察部長ザイサアの三名を急ぎ立てて、一緒に隣りの部屋へ這入つて、カタンと扉を閉めて了つた。扉の外には武裝した突撃隊員が、嚴重に警戒してゐるのだ。

扉の中ではヒットラーが、口を酸^すばくして、連れて來た三名に最後の通牒を突き付けてゐる。彼は言ふ―「私はもう自分一人の意思で、ドイツ國全體の新内閣を拵^もへて了つた。それに依つてバイエルン現政府は廢止されたことになる。新内閣の陣立としては、全國々民軍の總指揮をルーデンドルフ將軍閣下にお願ひし、ポエーナアはバイエルン新政府の首相に。それから、フォン・カールさん、貴下にはバイエルンの「攝政」になつて頂く…」

カールは瞋^{いか}目して殆ど一言の答へもしない。ヒットラーは氣を焦^こ立て、或は懇請し、或は威嚇^{いか}するかの如く迫る。そこへルーデンドルフ將軍も來合せた。將軍もその言ひ分を聽いて、全然ヒットラー側に賛成した。従つてこのバイエルンの獨裁者を以て任ずるカールに向つて、「もう斯うなつた以上は已むを得まい。蓋しこの舉はヒットラー氏も言はるゝ如く、全國民的な大業であるから、この際私情は捨ててお互に参加協力しようではないか」と説き動めた。所がカールの立場ぢや、その「全國民的な大業」なるものが氣に喰はないのだ。でもその場合、斷然頭を横に振ることは、到底不可能と見て取つたものだから、カールは多少澁々ではあつたが、「ぢや宜しい」とばかり頷いて、兎に角その印にルーデンドルフ將軍と握手を交した。でそれを見たヒットラーも安心し、皆と一緒に連立つて別室を後に、又聽衆のガヤ／＼騒いでゐるもとの集會場に姿を現はした。そしてヒットラー、カール、ルーデンドルフの三名は代る／＼立つて、これより展開せ

んとする國民的革命に就いて、自己の所信を披瀝したのである。第一にヒットラーは、彼一流の燃ゆるが如き雄辯で、「十一月の犯罪」を殲滅し、ゲルマン民族中心の大獨逸國を建設するためには、今より速かに「ベルリンへの進撃」に移る必要があることを講述し、並みゐる聴衆を感奮せしめた。所がその次に立つたカールは氣の進まぬ低聲で、たゞ何かぶつ／＼言ふばかりである。その内容は現下の政局に際する國家の任務は何ぞや、といふ極めて抽象的な議論であるらしく、然も能く聽いてゐると時々その表現の中には、謎の如き伏線がチラついてゐる。最後にルーデンドルフが立つた。頭は單純だが眞直ぐな軍人だけに、自分は「固有の權利に依り」御用に立つことなら何でも實行する、ときつぱり言ひ切つた。

で、感極まつた聴衆は今や總立ちとなつて「ヒットラー・ルーデンドルフ新政府」の萬歳を高唱し、焰の如く上氣した大獨逸精神の高揚に油を注ぐ概を示した。眞赤に溶けた國民主義革命の熱湯は、ミュンヘンの熔鐵爐から流れ始めたのだ。その結果ポエーナーは「革命裁判所」の創立を命令し、在來のバイエルン政府の大臣及びミュンヘン市の高級吏員は、保護の名義で悉く監禁させることにした。又鈎十字を擁する諸團體は欣然として市内を練り歩き、結局國防軍の營舎を訪ねて、軍民交誼の實を挙げ始めたのである。彼等、殊に武裝した突撃隊の面々はその晩兵營に泊めて貰ふ積りだつたのだ。然るに不思議なことには兵營は入口の扉を固く鎖して、誰れ一人迎

へに出る者が無い。仕方がないから突撃隊は、又もとの「ビュルガアブロイ」の大集會場に歸つて來て、そこで一夜を明かすこととした。それと同時に各人は何となく、そこに裏切者の策動のあることを豫感した。こんな事ぢや、折角の計畫も水の泡ぢやないかしら……否今度の軍事的暴動は、或は残念ながら失敗だ……との不吉な印象が各人の胸を搏つたことだらう。

實際カールとロ・ソオとは「ビュルガアブロイ」の會場から、「釋放」されると共に、ホツと胸を撫で下して、そのまゝ國防軍及び警察の護衛を乞ひ、同時に大急ぎで政府の役人や、司令部の士官連を集めて、只今我々はヒットラー一派と行動を共にするやうな承諾を與へてはおいだが、あれは兇器の脅迫に基く不本意な意思表示であつた……要するにヒットラーは、今兇徒を嘯集して國家に叛逆を企てようとしてゐるのだから、この際彼の行動は、全力を擧げても阻止しなければならぬ、と發表したのである。そこで警察官隊は一齊に活動を始め、先づヒットラー一味中のボエーナとフリックとが槍玉に擧がつて逮捕された。翌九日の朝になると、政府はバイエルン總統監フォン・カールの名前で、「國民社會的獨逸勞動黨及びこれに従屬する闘争團體の解散を命ず」といふ命令を公布した。

それでもヒットラー自身は、まだいくらか樂天的であつた。彼は昨夜の民衆の感激狀態から推して、自分が先頭に立つて乗出してさへ行けば、勿論脈があると信じてゐたやうである。殊にさ

ういふ積極的な態度を彼に採らせたのは、例のロエーム大尉と、それから舊義勇團隊の親方で、當時陰からヒットラアを輔けてゐたロスバツハとの、兩名の激勵であつたと言はれてゐる。

で、國民社會主義者は黨及びその突撃隊の解散命令などには、てんで知らぬ顔をして、十一月九日の午前に、ミュンヘン市内で大示威行列を敢行した。ヒットラアとルーデンドルフとがその先頭に立つてゐる。ルーデンドルフの樂觀は、自分さへ乗出して行けば、身分の低いロツソオの率ゐる軍隊などは、まさか大戦當時神の如く敬はれた第一幕僚長の胸板へ、鐵砲を撃ちかける勇氣はあるまいといふ、舊プロイセンの軍人らしい自信に基いてゐたもののやうである。又實際その行列がイザール河のルウドウィヒ橋を渡らうとした時に、向うで待ち構へてゐたバイエルンの地方警察隊の如きは、ヒットラアと一緒にルーデンドルフ將軍が肩を並べて歩いてるのを見て恐縮し、自ら武器を捨てて了つたくらゐだ。所が鉤十字の大行列が今レジデンツ街にある將軍會館の前にさしかゝつた瞬時……

タ、タ、タ……と制止の聲など聽かばこそ、その戶外の階段に寄らば撃たんと待機してゐた國防軍の一隊が、（人んきよきしやく）遠慮會釋もなく機關銃を亂射し始めた。不意を喰つて命中した人間の身體が、投げ捨てたやうに舗道の上に散らされる。死者十四名で傷者には算が無い。其處いらあたりは眞赤な血だらけである。行列はもう四分五裂だ。ヒットラアも石に頭（つゝま）いて倒れる。側に並んでゐた一同

志は、その危機一髪の間、上體を伏せ、地上の指導者を抱へて引摺るやうに危險圏外へ逐ひやつた。九死に一生を得たヒットラーは、烈しく挫いた我が腕をおさへながら、傍らの自動車に飛び乗つて一序にその附近に重傷を負うて倒れてゐた一少年をも車の中へ拾ひ上げ、大急ぎで其處を落ち延びた。ルーデンドルフ將軍は最前線にゐたのにも拘らず、擦り傷一つ負はないで、泰然自若逮捕さるゝまゝに身を任せた。ゴエーリングは腹部に重く貫通銃創を受けたが、氣丈な彼は血塗れのまゝ起ち上つて、何處ともなくその姿を晦ました。それから二時間經過して後、ヒットラーは矢張りミュンヘンの郊外で發見され、遂に囚はれの身となつて了つた。

*

*

*

それで一九二三年十一月に於けるヒットラーの革命一揆運動は、慘憺たる失敗に終つた形となつてゐる。

要するにバイエルンだけを獨立させようとする偏狹な保守反動の力は、まだ彼よりも強かつた譯だ。然しヒットラーを蹉跌させたカールの分離運動も、この抗爭の結果として殆ど何等得るところがなかつた。否、カールはその頑固な分離主義を徹底的に押通さうとしたために、寧ろ彼の心から憎んでゐたベルリンの「ワイマア制度」といふ政敵が、お蔭で大變な漁夫の利を占めたことになる。何故かといふにヒットラーの失敗と共に、一般の保守的右翼の古い愛國者連は、國民

的革命を標榜する青年達の、民族的社會的な自覺を見極つて輕蔑するやうな風潮を生み、従つて假令中央の政界は右轉しても、それは單に舊式の「即ち、ビスマルク時代から傳統となつてゐる大地主大ブルジョア階級中心の」保守主義を利益するだけの話で、結局ワイマア制度と妥協苟合することを、却つて得策とするやうに考へる時代を、將來させたからである。畢竟するにカールの遺口のために、ヒットラーも大打撃を受けたが、同時にカール自身の理想も、亦實現の可能性を失つた。おかげでワイマア共和國はその行詰りを打開して、まだ「當分生き延び得る眼鼻がついた。」といふのがミュンヘンに於ける破局の偽らざる決算なのである。

ヒットラーは敗れた。ところがその翌月ミュンヘンに於て、國民社會主義者の被告が叛逆罪に問はれて、裁判所に召喚されることとなると、ヒットラーの運動は今や寧ろ道義的に大捷を博し得たのだ。何となれば、假令ヒットラーの行動は暴舉であつたとしても、そこに一點の私心が見えない。だから尠くともまだ國民精神の残つてゐる人間にとつては、これ等の至純な魂の持主、これ等の高潔な信念を懷いた若者どもが、遂に想ひ餘つて、因循と怯懦と醜劣とに反抗するため武器を執らうとした、といふ健氣な態度がひどく同情を惹いたのである。同時にヒットラーがその後法廷に出て、其處で彼の革命精神に燃えた心頭の怒りを、激越な口調で陳述した言葉は、傍らの凡庸に硬化した舊式保守の徒輩や、「充實政策」の妥協にオゾ／＼してゐる民主々義者連

中の頼りない答辯に較べて、まるで桁違ひな好反響を齎したことも事實だ。その法廷に於けるヒットラーの大驚叱呼は、恰も革命裁判所で最後の訊問を受けた場合のダントンの傲語をさへ、劈きしめる文句が多かつた。尤もダントンの傲語には一面人を馬鹿にしたやうな、時には判官の顔を解かしめるやうな、バリ人流のエスブリが火花のやうに飛び散つたが、ヒットラーの怒號には徹頭徹尾ゲルマン式に眞面目窩つて、まるで聴くものをして息をも吐かしめないやうな、一面の堅苦しさはあつた。それでも彼は例へばこんな答辯を與へてゐる。

即ち、裁判所が擲擲の口調を以て、一體貴下の今回の目的は、一揆暴動に依つて國務大臣になり度い積りであつたらうな……と訊問した時、ヒットラーは殆ど無意識にこれを一蹴していふ。「一個の偉大なる人物に對し、大臣になつてその名を歴史に残さうとしたなどと、小ばけに臆測するのは冒瀆も亦甚しい……私の眼前に最初からチラついてゐた野心は、それよりも更に數千倍も大きいのだ……私は世界の誰一人成就し得なかつた『マルキシズムの全滅者』たるの榮冠が欲しかつた……私はこの任務のため、なほ依然として邁進するだらう……この任務をさへ遂行すれば、その時代に私の眼中には、大臣などといふ稱號は憫笑にも値せざるボロ屑である！」

言ふことは大きい。それをダントンが空嘯いて——「俺の住所なら虚無、俺の名前なら歴史のパンテオンの中を探して貰ひたい」と啖呵を切り、バリ市民をナンヤと喝采させたのに較べて、

ヒットラーの大見得は飽く迄も几帳面だ。それでも當時の人々の眼には、まるで誇大妄想狂の贅語と映つた。この言葉の奥には、確かに將來偉大なる「指導者」^{フューリッパ}として、雲を呼び風を御するに足りる風貌が、無意識に――然も豫言的に――表はれてゐるから面白い。

斯くしてヒットラーは禁錮刑五年の宣告を受けて、ランツベルグの刑務所に下獄した。ルーデンドルフ將軍は、別に未來の騷擾を企圖する意志なかりし者と推定されて無罪となつた。それと共に國民社會主義の運動は、ドイツ全國を通じて禁止されて了つたので、その組織の外形は殆ど全滅の厄に遭つた譯だが、それでもその眼に見えぬ精神は、ドイツ人の魂の奥にのみ共通した一種の大きな信仰として、法燈の如く輝き残つた。

七、出獄の直後

一九二三年から三〇年代にかゝる迄、短命なりしドイツ共和國史中の比較的長かつた七八年は、不思議にも退屈にして無味乾燥な平穩裡に過ぎた。

平穩と言つては語弊があるかも知れぬ。その期間を擴大鏡で凝視すると、裏面には波瀾もあり曲折もあり、社會不安と政治危機と經濟恐慌とが渾沌として、不愉快に混つた渦巻を、二重にも三重にも漂はせてゐたのだから、勿論たゞの平穩無事ぢやなかつたには違ひない。然しながらそれは砲聲股々として、屍山血河の酸鼻を極めた一昨日の歐洲大戰や、阿鼻叫喚の巷から明かに世の末を想はせたやうな昨日の革命戰に、神經の末梢まで擦滅らされた人間の眼には、この七八年の所謂「波瀾曲折」なるものは、たゞく／＼しく煩さい「叙事詩的な情性の蠢動」としか映らなかつた。そこには華やかな戯曲がないのだ。世界を震撼さすやうな大異變がないのだ。慥くともその間、ヒットラーが何よりも嫌つたかの「システム」が、國家の基礎と經濟の機構とに根を張つて、世相は怖ろしく散文的となり了つた。ロマンチズムが消えて、數と計算と物質と繁榮とのみが一切を支配した。抽象的な藝術家までが「卽物性」を謳歌するやうになつたのも、正に

この時代の一つの姿ではある。

何故このやうに詩は消えたか？ 感激が姿を晦ましたか？ それは一言にして盡きる―曰く、

「システム」(ドイツ共和國)のアメリカ化！

懷へ、つい昨日まではドイツ人の魂は、ポリシェヴィズムの蝕みに痛づき、聯合國の武力的脅威に怯え通したではないか？ だが今はもう世人はそんなことには無神経となつてゐる。否、ポリシェヴィズム自身が、世界革命の目標を失つて平凡化し、寧ろドイツから後退を餘儀なくされてゐるし、又聯合國が戦勝の餘威を藉りた華やかな帝國主義も、今は殆ど行詰つて二進とも動けない窮狀に置かれてゐる。従つてドイツにはその思想的な悩みや、愛國的昂奮を激情の形として發露させるに足る材料が乏しくなつた。そこへもつて來て弗の國アメリカの現世的な散文主義が、海を渡つてドツと流れ込んで來た。

その第一の著しい現象は、一九二三年十一月十五日以降の「馬克相場の安定」である。この現象がドイツ人の物質的精神的生活に與へた影響は、殆どお話にならぬほど大きい。

由來「馬克相場の安定」そのものが、如何にして起つたかは、殆ど一種の神祕である。幣制技術的に見てヘルフェリッヒが創意し、シャハトが斷行した「レンテンマーク」法の施術が、あれほどの靈驗を現はすものとは、實は當の本人達だつて豫想しなかつたであらう。それは「一種の

社會心理的」な事實が、この新幣製造策の地均しとなつたものだから、茲に初めて彼等の施術が起死回生の效能を現はしたのだ。經濟法則の原因の如きは寧ろ第二義的だつた。ドイツ人が惡夢の苦しさより覺めて、その法律を是が非でも遵守しよう、と希ふ無意識の心理が、期せずして一致したこと、それが最大の要因であつた。神祕の鍵であつた。

そこへ米國が乗出して來たのだ。今まで英佛が銃劍附でドイツを、延いては歐洲の政界を、安定せしむべく努力して全然成功せず、従つてヴェルサイユ流の帝國主義が袋町に立つて、その代表者ポアンカレすら、策の施す術もなく長太息してゐる矢先に、米國がそれぢや乃公一番と乗込んで來たのだ。一度ウィルソンの時出しや張つて、ハーディングの時引つ込めた龜の首のやうなモンロー主義の融通性を、再び歐洲大陸に伸し始めたのだ。然し米國の新進出―即ち、敗戦ドイツへの攻撃の續行―はポアンカリズムの如き銃劍を以てするに非ず、又ロイド・ジョーヂのそれの如く、蘇秦張儀流の策略に據るものでもなく、要するに全然政治的要素を離れて、寧ろ世界經濟的に、且つ商人的に敢行されるのだといふ…。

私はそれを敢て米國の弗のドイツ「攻撃」と見る。さう言つたらアメリカ人は怒るかも知れない。いや決して攻撃ぢやない、人道を尊ぶ米國が、ドイツに對して友情的に救済の手を差延べたまでであつて、立派な國際親善の現はれだと。然しその友情若しくは親善なるものは、純然たる

投機商賣根性の打算から來てゐたのだ。黄金の洪水に溺死しさうになつて、然も國內の繁榮が降り坂となりかけた場合、ドイツを相手にしてこれが經濟的恢復を計れば、必ず自國に繁榮が再來するといふ幼稚な樂天主義から出發してゐるのだ。彼等の頭は單純だから數字と計算が算盤の上で合つてをれば、總てが合理で悟性に叶ふものと判斷したものだらう。

然るに人類の頭は狂つてゐた。この神祕主義的な黄金のロマンチスト、この幼稚極まる弗のドン・キホーテたるドーズと呼ぶ人物がバイブを啜へてドイツに渡つて來た時、世人は反對に襟を正して讃歎した。彼こそは夢を説かずして現實を語るものだ：否、今迄のやうに觀念的なユートピアや宣傳屋と違つて、極く物質的な經濟的合理と金融技術の經驗とから、ドイツの渾沌を秩序立て、延いては世界の平和を將來させようといふのだから、この人物ほど確實で頼りになる者は又とあるまい、と過信したのだ。そのうちこのドーズ氏の啜へたバイブの煙から馬克貨幣の恒久的安定、ドイツを信用の對象とする經濟的救済、そこから出發する賠償の可能性、歐洲戦債の整理の手段、従つて米國の繁榮と世界經濟的平和といふやうな怖ろしく大きな問題を一纏めに引括めて、こちや／＼の數字に表示した「ドーズ案」なるものが生れ出た。それは嘗て人類の生んだ一番頭のいい、一番正確な、殆ど非難の打ち所もない程の金融技術界の豪華版ではあつた。只一つ玉に瑕とも言ふべきは、勘定合つて錢足らずで、結局何の役にも立たぬといふ事だけなのだ！

一體ならビジネスライクで實際的なべき筈の米國が、その當時何故もつと簡單な方法で、國際的財政の整理を、效果的に斷行しなかつたであらうか？ 一番簡單で常識的で效果的なのは、初めから歐洲の戦債を榨引にして、聯合國に賠償の横車おしを斷念させることだつた。さうすれば世界金融は新規時直しの帳簿で、新しい經濟關係の記帳が出来た筈である。所がこの極く單純な自然的方法に對し、米國の資本家連は孰れも眞赤になつて腹を立てた。そんな夢のやうな空想が實行出来るか？！我々はもつと實際的な商人だぞと。所がこの實際的な商人は、稻荷様の狐を信仰する如く、金の作用をある程度以上に迷信してゐたのだ。經濟原則のザインとゾッレンとを履違へて、勘定さへ合つてをれば、萬事が自分の方に動いて来る、と獨斷してゐたのだ。そんな考へでは、ヒットラーの運動などといふものは分りやせん。だからそんな不合理なヒットリズムなんてものは、到底永久に起り得ざるものだ、と高を括つて仕事を始めた。が幾許も経たぬうち、本當にそれが起つたから可笑しい！

この無意義なアメリカニズムが、馬克の安定以來、即ちドーズ案の成立以來、約七年間といふもののドイツの全土を風靡したのである。その行詰りが皮肉にも、ヒットリズムの破記録的テンポの擡頭に、こよなき便利と糧とを供給したといふ段取になる。だがその七年間にヒットリズムは、どんな形で雌伏し、どんな形で跼蹐してゐたか？

八、民を知る者

ヒットラーの政治運動が國法で禁止されて以來、こゝ暫くの間、國民社會主義の思想は變態的な擬制を採つてゐた。何しろ主腦者のヒットラーが牢壁に這入つて、居ないのだからそれも已むを得ぬ。

まづ第一に今迄の國民社會主義獨逸労働黨なるものは解散されたので、その代りに「バイエルン民族的ブロック」(Völkische Block in Bayern)と云ふものが成立した。然しヒットラー自身が、この「民族的」なる觀念よりも、寧ろ「大獨逸」の理想に重きを置いてゐたことを想ひ出した連中は、些やかながら自立して「大獨逸的人民共同體」(Großdeutsche Volksgemeinschaft)と云ふものを作つた。それから斯様な國民主義者をバイエルンのみならずドイツ全體で糾合包括しようと志した者は、特に「國民社會主義的自由黨」(Nationalsozialistische Freiheitspartei)を組織したのである。然し最後のものは、北獨とか南獨とかの分派主義の色彩が強くて、殆ど内輪喧嘩ばかりしてゐたやうに見える。だからその當時の國民主義の運動くらゐ、世人の愚弄嘲笑の的となつたものはない。奴等には頭がない……低脳描ひだ……同時に何等の策略をも持つてゐないと。その批評

は或る意味に於ては中つてゐたかも知れぬ。成程當時の一般政黨人や實業家の頭は良かつたであらう。企業家は斬新な發明や科學的經營法を採用し、合理化の眞諦を體得し、社會民主黨の爲政者は社會政策を巧妙に運用する方法を誦んじ、共產主義の學者は難かしいデアレクチックの理論を、日常茶飯と弄び得た。それに較べると國民主義者には、行動だけなのだ。然もその行動の方法も、幼稚で亦合理的でないものだから、何を企てても笑止千萬な破局に終つて了ふ。従つてヒットラー無き後の國民主義者は、お互ひに角突き合せて喧嘩するばかりであつて、實際に當つてどういふ道を選んでどう進むべきかに就いての定見がなかつた。中にはヒットラーの失敗は「直接行動」にあつたのだから、これから國民主義の大衆運動を起すには、「議會制度」を利用しなければならぬ、と主張する者もあつたが、その議會主義こそ、寧ろ彼等の敵たる民主黨や社會民主黨の活躍し得る唯一の獨壇場であつて、彼等が打つて出られる可能性がない。さういふ選舉技術にかけては、海千山千の經驗を積んだ在來のブルジョア及びプロレタリアートの議會的政黨を角逐しようにも、彼等の方はその時分まだあんまり素人臭くつて、まるで赤兒以上に不手際なのだ。

然しながらこれ等の嘲笑に値する國民主義者の中で、獨りヒットラーだけは、矢張り一頭地を抜いた人物であつたことは否定し得ない。成る程彼は共產主義者のやうな、ギラ／＼する理論を

持つてゐなかつたかも知れぬ。社會民主黨の人々みたいに、社會政策の運用に基く經濟的繁榮の秘術を知らなかつたかも知れぬ。又中央黨や民主黨の幹部のやうに、選舉技術の蘊奥を極めてゐた譯ぢやなかつたかも知れぬ。それに拘らず彼には、どんな學者も亦實際家も、企て及ばぬ長所が備はつてゐた。人間を見抜くことがそれだ！ 然も彼にはたゞ一個の、人間の心の底を見抜くだけではなく、ドイツ人といふ國民の魂の奥に沈んでゐる姿を、判然と把握し得る能力があつたのだ。恰も如何に歐米化した奴にしろ、その顔色が黄色い日本人である以上、或るものを以て打てば必ず響く共通性があるやうに、ドイツ人といふものの魂の奥にも、亦一種獨特な共通の姿がある。それはドイツの舊戦線軍人や保守の愛國者に見ても、更に自由主義な市民でも、否共產黨の勞働者の中にさへも、普遍的に存在する。たゞ共產主義の連中は、自分達の心の奥底に存在するその魂に氣がつかないか、或は氣がついてゐてもマルキシズムの理論に酩酊した結果、自らを嘲り自らを冒瀆してゐるに過ぎないのだ。そのドイツ民族全體に共通普遍した魂の姿を、誰よりも一番判然掴み、同時にそれを一定の方向に指導するために、怖ろしく強い自信を持ち、且つその使命を自覺した人物が、我がアドルフ・ヒットラーなのである。ドイツ人は往々にして彼を「Menschkenner」（人間を知る男）といふ。私はその點では、寧ろ彼を「Volkskenner」（民を知る男）と言ひたい。

その反対なのは、例へばルーデンドルフだ。ルーデンドルフは立派な軍人である。そして前にも述べたやうに、ドイツ國民主義運動の濫觴と、その精神とは全然「軍人的」なものであつたら、ルーデンドルフの如き名將が、この運動の先頭に立つことは決して不適當な筈はなかつた。大戦中彼は一方戰略の鬼才と稱はれたと同時に、他方では非常時の行政方面にも凄^{もつぱん}い辣腕^{りつぽん}を揮ひ、その國內資源の統一と物資配給の制度などは、今日でもなほ戦争經濟政策の模範とされてゐる程だ。所がこの將軍の非常な缺點は、人民の意のある所を明察してやるだけの徳がないことであつた。だからヒットラーが刑務所に這入つて後も、彼はバイエルンに於ける「民族的合同」^{フュルケツレエナクト}の創立者となり、更にその全獨的組織の指導に任じはしたが、どこへ行つても他人と衝突したり、部下に嫌はれたりして、味噌のつけ通しである。殊に彼は南獨に於て全然人氣を墜^{おとし}して了つた。例へば不必要な場合に、羅馬加特力^{ロマーカトリック}を淫祠^{いんし}邪教^{きやうけう}教なりと罵倒して、舊教の本據たる南獨の住民一般を嫌がらせたこともある。又保守のバイエルン人が依然として尊敬するバイエルン舊皇太子ルブレヒトを、馬鹿野郎と誹謗^{ひぼう}したために、ミュンヘンの將校連から絶交狀を叩きつけられたこともあつた。それやこれやで將軍は、周圍から酷く攻められ虐められた結果、一九二五年にはヒットラーの後釜を受けた筈の民族的運動^{フュルケツレエナクト}の全國的指導者たる地位を、退かねばならぬこととなつた。

ルーデンドルフに次いで、當時國民主義運動の首腦者と考へたうちにフォン・グレーエーフェが

ゐる。この人物は國會の保守派の代議士として、「獨逸民族的自由運動」なる一派を創立した。だがその政綱は議會政黨たる「獨逸國粹黨」のそれを、單に過激化しただけのもので、依然北獨（プロイセン）式封建の臭味強く、従つてホーエンツォーレルン王統の復辟を主眼としてゐたから、將來全獨に互つて伸張するだけの潜勢力は持つてゐなかつた。謂はゞフーゲンベルクとヒットラーとの中間を彷徨つたものと見るべきが妥當だらう。で、結局は時代の進展と共に、そのうちの或者はヒットラー派に合流し、他の者は軟化して獨逸國粹黨へ合併せられ、その右翼分子に溶け込んで了つた。

さういふ國民主義運動の指導者難に悩んでゐる矢先に、ヒットラーは突如として刑務所を出て來たのである。彼がランズベルグの刑務所に縛られたのは僅かに一ケ年であつて、一九二四年の降誕祭の日、バイエルン政府の特赦に依つて、意外にも早く日の目を見ることが出來た。バイエルン政府は妙な行違ひから、國民社會主義運動を禁止解散し、ヒットラーを投獄してはみたものの、周圍の事情から推して、何となく氣が替るものだから、遂にヒットラーに斯様な赦免の恩典を——尤も監視附で——與へた譯であらう。

斯様にバイエルン政府は、退目を感じてゐた場合であるから、監獄から出て來たヒットラーが訪問して來て、その巧妙な相談の申込みを受けてみると、これを無下に撥ねつけるだけの勇氣が

なく、矢張りそのうちもとの「國民社會主義獨逸勞動黨」に對しても、亦その禁止令を解かざるを得なくなつた。

でヒットラーは、早速方々に散らばつたもとの同志や黨員を糾合し、改めて公々然の大集會を開催したのである。一九二五年二月二十七日、彼は立錫の餘地もなき「ビュルガブロイ」の大廣間で、一年振りの大演説をやつた。それは熱狂的な喝采の渦卷であつた。ヒットラーの不在中^{ふたせうよ}、受難窮餘の結果とはいへ、小さな異を立てて紛争してゐた同志の面々は、續々演壇際に飛び上つて、新しく歸つて來た「指導者」のために握手を求めた。彼等は今迄の煮え切らなかつた自己の態度を恥ぢ、これから再び「指導者」のために、身命を賭しても運動のために働かうといふ誓ひを立てた。ヒットラーはいとも嚴肅な面持で叫ぶ。「誰が良いの悪いのといふことはない……たゞ喜ばしいのは自分が牢獄から出て來たために、又一切の責任を自分一人で負ひ得ることだ……我々の戦ひは今眼前に二つの可能性を控へてゐるに過ぎない……曰く、敵が我々の死骸を越えて進むか、それとも我々が敵の死骸を越えて進むかだ！」

この「死骸を越えて」といふ有名な言葉がいけなかつた。バイエルンの政府は多少の後めたさから、ヒットラーを釋放しては見たものの、元來が官僚主義の杓子定規に凝固まつてゐるのだから、公の秩序を紊亂するやうな激語の發表は放置しておけない、といふ理由で以て以後ヒットラー

アに演説だけは許可しない、といふ嵌口^{かんこう}の禁止令を出した。氣の利かぬバイエルン政府でも「ヒットラーの演説」だけは怖ろしい、といふことを骨身に沁みるほど知つてゐたからである。その點から判斷しても、ヒットラーの持つ最鋭な武器は理論に非ず、術策に非ず、たゞ彼の偉大な個人的影響にあることがよく窺はれよう。

で嵌口令のために、自分の誠意を直接大衆にぶち撒ける方法を失つたヒットラーは、こゝ暫くたゞ年少氣鋭の政治的軍事的中核團體（即ちS・A^{エス・ア}）の再建設に専心没頭した。それでも彼の要望する眞の「政治軍人」を養成し、自分の一令の下にこれを行進させるまでに發達させるには、約一年ばかりの多難な雌伏^{ひそぶ}の歳月を閲したのである。いろんな障害が續出して、中々思ふやうに旨く仕事が進んでくれなかつたからだ。

といふのはS・A^{エス・ア}即ち突撃隊方面の任務だけを、黨自身の行動から切離して、それを特に自分の願使^{いし}の下に置かう、と考へてゐたのはローム大尉である。既に彼はヒットラーの留守の間に、離散した鈎十字の騎士を集めて、新しい團體即ち「戰線強團^{フロンツェンシュタール}」といふものを組織してゐた。これは極めて嚴格な、民族主義を基礎とする軍隊式スポーツの一團であつて、北獨の方にも可成り多くの渴仰者を持つてゐたやうである。但しロームは二三―二十四年の經驗に基いて、その軍隊的指導訓練を、政黨の政治方針から全然獨立させてゐた。その上この新組織は、もとのS・A^{エス・ア}より

も遙かに芝居氣が多く、上官の命令には絶對的盲從を強要し、一度ゲルマン式に誓約を立てた以上、これを破るものは忽ち團刑として、一種の私刑に處せられたのである。だから規律の峻嚴に關しては、素よりヒットラー自身の理想に近かつたかもしれない。たゞその殘酷な私死刑の續出に依つて、共和國當局はこれを非法的な秘密結社と看做し、極端な彈壓を加へる方針に移つたのと、又新時代の政治的軍隊を造らうといふ實際的努力よりも、寧ろ中世紀式奴隸兵の模倣に近いやうな、變な芝居氣が氣に入らなかつたことに依つて、ヒットラーとロエームとは旨く合致しなかつた。この時の分裂が、後に双方命の遺取をするまでの大喧嘩に立ち至つた最初なのである。然しその時分はロエームの方が、まだ比較のおとなしく折れて出て、その私軍の指揮者たる地位を辭退したものだから、所謂「戰線強團」なるものは次第にその特長を失ひ、總てがもとのS・A（突撃隊）の傳統に基く本領に復歸して、一應圓滿に覺がついた。

さてS・A（突撃隊）の再建に成功したヒットラーは、次の大きな任務として、今度は指導者幹部團の選擇精化に努力し始めたのである。凡そ彼の欲してゐる運動に於ける「指導者原理」なるものは、單なる言葉の遊戲ぢやなくつて、極めて重大な役割を演じてゐる。それは普通の市民政黨の總裁だとか、總務とか又は何々委員などといふものとはまるで觀念が違ふ。ヒットラーは「指導者」の資格を、徹頭徹尾國民的、且つ現實的に判斷し、從つて人道的教養に則れる者、所謂

「汎人間」の型に嵌つた者を、初めから無能力者扱ひした。彼はその時分、黨の機關として經營してゐた「フェルキツシア・ベオバハタ」紙に於ても、それに關して斯う言つてゐる――「人類の天性は事實在るがまゝの現象なるを以て、これを個々に突變せしむることは難く、たゞ全部が數世紀を經過する發展過程に於て、自ら變化し得るのみである――一般にはそれすら種族の變化を前提條件としてゐるやうだ――そこで私の任務は種々の違つた氣性や能力や特徴を、一定の方向に進む軌條に載せ、その範圍で相互に缺けたる所を補ひ合せることに在つて存する……」

斯くの如く彼は一個の生物學的な立場から、多種多様な指導者群の有機的な作用を自由に採擇し、それに依つて先づ彼の指導する協力者層の間に、小さいながらも一個の人民共同團體を作つた。一方有産階級又はマルキシズムの政黨では、幹部連中が絶對的には皆な賢いやうに見えても、相對的には身動きもならぬ程一律に取扱はれ、みんな團栗の背較べをする以外に、人的特徴を發揮する機會がないのだ。だが國民社會主義の方では、人間を無理遣な鑄型に嵌める階級觀念や、教養の如何や、身分の差異や、舊來のセンチメンタリズムといふものが無い。彼等には各同志に國民としての個人的、社會的、身分的な價值を享受せしめる雅量がある。但しそれかとて誰しも指導者に服従しないで、それが爲めに全部に渾沌の状態を齎すやうな態度は大禁物だ。従つて國民社會主義の洗禮を受けて水から上る時、頭上に降りてくる聖靈は自分が「全的國民」及び「全

「國家的」への努力手段としての「全政黨的」の闘士に選ばれた、といふ強い自覺でなければならぬ……といふのだ。

所がこの觀念は、時代の流行思想を超越し過ぎてゐる爲めか、中々普通の人々の頭には這入り難い。その證據にはヒットラーが右の理想を筆に物して獄中で書き上げた「我が戦ひ」が、疾く本屋から出版されてゐるのに、その當時では殆ど買手がなかつた。人民一般の頭に常識的に滲み込んでゐる政治思想は、何と言つても十八九世紀この方、磐石の根を張つてゐるリベリズムなのである。だから麥酒でも飲みながら政治臭い話をする一般平均人の態度は、論據が曖昧で内容が貧弱なるはさることながら、兎も角も先づ自分の主張を貫徹し、それから他人の説を批評するといふ態度に限られてゐた。斯様な西歐流の「インヂヴィデュアリズム」は永い間の社會的風習に基くもので、それが一時大戦とその直後の過渡期に、一寸變態となりはしたが、一九二四年頃からまた以前の傳統通りに復舊して來た形勢がある。さういふ連中を一々説伏するためには、ヒットラーの努力も決して一通りぢやなかつたに違ひない。たゞ大戦以前にはまだ物心のついてゐなかつたために、特に情性として個人主義的又は自由主義的教育を受くる機會がなく、従つてその頭腦がまだ全然白紙として、取殘されてゐた青年達の間にだけは、至誠の迸るヒットラーの言葉が烙けつくやうに強く印象され得たのである。

で、今一つその當時の難關は、政治論なんかどうでもいいといふ市民階級よりも、却つて國民主義者同志のうちに理窟を捏ねて、上からの統制を聞かうとしない連中が、案外多く存在するこゝとであつた。南獨はさうでもなかつたが、北獨にはさういふ連中が特に多くゐた。

何故かといふに、由來北獨の國民主義は舊プロイセン王國の傳統に基き、プロテスタントの精神を體得した地主貴族の指導が、その模範となつてゐただけに、大體は中央政府の方針に妥協せんとする日和見主義であり、然らざる場合は單に革命的陰謀だけを主眼とする反動の蠢動があるのみである。要するにその二者中の中間がないのだ。然し同じ國民主義を標榜するにしろ、議會制度を否定するヒットレリズムが、北獨の日和見主義者とは到底妥協が出来るものでない。そんなことをすれば大獨逸主義精神の本領は失はれ、結局、その當時國會で有力な政黨となつてゐた「獨逸國粹黨」の、たゞの右翼分子に繰入れられて了ふに過ぎない。だからヒットラーが北獨に進出するとすれば、残つた反動主義者に渡りをつけることとなるけれど、この又北獨の反動主義者といふ奴は、餘りにも小兒病的で、まるで狂犬のやうに噛みつくことばかり知つて、指導者原理などといふものを、初めから舐めてかゝるのである。

その著しい例が、グレゴル・シュトラッサアだ。この男はランツフートの藥種屋出であつて、初めからヒットラーの運動に興味を有し、何くれとなく、この運動のためには協力を惜しまな

つた。相當に頭腦も明晰だし、又演説も上手だったので、彼は既に一九二三年の「埃事件」以前に、國民社會黨の下バイエルンに於ける「州指導者」に擧げられてゐたのである。「州」といふのは黨がその方針を實行するために、全ドイツを幾つかの區に分つたものの名稱で—今日では州の數は三十三州に及んでゐるが—その各々に同志中の一番優秀な人物を指導者として派遣して、該地方一切の黨務を處理せしめることになつてゐる筈だ。シュトラッサアも亦その州指導者の一人として働いてゐたから、ヒットラーからは相當に重要視されてゐた闘士であると見なければならぬ。尤も下バイエルン管轄州下の黨員は、一九二三年事件當時は、殆ど豫備軍の役目を勤めてゐただけで、表立つては活動しなかつたし、又ヒットラーが入獄した直後には、黨員が離散して、全滅の形になつてゐたことは事實だ。孰れにしてもシュトラッサアは本來非常に宣傳が上手で、且つ大衆を糾合組織する能力を持つた男であつたから、そのうちいつの間にか、民族的覺醒の全國運動を起して、相當な數の賛同者又は同情者を自分の傘下に聚め、そして一九二五年の春には、その團體をつくりを、ヒットラーの指導の下に委ねて、自分も國民社會黨の一員として働くことを誓約したのである。そこでヒットラーは彼を信用してベルリンに送り、共和國の首府に於ける、大獨逸主義の宣傳といふ重任を授けてやつた。

シュトラッサアがベルリンに来て見ると、北獨の國民主義の精神は、悉くホーエンツォーレル

ン式、土地貴族式、又は農奴式の型を脱せず、要するに、プロイセン主義を中心とした一種の特性を持つてゐるので、南獨人のやうなファンタジイでは、中々動かないことに氣がついた。これはどうしても、南獨人のやうに「人民共同團體」を作らせる前に、一應嚴格な訓練若しくは教育を施して、大獨逸人たるの一定の型を作る必要があると痛感したのだ。して見るとそれは共產主義政黨がポリシェヴィストの型を作るのと同じの行き方であつて、或る意味からはヒットレリズムの本領から横道へ外れることとなる。で、ヒットラーは右の意見を耳にしたものだから、使者を送つて、懇々その態度の不可なることを説いてみたが、自我心の強い且つ昂奮性の多いシュトラッサアの耳には、その忠言が全然徹底せず、後にはまるで自分獨りが仕事をしてゐるやうな氣になつて、或はオーデル河畔からヴェーゼル河畔又はシュレスウイヒルホルシュタインの地方を限なく講演したり、或は特に民族的且つ社會主義的な急先鋒となれる過激反動論者と聯絡をとつて、各所に祕密の細胞を植ゑつけたりして廻つてゐた。

そんな鹽梅だつたから、ヒットラーの運動は、全獨に擴まり始めたとは言ふものの、その内容を調べて見ると極めて危な氣が多く、殊に一九二五—六年の冬に國民社會主義の政黨は、その綱領を統一することさへ出来なかつたくらいだ。さういふ内紛は單に指導者達の個人的感情のもつれからばかりではなく、黨の死活を決定すべき革命方法の本質に關するものであつて、中々一筋

總では解決がつきさうにもない。勿論國民革命を敢行する意圖に於ては、誰しも異存がないのだ。唯その方法に關し、黨は合法的な態度に出づべきや、將又非合法の暴力一揆に據るべきや、といふ事が議論の分歧點であつた譯だ。ヒットラーは一九二三年の苦い經驗からして、又彼の將來を見透し得る炯眼からして、彼自身の指導者原理を完全に遂行する限り、當分合法手段に則つて進んでも、必ず成功するといふ見當をつけてゐた。然るに人的要素よりも空虚な理論を過信する北獨の過激論者は——殆ど左翼小兒病的な共產黨と同じやうに——獨りよがりの觀念に醗酵して、(一)現政府のブルジョア中心の産業恢復計畫には極力反對すべく、(二)自由主義經濟機構は、凡ゆる手段を以て破壊するを要し、たゞ(三)コルボラチヴな社會主義の建設に向つてのみ、地下潛行式に邁進すべきを、強調して譲らうとしない。

これ等の北獨過激反動論者(シュトラッサア派)の人工的に捏ち上げたテーゼは、左翼の「社會革命派」のそれに酷似して、一見甚だ巧妙に且つ理論的に組立ててはあつたが、實際的なドイツ人の國民生活の琴線には、殆どビンと共鳴する何物をも抱藏してゐなかつた。それは世人が彼等を目して「國民主義的マルキシスト」と俗稱してゐた程、左翼に近い革命理論を採り入れてゐたがためである。然しそれにしても「國民主義的マルキシズム」なる俗稱は、少し見當外れだつたと思ふ。彼等は依然として Volkisch な社會過激派であつて、徹頭徹尾唯物辨證法に據らざる

有機的生命形體を假想してゐたのだ。たゞその猪突的な宣傳様式は、ヒットラーの新しい態度と異つて、「手段を選ばず時期を急ぐ」方法に據り、従つて議論の前提たる有機的本質體が崩壊しても差支へないといふ、論理的な矛盾撞着に陥つてゐた觀がある。

それに較べるとヒットラーの宣傳には、イデオロギーに基く類推と例證とにギラ／＼光る所がないので、何となく燦んで地味な所はあつたが、それでも彼が國民の世相熊様をじつと見穿てた瞳には、シュトラッサアなどよりも、もつと本能的且つ政治家に正確な或るものを映してゐたのだ。革命の斷行もいゝだがそれが有機生物體に對する革命である以上、その切開手術には鈍物を使用しては不可ん……餘程鋭いメスで、然も細心以上の注意を拂はなければ失敗する……目的はただ、半死半生となつてゐる「國民」の病氣を癒して、もとの健康體に返さうといふのだから、餘り過激な切開は國民の生命そのものを斷つて了ふ、と見るのがヒットラーだ。彼も亦社會主義には一倍の注意を拂ふ。然し彼の社會主義はシュトラッサアの眼には微溫的と映るし、マルキシスト及び一般の經濟理論家にとつては、殆ど批評の仕様もない程のテーマの採り違へなりとして、一笑に附せられて了つた。何となれば彼が「社會主義」として頭に描いてゐることは、個人的な富の集積に依らず、又弱小分子の排擠擄取に基かざる個人の最高給付狀態の現出なのだ。だから勞働には、勿論不平等な個人的果實の收得が許される。但しそれは公共奉仕の勞働に限り、又共

同團體の利益に屬するや否やに就いて、公の監視下に立つものである。従つて彼の社會主義は、經濟學の範圍を脱して、倫理學に這入つてゐる。世人の驚いたのも或は笑つたのも無理はない。然しヒトラーに言はせると、社會主義が經濟現象の方則に依つて、組立てなければならぬ現代は、病體だからである。健康な國民共同團體の世界では、それは決して獨斷ぢやない。だから我々の任務は、その倫理的社會主義を妥當ならしめる國民共同團體出現のために、先づ國民的政治革命を斷行するに在るといふ。

所が一方北獨流の國民主義者は、經濟政策といふ以上は、在來の意味での社會主義に據らなければ、我慢が出来なかつたものと見えて、彼等は一九二五年十一月ハンノーファーで分派的會議を開催し、ヒットラーの意思に反する社會主義綱領なるものを作り始めたのである。然も彼等の態度は一見極めてラヂカルであつた。何もかもマルクス流の破局哲學から割出さうとするのだ。だから彼等は先づ合法主義を排し、階級妥協に依る經濟的平和を排し、商人的自由主義を排し、更に工業上の繁榮を排斥したが、その代り農耕的封鎖經濟への復歸を提唱し、その實行の手始めとして、一切の農業的租税の納附を、暴力的に拒否することを決議した。然し當時の世人一般は、マルク貨幣價值安定の直後であり、又アメリカニズムに依る繁榮復興に夢中となつてゐる際とて、こんな革命マルキシズムを振つて、然も農民的反動の運動に結びつけようとする努力は、机上の

空論としては面白いかも知れぬが、時代の大家に訴へる本當の意味での政治ぢやなかつた。

だから國民社會主義運動の大勢は、そんな線香花火式な北獨國民主義に追隨しないで、緩徐ながら依然ヒットレリズムの本流に向つて來た。そして一九二六年二月には、その幹部だけの指導者會議が、バンベルグに開催された場合、北獨派とヒットラー派とは互に鎗を削つて論争しあつたが、結局團扇は後者に上つた。その論争の中心は、革命に際して退位したブローセンその他の王家及び諸侯伯家の舊所領を沒收すべきや否や、といふこみ入つた國內的實際問題であつたが、シュトラッサア一派はその提案者たりしマルキシズムの政黨そのものには反對だと、口では言つてゐるに拘らず、結果としては彼等一流の過激社會主義の立場よりして、これ等財産の沒收に賛成し、又一方ヒットラー派は私有財産制の破壊を否定する理論上の結論として、沒收案に堂々と反對したのである。然し結局黨全體の決議としては、遂にヒットラー説に落着して了つた。

右の如き黨内の論争も、一九二六年の春には一應片付いて、國民社會黨内の分裂傾向も靜まつたので、その歳の七月に至つて、ヒットラーは全線に互る勝利者として、北獨南獨のほとんどの真中にあたるワイマアに黨大會を召集したのである。即ち、その時はもう黨内の喧嘩は綺麗に清算されてゐたから、黨としては勢力を他の政黨の攻撃、換言すれば、ワイマア憲法の精神で妥協してゐる中央政府への攻撃といふ、本來の目的に集中没頭すればよかつた譯だ。でその時に初めて黨の

「排議會主義」が、公然と發表さるゝに至つた。

この大會はヒットラーに依つて再建された黨の前途に、一段の光明を示した歴史的行事であつたと見てもいい。約一萬を越ゆる所謂「ヒットラーマン」が、或はトラックに乗り、或は徒歩に依つて、この中獨の歴史的な舊都に集合し、黨の最高指揮者に對する忠誠の誓を立てた。一九二三年十一月九日に血染となつた鈎十字章が、眞中に翻つてゐる。嚴肅な儀式の下にヒットラーは、茶褐色の制服揃ひで、隊伍を調へた一萬のS・Aを閱兵した。その際、特にヒットラーの周圍を護衛したのは、後にS・Aと互角の對立的權力を持つやうになつた「親衛隊」、即ちS・Sであつた。

このワイマア大會で最も注目すべきは、ヒットラーの委任を受けたゴットフリード・フェーダアが、一九二〇年に起草した黨綱領二十五箇條を、詳細に説明したことである。それによると國民社會黨は原則として、私有財産制を國家的に保護するといふ點に、特に力點が置かれた。即ちシュトラッサア式共產趣味の國民主義は、絶対に排撃する意圖を明示したことになる。だが、原則としてといふのだから、勿論それには例外がある。則ち個人が公共の利益に反する方法に依つて累積した私有財産は、國家の保護の外に置くといふことになつてゐる。それは疑ひもなく、いづれユダヤ人社會には痛棒を喰はせるぞ、との豫想を與へた譯なのだ。同時にフェーダアの「利

子詩屬」打破論は、依然として國民社會黨の經濟政策の骨子を形づくり、從つて國民の經濟的解放といふことが特に強調された。そこから國際的金融資本と賠償とに對する反抗が生れたのである。即ち國際的なユダヤ人とヴェルサイユ條約を押賣りする舊聯合國とに對して、極力戦ひを挑まんとする色彩が、餘程強く主張されたのである。

九、Schlagwort の 都

ベルリンへの進出は、ヒットラーの畢生の願望であつたに違ひない。だからこそ一九二三年十一月の苦い事件まで惹き起したのだ。

大凡ベルリンは共和國の首府である。假令この「アスファルトの沙漠」は、ゲルマニの傳統に無縁なユダヤ人と、ドイツの土に根を失つたプロレタリアートとの陰商群だけが、輻を利かす所であつても、この町を手に入れない限り、大獨逸主義の理想を天下に號令することは、極めて困難である。ヒットラーはそれがため、先づシュトラッサアを採題として、ベルリンの教化に當らせたが、それは前にも述べた通り總て失敗に歸した。何しろベルリンはワイマア憲法に忠實な議會主義政府の本場だけあつて、反動主義などに耳を藉するものは極めて稀であり、偶々保守的な傾向の市民がゐるにしても、それは單にプロイセンの土地貴族的な復古主義者であるか、さもなくば理論に淫するだけで、何の役にも立たぬ奴等ばかりだつた。シュトラッサアといふ木乃伊とりがベルリンで木乃伊になつたのも、矢張りそんな奴等に眞面目に相手になりすぎたためである。だから餘程確かりした人物でないと、大概の國民社會主義者は、ベルリンで揉まれて、理窟ばか

りこねてゐるうちに、或は一種の「獨逸國粹黨」(議會主義者)に變質したり、或はいつの間にか、共產理論の魅力に引摺られて了つたりする。そんなことでは國民社會黨はいつまで経つても、ドイツの心臓部で根を張ることは難しい。

その意味に於て、一九二六年の秋、ヒットラーが齡若きラインランド人ヨーゼフ・ゴッペルスを、新たにベルリンの「州指揮者」に任命したのは、黨の前途に對して、非常な運命を開拓したことになる。

ゴッペルスが比較的新しく黨に遣入つて來た人物なるにも拘らず、宣傳工作にとつて一番難しいベルリンの探題に拔擢されたのは、彼がライン及びルーア地方に於て、黨のために組織方面の異常なる功績を樹てた爲めではあつたが、なほその上に刃物のやうに鋭利な表現に依つて、敵の抗辯を寸斷することの出来る彼獨特の雄辯と才筆とが、特にヒットラーの氣に入つた爲めである。由來ベルリン人の生活には、ドイツ語に謂ふ *Schönwiese* (強ひて「場當り言葉」とでも譯すべきか?) の調子が支配する。それは恰もロンドン人に「ユーモア」があり、パリ人に「エスプリ」の存する如き、大都會生活に無くて叶はぬ一種の大衆生活の呼吸であつて、例へば山と言へばすぐ川と答へるやうに、氣の利いた言葉の撥返し^{はねかへ}で以て、相手にグウの音^おも出せないやうな電光石火の調子なのである。この調子は永くベルリンに棲んだものでなければ、中々出て來ない

し、又この調子を持たぬ人間を、ベルリン人は非常に輕蔑して殆ど相手にしない。ベルリン人が常にバイエルンの田舎者を馬鹿にしてゐるのは、要するに後者がいつまで経つても、この調子を解し得ないがためである。

所がゴエッベルスは、態こそ小ぼけで跛足で、風采は揚がらないが、彼は生れながらにして、この Schlagwort の達人なのである。世間はよく彼が過激な暴言を發するだけの男のやうに言ふ。だがそれは彼をよく知らない者の間違つた取沙汰に過ぎない。成程、彼は毒舌をも弄し、思ひ切つた悪口も言ひはする。然し毒舌や悪口は、別にゴエッベルスだけの專賣特許ぢやないし、それにベルリンでは單に誰それを殺せ……とか、何々を打倒せよ……などと無茶な言葉を放つだけでは、單に狂人扱いにするだけで、誰も相手にしないだらう。否、ゴエッベルスの毒舌や悪口は、言葉それ自身の内容よりも、それを利用する調子が、全然 Schlagwort 式であつて、ベルリン人の吐き出す皮肉や嘲笑の攻撃を高飛車に跳ね返してしまふ所に、一種眞似の出来ない特徴を持つてゐる。その調子をよく辨へてをればこそ、彼はベルリン人の心理を、活殺自在に操縦し制御して、時ならぬ拍手喝采を克ち得るのだ。その調子を辨へないで、單にミュンヘンあたりの田舎から出て來た國民社會主義者が、どんなに至誠を迸しらせ、聲涙を併せ下してみても、或はどんなに逞しい南獨人的な堅い拳固を、演壇で振廻してみても、ベルリン人はたゞ片眼閉つて、肩を牽

めるだけだつたであらう。シュトラッサの失敗も亦一面そこに在つたと言へる…。

で、このゴエッペルスがベルリンの「州指揮者」^{ゲラウライター}として宣傳を開始したのは、一九二六年十一月のことである。彼がベルリンへやつて來た時には、黨員と名乗る者は存在はしてゐたが、全然タクトを振るものがないので、全然無方針で、従つて勝手な紛争のみを事として、殆ど拾收^{しゅうしゅう}のつかぬ混沌状態を示してゐた。が心に期するところあるゴエッペルスは、先づ小さな一麥酒屋^{ビール}の奥に電燈さへない一室を借りて事務所とし、散在した黨員を見付け出しては、一々個人的に堅い聯絡をつける所からやり始めた。

その時分ベルリンには、九十名のS・A^{エス・ア}（突撃隊）がゐたと言はれる。彼等は殆ど全部が失業^{ユニ}者で、別に深い根據があつて國民社會主義を信じてゐる譯ぢやなかつた。或は共產黨へ這入つて赤い旗を擔いだつて同じことだが、共產黨内ぢや不愉快な内輪喧嘩が多くつて、癪に障る奴がゐるから、寧ろこの際風變りで景氣のよささうな鈎十字の旗の方を擔いで歩いてやれといふ位な、どうでもいゝ、そして可成り品の悪い連中ばかりだつたのだ。それにプロイセンの内務大臣で、社會民主黨の幹部たるセーヴェリングは、徹底的なヒットラー嫌ひだつたから、一九二三年のミューンヘン一揆事件^{フック}以來、自分の管轄内のベルリンでは、一切鈎十字の旗を禁止してあつた。だがゴエッペルスの指導の仕方には、時々奇想天外より落つるやうな痛快味があつたものだから、そ

のうち好奇心の強い青年達が、續々その傘下きんかに聚あまつて來た。ゴエッベルスはこれ等の青年を眼前に据ゑ、傍の釣十字旗に向つて片手を高く揚げつゝ叫ぶ―「我々自身は豪もくも何でも無い…我の求めんとするものが一切であり、然も一番豪いのだ！」それから赤色の大都と呼ばれたベルリンの眞中で、初めて國民社會主義者の大集會を催した時、彼は人一倍の大聲を張揚げて次の宣言をした―「マルキシズムは死すべきである、若しもドイツの社會主義が生きようとするならばだ―」

彼の演説は、惡く言へば用語の術學主義ペリシヤリズムに充ちてゐる…が好く言へば例の Socialism に依つて敵の肺腑はふを抉ると同時に、その願みを解かしめるのだ。だから、初めは反感と好奇心とだけで聞いてゐる聴衆も、いつの間にか昂奮し感激し、遂に黨の同情者となり、又正式の闘士となつて働かうといふ決心をするやうになる。殊に青年がさうだ。ゴエッベルス自身もまだ齡としが若い上に、ベルリンの壯年や老人を相手にしても何にもならぬ：彼等は假令反マルキシストであつても、到底既成の「獨逸國粹黨」員の範疇を出ないか、然らずんばプロフェッサア式に死んだ理論を捏ねる輩だけだ…と高を括つてゐたものだから、宣傳の目的物は常に青年だけである。「未來を有するものは又青年を持つ…かるが故に我々は未來を持つ！」とは彼の有名な言葉であつた。従つて S・A の青年が、ベルリンでは次第に増加の傾向を示した。そこでゴエッベルスはその S・A を

引具して、今まで赤色プロレタリアの獨占舞臺だつたベルリンの街頭を奪還しようとかゝつた。暇さへあればユダヤ豪商の多いベルリンの眼抜きの大街や、共產黨員の群居したフリードリヒスハインなどを、隊伍を組んで徘徊し、逆らふ者に故意なる喧嘩を吹ツ掛ける態度を捨てない。彼等が歩調をとつて傍若無人に行進する場合に叫ぶ合唱は斯うなのだ。

„Durch Gross-Berlin marschieren wir !

(大ベルリン中を進軍するは我等！

Für Adolf Hitler Kämpfen wir.

アドルフ・ヒットラーのため戦ふは我等。

Die rote Front, brecht sie entzwei !

赤の戦線を眞二つに壊せ！

S. A. marschirt ! Achtung ! Die Strasse frei !

S・Aの進軍！氣を注げえ！道を開けろ！)

さういふ共產黨員を眞赤に怒らせるやうな歌を、わざ／＼憎々しく唄つて、挑戦のデモを行つた上、到る處の廣告塔——即ち、ベルリン街頭の四つ角などによく立つてゐる公私廣告用の圓塔——に遠慮なく、鈎十字の宣言と題する挑發的大文字をベタ／＼貼つて行く。それには斯う書いてある。

「ブルジョア國家は今末路に近づきつゝある！それは當然だ！何故ならドイツを解放する資格がないから。だから新しいドイツを今鍛へ出す必要がある。それは官僚の國家でもなければ、階級の國家でもない。たゞ勞働と規律のドイツ國だ！その任務のために、歴史はたゞ諸君——額と

拳の労働者―を選んだ。諸君の掌の中に、ドイツ民族の運命が握られてゐる！　よく考へて見給へ……そして敢然起つて我等に相談し給へ！」

で「額と拳の労働者」諸君は、一九二七年二月十一日（金曜）の午後、「ファルスザール」に開かるゝ國民社會黨ベルリン大會に參集し、國會代議士ゴエッペルス博士の演説に耳を傾けよ、といふ文句がその廣告の末に書かれてあつた。

この大會に於てゴエッペルスは、實際「ブルジョア式階級國家の崩壊」といふ大演説をやつた。然し會場及び閉會後の門前は、激昂した共產青年の猛襲を受け、血腥い激闘の末、双方に多數の死傷者を出したのは當然だ。

然るにこの有様を見て、プロイセン内相セーヴェリングは、大ベルリン市に於て國民社會黨のデモンストレーション及び集會を嚴禁したので、それから暫くゴエッペルスは、その得意の熱辯を揮ふことが出来なくなつた。演説が出来ないとすると、彼は週刊新聞「アングリッフ」（今日は日刊になつてゐる）に閉ぢ籠り、今度はペンを執つて縦横無盡の論陣を張り始めた。が彼の文章も亦、彼の演説以上に辛辣を極めたものなのだ。當時の世人は彼を「ナチスのマラー」とさへ呼んでゐた。

だが筆戰となると、連がは共和國の首都には論敵が多い。殊に新聞界はそれ迄ユダヤ人出身の

文士の獨り舞臺であつたため、有名な「ペルリーナ・ターゲブラット」にしろ、「フオシヤ・シエ・ツァイツング」にしろ、所謂一流紙は筆を極めてゴエッペルスの排ユダヤ主義を反響難詰した。或る新聞の如きは揶揄の口調で「ゴエッペルス(Godheg)なんて姓名は、本當のドイツ人には珍しい：屹度ゴエッペルス(Godheg)か何かの轉訛だらう：ゴエッペルスならその發音から推して、どうしてもこの男はユダヤ人だ：ユダヤ人がペルリンのナチスの親方になつて騒ぐとは、鼻持のならぬスカンダルだ」などと書き立てた。するとゴエッペルスは眞赤になつて、これ等の新聞を「輪轉機のシナゴグ」(シナゴグとはユダヤ教の禮拜堂のこと)と罵倒し、「更に激越の筆で彼等を攻撃していふ」「噓だ！：噓だ！：諸君、信ずる勿れ、皆噓八百だから：彼等が口を開いたと思つたら、そら一つ噓を吐く：輪轉機が一廻回轉したと思つたら、そら又一つ噓の皮だ：寫眞畫報に繪が一つ載つてると思つたら、案の定又々噓の大噓だ。」

ペルリンの警視廳は、特にゴエッペルスを親の仇の如く憎んだ。それは警視廳の副總監が、ベルンハルド・ワイスと呼ぶユダヤ人出身の男だつたからである。ゴエッペルスはこの男に「イシドル」といふ馴れた綽名をつけて、口に筆に彼を揶揄し譏弄し戲畫化したものだから、ゴエッペルス對ワイスの前後六年間續いた喧嘩は、當時の社交界をさんざめかす有名な話柄となつてゐたものだ。遂にはワイスは「イシドル」なる綽名をひろめたこの憎きゴエッペルスを相手取つ

て、法廷に名譽毀損の訴訟をさへ提起したくらゐである。すると、ゴエッベルスの法廷に於ける陳述がふるつてゐる——「勿論、我輩はインドールといふ言葉を使用致した……然し、インドールは人間の名前ぢやない……それは憎むべく笑ふべき或る「システム」の名稱だ……在來の嚴めしかつた王様達が、馬から墜落おちちられたものだから、その代り現代はその空鞍おそくらの上にチョコンとユダヤ人が乗つかつてゐる……だが、その尻しつつびり腰の可笑しい態さまあ見ろ……これが笑はずにゐられるものか!!」

斯様にワイスとの喧嘩は多少愛嬌があつたけれど、何しろ相手は警察の親方であるから、これに睨にらまれていゝ結果のあらう筈がない。黨員が何か一つ宣傳らしい行動に出ると、もう警官が革鞭かわむちを打ち振つて遠慮會釋もなく追ひ散らすのである。殊に共產黨員はこれに乗じ、「ナチス」と見れば、拳銃その他の兇器を用ひて暗撃あんげきちを敢行する。「ベルリンの色よ、鮮血の如く、永久に赤く塗潰されてあれ……その繪具の材料を取るために、ヒットラーの強盜團を盡殺きんころせよ……」——とはモスコウの意を體した當時の「ローテファートネ」紙の標語であつた。斯くして、ゴエッベルスの麾下あきに集まつたベルリンS・Aの一味中、その時分、赤色戦線闘士團の不意の襲撃を受けて、鋪道に血潮を散らしながら、敢なき最期を遂げた青年達は尠すくくなかつた。ゴエッベルスはこれ等の光榮ある「S・A無名戰士」を葬はなふために、「アングリッフ」紙の冒頭に不撓ふたふの筆を揮つてい

ふー「起てよ汝等、新しき勞働界の新貴族よ！ 汝等は自ら第三帝國の貴族なることを忘るな！ 汝等の血潮もて種蒔きし實は、今に必ずや、立派な收穫となつて現はれるに決つてゐる！ 拳を固め頰を硬直せよ！ 若き勞働者の歴史的完成の途を邪魔する、デモクラシイの惡平等を粉碎せよ！」

一〇、議會制否定のための選舉戰

懷ふに、國民社會主義の燎原れうげんの火の如き普遍化は、勿論上に立つヒットラーの異常な組織統率の才能に基くとは言へ、一方共和國の心臓とも言ふべき大ベルリンに於て、幾多の迫害と受難の數星霜とを持ち應へた、あの頑張りの強いヨーゼフ・ゴッペルスの活動に負ふところも亦、非常に大きかつたと見なければならぬ。今日宣傳相としてのゴッペルスは、方々の批評家から種種の眼で睨にらまれてはゐる。その奇矯きけうにして傲慢なる態度を憎んだり、嘲つたりする同僚さへ可成り多いやうに見受けられる。それにも拘らずヒットラーは、依然としてこの男を重要視し、決して彼を疎んじようとしなないのは、國民社會黨の受難期に際し、黨のために一番困難な大ベルリンで雄々しく戦ひ抜いた彼の功績を、いつ迄も忘れないためと思はれる。

斯くして一九二七年八月に至り、國民社會黨は南獨ニルンベルグ市に於て、第二回全國黨大會を開催した。その地はドイツ中の一番傳統的な古い町であつて、ヒットラーが一九二三年に初めてS・A（突撃隊）の閲兵をやつた所だ。然るにこの度は、こゝに約二萬人のS・Aが、各スタンダルドに別れて、立派な分列式を舉行した。二萬人と言ふからには數から見ても、もう今迄

のやうな黨青年の政治的示威運動を表はすだけの、單なる裝飾でも景氣つけのお芝居でもない。
立派な「軍隊」だ！ 完全な武裝の兵力だ！！

この驚くべき進歩—S・Aの勝利—は如何なる原因に依つて起つたか？ 私はそれを當時の政治的軍人的な國民主義團體の不統一に歸するものと見てゐる。即ち、ヒットラー運動以外の國民主義者の活動は、その時分全然行詰つてゐたか、或はその綱領に新味がないために、團員に倦意を生じてゐたので、つまりそれ等に憐れない不平の徒は、大舉してヒットラー派に改宗し始めたが爲めである。例へば、ヒットラー派はその時分、在來の「鋼兜團」の中から夥しい青年を獲得したので。「鋼兜團」の幹部は、當時ブルジョア社會の經濟的恢復の大勢から推して、叛逆的行爲の無意味なるを覺り、新たに「國家の中に入れ—」といふ標語を掲げた。所が國家といふのは、その當時のことだから、當然ワイマア憲法に忠誠を誓ふ所の共和國を指すことになる。故にそのやうな生澁い方針に愛想をつかした過激な連中は、どし／＼今迄の團體を脱退して、ヒットラーの傘下に聚まつたのである。その他北獨にはなほ「青年獨逸騎士團」(簡稱「ユングドオ」といふのもあつて、初めは反動的革命を畫策してゐたものだが、後には「鋼兜團」と同様に、彼等の幹部が、聯合國の要求に對する政府の充行政策に賛成を表す態度あるを見て、續々脱退を聲明し、そして擧つて、S・Aへの編入を志願して來たやうである。

國民社會黨は單にその青年運動、則ち軍隊的方面のみが膨脹しただけではなかつた。一九二七年の中頃には、ドイツ國內に於ける有名な既成の政治家連までが、續々ヒットラーの指導を仰がうとして集まつた傾向が、特に世人の眼に立つた。その例を挙げると、國會の萬年代議士で、プロイセン流の保守派を代表してゐた有名なエルンスト・レーヴェントロー伯の如きも、自分の屬する「獨逸國粹黨」の、單に舊地主階級を操縱して政府乗ツ取りの妥協政策に痛心する以外、何等眞面目な方針のないのに、ほと／＼愛想をつかし、遂に國民社會黨の黨員となつて了つた。その時彼は告白して言ふ――「自分は多少世間から名前を知られた舊人だが、今改めて新人ヒットラーの前に膝を屈し、彼の指導に従ふこととした。何故であるか？：曰く、尠くとも自分は、彼が「指導し得る」人物なるを認めたが故である！」

レーヴェントロー伯に次いで、シュトューアといふ人物も亦、正式に國民社會黨へ入黨を申込んだ。シュトューアは「獨逸國粹黨」の所謂「民族派」を代表した代議士で、今迄は國粹派所屬の勞働組合の幹事長を勤めてゐたのである。従つて彼の轉黨は、夥しく多數の勞働者をお土産に持つて來たことにもなる。更に又ヴェルッテンベルグの「民族派」の名士で、文化研究に異彩を放つてゐた大學教授メルゲンターラ博士が、黨に参加したことは、黨の理論的方面に、非常な重味を加へたことになる。

これ等の國會議員その他の名士が、續々ヒットラーの麾下に聚まつたことは、大衆の獲得現象に較べて、大した事件ではないやうに批評する者もあるが、私は寧ろ、それに非常な重點を置いて考へてゐる。何故かといふに、レーヴェントロー伯やシュトエーアは、ヒットラーに對し、盛んに黨の國會進出を獻策し、そしてヒットラーの考へも、それに依つて非常に變つて來たが爲めである。元來ヒットラーは議會主義の敵だ。その指導方針を確把する態度に於て、ヒットラーの心は、昔も今も決して變りはしなかつた。然し今や彼の私軍の編成は、質量共に完全なものとなり、一方、労働組合や國會議員などに密接な關係がつき始めて見ると、將來の希望が増して來る一方で、同時にヒットラーの政治的本能の眼はカツと豁けて、なアにこのまゝ選舉戦裡に没頭しても大丈夫、晚かれ早かれ、ドイツの政權を全部黨の掌中に收めることが出来る、と判然見極めをつけることが出来たのである。然り、先づ政權さへとつて了へば、議會主義なんかどうでもいい。否、政權をとることに依つて、議會主義の全廢を實現することが出来るのだ。従つて、この際選舉戦に飛び込んで行くことは、目的を聖化するための賢明なる手段ともなり得る、と考へるやうになつた。

勿論それは議會否定の共產黨が、選舉運動をやつてゐるのと同様の態度だつたとも言へる。されどヒットラーの慧眼は早くも共產黨などでは、到底政權のとれないことを見抜いてゐた。共產

黨はその潔癖性からして、永久に社會民主黨と提携することを敢てしないだらうし、また社會民主黨は共產黨と協同戰線を張れば、結局共產黨の言ひなり放題となつて、自黨は反對に全滅するだらうから、到底提携を欲しない事情にある。さういふ工合に、労働者の二大政黨が犬猿も嘗ならぬ關係に分裂してゐる限り、共產黨の獨力では、どんなに逆立ちしてみても決して天下は取れつこない。たゞ示威運動程度の亂暴はするだらう。だが共產黨が亂暴すれば、その時は眼にて眼、齒にて齒だ。そのくらゐの亂暴を取鎮めるほどの暴力なら、今はもうヒットラー自身の手許に十分集められてゐる。

で、問題になるのは労働階級以外の政黨であるが、現状から推して、ドイツのブルジョア政黨は極めて零細に分裂し、どの政黨一つとつて見ても、獨立して政權を獲得する可能性がない。然も傾向から言つても、現に政府を組織してゐる諸政黨は、保守の獨逸國粹黨を除き、孰れも選舉毎に萎縮し減少しつゝある。だからこの際、一方共產黨を暴力で威壓する傍ら、他方では合法的な選舉戦に喰ひ入つて、ブルジョア政黨から切崩した投票數を掻き集めるなら、國民社會黨を少くとも當時の獨逸國粹黨以上の大きなものにする事は容易である。さうなれば一應獨逸國粹黨と提携する形で、既成労働者黨全體を叩き付け、そして議會に絶對多數を占めてから、茲に初めて、最初からの念願通り、議會主義そのものを自滅さして了ふのが得策だ……といふ風にヒットラー

の方針が變つて來たのである。

この方針に大賛成だつたのは、矢張りベルリン探題のゴエッペルスだつた。彼は元來、煽動演説と人氣聚めの宣傳が何より好きな性である。乃公一たび、選挙場裡で奮戦すれば、相當以上の効果を上げてみせる。との自信からして、彼は黨の合法的選挙運動に萬腔の賛意を表した。たゞ例に依つて、過激な理論を尊ぶシュトラッサアや、或はS・Aの暴力運動のみに興味を感じるローム及びシュテンネスの如きは、黨が本領を忘れて、そんな選挙運動などをやれば、結局木乃伊^イとりが木乃伊^イとなる愚を演ずるだけだと、常にヒットラーを諫めてゐたやうである。

然しいろ／＼考へて見た揚句、ヒットラーは遂にシュトゥーアやゴエッペルスの意見を採用し、斷然合法的な選挙運動へ乗出すことにした。尤もヒットラー自身も、初めは單に一足飛びに議席獲得数を掻き集める野心を抱いてゐたのではなかつたらしく、兎も角も黨がこれ程膨脹したのだから、この際合法的な政界に於て、どれだけ多くの投票者が集められ得るか、といふ尺度が知りたかつたものであるらしい。

斯くして國民社會黨は一九二八年五月二十日の總選挙戦へ、堂々と名乗をあげて打つて出た。その結果は八十萬七千の投票を得、従つて、黨から十一名の代議士を國會に送ることとなつた。この數字は當時、旭日昇天の勢を示してゐたヒットラー運動にとつては—假令最初の選挙参加

であつたとは言へー大して香^{かんば}しい成績ぢやないと思ふ。一體選舉は水物であり、且つ傳統的な技術に負ふ所が多いので、中々一筋縄では往くものでないから、彼等の最初の試みとしては、先づこれでも宜かつたかも知れない。然しゴエッベルスの意氣込ちや、この選舉で一躍、國會中の第二若しくは第三黨くらゐになつて見せるとの發表であつた。それにしては少し成績が悪過ぎる觀がある。

その理由は他でもない。要するに非常に運が悪かつたのだ。一體國民社會黨が合法的選舉戦に打つて出るといふことは、一般の選舉民の腦裡には所謂「右黨」が又一つ殖えたといふ印象を與へたのである。所が今まで國會内で「右黨」を以て自他共に許されてゐた獨逸國粹黨^{ドイツナチスト}は、フーゲンベルクを黨首に頂くやうになつて以來、ヤング案を認める認めないの問題で、政府と酷く衝突し、急に「ワイマア憲法システムの否定」を標榜して、純然たる在野黨となつて了つたばかりの瞬間であつた。そこで、ヒットラーの國民社會黨が、事新しく「右黨」として、又「システム否定」の政黨として打つて出ても、一般の衆愚にはフーゲンベルクの政黨でも、ヒットラーの政黨でも大體同じことであり、その間に殆ど區別のつかぬやうに思はれたものだから、結局、右黨への投票者は便宜上「獨逸國粹黨^{ドイツナチスト}」に殺到する結果を見たのである。

然し、ヒットラーもこれに依つて、非常にいゝ經驗を積んだことだらう。一九二三年には一揆^{ヒットラー}で

失敗し、如何に誠意を有すと雖も、實力の不足で暴動を企つることの無意義なるを悟り、又一九二八年には選舉で失敗し、假令宣傳を旨くやつても、特に明確で獨自性ある標語を、民衆に理解させない限り、敵黨のために旨い汁を吸はれる惧れのあることを、肝に銘じて學問したであらう。

*

*

*

選舉ちや旨く往かなかつたが、その代り一九二八年は國民社會黨にとつて、内面的な組織を固めるために、躍進的な進歩を遂げた年である。全國に分散した黨員を何々地方會員とか、何々支部とかいふ形に纏めないで、寧ろドイツ全體が既に國民社會黨の國家であるかの氣概を以て、地理的に所轄の區を置き、その幾つかの區を總括して「州」となし（今迄にも「州」の制度は採つてはゐたが、それは極めて部分的で且つ漠然としてゐたものであるが、この年になつて略今日の州制度と同じやうな基礎を作つた譯である）、その各州をミューンヘンに於ける全國指導部が一條索れず號令する。その又指導部の上には、最高指導者たるヒットラーが立つてゐる。といふ風な完全な三角塔型の統階制度を確立したのである。

換言すれば、國民社會黨はもう一九二八年頃から立派に「國家内の國家」を作つた。この國家の中央集権よりは、まるで中世の神聖羅馬帝國を髣髴させる形式に則つてゐる。従つてこの時分から、若しも國民社會黨が天下を取つた場合は、それはプロイセン中心の聯邦國家を基礎とした

ビスマルクの獨逸帝國や、或は又、主權を人民の意志に基かしめつゝ、地方分子國の國政を、極端な自治狀態に放任したワイマール憲法の共和國などは、雲泥の相違ある國家が出来るだらうといふことは、既に識者の間に判然想像された所である。

それから一九二八年には、右に述べた黨の地理的統階制の採用と共に、更にその他の新しい施設も續々完成した。先づ今日のヒットラー運動に於て、重要な役割を演じてゐる、かの「ヒットラー少年團」の如きも、矢張りこの頃出来上つたものである。この團體は國民社會主義の酔へるが如き讚美者たりし一學生バルドウ・フォン・ジーラーハが、文化政策上の見地から、將來の國民社會主義思想の擔當者を養成するために糾合したものであつて、ヒットラーも全然この青年の熱意と抱負とに感動し、その組織を全國的に擴大させることを許した。中には既にS・Aがある以上は、特にヒットラー少年團なる獨立の組織は必要でない。若しも單にS・Aの候補者を少年時代より養成するといふ意味なら、S・Aの中に少年部を置けばいいだらうと、その新團體の無用論を唱へる者もあつたやうだが、ジーラーハはその説を反駁し、「ヒットラー少年團」は單にS・Aの如き政治軍隊の候補者を作る許りではなく、將來、黨の「世界觀」を正しく認識する廣義の黨人を養成するものと強調したので、結局ヒットラーの非常な養成を得た譯だ。

然しそれと同時に、又ヒットラーの意見で、「ヒットラー少年團」所屬の少年を訓育するのみ

ならず、更に進んで將來は、國民社會主義思想を中心として、全國の教育制度を悉く一律に改革する必要がある、それが爲めには、教職員自身の世界觀を指導しなければならぬ、といふ事になつたものだから、黨には又「國民社會主義教員同盟」といふものが成立した。それから黨の世界觀に基く理論闘争の中心施設としては、ミュンヘンに於ける黨機關「フエルキツシア・ペオバハタ」紙の主筆たりしアルフレド・ローゼンベルグが、黨に直屬する「獨逸文明擁護同盟」を設立して、自らこれが指導に任じた。最後にベルリンの労働者ラインハルト・ムーホーといふ者が、この年に「職場細胞」を組織し、盛んに國民社會主義思想を懷く労働者の聯絡を計り、又運動方針を示唆したのである。この組織は後に黨の直屬として採用せられ、N・S・B・Oの名稱をとるに至つた。

*

*

*

それから一九二九年に入つて以來、黨の宣傳方針は急に外交方面に向けられた。従つて國民社會黨に對して外國は急に眼を嚙り、ヒットラーの一舉手一投足を注視するやうになつた。

今迄と雖もヒットラーは、ドイツの對外關係を重要視しなかつた譯ぢやない。既にその著「我が戦ひ」の中には、將來イギリスと無益な抗争を構へてはならぬことを諄々として説いてゐる。又生來のロシア嫌ひたるローゼンベルグがヒットラーの意を擧げて、今迄も盛んに「フエルキツ

シェア・ベオバハクア」などに、排佛露親英伊の外交論を公にしてゐた。然しそれ等は單に、ヒットラー乃至ローゼンベルグの對外政策に對する個人的理解を物語るに過ぎなかつた觀があるが、今からは急に黨全體の方針として、外交問題に過激な宣傳を、集中することとなつたのである。

一體、何故それが特に珍しい現象であつたか？…又何故、外國が急に眼を醒つて驚き始めたか？それは他でもない。今迄の中央政府を形成する政黨中、判然たる硬骨外交の態度を示したものは一つもなかつた。社會民主黨は平和論の權化である。中央黨や民主黨乃至人民黨は、時としては、ヴェルサイユ條約の過酷な要求に對し、不平を述べたり、一種のポイコットの行爲に出たりするとはあつたが、誰一人堂々として聯合國を、正面から攻撃するものはなかつた。又それだけドイツが實際に弱かつたのである。ウィルトやストレーゼマンの充行政策乃至積極的瞭解政策の如きは、總て弱いドイツを基礎として一種の權謀術數であつたと見てもいい。彼等は時としては、對内的には強かつた。國內に不平の徒が在る場合は、警察力その他あらゆる暴力を揮つても、これを鎮壓するだけの勇氣を持つた人物は澤山ゐた。ノスケやセーヴェリングの如きがそのいい例である。然るに事一度外交の問題となると、皆な一樣に戰々競々として、まるで腫物にでも觸るやうな態度に變つて了ふ。然もそれは左翼の連中ばかりぢやなかつた。例へば右黨中の舊帝國主義を代表する「獨逸國粹黨」の如き大政黨でさへ、日頃はなる程強いことを言つてゐるが、さて

愈々ドーズ案を押付けられたり、國際聯盟に加入せねばならぬ土壇場になると、故意に自ら黨を分裂させ、投票を控へる組と、賛成する組とを二つ作つて無責任にもお茶を濁したりなどした。否それは無責任ぢやない：彼等の目的が大臣の椅子を覘ふ所に在るので、餘り人民を喜ばす爲めに、戦争をも厭はぬやうな對外政策上の強がり言つておいては、後で身動きがとれなくなる、即ち責任が特でなくなるからといふ、寧ろ一種の責任感(?)からでもあつた。

所が國民社會黨の場合は多少趣きが違ふ。彼等は元來一黨の獨裁を目的としてゐるし、同時に對外的な強硬な態度に出ると、第一人民が喜ぶし、第二に外國と雖も今迄のやうに傍若無人の振舞が出来ない、換言すれば、それだけドイツが強くなつてゐることを自覺してゐるのだ。萬一それに依つて、戦争の不幸が起つても、國民社會主義は單一の政黨として天下に抗争の號令を下し、一切の責任を引受けるだけである。即ち、背水の陣を布いて戦ふだけである。さういふ黨独自の特色を明かに表明して、次に選挙場裡へ打つて出る場合は、今度は旗幟の不鮮明な「獨逸國粹黨」などと、單に「右黨」といふ名目だけで混同されることはないだらうし、従つてそんな政黨に漁夫の利を占められる心配もない。といふのが、ヒットラーの一九二八年の總選挙に依つて學んだ、貴い經驗を基礎とする新方針であつた。

そこでヒットラーの意を擧げて、先づ對外政策強硬論の一番槍を承はつたのが、例のゴエッペ

ルスだ。彼は一九二八年五月以來、國會議員であり同時に黨の宣傳部長に擧げられてゐたものだから、國會及びベルリン諸集會の演壇を利用して、旺んに「賠償打倒のための決戦」なる絶叫を續けた。彼は當時ドイツ產業界の痛とされてゐた失業群の發生原因を、悉く賠償義務の履行に結び付けて説明した。實際一九二九年一月十五日の統計では、ドイツ失業者の數は三百三十萬人に上つて、その前途は極めて暗澹たるものがある。然るに當時實行されさうになつてゐたヤング案が通過すれば、ドイツは賠償義務を人間二代の間甘受し、その間に、ドイツ労働者の三分の二は、失業者として白人苦力の仕事さへ得られなくなるに極つてゐる……といふ單純な、然し直截な論法で、黨はこれ等の失業者を夥しくその黨員又は同情者に引入れ得たのである。だから、この時分から世界は「ナチス」を人道の敵と看倣し、ナチスの擡頭は、即ち世界戦争也といふ風な意識が、舊聯合國側の政治家の頭には、非常に強くなり始めたのも無理はない。

斯くの如く、國民社會黨の外交政策は一見極めて粗雑に見えた。それでも當時のフランスやロシアは、實際武器を執つてドイツを脅嚇するだけの實力を持つてゐなかつたのだから、ヒットラーの強がりには、要するにこれ等の外國を甘く見た結果なのだ。そしてそれに依つて寧ろ大衆を黨に惹き付けることも出来、従つて政策上から見ると、非常に効果的であつたと言はねばならぬ。それから外國に對して、右の如く強硬な態度を示す代り、今度は對内政策に於てヒットラーの考

へは、今迄に全く注意深く且つ細こまかくなつて來た。選舉戦の如きも一九二八年の時の如き、單にデモンストラチヴなものでなく、實際政治の上から確實に議席の多數を、占め得る算段をし始めたのだ。それには、一躍して中央政界の乗取りのりを、畫策するよりも、寧ろ黨員及び同情者の比較的多數を占むる地方の議會に進出し、地方政府から順次に、國民社會主義化の歩を進めることに決めた譯である。

その頃國民社會黨投票者數及び議員數が一番多かつたのは、ザクセン及びチューリンゲンであつた。これ等の地方では國民社會黨の議員は、特にヒットラーの許可を得て、便宜上他の右黨（主として獨逸國粹黨）と協同戰線を張り、多數に依つて政權の獲得を策した。すると例の「破局カストロー理論ミントラウイ」派の黨員たるシュトラッサアの一派は再び激昂し、「大臣の椅子が大切な、革命が大切なか？」といふ小冊子を出して、「ザクセン・チューリンゲン」派の行動を妨害しようと努力した。だから内政問題に關する限り、一九二九年の黨は又もや不愉快な内訌ないこうを續けてゐたと見てもいい。一九三〇年一月、時の國會議員フリックはチューリンゲン國の内務大臣（事實上の首相）に就任した。これはヒットラー主義の驍將として、憲法規定に準據しての初めての「ナチ大臣」なのであるから、センセーショナルな世人はこの政局推移の跡を見て、轉ま今昔の感を深うしたものだ。それよりも更に吃驚したのは中央政府である。一體共產黨にしる、國民社會黨にしる、議會を否

定するやうな政黨なのだ……そんな奴等が在野黨として暴れるのは仕方がないとしても、政府を組織するのは無茶である。現にドイツ國家の基礎は、ワイマア共和憲法に依つて立つてゐるのだから、これを認めないやうな無責任な人物が、假令地方國家とは言へ、苟もその國務大臣の一人になるといふのは容赦のならぬ現象だと憤慨した。所がフリック大臣は一向平氣な顔で、チューリッゲン警察の内部に於て、マルキシズムの立場から共和憲法に忠誠を誓ふ官吏をどし／＼免職し、國民主義を奉戴する警官のみを以てこれを補充し始めたのである。そこで共和國內務大臣セーヴェリングは、今まで中央からチューリッゲン警察に送つてゐた豫算の金を、今後は斷然一文も支給してやらないことにした。

そんな工合で、セーヴェリングとフリックとは永い間喧嘩を續け通した。そのうちセーヴェリングは内相の職を退き、同じく鉤十字運動の公敵たるウィルトがその後釜に坐つた時、初めはその爭議を續續してみたが、遂に根氣負けがして、送金停止の禁令を解かざるを得なくなつた。そしてフリックは又チューリッゲンの文部大臣をも兼攝してゐたものだから、益々國內に於ける自由主義施設に彈壓を加へ、國民教育のドイツ主義的愛國化を計つたので、ドイツ全國中勤くともチューリッゲンだけは一つい先頃まで赤色チューリッゲンの異名で謳はれた左翼過激派の根據地は——完全に「國民社會主義國家」に一變して了つた。

一一、第一黨へ！

チューリッゲンが偶々「ナチスの根據地」に變つて、中央の言ふことを聞かなくなつたと言つても、ベルリンは中々さう簡單に往かぬ。ベルリンは何と言つても、共和國政府の高き城壁であり、マルキシストの堅き砦^{おしろいぶ}なのである。従つてベルリン市内の國民社會主義者は、なほ依然として政府及びプロイセン警察の激しい迫害を受けた。警官又は共產黨の暴漢のために犠牲となつて命を殞^{おと}したS・Aの青年達―即ちゴッペルスの所謂「S・A無名戦士」―の數も矢張りベルリンが一番多かつた。

そのうちでも、國民社會黨員の忘るゝことの出来ない悲劇は、共產黨の殺人團と、鈎十字學生團より成るS・Aとの衝突に基いて惹起された「ホルスト・ヴェッセルの暗殺事件」である。

ヴェッセルはベルリンの牧師の子に生れた一法律學生であつた。彼は夙^{もと}に熱心なヒットレリスムの讚美者となり、後には大都會の裏に巢窟^{くわく}ふ失業者を相手に、國民社會主義的な教化訓練を與ふる任務を引受けたものである。従つて、彼は市の中央の大學街を離れて、「突撃區第五」といふ共產黨の暴漢の巢窟たるフリードリヒスハインの一隅に居住して突撃班を指揮し、あらゆる迫

害や貧窮と戦ひながら勇敢に活動を續けてゐた。その際、彼は悲壯なる自作の歌

„Kam'raden, die Roffront und Reaktion erschlossen,

Marschiet im Geist in unsem Reihen mit."

(赤色戦線と反動の徒に斃^たされし同志

我等の隊伍の精神となりて共に進軍す)

を用ひて同志を鼓舞するを常としたのであるが、遂に彼自身が數名の共產黨員のため、寓屋の入口で拳銃の暗撃に遭つて、慘憺たる最期を遂げた。生前の彼は、なほ年少なりしにも拘らず、性^{せう}廉直にして極めて果斷、且つその風采から言つても、長身白哲で金髮碧眸の理想的なゲルマン型の青年であつたといふ點からして、同志は慟哭の情を禁じ得ず、ヒットラーも亦この青年の話を聞いて痛く感激し、同青年の日頃愛誦した右の自作の歌をそのまゝ「黨歌」に採用してやることにした。それが今日ドイツの諸儀典に際し、會衆によつて必ず合唱される「ホルスト・ヴェッセルの歌」である。

一九三〇年三月一日ベルリンのS・Aは、このヴェッセルの遺骸を擔いで、猛烈な示威運動と共に黨葬を舉行した。ベルリン警視廳はこれに依つて、S・Aと赤色戦線の徒とが血腥い衝突の椿事を惹起することを俱れ、その黨葬を嚴禁したに拘らず、血氣に遡^{さか}るS・Aはどうしてもこれ

を聴き入れない。襲殺になつても、この殉教者たる同志の靈柩は、豫定の墓地へ永久に葬つて見せるといふ。警察の方でも死者の葬式だけは禁止する譯には往かぬので、いろ／＼交渉の結果、種種の面倒臭い條件をつけ、武装の警護を以て道順を指定し、且つ死者の棺は鈎十字の旗にて覆はないこと等の約束で、やつとこれを許可した。然るに實際、その時刻になるとS・Aは平氣でヴェッセルの棺に鈎十字の大旗を捲付け、一齊に「ヴェッセルの歌」を高唱しつゝ行列を進めようとするのだ。警備巡査の指揮官は大に憤り、その行列を阻止しようとして、激しい格闘が隨所に起つた。棺桶を地下に埋葬する瞬間まで阿鼻叫喚の修羅場だ。警備巡査連も意地づくになつて、慫くとも鈎十字の旗だけは撤回させなければ、葬式そのものを許すことが出来ぬ。棺桶をそんな不慮な旗で巻いて埋葬しない約束であつたぢやないかと詰る。すると傍の柵上へ飛び上つて大音聲を揚げた小男がある。見れば指揮者のゴエッペルスだ。曰く「警官諸君！我々は確かに諸君との約束を守つてゐる。鈎十字の旗は故人の屍を包んだまゝ地下に埋めようとしてやしないぞ。見よ我々は、この旗を空高く翻し、この屍を踏み越えて、諸君等の本據たる「ワイマア」のシステムを粉碎しようとしてゐるのだ！」勿論ゴエッペルスは、その暴言に依り有無をも言はさず檢束を喰つた。然し警察は彼が國會議員たるの故を以て、それ以上に手の出しやうもなく、忌々しさに釋放するより他はなかつた。

一九三〇年になると、國民社會主義運動は今まで一番難しかつた筈のベルリンに於てさへ猛烈に擴がり始めた。それでヒットレリズムの未來はもう完全に約束された譯だ。プロイセン政府は今や足許に火が移つた以上に狼狽し、ヒットラー主義の活動と見れば何でもかでも見當り次第に禁止を喰はせた。後には禁止する對象物がなくなつて、遂にプロイセン國內に於けるS・Aの制服着用をさへ禁止した。黨色の上着と洋袴ズボンを着用して街頭を練り歩く者は、公の秩序に害あるものとして、刑罰に處せらるべしといふことになつたのである。然し大勢がそこまで進んでゐる以上、これに逆さかふことはもう不可能だつた。制服が禁止されると、ヒットラー人は孰れも眞直ぐに右手を前方高く突き出して、所謂「ハイル・ヒットラーII」の黨敬禮を交換し合ふことにした。プロイセン警察と雖も、人間が道で手を舉げちや不可いふんなどと言つて、まさかそれを禁止する譯にも往かなかつたのである。

*

*

*

その頃然し黨の内部に於ては、又理論上の抗爭が鎌首もたを擡げ始めた。當の責任者は、矢張り例の破局カスストローフ・フョークライ論の主唱者シュトラッサアである。

この男はフリックのチューリンゲン内閣入り、及びヒットラーIIギュッペルスの國會進出主義を評して「システム政黨との提携」であり、従つて國民革命主義を拋棄はなすする黨の墮落なり、と憤

慨してゐた。然らば自分で所謂「革命」を實行するかといふと、案外さうでもない。黨内の社會革命的思想を有する一派が彼を擁立し、愈々その實行に移らうとする場合になると、グレゴル・シュトラッサは、そんな不用意な宮廷革命の眞似事みたいなことは、賛成が出来ないと遁（ひ）を打つて了つた。彼の弟のオットー・シュトラッサは大に憤り、兄に絶交狀を叩き付けて、數多の「過激理論家」と共に獨立し、革命の旗揚（はたあげ）を謀つた。然しその「革命」も結局、借事務所の奥の一室で、秘密出版や檄文（げいぶん）の原稿をタイプライターで叩き出す以外の何物でもなかつたらしい。そして寧ろ自分達の方が、他の既成政黨政派の連中と私的な聯絡をつけたりなどして、その後二年間、暗中飛躍を續けたといふにとゞまる。

黨内の暗闘は、それで又一段落を告げたと思つたが、ヒットラーが愈々議會乗取（めとり）りの政策を立てて以來、案外外部に手強い敵が現はれた。それは當時の共和國宰相で、中央黨の領首たりしブリュニングであつた。

ブリュニングはその容貌風采（ようぼうふうさい）の柔和なるにも似ず、共和國歴代の宰相切つての稀に見る剛直（かうちく）果斷（くだん）の士であつた。だからこそ國歩多難に際し、責任を議會に轉嫁せず、寧ろそれを一身に引受けて、獨裁的傾向ある緊急令などを矢擲（やてき）早やに出すだけの勇氣は持ち合せてゐた。たとへば、好漢折角（こうかんせかく）を突き出しておきながら、今一步といふ所で蝸牛（こぎゅう）の殻へ閉ぢ籠る癖があつたので、

最後はとう／＼敵に遣つ付けられたのだ。今一つ彼の缺點は、他のブルジョア自由主義の諸政治家と同じく、新興の國民社會主義の伸展性を、餘りにも過少に評價し過ぎてゐたことである。彼は一九三〇年の夏、内閣豫算案を通過させるために、解散を以て國會を威嚇した。彼は新選舉に依つて、多數の與黨を獲得し得る確信を持つてゐたのだ。恰もよし彼の外交手腕に依り、六月末には、舊聯合國のラインランド駐屯軍が全部引揚を完了することとなり、國民は狂喜して、政府の功績を稱讃してゐる場合であつた。彼の確信も萬更根據がなかつた譯ぢやない。然し彼はこの際國會を解散してすぐ選舉などに移れば、屹度横合に國民社會黨が手具輕引いて待つてゐる、といふ陥穽に、迂濶にも、氣がつかなかつたのである。だから彼はその頃こんな演説までした。――「このまゝ總選舉に移れば、或は國民社會黨は、議席數を五十ぐらゐは獲得するかも知れぬ……然し經濟恐慌の秋には、過激な政黨がのして来るのは普通のことであつて、該黨が少しばかり膨脹したとして大して心配する必要はない……且つ又ヒットラー運動なるものは、不平の多い騷擾すきのやぐざ連中が偶然寄り集まつた、謂はゞ烏合の衆なのであるから、今政府が秩序を尊重する民衆の助力に依つて、目下の經濟上の困難を切抜けて了ひさへすれば、奴等には積極的活動は出來ない筈だ……」

これぢや時勢が、全然分つてゐない證據である。ブリュンニグにして今少し視野が廣かつた

なら、或は總選舉戦法なんかやらなかつたらう。公平に見て、國民社會主義は單一の革命主義政黨なるに拘らず、その爪牙を隠して、寧ろ議會主義を利用しようとしてゐる場合だ。反對に政府自身は議會主義に依つて構成されてゐたに拘らず、ブリュンニングの剛直な態度で、緊急令政治を押し、議會の職能を停止してゐる際なのだ。言ひ換へると、彼は獨裁政治の一步手前まで來てゐた譯である。それならブリュンニングが今一步進んで、ワイマア憲法を停止又は改革するだけの決心があつたとしたなら、或はヒットラー運動は一九二三年の時以上に、非常な打撃を受けてゐたかも知れない。その當時のワイマア憲法はもう疾づくに行詰つて、國力の恢復した獨逸の身幅には合はなくなつてゐる。この憲法に最後まで繼々たる政黨は、社會民主黨と民主黨（然も民主黨自身はその頃殆ど全滅に近い程勢力を失つてゐた）だけであつて、中央黨内にもその反動分子は、その他の人民黨や獨逸國粹黨と同様に、口では憲法に反逆を企てようなどとは言はないが、心の中には新しい國民主義の風潮から察して、確かにその行詰りを痛感してゐた筈である。

然もかういふ國民主義的、且つ反動的な風潮は、單にドイツに限つたことはない。ファッシズムのイタリヤにしる、或る意味ではスターリンの蘇國聯邦にしる、その他歐洲の諸小國中の或るものにしる、デモクラシイ憲法の性能を停止してゐる先例は、既にいくらでもあつたのだ。その

際ドイツだけが、世界中に比類もない程の自由、そして民主的な憲法を捨てて了つた所で、別に不思議がる者はなかつた筈である。

要するに時代は、思ひ切つてワイマア共和憲法を叩き毀し得る者の手にのみ、ドイツ全體の政權が落ちてくるやうになつてゐた。ぢや誰がそれを一番容易に毀し得る地位にゐたか？ ヒットラーか？ 私は一概にさうとは思はない。ヒットラーはある一定の時期が來れば、必ずそれを毀す―或は自然に毀れる―ことを豫定してゐたけれど、その時期に達する迄は、一應同憲法に規定する國會を利用しようといふ、謂はゞ比較的消極的な政策に退嬰してゐる矢先であつた。ぢや獨逸國粹黨のフリーゲンベルクはどうかといふに、これは國民社會黨と同様に、政府に對する反對黨の立場に在つて、獨力ではワイマア憲法の停止などといふ大それたことが出来る筈がなく、精々のところ、議會へ憲法停止の提案を出すか、それとも人民投票に訴へる運動を起し得るくらゐが關の山である。従つてフリーゲンベルクが無茶をやり得る前途は、まだ／＼中々遠達だ。

して見ると、この高飛車に出る行爲をやるのに一番適當な地位にゐたのは、矢張り宰相ブリュニングだけであつたと思ふ。彼は現在その宰相の地位を利用し、國會あれども無きが如き緊急令に依つて、全國に號令し得る立場に在つたのだから、今一步思ひ切つて前進し、ヒットラーの切札を自分の手に奪つて、ワイマア憲法そのものを廢止する英斷に出てゐたならば、今日のドイ

ツは、或はまだヒットラーのものぢやなかつたかも知れない。勿論、そんな大それた英斷を敢てするのは、その當時ぢや、まだ種々の事情から推してなか／＼困難であつたには違ひない。然し困難だと言つたところで、ぐづ／＼して居れば、自分自身が根柢から滅ぼされて了ふのだ。既にヒットラーから王手と出て、本據を衝く駒を出して來てゐる以上、姑息手段ぢや、最早何もならない。乾坤一擲、最後の捨身になるだけの覺悟が當然必要だつた筈である。それなのに、彼は前にも述べたやうに、まだ／＼ヒットラー黨の時代ぢやないなどと嘯いて、總選舉で勝つてやらうなどといふ、吝な了見を持つてゐたのだから駄目だ。假令一步譲つて、その場限りの總選舉に勝つて見た所で、それはもう行詰つて、何れ死んで了ふ變態内閣の餘命を、僅か一ケ年か二ケ年か延長するに役立つたのみだらう。さう考へて見ると、成程ブリュンニングも相當に傑かつた：生來政治以外には何等の道樂もなく、矢張りヒットラーと同じやうに獨身で恬淡で、そして燃ゆるが如き祖國愛の至誠をも持つてゐた：德操ばかりでなく、彼は又ドイツに於ける最高の教育を受け、政黨人としての經驗も豊富であり、同時に或る程度までは敏捷で果斷で、政治家としての要素を多分に持つてゐた。大戰後の渾沌としたドイツの政界には、どれもこれも團栗の背競べみたいな政治家が蠢動してゐた中に――この人物拂底は社會民主黨及び共產黨に於て特に甚しかつたが――グスタフ・ストレーゼマンと彼ブリュンニングとだけは、一頭地を抜いてゐた感がある。然し最

後の土壇場になつての彼の行動から判斷して見ると、この「大政治家」ブリュンニングと雖も、ヒットラーと四つの相撲をとるにしてはまだ餘ほど段違ひの感がした。その點から判斷しても、相手のヒットラーは、單なる風雲兒であるといふ以外に、所詮近代ドイツ政治界が生んだ、驚くべき「偉人」であると折紙をつけてもいいだらう。

*

*

*

で何は兎もあれ、一九三〇年九月十四日、總選舉の蓋を明けて見たら——これは又、ドイツの議會史始まつて以來の驚くべき異象が起つた！

ヒットラー黨は今迄の國會代議士十二名から一躍百七名に飛び上つたのである。

もうこの時のヒットラーは、一九二八年當時のやうに、單に國民社會主義の威力を試験するための示威運動をやつてゐるのではない。寧ろ實際政治的の立場から、國會内になるべく多くの議席を獲得し、結局合法的にドイツの政權を掌握する腹でやつてゐるのだ。そしてその計畫は空前の大成功を収めた。

世人は驚愕した。誰よりもかれよりも精々で五十名ぐらゐが關の山だらうなどと、高を括つてゐたブリュンニングの顔色が蒼くなつた。もう未來の政權は「ナチス」のものだ。それは最早短い時間の問題と相場が決つた。こんな結果を生むくらゐなら、下手な總選舉なんかには訴へない

で、初めから國會を蹂躪し、獨裁政治を強行しておけば宜かつたが（例、オーストリアに於けるドルフス内閣）、もう斯うなつては後の祭で、口惜しさの脛を嚙んでも追つ付かない。

一體國民社會黨が何故こんなに驚くべき好成績を挙げ得たであらうか？ どこにブリュンニンの目算を誤つた點が存在したか？ ドイツ人の政治に對する頭が一晩のうちに、まるでグラツと變つたのであらうか？

この謎は然し神祕な謎ぢやない。曰く、ドイツの國會議員は六萬人の人口から一人宛選ばれることになつてゐたので、人口の増加に伴つて、議員の數もそれに應じて殖える譯になつてゐた。所が此度の總選舉で、議員の總數は四百九十名が五百七十七名に増したのである。言ひ換へると、選舉投票者數が以前よりも四百六十萬ほど増加した勘定だ。どうして増加したかと言へば、（一）今まで多數政黨が割據して鎬を削つてゐた場合は、政治意思の判然しない連中（從つて選舉などはどうでもいゝと冷淡であつた連中）が、今回の選舉戦がヒットラー派か非ヒットラー派かといふ風な、簡單明瞭な形になつたので、ドシ／＼選舉投票場へ押出したこと、及び（二）今まで滿二十歳に足りなかつたのに、この頃は漸く成年に達して、新たに選舉資格を得た青年男女の數が夥しく増加してゐたからである。第一の場合は、標語が簡單で、威勢がよくつて、素人向のするヒットラー黨の投票者となつたであらう。第二の場合も亦、ヒットラー運動は青年運動だと言はれ

てゐるだけに、投票場裡へ乗出したばかりの若い青年は大概國民社會黨へ加擔したことになる。その見え易い道理が、舊デモクラシイ型のブルジョアジイには見えなかつたのだ。否、比較的先見の明ある筈のブリュンニング宰相でさへ、さういふ勘定は忘れてゐたのだ。

兎に角九月十四日の總選舉の結果は、ドイツに於けるデモクラシイは晩かれ早から、ヒットラーに依つて縊め殺される運命に逢ふことにもう相場が決つた。一體今後はどうなるだらう？ 又怖ろしい革命がやつて來て、かの十年前にポリシェヴィズムの恐喝政治で苦しめられたやうな時代が來るだらうか？ ヒットラーは盛んに「さて我々は愈々『進軍する』のだ」といふやうな言葉をつかつてゐるが、進軍とはどんな無茶をやる積りだらうか？ といふ風に怯え恐れた左翼の政客やユダヤの商人などは、もうトランクへ荷物を詰めて、外國へ逐電でもしかねまじき騒ぎである。外國新聞記者連は、さては愈々面白い時代が來たと早合點して「ヒットラーは今日『さういふ奴の首は地上に轉がるだらう』などと凄い演説をしてゐたから、實際『ナチス』は、今に街頭の『電燈柱を悉く獄門臺』に利用する計畫を立ててゐるらしい」(マンチェスター・ガーディアン紙及びアントランジャシン紙等)——などと、センセーショナルな特電を發したりなどしてゐた。

丁度その頃面白い事件があつた。獨逸國防軍の現役青年將校三名が、軍隊内へ國民社會主義の

宣傳をやつたといふので逮捕されたのだ。そしてそれが非常に大きな問題となり…政治に超然たるべき軍人が、さういふ非合法行爲をやつて、國家を轉覆するやうな政黨の宣傳をやるのは怪しからん…といふわけで、政府は右の三名をライプチヒの大審院へ叛逆罪として、起訴したのである。ところが法廷に於ては、國民社會主義は果して合法政黨なりや非合法政黨なりや、といふところが大變な議論となつた。或者は、いや公の國會へ正面から代議士を送つて進出する政黨だから當然合法政黨だと主張し、これに反對する者は、それでもヒットラーが「首が地上に轉がる…」とか「電燈柱を磔刑臺に…」なんて言葉を遣つて演説したことがあるから、奴等の企んでゐることは、當然非合法的な犯罪の計畫であると、論じて譲らない。それではヒットラー自身を證人として法廷へ召喚し、一體國民社會主義の本質は何ぞや、といふことを訊いて見ようといふことに、評議が一決した。

そこでヒットラーは召喚に應じて、法廷へ姿を現はしたのである。全ドイツ、否、世界の耳目は今悉くライプチヒに於ける、このスフィックスのやうな證人の態度と、その一言一句との上に向けられてゐる。然るに彼は何の激みもなく、すら／＼とかう答へた。

「我國に於ける國民社會主義の運動は、憲法の規定に従ふ方法を以て、或る目的を達せんとするものである。換言すれば、合法手段で、立法の府に於ける過半数を獲得せんとする努力を續け、

さてそれが成功すれば、すぐさま國家を我等の理想に叶ふやうな形に鑄變^{かたまり}へる積りでゐる……今日我黨の議員百七名が、そのうち二百五十名となれば、國會内の絶對多數を占める譯である。然るに我等の政敵は、我等が合法運動をやることを煙たく思つて、どうかして非合法の運動をしてくれ……^{このわが}と希つてゐるやうである……が我々は、その手には乗らないで、なほ二回三回の公然たる選舉を續けた上、必ず國民社會主義の政府を組織して見せる……」

世人は意外に感じた。否、ヒットラーが指摘したやうに寧ろ不満足な顔をした。何……合法的な選舉運動だけで……それぢや、あれ程大きなことを言つてゐたヒットラーも、宗旨を變へて軟化した譯か……と冷笑する者さへあつた。然しそんな淺薄な觀方は、このヒットラーが「聰明な政治家」であることを知らない連中のすることだ。誰しも魚がもう餌に喰ひ付いてゐるのに、わざわざ釣竿を捨てて、新たに餌^{もつ}で、その魚を突いて捕らうなんて馬鹿はない。目的が魚自身にあつて、然もそれがもう釣れてゐるなら、今はもう釣竿を引上げるだけのことだ。國民革命は默^{だま}つてゐても出來るといふ見當のついてゐる今日、革命は流血の痛快な方法に依つてのみ克ちとるべきだ……などといふシュトラッサー流の小兒病的潔癖論^{けつぺきろん}は、尠くとも政治家たるヒットラーにとつては、一笑の値打もなかつたであらう。

で一方、裁判官の方はヒットラーの答辯が餘りに淡泊なのに失望し、今少し何等かの言ひ懸り

で言質を捕へてやらうと考へたものか——「でも證人は『人間の首を地上に轉がしてやる』とかの演説をしたさうぢやないか？……その意味を一つ聽かして貰ひたい——と録をかけた。すると、ヒットラーは囁（ささや）き、今度は凄（こわ）い答辯をした——「我等の運動が成功した曉には、こんな裁判所なんか失くなつて、全然新しい組織の裁判所が出来る……そこでは十一月革命の犯罪人どもは、一人残らず裁かれる筈だから、勿論多少の首は地上にコロ／＼轉がりましょう!!」

一二、大統領戰の表裏

一九三〇年九月の總選舉で、百七名の議席を獲得した國民社會黨の將來は、もう確實に約束された譯だが、黨がヒットラーの言ふ通り、合法的議會制度を手段とする限り、成程一足飛びには政權を掌握することが出来なかつた。勘くとも、黨が國會（及び地方議會）の過半数になる迄には、まだ多少の時日が要るだらう。そしてその間だけが、ブリュンニング内閣（否ワイマア組織に基く一切の妥協内閣）の辛うじて生存さして貰へる、唯一の果敢ない期間なのである。

だが、それは斷末魔の期間だつた。随分苦しい想ひをさせられた。一方ヒットラーが一寸動いても、もうひやくとして怯え切つてゐるのに、他方では財政上の破綻が近づいて、殆ど遺縁の方法もつかない。げに一九三一年は、ブリュンニング内閣にとつて、まるで煮湯を飲まされるよりも辛い一ケ年ではあつた。

もとを糺せば、ドイツ人の理想主義が影を潜め、その代りアメリカニズムの普及に依つて、社稷が救へると過信したのが悪かつた。國に黄金の繁榮さへ來れば、賠償も出来るし、復興も出来るし、又國家は泰山の安きに置かれるといふ輕率な世界觀で、自分の足許を見なかつた資本過重

主義は、愈々蹉跌^{さだつ}して、身動きもとれぬ時代となつたのである。

ロカルノからヤング案に至るまでの期間に於けるドイツ爲政者の經濟政策は、全然血迷つてゐた。外國から何億何十億といふ金を、後から後から借りて、それを鋼鐵にしたり、アスファルトにしたり、ホテル建築にしたり、鮭の罐詰にすることばかり考へてゐたのである。その仲介者は國際金融界の投機業者なのだ。さういふ危なかしい連中が、アメリカやイギリスやオランダ、スイス等から矢鱈に金を借りて國內へ投資し、その總額が百八十億馬克^{マルク}にも上つてゐたのである。

所がヤング案の交渉行儀みや、九月の總選舉に於けるヒットラー黨の躍進、又は赤字豫算の膨脹等の惡材料に依つて、ドイツの資金はどし／＼海外へ回收され始めた。それも借金が長期信用ならまだしも、その三分の二が短期のものだつたから、まるで洪水が堰を切つたやうに資金が海外へ逃避して了ふ。殊に三一年五月、オーストリア信用商社の破産以來、神經質になつた債權者は猜疑の眼を、悉くドイツの財界に向け始めたから堪らない。それにドイツが、愈々ヤング案に因る債金を、支拂はなければならぬことにでもなれば、財界は益々困難となる譯だ。その救濟の一方方法として、六月二十一日に米國大統領フーヴァのモラトリウムの發表があつた。然しこの救濟方法は結局、ドイツに信用なき事情の暴露に役立つこととなり、七月の中頃に至つてドイツには本當の「恐慌^{パニック}」が襲來した。ダナート銀行は潰れて了ふ、北獨毛織會社は身代限りをする。と

いふ慘憺たる有様である。

財界金融界の極端な不安は、そのまゝ國民の社會生活に甚しい惡影響を與へた。實業家は清算の跡始末に東奔西走し、政府の當事者は賠償、戦債、支拂猶豫、安全保障などの國際會議に出席したり、外國の賓客を迎へて、宴會を開いたりして大意になつてゐるが、その裏面でドイツの國民生活は、まるで火山の上にも坐つてゐるやうな想ひがあつた。何よりも目立つた現象は、失業者の續出と同時に共產主義の急激な擡頭である。

ドイツ共產黨は中獨に於ける叛亂一揆に失敗して以來、モスコウの指令に對する解釋に於て黨内が四分五裂し、もはや昔日の面影を失つた感があつたが、この頃になつて不思議にも再び芽を吹き出し始めた。そして面白いことには、今迄の如く、ユダヤ教のドクマをもぢつたやうな世界革命だの、無産階級の獨裁だの、といふ勤勞者の實際生活には縁遠い夢を説くのではなくて、もつとドイツ國民大衆に訴へるやうな目標の運動に着手した。その指揮者は齡の若い制に、極めて融通の利くハインツ・ノイマンだ。彼はドイツ共產黨の任務を「ヴェルサイユの桎梏に反抗する戦」となし、民衆の興味をドイツ國民解放戰の方面に向けて了つた。かうなると普通人の頭には、共產主義と國民社會主義との間に、殆ど區別がつかなくなる。實際に又、その頃共產黨出身の勞働者で、國民社會主義に轉黨して來た者も尠くない。又反對にヒットラー主義者でありながらノイ

マンの運動に共鳴して、それに鞍替した者も澤山あつた。

例へば、軍隊内で國民社會主義の運動を起して逮捕され、ライプチヒの大審院で刑に處せられた士官のうちのシューリングアの如きは出獄後、自分はポリシェヴィストであると傲語し、共產黨のために「ドイツ赤衛軍」の編成を引受けたのである。尤もそれは酷く失敗して、シューリングア自身は、再び刑務所入りの憂目を見ただけで消えはした。

所が共產黨は國民社會主義に紛らほしい眞似をし始めたばかりでなく、更に「鋼兜團」と行動を共にし始めたから面白い。當時「鋼兜團」は人民投票に訴へて、プロイセン議會を解散すべき運動を起してゐた。成程プロイセン議會は一九二八年、即ち社會民主黨が最後の勢力を盛り返した年に選舉されたまゝで、それから三年を経た一九三一年には、全然民意を代表してゐない事が明かであつたから、「鋼兜團」が國民主義者として、この要求を出したのは敢て怪しむに足りない。然るに共產黨がこの提案に賛成し、プロイセンのブラウン・シーヴリング内閣打倒のために、所謂「赤色人民投票」案を提出したのである。それも一方財界は混亂の極に達し、八月十日、破産や取付等の現象に人心恟々たりし眞最中であつて、ベルリン警察は怖ろしく狼狽したが、共產黨の方は又反對にその警察の狼狽を利用した譯だ。そして人民投票の當日になると、示威運動の意味でか、彼等の根據地たるビューロー廣場のカール・リープクネヒト館に籠城し、又その或

者は警官隊に挑戦して激しい市街戦を演出した。それがため警視二名が無惨にも撃殺されたのである。さういふ血腥いお芝居的一幕を演じたに拘らず、彼等の要求する赤色人民投票は、僅かに三割七分の成績を収め得たに過ぎず、従つて社会民主党中心のプロイセン議會はそのまゝ存在を続けることとなり、結局共產黨の暴動は却つてセーヴェリングの警察國家の勢力を強めるといふ損な効果を齎らしたに過ぎない。

共產黨がベルリンで無駄な暴れ方をしてゐる間に、国民社会黨の本據は、寧ろブラウンシュヴィクに集中してゐた感がある。これも亦、ヒットラー特有の綿密周到な政策から來てゐること、議會の絶對過半数黨を目標とするためにはさう焦らないで、先づ順次に地方から手入れをして行かうと考へたからである。

ブラウンシュヴィク國は、その當時實際国民社会主義の根據地であつた。有能な黨員のクラッゲが三一年の九月にこの國の大臣に擧げられて以來、プロイセンとはまるで反對で、社会民主党には演説も集會も許さないが、国民社会黨ならどんな示威運動をやつても、喜んでこれを獎勵するといふ徹底振りである。そこで十月にこの國の温泉地ハルツブルグに於て、獨逸國粹黨首フリーゲンベルクはブリュンニング内閣を打倒する目的でヒットラーと會見し、所謂「ハルツブルグ同盟」なるものを結んだ。同月十八日にヒットラーは全國のS・Aを總動員し、ハルツブルグに大

閱兵式を舉行したのであるが、その數實に十萬人を超えたので、その報道だけでも實にベルリンの心臓を寒からしめた感がある。

ベルリンの中央政府では、ブリュンニングが最後の智慧を絞つて内閣の改造をやり、少し左に過ぎる感ある内相ウルトを退かしめて、國防相グロエーナ將軍を内相にし、従つて警察事務の一切を一任した。軍隊の威力を以てS・Aの擡頭を壓へ付ける積りであつたらしい。所が大統領のヒンデンブルグ元帥は、ブリュンニングが身の程をも考へないで、無暗にヒットラーに挑戦する態度が、心配で堪らなかつたものと見える。既に「ハルツブルグの日」の直前たる八月十日にも、老大統領は國務祕書マイスナアを仲介者として、官邸でヒットラーと初めての會見をやつたのである。

その報道は可成りセンセーショナルに響いた。何しろ主人は現にドイツ最高の元首で、嘗ては軍最高總司令たりし元帥であり、客は歐洲大戰に單なる志願の一兵卒たりし者、今でもドイツ官界では無位無冠なるは愚か、素性を洗へば、ドイツにも埃太利にも國籍さへ持たない一介の風來坊なのである。然し大統領は彼を有名な「人民の人」として、尠くとも知己になつて置きたい積りであつたといふ。この會見に於て、ヒットラーは自分の運動が全然合法的のものであることを誓ひ、諄々として國民社會主義の精神を説いたので、熱心にこれを聴取した大統領は——「貴下の

精神は儼にもよく分る：そして大に共鳴する所がある」旨を答へた。然し最後に大統領は附言して言ふ―「然し、貴下は今少し憎惡及び不穩でない形式で、その運動を續けて下さる意思はないか？」ヒットラーは莞爾として應へした―「何しろ運動そのものが新しい上に、相手の反抗は死物狂ひであり、又世間は一般に誤解だらけになつてゐる際なので、萬更靜かに暫一つ立てないで、實行することは多少難かしいやうです」そして主客兩者は、元帥と一兵卒との間柄でありながら、「戦線同志」としての堅い握手を交して別れを告げた。あとで大統領は周囲の者に、自分の感想をかう述べたといふ―「ヒットラーの革命的な血管には、決して非國家的な血は流れてゐない：根本に於ては、儼の主張と大して違つてをらぬやうだ：だから一定の時が來れば、ヒットラーとその一味を組閣に参加させない譯には往くまい：今の所ぢや、まだ騒々しくつて、多少落着がなさ過ぎる：でも餘り永いことはあるまい、そのうちヒットラー自身が屹度、責任を引受けて立つやうになるだらう。」

ミュンヘンの本營「萬色館」から、チューリンゲンとブラウンシュヴァイクの兩國を、完全に掌中に収めたヒットラーは、その他の地方國家をも順次に蠶食するために、十一月には勢力をヘッセンの地方議會選舉に集中した。そこでは、前三〇年九月の選舉に比し、國民社會主義への投票

者は約二倍に増加したのである。この成績は先づドイツ全國を平均した標準を示すものの如く見えた。然し三二年の春になると大プロイセン國の選舉である。プロイセンは孤城落日の觀ありとはいへ、なほ社會民主黨のワイマア組織の最後の堅壘である。これを陥落させるのには餘程の努力が要る……といふのでベルリンでは、もうゴッペルスがその準備工作に大業となり、毎週一回づつ「スポーツ館」に數萬の聽衆を招いて、彼一流の宣傳演説をやつてゐる。大衆演説會と言へば、ついこの前までは、マルキシストだけの占有物だつたのに、今は反對に國民社會黨の獨占となつて了つた。同時にヒットラーも「鴛色館」を後に、近頃は大抵ベルリンの「ホテル・カイザアホーフ」に根城を構へ、そこを中心に、全黨へ命令を與へることとなつた。「カイザアホーフ」と言へば、ウィルヘルム街の内閣及び諸官省の鼻先にある。然もホテルの數室は黨の外務、經濟、軍務、教育等の事務に充てられ、まるで獨立した各省を作つてゐるやうに見えた。そこからヒットラーの私設外交使節は、すでにイギリス及びイタリアにまで派遣されてゐた。だからウィルヘルム街には今ブリュンニングの政府があると同時に、その隣りにヒットラーの私内閣が鎮座してゐる形となつて、世人はこれをカイザアホーフの「革命副政府」と異名した程だ。そこでヒットラーは事實上國家の元首若しくは宰相の如き權威を以て、會見を申込む外國新聞記者などを、煙に巻いたものである。

プロイセンの選舉以前に、國民社會黨の行事にとつて最も厄介な事件が起つた。それは三二年の春に、七年の就任期を了へたヒンデンブルグ大統領に對する再選舉の問題であつた。

私は敢て厄介な事件といふ。何故かと言ふと、ヒットラーはヒンデンブルグ元帥を國家の元勳として心から崇拜してゐたのであるから、同元帥が再立候補することには決して反對ぢやなかつた。彼の熱望するのは、ワイマア憲法に依つて樹立さるゝ政府そのものを叩き潰し、自ら絶對主義の宰相となつて、立法、司法、行政の三權を掌中に收めることに在るので、ヒンデンブルグの代りに、自分が國家最高の裝飾たる大統領になるのは無意味だつた。だから彼は、既に一九三一年十二月にゲーリングを使として、大統領の國務祕書マイスナーに、かういふ意思を傳達して置いた程だ――「國民社會黨は國家方針の變更に保障を得る場合は、ヒンデンブルグ大統領の再選舉に喜んで加擔する用意がある。」

所が一方、ヒンデンブルグの名前を、ブリュンニング内閣が獨占的に擔ぎ上げようとする形勢を見てとつたものだから、ヒットラーは急に旋頭を曲げ始めた。ブリュンニングに言はせると、目下國歩多難で、國民が詰らぬ感情を荒立て喧嘩し合ふべき秋ぢやないから、人民投票の選舉騒ぎは一切差控へ、國民上下一致してヒンデンブルグ大統領に再就任をお願いしようではないか……といふ表面極めて物の分つた理由に基き、態々ヒットラーに手紙を寄せて「それに就いて貴下の

御意見をもお伺ひしたいから、一度宰相官邸へ御足勞を煩はしたい」と會見を申込んで來た。

でヒットラフは宰相官邸に乘込んで來て、ブリュンニングに意見を開陳する。「ヒンデンブルグ大統領の再選には、私自身も異存がないが、我黨がそれを賛成する條件として、貴下は内閣を辭職して頂きたい」勿論ブリュンニングが、それを承諾する筈はなかつた。そこでその場は物分れとなつたが、後三二年一月十二日にヒットラフはキツパリと、宰相の申込を拒絶して了つたのである。その理由は、我黨は現政府が人民の意思を代表するものとは認めないから、そんな政府の提案に、國民一致の美名を冠せて、提灯持ちをしてやる譯には往かぬ。ヒンデンブルグを擁立しようとするなら、その前に國會の改選を行つて、貴政府が果して人民の意思を代表してゐるかどうかを省て見るがいだらう…といふのだ。結局ヒットラフの敵はヒンデンブルグではなくつて、徹頭徹尾ブリュンニングであつた譯である。

するとブリュンニングは大統領を訪問し、ヒットラフの意見では、自分がゐては閣下の御再任を支持することが出来ない由だから、この際自分は骸骨を乞うて職を退かうと思ふ、と誠に哀れつぽく出た。すると正直で素朴な老將軍は眼に涙を泛べ、自分の再選なんかどうでもいいから、貴下がそんなに仲へ遣入つて詰腹を切る必要はない、と眞蒼な宰相を慰撫した。

然るに、さうしてぐづ／＼してゐたのでは、敵がどんな難題を持ち掛けるか分らない、と心配

した中央黨初め政府與黨及び好意中立の社會民主黨の幹部連は、先づ自分達の名前でヒンデンブルグ擁立の宣言を行つて先手を打ち、若しヒットラーがこれに反對なら、ヒットラーは國民の慈父たるヒンデンブルグ元帥に弓を引くものだ、といふ惡宣傳をひろめることを計畫した。中にも「ナチス」に對し、もう惧み骨髓こつそに徹してゐる社會民主黨などは、先づ率先してヒンデンブルグ擁立の大々的宣傳に移つたのだ。「ヒットラーを撃滅せんと欲すれば、ヒンデンブルグに投票せよ！」といふ宣傳ビラは四方に配られる。それが一九二五年に「成金を喜ばせ貧民の餓死に興味を感ずるものは、ヒンデンブルグに投票せよ！」なるビラを、狂氣のやうに頒布した同一政黨の手に成るものだから愉快である。

兎に角、斯様な事情の下に、ヒットラーは自分が好むと否とに拘らず、ヒンデンブルグ元帥を相手に、大統領の立候補をしなければならぬ破目となつた。然しこの立候補は、必ずしもヒットラーが大統領の地位を獲得する目的ではないが、國民社會主義の全國的威力を、これに依つて測定するのには絶好の機會でもあつた。

で、ヒットラーは立候補した。彼はそれ迄まだドイツには國籍がなかつたのだ。それかと言つてオーストリアの國民とさへ認められてゐない。そこで政敵は彼を「オーストリアの逃亡兵」なりと惡態を吐いて、彼の人氣を墜おとさうとしたけれど、彼は自分の勢力範圍下に横はるブラウンシ

ユワイク國の官吏（同國よりプロイセンに派遣された使節）といふ形で、容易にこの問題を解決したのである。

三月十三日に於ける全國に亙る人民投票數は、政府與黨のヒンデンブルグ、國民社會黨のヒットラフ、獨逸國粹黨及び銅兜リュウケルヘルム團のヂュスタフ・ベルク、共產黨のテールマンの四候補者の間に分たれた。後二者の得票は殆ど問題とはならなかつたが、ヒンデンブルグは千八百萬票を得、ヒットラフは次位の千百萬票を収めた。千百萬票と言へば、一九三〇年の總選舉に較べて、約二倍の増加を示してゐる。

ヒンデンブルグは第一位を勝ち得たけれど、絶對過半數には達しない。さういふ場合には憲法の規定に従つて、第二回の決勝投票（比較的多數にても可）を行ふことになつてゐる。そこで政府の與黨と國民社會黨は再び東西に分れて、猛烈な宣傳戰に移つた。

恰もその時、ゴエッベルスは宰相ブリュンニングに立會演説を求めた。宰相はそんな厄介な奴に引懸つちや煩わづらいと思つてか、全然返事をも與へず、勝手にヒンデンブルグの故郷東プロイセンに出掛けていつて、「ナチス」攻撃の選舉應援演説をやり、然もそれをラヂオで全國に放送した。するとゴエッベルスは、その放送を蓄音器のレコードに収め、同時に「今夜の八時スポーツ・パラストに於て、ゴエッベルス博士と宰相ブリュンニングの立會演説が開催される……國民は舉つて、

この兩者の「舌端の決闘」に参加せよ」といふ廣告を出した。斯く書いてゐる筆者も、實はそれに付らされて、スポーツ・バラストへ押掛けて見た一人であつたが――正面の演壇にはゴエッベルスが獨り蓄音器を廻しながら、宰相の演説の一句毎に針を止め、「いや、それは大違ひだ……」とか、「そんな低脳な議論があるか？」とかの言葉を挟んで、レコードを完膚なき迄にやつ付け、最後にそれを叩き毀して、滿堂を撼がす大喝采を博した。詰らぬ挿話ではあるが、ゴエッベルスのお芝居の旨さなど想ひ出されて、今更の如く北叟笑まるゝ次第である。

で、四月十日の第二回決戦の結果、矢張り豫想の如く、ヒンデンブルグが勝利を収めて、大統領に再選した。國民社會主義者は千三百萬の投票を得、デモンストラチヴな成功を収めたことを收穫として、ヒットラーの所謂「戦ひは間斷なく續く……前進ツ」の標語の下に、次の活動に移つたのである。

ヒンデンブルグの居据りに依つて、ブリュンニング内閣は暫時小康を得たのだ。然し同時にこの勝に乗じて、彼は餘り圖に乗り過ぎた感がある。

といふのは、この内閣の暴力的方面の全權を握つてゐた國防相兼内相グロエーナー將軍は、ヒットラーのS・A(突撃隊)の中から、反逆罪を構成するに足る書類を押収したといふので、一舉に

して「ヒットラー黨に屬する武裝團體の解散及び禁止」の大統領令を出させようとし始めたのである。だがそれは自分の力を計らぬ野猪の勇に過ぎなかつた。何故かといふに、二三年前ならいざ知らず。この頃ではS・A（突撃隊）にS・S（親衛隊）を合せ、なほS・A豫備隊、モートル突撃隊、海軍突撃隊、騎兵突撃隊、自動車突撃隊、衛生班、指導者養成所、兵器廠隊等一切を加へると、驚く勿れヒットラー私軍は、もう五十萬人を越えてゐたのだ!! そのうちの大部分は失業者の青年を武裝させてあるのだから、うつかりこれを解散するなどと發表しようものなら、どんな暴動が起るか分らない。

グロエーナア將軍の意見に反對したのは、國防省のシュライヘア將軍であつた。彼はウィルヘルム街の内閣會議に列席し、今頃そんな無謀な律令を出したら、その禍が國防軍自身の統制に及ぶだらう。この際、或る程度までヒットラーと協力して、彼にS・Aの責任を持たすことにしては如何?と提議した。然るにグロエーナアはその提議を一蹴し、苟くも下級官吏が上官に對して、要らざる諫言^{かんげん}立た、といふ風な態度を示したのだから、シュライヘアは憤然として、出口の扉を叩き締めながら退席した。この將軍は生來底氣味の悪い陰謀家で、彼に睨まれて大臣の椅子を蹴り落された連中は、今迄にも澤山あつた。果せる哉、グロエーナア將軍は大統領からS・A禁止令の署名は貰つたけれど、國會に於てこれを説明する場合、國民社會黨の猛烈なる反對を受け、

その上ヘシュライへの陰謀が利いたものか、同僚中の支持をさへ得られなくなつて、國防大臣の地位を辭職せねばならぬ結果を來した。

同時に四月二十四日に舉行されたプロイセン議會の選舉は、案の定、國民社會黨側の大捷に歸した。マルキシズムの最後の要案は遂に陥落したのである。國民社會黨は一六二の議席を得、これに反して、社會民主黨は僅かに九四に減少して了つた。所がブラウン・シーヴエリッング内閣は表面上は總辭職して置きながら、新内閣の出現まで事務を執ると主張し、依然としてその椅子を離れようとしないのである。それからプロイセンに次いで、バイエルン及びヴュルツテンベルクにも選舉が行はれた。孰れもプロイセンと似たり寄つたりの結果なのだ。

かういふ工合に、どこを向いても八方塞がりになつて、活路を失つたブリュンニグは、大統領に絶對の全權委任を要求して謝られ、遂に五月三十日に惨めにも政權を投げ出して了つた。

III ヘア・フォン・バーベン

ブリュンニング内閣といふ、ワイマア憲法の最後を護るものが倒壊したのだから、さて次期内閣の編成難は大變だらうと心配された。ヒットラー黨を除く以外に、政黨で時局を拾収し得るものは一つもない。若しもヒットラーを考へないとすれば、たゞ大統領と國防軍隊の意嚮だけが、口を利く資格があるに過ぎない。

所がそんな心配は一つもなかつた。不思議にも、ブリュンニングが辭職した同じ日に、もう次期内閣の顔觸がチャンと決つてゐたのだ。例の暗中飛躍すきなシュライヘア將軍が、その膽立を綺麗に用意してあつたのだ。

で、新宰相として、政界の舞臺へ姿を現はしたのは、フランツ・フォン・バーベンといふ、殆ど世人の知らない人間である。世人は知らなくつても、その容貌風采を観察し、その経歴を調べてみると、ハ、ンと頷かれる一種の型の人間ではある。洒落れた槍騎兵士官上りで、競馬場の顔役で、米國が大戦に参加する迄は、ワシントン駐在の武官として多少後暗い諜報事務に携はり、それでゐて、實業方面では陶器會社の社長もやり、いくらか新聞の經營にも口を利く……會話を聞け

は、國際的にどこでも通用する程度の危氣のない國家理論家で、そのシルクハットの冠り方から判斷すれば、上品な「ヨーロッパの紳士」、宗教的には法王の御手に接吻する態度が不自然でなく、社交的にはベルリンの保守派に依つて護られる「家長俱樂部」の重立つた會員なのである。獨逸語で對手^{あて}を呼びかける敬稱の「Herr」といふ言葉は、この男にはしつくり當嵌るやうな氣がする。例へば「ヘア・ヒットラア」とか「ヘア・ゴエツベルス」と呼びかける發音には、何となくギョチない所があるが、「ヘア・フォン・パーベン」と呼ぶ時の「ヘア」は、彼の全貌を遺憾なく表現してをり、その「ヘア」が全く板についてゐる……。

ヘア・フォン・パーベンも亦ブリュンニングと同じく、中央黨所屬の代議士だといふ。たゞブリュンニングは黨の眞中、若しくはそれよりも少し左翼を代表してゐるのに、パーベンは全然保守の右翼を代表する相違があるといふので、時の中央黨總裁たりしカース師は、パーベンの身を矢鮮に自黨に結び付けようとした。然し大統領ヒンデンブルグは、この際黨人臭のある内閣は絶対に禁物ぢやと頑張つて、パーベンに向ひ、非黨人として純然たる超然内閣を組織せしめたのである。この内閣は勿論議會には頼らない。その代り、内閣が何か特別の政治を行はうとすれば、先づ大統領に相談し、そして大統領令の名に於てのみ、これを行ふのである。だから完全な獨裁内閣に至るまでの一步手前の内閣なのである。世にこれを「プレジチアル」内閣と呼んだ。

惟ふに、國家最高の飾り物たる大統領がこの時程、眞個ほんごとに國權を自分で掌握しやうあくした例は、前にも後にもなかつたであらう。然しそれでも、大統領自身が宰相として働くのぢやないから、「プレジデント」内閣ではない。内閣が大統領の意思を代行する意味に於て、矢張り「プレジデント」内閣には違ひない。大統領の意思を代行する實際の権力者は、宰相バーベンといふよりも、寧ろ自ら推薦して、國防大臣になり上つたシュライヘシュライヘ將軍であつたと見てもいい。それから内相には、大統領の郷里たる東プロイセンの舊名家の出身で、「啓蒙反動論者」の異名をとつたフライヘフライヘ・フォン・ガイルが推された。以上三名の有力な閣僚の顔觸から判斷しても、この内閣がビスマルクの昔から傳統を引いた、プロイセン式保守貴族の勢力と軍部の勢力とが、大統領の傘下に抱合したものだ、と判斷すべきであつた。

ヒットラーはこの内閣が、單に舊式の反動的勢力を糾合きうがふしながら、國民主義的舉國一致の看板をかけたのを見て、多少不愉快には思つたが、それでもワイマア憲法の亡者共に蠢動しんどうされるよりはまだ増した、と考へたものだから、單に「過渡期内閣」の意味で、これに好意の中立を約束した。然し孰れは國民社會主義が必ずこれに取つて代る時代の近づいたことを覺つたので、その用意として、議會に過半数を占めておく必要がある。そこでスーベン内閣に對し、(一)國會の即時解散、(二)S・A禁止令の撤回の條件を出したが、それがバーベンに依つて聽き容れられたので、

右に述べたやうに、好意的中立の態度を示してやつた譯だ。

で、パーベンも今ヒットラーに旋頭（まがむく）を曲げられたら、何にも出来ないことをよく知つてゐるので、約束通り、先づ三二年六月四日に國會を解散し、總選舉を七月三十一日に決定した。それまで約一月近くは、安心して仕事が出来る譯だ。それから六月の中頃に大統領の名で「政治的擾亂防止」の緊急令を出した。これは今迄に發布されてゐた七つの緊急令を一つの形に整理したもので、これに依つてS・Aの禁止は解け、更に共產黨を除く以外の他の一切の政團は制服の着用をも設けられることとなつた。で、ヒットラーの最少限度の條件だけは、先づ以て充たされた譯だ。

然しパーベン内閣は、決して無用有害の中繋（なまつ）ぎ内閣に過ぎなかつたとのみ酷評することは出来ない。その命の短かつた割合には相當の仕事もしてゐる。外交方面ではロカルノージュネーヴハーグと、ストレーゼマン時代から前後實に三十五回も國際會議を開いて引きすり引張つてゐた賠償問題を、最後にローザンヌ會議で片づけて了つたのなどは、ドイツの國威を發揚する上に、非常な功績であつたと見なければならぬ。それがために、ドイツを經濟的に縊（く）り殺す道具となつてゐたヤング案を、却つて返り討して殺して了つたのである。

それから内治方面でも、ヒットラーが常に不倶戴天の敵の如く考へてゐた社會民主黨の最後の要害たるブローイセン（従つてベルリン）に、斷然たる荒廢治の手入をしたのも、亦パーベン内閣

の手柄である。プロイセンは前にも言つたやうに、選挙の結果社会民主党が第一黨たるの地位を失つたにも拘らず、なほブラウン・シーヴエリングの政府が言を左右に託して、依然内閣の明渡しを背じなかつた。そこでバーベンは例の緊急令でプロイセンに戒嚴令を布き、自ら宰相でありながらプロイセンの統監を兼任し、腹心のブラハトなる者を統監代理兼プロイセン内相に任命して、今迄の社会民主黨中心の官吏を残らず追放して了つた。傲岸なシーヴエリングは大に憤つて、全國の勞働者に總罷工を傳へようとしたが、一方シュライヘアの國防軍が銃劍附で威嚇してゐるので、身邊の危害を慮^{おもは}かり、命からく^せブランデンブルグの田舎へ逃げ出した。例のゴエッペルスと喧嘩を仕續けて來た、警視副總監たるユダヤ人ワイスも生命保護の名目で逮捕された。斯くして、在來の官衙^{くわんが}は悉く國防軍の占領する所となり、中央政府に對するサポーター・ジュを行つてゐた役人は上は大臣から、次官、局長、地方知事、警察官に至るまで、洗ひ浚^{よぐ}ひに放逐し、反抗するものは、監獄へ叩き込んで了つたのである。

*

*

*

さて七月の末になつて、愈々約束通りのドイツ全國の總選挙が來た！。

この選挙の特色は、今まで普通の總選挙の如く、政府の與黨と反對黨に分れて互に鎬^{いかり}を削るやうな戦ひではなくつて、政府は全く無關係の存在であつた點だ（尤も獨逸國粹黨が、いくらか政府

の與黨らしい態度を示しはしたが、數の上から見て言ふに足りない。だから政府筋の者は、誰一人選舉の遊説に出る必要はなかつた譯で、たゞ人民側の方が、政府なんて考へは全く離れて勝手にヒットラアを支持するか、それとも排ヒットラア黨に投票するか二つに分れただけである。

で、國民社會黨側では、ヒットラアと宣傳部長ゴッペルスとが、駒の頭をならべて、選舉場裡へ突進したのは勿論であるが、この度は特に例のグレゴル・シュトラッサアが、重要な宣傳の責任を引受けたのが異彩を放つた。シュトラッサアは黨内の持餘し者だつたに違ひない。然しヒットラアは随分酷い奴でも、辛苦を共に嘗めた舊黨員であるかぎり、見殺しにして突放すことけ出来ない質^{たち}なのだ。後のローム事件の如きも、早くからその悪い芽を芟除^{せんじょ}することをしないで、荏苒^{じんぜん}日を延ばしてゐたものだから、遂に痛ましい悲劇に終つたなども、そのいゝ例だ。古い黨員をなるべく庇^{かば}つて、よく／＼のことがなければ決して見捨てない―それはヒットラアの弱點でもあるし、同時に彼が大きな「親分」としての資格を、遺憾なく物語るものでもある。

兎に角、シュトラッサアは今迄「親分」の命令に背いて随分横紙破りをやつたに拘らず、ヒットラアは、なほ依然として彼の才幹を買ひ、黨の組織部長に擧げた上、七月末の選舉戰、及びその後の十一月六日の選舉戰には、堂々と前線に立てて戦はせたのである。私は然しシュトラッサアを表面に立てたことは―ヒットラアの人情味には敬服させられるが―大體の結果から見て、大失

敗だつたと思ふ。後にも説明するやうに、七月末日の選挙の結果は、ヒットラー自身は大變な成功のやうに言つてゐるけれど、實は黨が合理的に豫期したほどの成績ぢやないのだ。十一月六日の選挙に至つては、一種の惨敗と見てもいい。勿論、その責任をシュトラッサアの一身に持つて行くのは苛酷であるかも知れないが、一體シュトラッサアは癖の多い、狂人のやうな奇矯人^{オウロキョウジン}なのだ。その點では同じ奇矯人でも、ゴッペル^{ゴッペル}の方には愛嬌があつて、大衆に場當りの宣傳をやらせるには、稀有^{ヒョウ}の天才である。だがシュトラッサアの奇矯に至つては、反對に相手を怒らせるばかりで、折角、國民社會主義に傾いた民衆の心理を、打毀^{うちこは}して行くやうな行動が多かつた。

黨の方針が今は議會主義に則り、然も、前後の事情から判斷して、一人でも餘計にブルジョアの階級から投票者を、多く得ようと努力しなければならぬ選挙戦であるから、戦術上から考へても、シュトラッサアたるもの、今少し圓滿な態度を執らねばならなかつたやうに思ふ。所が、彼は自己一流の理論から割出して、獨逸の戦ひは資本階級の殲滅^{せんめつ}あるのみ……ヒットラーが政權を執れば、少しでも資本を有する者は、首が無いと覺悟しなければならぬ……眞のゲルマニズムは土地及び生産手段の即時公有に在り……大體議會制度が何だ、第一選挙行爲^{ぎやうゐ}ぐらゐ怪しからぬものはない……などと選挙間際になつて無茶を言ふものだから、それぢや下手な共產黨の左翼小兒病患者よりも、ずつと結果が悪い。折角集會に集まつて來た選挙民でも、これを聽くと、色を蒼くして

尻込し始めたものだ。従つてバイエルン國の如きは、シュトラッサアのラチオ演説は國內で放送を禁止して了つた。

で、愈々七月三十一日に選舉が終つて見ると、國民社會黨は百七名が増加して二百三十名となつた。その増加は中央黨以外のブルジョア階級から新たに獲得したものと見てもいい。所が議會制度の上から見て、共產黨と社會民主黨とに配分されたマルキシストの投票總數は、國民社會黨のそれよりも少し少かつたとは言へ、在來に較べて非常な減少とは言へないのだ。

この結果を見て、シュトラッサア一派は、これはヒットラーが國民革命の本流を捨てて、合法的選舉戰のみに依らうとする態度が不可いなのだ、と宣傳し始めた。又 S・A 幹部の中にも、例へばロエーム大尉の如きは、我々は折角の「武力」を擁してをりながら、何故に「投票用紙の革命」を大切にらねばならぬか、と部下を焚き付けるやうな態度に出た。そこでヒットラーも、黨の大勢を察し始めて、バーベン内閣に好意の中立を保つ態度を捨てることとしたのである。黨の機關紙「フエルキツシア・ベオバハタア」は社説に於て——「我黨は最早、現政府を庇護する何等の理由をも持たなくなつたので、これからは自由に我等獨自の途を進むばかりだ——といふ凄惨な文句を發表した。世間では七月末日の選舉の結果、百七十名が二百三十名になつたのだから、驚異的な成功のやうに考へ、殊に外國新聞記者などは避てふために、「ヒットラーの大勝利」など

と盛んに電報を打つたやうだが、私は寧ろ、それは豫期以下の不成功だつたと見てゐる。不成功でなければ、何故その時 S・A がそんなに不平を言ふやうになり、従つてヒットラーもパーベン内閣を離れるやうな宣言をしなければならなかつたか？…その意味が分らぬからである。

さて S・A は選挙戦だけぢや、直ぐ天下がとれぬことが分つたので、不平の輩は方々で武器弄りを始めた。故意に警官と衝突したり、或は夜間に共產黨員の巢窟を襲つて、拳銃の撃合をするやうな棒事は頻々として起つた。S・A がロニームの下に、大規模に武装してベルリンに進軍し、暴力を以て現政府を轉覆する陰謀を計畫してゐるなどの風評も擴まつた。

パーベン内閣も、この形勢を見て遽で出したのである。勿論ヒットラーとの約束があつたので、S・A の結社禁止は解き、又その鳶色の制服着用は許可したものの、これが堂々と武装して、ベルリンに遣入つて来るなどと言ふことは、「擾亂防止の緊急令」に違反することとなるので、今迄ヒットラーの御機嫌ばかり伺つてゐたものが、その頃から急に、國民社會主義に敵對行爲を執るやうになつた。その張本人は國防相シュライヘである。彼は若し S・A が叛亂を起すやうなことがあつたら、國防正規軍は直ちにこれに應戦して、用捨なく叩き潰すべし、といふ祕密の命令を與へてあつた。ヒットラー及びその幕僚は、その形勢を察知したのだから、パーベン内閣に反抗することはいゝ…然しその反抗は、飽く迄も合理的であらねばならぬことを決議し、同時に、

各「州指導者」をして、その地方々々のS・Aを慰撫せしめ、この際素りに武器を執つて事を起すやうなことがあつては、國防軍と激戦を交へなければならぬだらう、若しもその戦争に負けて了へば、國民社會主義の九分九厘までの成功を、一遍に覆へすことになるから、決して指導者の命令のないのに短氣なことはしないやうにと、怒々説伏したのである。

S・A參謀長のロエームは不思議に思つた。彼は國防軍中にもいろいろ親しい友達がゐるので、假令S・Aが事を起しても、國防軍は喜んで應援こそすれ、S・Aを邀へ撃つなどとは、夢にも想像してゐなかつたのだ。そこでロエームは祕かに國防省を訪れ、國防軍は鉤十字軍隊の駐屯地に發砲するやうな考へを持つてゐるかと思つて見た。すると、國防省の代表者は「勿論シュライヘアの毒が廻つてゐるので――斷然これに答へて言ふ。」「それは當然だ……駐屯地ばかりぢやない、隊伍を調へて國都ベルリンの中央へ遣入つて來たら、假令武裝はしてなくても撃ち捲くる積りだ――」

それを傳へ聞いて、S・Aの血氣旺んな連中は切齒して憤慨した――「宜しい……それぢや一つ喧嘩の相手にならう……今まで國防軍は我等の國民的高揚の大業に對する無二の友と考へてゐたのだ……それなのに、今我々に向つて鐵砲を撃ち掛けようといふのは、國防軍の組織がゲスラアやグロエーナアの如き民主的非國民の擴めた毒素に感染してゐる證據だから、宜しい、この際大に一戰

を交へよう」

で、誰の命令に従つたものか知らぬが、ベルリン北部のマルクの國道には、もう朝霧を衝いて數十臺のトラクタが、機關銃を擔ぎ、又銃剣を閃めかしたS・Aの物々しき武装隊を滿載し、ガソリンの詰替を終つて、凄い爆音を立ててゐる。これは大變だ……愈々ヒットラーが本當に進撃命令を傳へたのかも知れない……と半信半疑になつてベルリン郡指導官のヘルドルフ伯は、飛行機に乗つてミュンヘンの本部へ飛んで往つた。然るにヒットラーは、一向そんな無茶な司令を出した覚えはない……この際、そんな一揆類似の行爲は、黨としては絶対に禁止だ……との答へである。

一揆組は、ヒットラーの譴責を受けて拳の遣り場所に困つた。そこで多少不満々な顔で「ぢや宜しい、絶対に不可いとあらば、今少し我慢はする……然しS・Aが、こんなに侮辱を受けて引込んだとあつては、若い者の蟲が収まるまいから、若しヒットラーが合法的に天下を取つた場合は、僅か三日の間一切の警察及び國防軍の警戒を禁止して、我々が黒表に載せてある共產黨員を叩き殺さうが、ユダヤ人を縛り上げようが勝手にさして下さい」と願ひ出た。それに對しヒットラーは、所謂この「三日計畫」を次のやうな形式で許可した。「若しも自分が政權を獲得したなら、十萬人のS・Aに歩武肅々の模範的な隊伍で、ブランデンブルグの凱旋門を行進させる……だがその行進が済んだら、再び秩序整然としてベルリンを退去しなければならぬ」

一四、「力」を缺いた獨裁

一方バーベン内閣は、そのうちヒットラーの穏和な態度を、いくらか甘く見過ぎたやうだ。だからあれ程ヒットラーには、ワイマア憲法組織に致命傷を與へるといふ約束をしておきながら、依然として、同憲法を頼りにするやうな傾きを見せる。

例へば、八月十一日の憲法記念日に於て、内相ガウルはかういふ演説をした――「ワイマア憲法の條文の解釋は、各人の見解の如何に依つて多少異なる所があるかも知れぬが、同憲法そのものの存在は、ドイツの國家を肯定する國民にとつては、そのとりくみの世界觀的、政治的見解の基礎となるものである……國民社會主義の思想を懐くものも亦、この點では結局異存がない所だらうと思ふ。」

理論の上でヒットラーを甘く見てゐたばかりでなく、バーベンは又政略の取引如何に依つて、ヒットラーを旨く抱き込むことが出来る、と樂天的に考へてゐたやうだ。この憲法祭があつた二日後に内閣會議を開き、この際ヒットラーを、内閣の閣僚（メンバー）に加へようではないかと相談を一決した。この提案をした人物は、國防相シュライヘーである。彼はヒットラーを内閣の閣員に加へて、彼

の名譽心を満足させ、同時に一方不平のS・Aを國防軍に結び付けて、結局自分がS・Aをヒットラーの手から奪ひ取つてやらうといふ、腹黒い算段をしてゐたやうだ。

八月十三日の朝、招待に應じてヒットラーは、S・A參謀長のロエムを伴ひ、宰相パーベンをその官邸に訪問した。パーベンは莞爾として、採手しながらヒットラーに向ひ、この際、貴下も決心して、一つ内閣入りをして見ては如何ですと勸めて見た。ヒットラーはそれに對し、無造作に、いやこの次の組閣の場合には、私も必ず黨を率ゐて出馬する用意があると答へたのだ。するとパーベンは隙さす―「いや、この次の内閣を待つ迄もなく、現内閣に遣入られた方がいゝでせう」とと鎌をかけた。ヒットラー―「私に宰相になつて現内閣を改組しろとの御提案なら、お引請しても宜しい―」

パーベンの當は外れた。彼自身宰相の地位を去る位なら、こんな提案はしなかつた筈だ。それにヒットラーの望みは、彼の豫期以上に少し高過ぎるやうである。然しもう乗りかゝつた船だから、少しばかり讓歩して言ふ―「ぢや宰相職を正副の二つ拵へませう。貴下には副宰相になつて頂く。……なアに權限は正でも副でも同等だ。……例へば、古の羅馬帝國には第一、第二等の執政があつた。……或はそのうち貴下に、その第一執政をお願いすることがあるかも知れない―」

ヒットラーは斷然それを斷つた。自分を臨時政府の副宰相にするといふのは、物には順序があ

つて、先づ初めは大臣學から勉強して、漸次本當の政治家になれといふ、身分や出身を重んずる保守派育ちの紳士バーベンの謎かも知れぬが、そんな官僚主義な内閣を考へてゐては、なる程自分は一介の野人だから課長にも局長にもなる資格はないだらう……それでも自分は立派な人民の指導者だ……傳統の蜘蛛の巣だらけな古いブロイセンのお役所なんか叩き毀して、全然何等の羈絆拘束のない新しい國民國家を指揮するのが自分の使命である……

ヒットラーの態度が、意外に頑固なのに驚いたバーベンは、客を送り出した足で、そのまゝ大統領の許に飛んで往つて、右の趣を報告した。老ヒンデンブルグは暫く思案の揚句、それでは自分が直接ヒットラーに會つて、彼の意中をもつとよく、確めて見ようといふことになつた。

それはヒットラーが大統領ヒンデンブルグと會見した第二回目なのである。その際ヒットラー及びその幕僚は、黨の制服で老大統領の前に起立し、別に椅子に腰を掛けようとしなかつた。長談議をしても駄目だといふことが、初めから分つてゐるからである。そして老大統領の質問に應じて、現内閣に對する國民社會黨の反對しなければならぬ理由をば開陳し、最後に、それでは全然バーベンを助けて内閣入りをする決心はないかと確かめられた時、残念ながらそんな意思は毛頭ありませぬ、とキツパリ斷つたのである。

大統領はその國務秘書マイスナアから「ヒットラーは、閣下御自身にお勧めになれば、十中八

九心を動かしましてう」と聞かされてゐたので、今眼の前のヒットラーの態度の案外手剛いのに、少し驚いたやうである。そこで靜かに訊いて見た―「それでは貴下は、どれだけの範圍の政權を希望なさるか?」「全權なのです」といふのがヒットラーの答へだ。全權とは一體何の意味か?獨裁の積りか?その邊が判然しないけれど、主人はそれ以上を訊かうともせず、又客人もそれに對し、明確な説明を與へようともしない。兩名の間に暫く沈黙が続いた。それから老大統領は軽い吐息と共に、別れの手を差伸べて言ふ―「お互ひにもとの戦友として、僕は貴下と握手してゐるのですぞー」

ヒットラーは大統領との會見が終ると、そのまゝバイエルンの田舎ヘアヒテスガーデンの山莊に隠れて、暫く俗世間から身を退いた。S・Aも十四日間の休暇を得て、その間皆な窮屈な鳶色の制服を脱いだ。たゞゴッペルスだけが、ベルリンに頑張つて、機關紙「アングリッフ」に「倒閣近きに在り:暴風の前の靜けさだ」といふやうな豫言めいた凄惨な文句を、書き續けてゐたのである。

その豫言は、かう言ふ形で中り始めるやうに見えた。

八月二十二日、ボイテンの特別裁判所が、殺人罪で起訴中であつた上シュレジェンのS・A五名

に對して、死刑の宣告を下した時、今まで氣味悪く沈黙を守つてゐたヒットラーは、まるで怒髪天を衝くやうな政府威嚇の電報を、被告達に送つたのである。「同志よ……この奇怪千萬な血腥い宣告の報を得て、予はどうあつても、諸君を見殺しにはさせない決心をしてゐる……諸君を青天白日の身にするのは、我等の名譽にかけても斷行してみせるから安心しろ……こんな不埒なことをさせた現政府を叩き潰すのは、今我等の焦眉の義務だ……」との電文である。さすがに宰相バーベンも、裁判所から廻されたこの報告を見て驚愕した。然し宰相も亦、恐怖と共に相當に腹が立つたと見えて、傍らのシュライヘーを顧みつゝ「こんな鹽梅ぢや、もうヒットラーを閣僚に加へる計畫なんか斷然止した……」と聲を荒らげたといふ。

八月三十日になつて、改選後の國會が初めて蓋を明けた。議席の上から見て第一黨である理由からして、議長には國民社會黨の大立物ゲーリングが擧げられた。彼はその底光りのする眼で政府委員席をジロリと睨みつけながら、しかし口元だけには皮肉な笑を湛へて、正面の議長席にどつかとその巨軀を卸した。なアに黨首に御足勞をかけるまでもない、これから俺が一つバーベン輩の細頸を撓つてやらう……とでも言ひさうな面構へである。

成程バーベン自身はいざといふ場合、頼りにする何等の「力」をも持つてゐなかつた。内閣には國防軍及び獨逸國粹黨の支持があるとは言ふものの、獨逸國粹黨は單獨では大した勢力ぢやな

いから、やゝもすれば、寧ろヒットラーに秋波を送り兼ねまじき傾向さへあり、その上該黨はフリーデンベルクの私有政黨みたいなものだから、自分が頗で指圖する譯には往かぬ。國防軍は？ 成程「力」の問題とすれば國防軍は強い。だがこれも、腹の底は何を企んでゐるか分らぬシュライヘーの物だ。シュライヘーに秋風を吹かれたら、いくら強くつても何の頼りにもなりはしない。そこで不圖妙案が泛んだのは「鋼兜團」のことである。「鋼兜團」の親方のゼルテは、今頻りに政權に有りつきたがつてゐる：彼奴を抱き込んで「鋼兜團」の堂々たる威力を自分の番犬代りとするれば、如何にヒットラーと雖も、自分をさう馬鹿にすることは出来まい…。

そこで彼は早速ゼルテ宛に手紙をやつて、鋼兜團は今「戦線兵士記念日」を舉行したいさうだが、そんならベルリンの真中のテンベルホーフ廣場で催したらどうだ？…その際は不肖小生も極力お手傳ひしよう、と申入れたのである。ゼルテは早速これに應諾した。聽て規律整然たる舊戦線兵士の大群が、鋼兜團特有の緑色の制服に身を固め、續々ベルリンに遣入つて來た。テンベルホーフに於けるその分列式には、バーベンもゼルテと一緒に肩を並べて堂々と閱兵した。この有様を見て憤慨したゴエッベルスは、その日「アングリッフ」紙に筆を執つて、「バーベン不眠症に罹り、遂に金を出して十五萬の夜警團を雇つた！」と、警鐘を打つやうな攻撃社説を掲載したが、然し考へてみるに、鋼兜團と雖も元來バーベンの造つたものではなく、全然他所からの借物

であるから、パーベンがそんなお芝居だけで安心してゐたとすれば、多少お目出たい話である。だがそれだけ又、當時のパーベンの苦衷も察しられない譯ぢやない。

さて一方さういふ喜劇を他所に見て、國會の方では、九月十二日宰相パーベンが初めて政府の施政方針を發表することになつた。その前に國會議長のゴーリングは大統領に對し、「この際内閣を根本的に改組されては如何……不肖自分の考へでは、パーベンの經濟施設は人民の意思に反するものなる故、この際ヒットラー氏を中心とし、中央黨を加へた新内閣を作らせるなら、屹度危機を切抜ける可能性がある」といふ意味を傳へてあつた。この報に據つて、世間には國民社會黨が議會政黨としての中央黨と提携する意思があつたかのやうに言ひふらす人もあるが、私は決してさう思はない。單にそれは議會主義的な一片の職術だつたのだ。ゴーリングは自分がそんな提案を大統領に出した所で、勿論おいそれと受入れられる筈はないことは、百も承知してゐたが、尠くともそれに依つて、當時パーベンの「課稅權國債による二十億馬克の融通」といふ經濟方針に、中央黨の選舉區が非常に反對してゐる事情を察知し、従つて政府不信任案が出た場合は、中央黨をもそれに引きすり込んでやらう、といふ魂膽からして、以上のやうな一種の「廣告」をした譯だと思ふ。

會議がはじまると、國民社會黨に先を越されまいと焦つた共產黨が、劈頭第一にパーベン内閣

の不信任案を提出した。不信任案なら誰が出してもいい形勢なのだ。殆どこれに反対する者がない。バーベン支持の筈の獨逸國粹黨さへ、正面からは政府の辯護を避けて、大勢已むを得ないから國會は解散した方がいゝと唱へ出したくらゐだ。で愈々不信任の可否を票決する前に、議長は一應會議の休憩を宣したのである。

で、會議が再び開かれた時、政府席には人影が見えない。宰相は獨逸國粹黨の示唆に依り、大急ぎで大統領からの國會解散の大統領令を取寄せたのである。實は東普ノイデックの別荘にゐるヒンデンブルグから、その署名ある全權委任狀が來てゐた筈だが、遑てふためにバーベンは、生憎それを衣囊ボケイトに入れて來なかつたものだから、又官邸へ引返して秘書を叱るやら机の抽斗ひきだしをまぜ返すやら、大騒ぎの眞最中だといふ……。

ゴエーリングはそんな事には知らん顔で、所期の通り、「内閣不信任可否の投票を集め始めた。そこへバーベンは汗をかきながら飛んで來て、「赤い折革靴」から書類を取出し、そして議長に緊急の發言を求めた。だが議長は差出された書類を黙つて受取りはしたものの、それには一瞥も呉れないで、机の横の方へ押しやり「只今票決事務の進行中ですから、發言は誰にも許しませんツ」と嗷鳴りつけた。そこで振鈴が鳴る。投票結果の發表だ——「現内閣に對する不信任案は、反對三十一に對する賛成五百十三票の絶對多數を以て、こゝに通過と認めます——」それからゴエ

ーリングは机の横に放つてあつた書類を取上げ、「此處に只今不信任の結果倒壊した筈の一政府代表者が署名した『國會を解散す』といふ書面があります、これはもう手續の上から見て、本國會の採擇すべき筋合のものでないので、當然無効と認める！」と叫んで、そのまゝ會を閉ぢて了つた。

そこまで痛み付けられては、バーベンと雖ももう破れかぶれである。彼は早速宰相官邸からラヂオを利用し全國に向つて、自分が只今國會を解散したのは合法的な事實である：國會は横暴にも、これを聽かうとしないけれど、國會の態度こそ實は法律的に效力がない：何故なら自分は、大統領から白紙の全權委任狀を貰つてゐるからである：従つて自分が今、ラヂオで放送してゐる言々句々は、獨逸國家の法律として即時有效なものだと心得なければならぬ：で國會は解散され、十一月六日を期して總選舉に移る：と電波に依る國令發布の意思表示をした。

懷へば總てがグロテスク極まる姿である。議會制度を絶対に否定するヒットラー黨が、國會規約の字句を盾にとつて譲らず、反對に議會制度のワイマア憲法を國權の基礎と宣言する筈の政府が、この際國會なんか問題ぢやないから、國民は自分の獨裁に従へと見榮を切るのだ。然もそれがまだブリュンニング内閣の當時であつたと假定すれば、さういふ除外例的な横紙破りも戰術としては、首肯できる節もあつたらう。然し時代はもう遅すぎる！ それにも拘らず宰相が獨裁を

宣言する積りなら、その横紙破りの決心を正當化するだけの「力」が必要なのだ。彼にはそれが無い。無い證據は既に國會での投票の九分九厘までが、敵に廻つてゐるといふ事實だけでもよく分る。それぢや國會が全然人民の意思を代表せぬものと假定し、従つて選舉さへやれば宰相を支持してくれる政黨の數でも殖えるかといふに、元來が超然內閣のこととて、本當の意味に於ける與黨的政黨なるものは一つも存在しないのだ。選舉をやれば、問題はたゞヒットラー黨と排ヒットラー黨とが、數字の上で争ふだけであつて、その双方の孰れが勝つにしても、すべてパーベンの敵なのだ。結局パーベ內閣はもう實際倒壊してゐるのだから、直ぐ葬式しなければならぬにも拘らず、十一月六日の選舉期日まで、死屍にナフタリンをかけて、恥を公衆に曝してゐるといふ状態であつたに過ぎない。

で、總選舉の結果、ヒットラーの國民社會黨は、今迄の二百三十から百九十八に減つて了つた。世人はこれを評して、ヒットラー運動の大慘敗とした。が私に言はせると、成程成功ぢやないとしても、決して「大慘敗」ぢやない。元來、ヒットラー黨の大成功は十二の數が百〇七となつた時だけであつて、その時以來ヒットラーは、合法的議會制度を利用してゐるのだから、自ら野黨に止まる限り、そして社會民主黨、共產黨、その他のブルジョア諸政黨が、なほ公然存在を許されてゐる限り、技術上から見て限定された定數を、それ以上矢鱈に殖し得られる筋のものぢやない。

で、議席の数が二百三十であらうが、百九十八であらうが、この際ヒットラーが「否^{ナイ}」と一言いへば、もうバーベンは黙つて引込まねばならぬ形勢になつてゐただけは、動かせぬ事實だ。そしてヒットラーは、この「否^{ナイ}」を然も大聲で囁鳴つたのである。即ち、選挙の済んだ直ぐ後で、彼は「全線に互る總攻撃」の命令を、かういふ形で與へた。「今や我々は、黨の歴史始まつて以來の困難な戦ひに直面してゐる……ドイツ國民の運動と權利とを擁護する最初の總攻撃は、遺憾ながら挫折^{すつ}した……今回の選挙に依り、我々は愈々以て、假借^{かりそへ}なき最後の擧^{あつ}殺^{ころ}を敢行するより外に途なきを覺^さつた……情をかけてフーゲンベルクリバーベンの反^{レフ}動^{クツ}を見説^みしてゐた爲めに、看よ、獨逸國會には、今共產の醜奴^{しうど}が初めて百名を超えるといふ、不仕鱗^{ふしりん}至極の状態となつたではないか……こんな怪しからぬ政府は、これを支持する政黨もろとも根こそぎに撃^ぶち倒してさへ……それが済むまで、一切の商議は我々は全然聽く耳を持たぬ！」

この宣言と共に、事實^{じつ}二進^{にん}とも動けなくなつたバーベン宰相は、絶望の辭表を大統領に提出した。シュライヘ^ス以下の閣僚亦これに従ひ、結局バーベン内閣は十一月十七日を以て、形骸^{けいがい}共に倒境して了つた。

一五、「忍び寄る危機」

それから次期内閣の構成に至るまでのドイツは、十四日の間、組閣難の陣痛に悶えた。

今度こそ、當然ヒットラーの出馬ではなからうか？　だが、ヒットラーは國民社會黨を率ゐて全權を要求してゐる。ヒットラーが個人として獨裁宰相の地位に就くのは許せるとしても、さうなれば、結局「國民社會黨の獨裁」が成立するだらう。大統領はこの際、黨人を排して、政黨に超然たる「プレジヂアル」内閣に全權を與へる積りでゐる。だからこの際、ヒットラーが黨を離れ、個人として組閣の本命に應ずるかどうか？

ヒンデンブルグは三度ヒットラーを自邸に呼びつけた。老元帥はヒットラーに向つて——「貴下に今、中央黨及び獨逸國粹黨と妥協し議會に多數を占めるやうな聯合内閣の組織を、お願ひしたいと思ふがどうだらう……一政黨だけに國權を全部委任することは、現今の狀態ではまだ少し早過ぎる氣味があるので、僕は大統領たるの責任に鑑みても許容し兼ねる次第だが……」とこの意思を傳へて彼の再考を促し、そしてヒットラーが黙つて引退らうとする手をしかと握つてかう附添へた——「貴下がこの提案をお受けして下さるか否かは、すべて神様の御決定に待つこととしよう……」

く往かなくつても仕方がない……ちやがその場合でも、今日以後、僕の扉は貴下のために何時でも開かれてゐるものと考へてゐて下さい！」

それからヒットラーは「カイザーホーフ」に閉ぢ籠り、幕僚と鳩首合議の結果……残念ながら、それでは黨に對する面目が立たぬから、御下命はこれの際お謝りする旨を書面に認め、使者を立てて大統領に送達した。數日を経て、中央黨首カース師も亦同様に謝絶の通牒を發した。それで憲法原理に則るヒットラー内閣説は、立消えとなつた譯だ……。

待つてましたとばかり、そこへシュライヘー將軍が飛び出したのである。然しこの野心滿々たる黒幕の軍人は、その時單に散々な味噌をつけたパーベンの替玉になることを欲せず、又次にヒットラーが出るまでの、中幕を勤めるのも嫌だつたやうである。彼は全然ヒットラーの仇役を引受けたかつたのだ。否、ヒットラーの役割を全部自分が演じたかつたのだ。彼は軍閥、政客、實業家の間に、兼々から祕密の蜘蛛網みたいな聯絡をつけて、「國民社會主義」を悉皆自分で乗取る算段をしてゐたもののやうである。彼が嘗て近親の者に、そつと耳打ちした標語は、「ヒットラーなき國民社會主義」であつたと噂される。

この鵠のやうに神祕な將軍が、今大統領から印綬を帯びて内閣を作りはしたものの、その閣僚は如何せんパーベン内閣時代からの受續以外に、大した人物を聚めることは出来なかつた。假令

聚め得たにしても、モザイクの櫛ぎはぎみたいなものだ。所が本人は大眞面目で、自分は一個の主義主張に基く信念から、この内閣を生きものにして見せるといふ大抱負を披瀝した。如何なる主義主張かと訊けば、我が内閣は國民主義に基くとはいへ、「勞働者及び兵卒の内閣」であつて、結局「社會主義」を實行するものと答へる。そこで國防軍の將軍が組織する政府だから、嚙かし保守的な頑固一點張りの政治を行ふだらうと考へてゐた世人は吃驚して、それぢや、まるで左翼の内閣ぢやないか：國民主義に則りながら過激な社會主義を實行するといふなら、まるでシュトラッサアの議論に劈刺たるものがあるぢやないか：と、みんな口あんぐりの體たらくである。所がシュライヘアは、實際シュトラッサアとも内々の聯絡をつけてゐたのである。彼は國民社會主義をヒットラーの手から奪ひ取るために、シュトラッサアを手なづけ、それに依つて、國民社會黨を攪亂してやらうと、目論見てゐたのである。だから彼は先づ、シュトラッサアの意見を用ひて、債務の社會化、勤勞階級の國家的救済、勞働奉仕義勇軍の編成等を計畫し實行することにしてゐた。

これ等の發案は、すべてヒットラー自身が天下を取つた曉には、必ず發表しようとして、虎の子のやうに藏つてあつた計畫なのだ。それが今ドシ／＼得體も知れぬシュライヘアとかいふ人間の手にかゝつて、下手に歪曲されようとしてゐる……これには必ず國民社會黨の幹部の中に、シュライヘ

アへ裏切つてゐる奴があるに違ひないと内々調査してゐると、果せるかな、それがシュトラッサなることが判明した。そこでさすがのヒットラーも今度は本當に腹を立てて、遂に涙を揮つて馬稷^{ばしよく}を切るの態度に出で、本人に向つてその處決を促したのである。シュトラッサ自身も亦、最早や國民社會黨に留まる理由なきを覺つたものか、進んで組織部長の地位を辭すると共に、更に退黨届けを出して、永遠にヒットラーとは分れて了つた。その後一九三四年六月の末に、シュライヘアとシュトラッサとは、孰れもS・Sの手に暗殺されたのであるが、それ迄この妙なコンビの兩名は、依然として裏座敷的密れ縁の關係を繼續してゐたといふ。

で、シュライヘアは當時政治的、社會的、經濟的に縫れ合つた危機の眞中で、超然としてガラス張りの温室に遁入つたやうな寡團氣を造らうと努力した。然し彼の造り得たものは、彼の名の示す如き「忍び寄る危機」のみであつた。一體「シュライヘア」(即ち忍び寄る男)といふ彼の姓名の發音からして、何となく薄氣味悪く胡散臭い氣がするので、當時の人々が世智辛くなり行く世相を、誰言ふとなく「忍び寄る危機」と評し合つたのは寔に穿つた表現だ。それでもこの夢みる如き奇怪な男は、いろんな空想の中から「獨逸青年救濟事業」なるものを、本當に實行したから感心だ。これは後にヒットラーの世となつて、そのまゝ有名な「義勇勞働奉仕」の施設に繼承せられたものである。それからシュライヘアの時代に、軍隊的スポーツが非常に奨励され、そして

それも亦、その儘國民社會主義の事業として受繼がれてゐる。だから彼とても、萬更何一つ功績を残さなかつた譯ぢやない。然し不安と渾沌の真中に漂ふ社會の全體から見ると、そんな些細な功績は、大海の一粟にも等しく、例へば失業者の如きは、その數實に六百萬を超え、それを救済する施設のために、國家の財政は殆ど破綻に瀕する有様で、要するに國民經濟的にも財政的にも、殆どその年の聖誕節が越せると考へた人はなかつたやうである。

だが本當の行詰りは、翌一九三三年の一月に來た。國會が開かれさうになつたからである。今迄ヒットラーは黙つてこれを見てゐたが、愈々國會が開かれると、その儘知らぬ顔をして引込んでゐる筈がない。そして一方、シュライハ自身は、その老大な議會の敵を眼前に据ゑて、理窟で切抜けられる程の演説は出來ないのだ。それぢや國防軍は？ 國防軍はもうシュライハの鵜飼のやうな權謀術數に愛想を盡かしたと見えて、今はもつと頼りになる大木、即ち大統領ヒンデンブルグ元帥を捉へてゐる。

斯くして内閣製造の鍊金術師シュライハは、まだ組閣後二ヶ月にしかならないのに、その軍事及び社會的投機の思惑が見事失敗し、遂に臺閣を下り降りて了つた。それから愈々ヒットラーの出現となる！

一六、一月三十一日

一九三三年一月三十一日、午の一時、アドルフ・ヒットラーは獨逸國宰相の榮職に就いた。

今迄に述べたやうな永い經緯^{ひい}を経た揚句のことだから、彼の就任は露黨^{ロイスマン}の突發事ぢやなかつた。當然のことの如く待ち設けられてはゐたのだ。然しそれにしても、どうしてこの待望が實現したかといふ周圍と前後の政局的事情を考へて見ると、そこには言ふに言はれぬ面白味がある。

第一その當時はまだ「一黨だけの獨裁を欲する者に、政府を預ける譯には往かぬ」と主張する老大統領が頑張つて居り、そしてその意思に背いて、内閣を組織することは到底不可能であつたといふ事情を、念頭に置いて考へて見る必要がある。で、ヒットラーが宰相となる爲めには、どうしても何等かの形で、「聯合内閣」を作るより外に途がない。聯合内閣を作るとすれば、中央黨か獨逸國粹黨と提携することになる。所が中央黨はパーベン内閣の倒れた場合に、黨首のカース師がヒットラーとの提携は、全然御免だと明言してゐる際とて、今更これを引入れることは絶対に出来ない相談だ。一方獨逸國粹黨も亦そんな明言こそしてゐないが、黨首のフーゲンベルクは、「お互ひに在野黨としてなら、實力のあるヒットラーと握手するのは避けないが、一緒に政權を

握るやうな場合には、勢くとも自分の方が、小粒でも歴史的な黨の總裁であるし、その貫祿くわんろくから言つても亦經驗から言つても、自分が上に立つてヒットラーが下に坐るのが物の順序だ」と、妙な所へ力瘤ちからこぶを入れてゐる。所詮、フーゲンベルクには時勢の推移が分つてゐないのだ。

そこへバーベンが現はれた。彼は今迄ヒットラーには随分侮辱されたけれど、全然、黨に關係なく中立の自由な立場で物を見てゐるだけに、結局、ヒットラーが宰相にならなければ納まらぬことと、フーゲンベルクとヒットラーとの間には、誰か仲介者、若しくは介添人かたせんにんがなければ決して結び付かないことを能く見抜いてゐた。そしてさういふ外交的な手打の仕事なら、バーベン自身が實際誰よりも勝れた手腕と興味を持つてゐるのだ。宜しい…乃公一番この取持の難役を受けてやらう…。

そこで彼は政治的には全然中立で、たゞ社交的には極めて都合のいいコルン市を選んで、祕かにヒットラーと會見した。そしてその席上で、勿論ヒットラーは宰相となる…バーベンは單に名目上のヒットラーの事務代理と言ふだけでなく、彼とプロイセン式な古い保守流との中間調停ちゆうてんてうてい役を引受ける…といふ約束が出来上つた。

だがそれで、老大統領が納得するかどうか非常に懸念があつたものだから、バーベンは早速國務祕書のマイスナー—この男も亦ヒットラーが宰相とならねば萬事が納まらぬことをバーベ

以上に感じてゐたのだ——に相談し、彼の口を通して老大統領を説伏して貰ふやうに依頼した。マ
イスナアが畏る——老大統領の前に進んで、右の趣を謎のやうに物語り、何しろ昨今の時勢は過
去十年間とは全く變つて了ひましたからと説明してゐると、ヒンデンブルグは靜かに頷いて答へ
た——「よし、分つてゐる……萬事は諸君に任せよう……諸君は儂が老人ぢやから時勢の推移が分らん
と思ふかも知れぬが、嘗ては古いプロイセン制度の時代から、カイゼル陛下の獨逸帝國、ワイマ
ア憲法の共和國と隨分風變りな時代の變遷を経験し、惱み抜いて來た儂ぢや……又時代が一轉して
別の世界になつたとて別に驚くこともない……宜いとも、政局は時代に適するやうに拾收するのが
適當ぢや……」

と案外物の分つたことを言ふので、マイスナアは勿論のこと、これを聞き知つたパーベンまで
殆ど呆氣にとられた程だつたといふ。所がヒンデンブルグよりも難しかつたのは、寧ろフリーゲ
ンベルクであつた。この男はなほ傲然として——「若しもヒットラーが私の船に同乗しようとするな
ら、私は尠くとも貨物係の方に廻らう……要するに經濟、農政及び食糧の仕事は一切私の指圖に任
せて貰ひたい——と厄介なことをいふ。

ヒットラーもその言葉を聞いた時は、實際口惜しかつたであらうと思はれる。然し今フリーゲ
ンベルクに頭を横に振られては、最早「合法的國民政府」を建設する可能がないのだ。でも孰れこ

の男なんか、近いうちに國外に放り出して了はれる時期が来ることを確信したものだから、遂に一時の不愉快を忍んで、所謂「彼の船」に乗り、船長の役目を引受ける約束をした。

さて閣僚の顔觸れを描へる段になると、國民社會黨からは宰相ヒットラー、内相フリック、無任所相ゴーリングの三名しか提議する餘地がなかつた。何故かといふと、パーベンの副宰相兼プロイセン統監、ゼルテの労働相、フーゲンベルクの經濟相の地盤は變へることが出來ず、他の各省は右翼の専門家若しくは官僚のうちで埋めなければ仕方がなかつた。實は國民社會黨員の中には、そんな各部門に適當するやうな知識を持つた人物が、まだその時には一人も養成されてゐなかつたのである。

三十一日の正午、右の顔觸れの報知がラヂオを通して全國に響き渡つた。それと同時に期せずして歡喜の示威に移つたのは、勿論國民社會黨員である。軒並に鉤十字と黑白赤の旗が織り交ふ。ホルスト・ヴェッセルの歌が街頭に狂唱される。勿論、十四年間の惡戰苦闘の應報だから、國民社會黨員が有頂天になつて嬉しがつたのも無理はない。然し同時に、ヒットラーとその幹部の胸中には、なほ多少の不満が秘められてゐたのは覆へぬ事實である。彼等は「全的國家」を欲したのだ。然るに今、獨逸國粹黨が黨としての——その當時の流行語を以てすれば——「平等權」を要求してゐる。それぢや如何せん、彼等の排斥する「三元國家」以外の何物でもない……。

執れにしても、この歴史的な一月三十一日に國民社會主義者が狂喜したのは事實であるが、一般にその他の政黨の態度はどうであつたか？　みんな青菜に鹽の如く打削れてゐたか？……といふに實は案外さうでもない。まさかもうその次の瞬間には、一網打盡に打ちのめされるとまでは信じられなかつたものだから、まだ案外鼻柱の強い氣焰を擧げてゐたものもある。

中央黨の機關誌「ゲルマニア」は——「我等は憂ふるものに非ず……たゞ我等は歴史の挿話とは、如何なるものなるかを初めて體驗したに過ぎない……挿話が終れば、我等は又これを踏み越えて次の本當の活動に移らう」と書いた。共和派の「ライヒスパンナア」は、もつと傲然として——「釣十字と銅兜（シュヴァルツ・ヘルク）の小僧達は今度が初めてで、又どうせ直ぐ立消えになることを知つてゐるものだから、今のうちに出来るだけ大騒ぎをしておけといふ浮かれ方だ……だがライヒスパンナアの秋は來た……今こそ我等は隠してゐた爪牙を剥き出すことにしよう……そして我等も亦男子であり、ヒットラーやゼルテやフーゲンベルクやパーペン輩の鈍刀（タマキ）ちや斬れぬ、といふ骨を見せてやらう」——と大きく出てゐる。

また社會民主黨の「フォアヴェルツ」が——「昨晚ブル／＼裸へて寢床へ潜り込まなかつた連中があつたとすれば、そいつは社會民主黨員だ」——と武張つたのは、消極的な力癪（キョウキカ）を見せたものだ。「ナチス」に依つて極端に憎まれてゐたユダヤ人テオドル・ヴォルフを主筆とする「ベルリーナア」。

ターゲブラット」紙が「凡そ物には境がある：如何なる暴力も、その境を越えてまで跳梁跋扈するものは許されぬ」と憤慨したに拘らず、肝腎のヴォルフが聽て行李を纏めて、境を越え外國へ飛んで逃げたなどは、今から考へると多少の愛嬌でもある。

一七、國民の高揚時代

ヒットラーが就任早々、先づ第一に着手したのは、國會の解散だ。それはもう翌日の二月一日の大統領の名で行はれたのである。

そこにもヒットラーの多少の不満が窺はれると思ふ。何しろ天下を取つたことは嬉しい……然しそれは所期に反して、獨逸國粹黨といふ餘計な瘤との聯合であり、同時に民間には右に述べた新聞紙の論調でも分るやうに、彼に楯突くやうな政黨が、まだ澤山残つてゐる。それといふのも國民社會黨が今まで單なる在野黨として、假令大きいとは言へ國會に百九十八しか議席を持たぬ、といふ事實にまだ少し押の利かぬ缺陷がある。だからお祭騒ぎよりも人民喜ばせの施設よりも、先づ以てこの缺陷を補つておかなければ氣持が悪いと考へたものだから、眞先にこの國會解散を實行したものだらうと思ふ。そして新選舉期日は三月五日と發表された。

それからその晩に、彼はラチオを以て新政府の施政方針を全國に放送した。宰相の就任演説、ラチオでやつて退けたのはこれが初めてである。そしてその際具體的政策としては、所謂「四年計畫」を發表し、四ヶ年間に、(一)國民の食糧及び生計の基礎を確保するためドイツ農民の生活

状態を救済し、(二)全力を注いで大規模に失業の退治をやることを約束した。

このラヂオ演説に、ヒットラーは「^{ナチス・ドイツ・ヘーレン}國民的高揚」といふ言葉を使つたので、従つて世人は、今ヒットラー・フーゲンベルタ政府のことを「國民的高揚の政府」と名付けてゐる。然し國民社會黨の幹部連、殊にゴエツベルスの如きは、この名前に多少の嫌らなさを感じたやうで、三月の末以後からは、矢鱈に「^{ナチス・ドイツ・ヘーレン}國民的革命」の文字を使用し始めた。従つて今日では、ヒットラーの登壇から一九三三年の三月末までを「國民的高揚時代」と稱し、同四月よりその年の中頃までを「國民的革命時代」と唱へるのを常とする。

さてその次に着手したのは、プロイセンの完全な手入れだつた。プロイセンは既にパーベン内閣の時、ブラウン・シーヴェリング内閣を掃蕩して大斧鉞を加へた筈だが、^{まだ}遠に永い間社會民主黨の本壘だけあつて、その黨の眼に見えぬ勢力が、地方の町村の隅々にまで浸潤してゐたため、パーベン内閣の没落と共に、再び舊勢力の擡頭する氣分が窺はれた。そこでヒットラーは、先づプロイセンだけは純粹の國民社會黨員で固めて了ふ決心をして、一方パーベンといふ名目上の統監がゐるにも拘らず、特に黨の中からゴエーリング、フォン・レヴェツォー提督及びルーストの「三人合議體」に支配の全權を委任したのである。そのうちゴエーリングは、内相として行政の諸般を統べた。フォン・レヴェツォー提督は、嘗て一九一八年十一月の革命に最後まで頑張つて、叛

徒と戦ひ抜いた豪の者で、早くからヒットラーに眼をつけられてゐた人物だけに、この際は、特に大切なベルリンの警視總監の役目を受持つことになつた。又それ迄ハンノーファーの「州指導」たりしルーストは、今や拔擢されてプロイセンの文部大臣に擧げられた。その前身は中等学校の教員であり、嘗て右翼運動加擔のため、社會民主主義の文部省視學官に睨まれて免職となつたので、その後専ら黨のために、文化及び教育の方面を擔當してゐた人物だ。で三人が共同して、先づ第一に實行したのはプロイセン議會の解散であり、それに續いて着手したのは、プロイセンに於ける文書刊行物の嚴重な取締りであつた。社會民主黨の「フオアヴェルツ」の如きは、ゴエーリングの手加減に依つて、押收及び發禁を立續けに喰ひ、それ以上プロイセン國內では、事實上印刷が出来ないことになつたことなどはその一例である。

然しプロイセンのこの手入れば、ヒットラーが来るべき三月五日の總選舉に於ける、自黨のための最初の準備と見ることが出来る。何も知らぬ人民は、ヒットラーが天下を取つたといふだけの表面的な事實で、有頂天に浮れてゐたが、所謂「國民的高揚政府」の樂屋には、相當な嫉視反目が横溢し、從つて龜裂だらけな缺點を持つてゐたと考へなければならぬ。要するに、来るべき總選舉に於て絶對過半数を得る迄は、國民社會主義の理想の實行は、全然封じられてゐた感がある。

そこで二月十日に、ヒットラーは「スポーツバラースト」へ乗り出し、大衆に向つて、國民社會主義的の人民意思十二ヶ條の方針を説明した。これは政府の施政方針を民衆に呼びかけたといふよりは、寧ろ獨逸國粹黨その他の右翼反動の勢力を出し抜いて、國民社會主義のみへ投票を集めるための一種の選舉運動であつたと筆者は見てゐる。

さうなると、フーゲンベルクも黙つてはゐられない。彼も亦獨自の立場から、自黨を保護するために、「黑白赤戦線同盟」なる組織を作つて、來るべき選舉に備へることとした。この同盟を支持する實力は「鋼兜團」である。パーベンはこの同盟が全然超政黨的色彩を持たねばならぬことを説いて、頻りにフーゲンベルクの「排ナチス」的傾向を戒めた。彼はそこに内閣の危機の存在するのを見たものだから、板挟みになつて非常に苦しんだやうである。然し彼の立場としては、防禦的に頑固になつてゐるフーゲンベルクだけを窘める譯には往かぬ。矢張り攻撃的な獨斷行爲に出ようとする、ヒットラーにも一應は面當しておく必要がある……といふので、パーベンも亦、「スポーツ・バラースト」の集會で、メガフォンの前に立つてかういふ演説をした。「國民的高揚の運動を大きな政黨の妥協、若しくは聯合のやうに考へるのは大變な間違ひだ。一九一八年の叛逆革命に反抗し、ワイマア又はヴェルサイユに反抗して戦ひを續けて來た人間なら、政黨政派の如何を問はず、みんな我々の平等な同志だ……つい昨日まで國民主義の運動を嘲笑してゐた

ものが、今日は急に轉向を装うて或る特殊の政黨へ名前を書き入れたといふだけぢや、さう威張る資格はない……さういふ黨員票は持つてゐなくつても、然し昔から國民主義國家のために、誠心誠意の努力を續けて來た國民なら、寧ろ前者に勝る立派な同志である。」

*

で、選舉を前に控へて、組閣早々新政府の間に、ヒットラー派とフーゲンベルク派の暗闘が眼立つてゐたことは、それで分つたが、然らば、この新政府に衝突かうとする社會民主黨及び共產黨の陣營は如何か？

社會民主黨はヒットラー内閣の出現に依つて完全に闘志を喪失した。殆ど尻餅をついたきり、起きあがる元氣さへ出ないのだ。何等かの形で反抗しなければ口惜しいとは思ふが、どこにももう反抗の武器が存在しない。彼等の武器は常ならば總罷工の筈である。然し彼等はもう永い間、労働組合に向つて政治的ストライキを命令するだけの實力がなく、その刺戟又は原動力となる階級争闘の標語は、もうずつと以前に放棄してゐる。そこで或者は窮餘の策として、祕かに國際労働組合聯合に訴へ、外國労働者の同情的な助けに依つて、外國とドイツの交通を遮斷するやうなストライキをやつて貰つてはどうか、と提案を出すものもあつた。然るに外國の助けを藉りて國內的活動を停めるやうな行爲をとれば、明かに叛逆行爲であるから、そんなことをすればそれ

こそ、ヒットラーに待つてましたとばかりのいゝ口實を與へて、すぐドイツ社會民主黨の大弾壓が来るだらう。實際フランス及びイギリスの勞働組合の幹部連もその邊の事情がよく分つてゐたものだから、ドイツの同志からのこの一策を聞いて、そんな無謀な自殺行爲は止した方がいゝだらうと斷つて來た。結局雪隠詰になつて、どうにもかうにも動きがとれぬまゝの姿だ。

それに較べると共產黨の方は、國民的高揚の政府が出來ても、そんなに見苦しく^お嫌はしなかつた。彼等はどうすつと前から、黨が禁止されること位は覺悟してゐたのだ。それまでだつて、既にブリュンニング内閣の時に禁止令を喰ひかけてゐたし、又バーベン内閣もそれ以上に、共產黨嫌ひだつたから、當然彈壓^{だんお}が來るものと度胸を据ゑてゐたのに拘らず、それが今迄する／＼に延期された形なのだから、黨が禁止されること位ぢや、彼等は別に嫌でゐる大騒ぎをする必要もない。否寧ろヒットラーが天下を取つたといふのに、共產黨を禁止しないで放つて置くなどといふ筈のないことは、彼等ならずとも、その操^{さく}りの絲を引いてゐるモスコウのクレムリンが、百も承知してゐた筈なのだ。それならそれでいゝ。元來共產主義の運動には、その時勢々々に適應し得る政策がある。合法時代には合法時代としての、又非合法時代には非合法時代としての手加減を用ふることが出来る。否、或る場合は合法的に馴^な致^せされるよりも、非合法の潜行運動の方に革命的な反抗の熱が沸いて、却つて過渡期共產主義本來の目的たる破壊的工作を、完全に行ふことが

出来る。モスコウの第三インター本部でも、ドイツの共産黨はその時餘りに溫室的に柄ばかり大きく育つて、破壊革命の氣魄に乏しいのを遺憾に想つてゐた位だつた。

だから共産黨が禁止になつても、さう悲觀するには當らない……さうなれば、寧ろ黨が悲壯に引締つて、未曾有の大規模な「アンチファッシズム」の地下運動を起すのに絶好の刺戟となる……なアに、共産黨の模範たるロシアのポリシエヴィズムだつて、合法的に成功したもののぢやない、あらゆる受難と迫害とが却つていゝ藥となつて、上から彈壓を加ふれば加ふるだけに反撥心を増して、遂に執拗にも既成社會の秩序を攪亂し抜いたではないか……この際目的のために手段など擇ぶ所ではない……黨が禁止になるなら、もつと勇敢になつて殺人、放火、爆裂裝置等何でもいゝから執拗なテロリズムを斷行し、それに依つてヒットラー政府の心膽を寒からしめ、その存続を不可能と諦めさせるまで威嚇してやる必要がある……若しもそれがために外交問題が紛糾しても、別に心配しないでいゝ……何故ならば、ヒットラー獨逸は、今世界の憎まれものであつて孤立してゐる……うろ／＼してそのうちヒットラーが、愈々軍備を擴張し始めたら多少厄介だが、然し今日の狀態では、彼は雲霞の如き赤衛軍の殺到を、單獨の武力で防衛するだけの力がない……だから眞のテロリズムを實行する積りなら、今が丁度潮時だ……といふのが、モスコウからの祕密の指令だつたのである。

ヒットラーも馬鹿でないから、この情報はよく知つてゐた。彼は臺閣に上るや否や、第一にプロイセンを手に入れ、ベルリンの警視總監にレヴェツォー提督を据ゑたのも、時機がもう逼迫してゐるのを痛感したためである。そこで彼は、レヴェツォー總監をして、不意に共産黨の本部「リープクネヒト館」並びにその他の兼々から怪しいと睨んでゐた所々の巢窟を襲撃させ、家宅搜索を行はしめた結果、案の定三月六日の選挙の前後に、惧るべきテロ行爲を計畫してゐる、といふ證據書類が澤山押収された。これは大變だ……その儘に捨てては置けない……大規模な檢舉に移らなければならぬ、と決心した瞬間……

二月二十七日のうら寒き夜更のこと、テロの烽火と覺しき火焰が捲き上つた。「チーアガルテン」の並樹の間隙は、まるで血潮の色よりも濃く、赫々と映り輝いてゐる。さてこそ國會の大火事だー 見上げるやうな殿堂が濃煙に咽せ、巨大な圓塔の硝子窓は、眼を射るやうな數條の閃光を噴き出してゐる。阿修羅の姿だー

國會議長としてのゴーリングと、警視總監レヴェツォーとは取るものも取敢へず、その現場に飛んでいつた。そこいらに遺留してあつたコールタールの仕掛からして、それが明かに放火なことが判明し……それから間もなく、犯人として、オランダの共産主義者と名乗るヴァン・デル・ルッペなる一堅工が逮捕された。それから數日を経て、ゴーリングは今まで警察の手で押収し

た書類を悉く調べ上げた結果、共産黨の驚く可きテロ計畫を一々具體的に公表した。それに據ると、共産黨はドイツ政府の官衙、博物館、宮殿、主要なる官有工場等を、軒並に焼き拂ふ積りであり、然もその兇暴なテロリズムに女子供を使用することとし、又それに引續いて、ベルリンの金満家の多い通りを奪略する計畫になつてゐたといふのだ。この警報を聞いて、遽に市民は驚愕した。そんな不退の徒輩を放つて置いては、安眠が出来ない……といふので、若しも警察が彈壓を下す場合は、我々も義勇的にお手傳の御奉仕をしよう、と申込む壯丁が澤山集まつた程だ。そこでベルリン警視廳はこれ等の青年團と一緒に、目星い共産黨員をどしどし逮捕して廻つた。その時捕へられた者が百三十名。その後も思ひ出し次第、見付け次第に共産黨狩りを續けたから、一切の總數は非常に多かつたことだらうと思ふ。黨の領袖のテールマンも、勿論この珠數轉ぎの中に遣入つてゐたのだ。そして共産黨の本壘たるリープクネヒト館は、それ以來、風雨に曝された赤旗が引きずり降ろされて、同じ赤地でも、今度は眞中に鈎十字のある新しい旗が初春の空に翻へつた。忽ち改名してホルスト・ヴェッセル館といふ。

懷ふに世間では、この國會議事堂の火災事件から、共産黨の陰謀暴露の経緯まで、總てヒットラー一派の計畫的なお芝居であり、或は議事堂の如きは手前が火をつけて焼いておきながら、その無實の罪を共産黨になすり附けたに違ひない、と極論するものもある。その孰れが正しいかは、

私にも判断が付き兼ねる。たゞ動かない事實として推定されるのは、ヒットラー等が来るべき選挙前に、何等かの方法で、共産黨を選挙リストから除かうと決心してゐたことと、又一方共産黨員が、モスコウの指令に依つて、或る叛逆的なテロを實行しようとして決心してゐたことだ。従つて共産黨側が柔和無心なること神の仔羊こひつせの如かりしにも拘らず、獐惡ぢやうあく恣そく譎ごなる「ナチス」といふ豺狼さうろうが、これを無慈悲にも嚙殺したといふモスコウ流の觀方は、鶯うさぎを鴉からすと言ひくるめる以上に滑稽だ。大きな目的を達成するに手段を選ばないのは、政治の常道と見るより他はない。それに對して、潔癖けつぺきな抗議を申込み得る政治家は甚だ稀であらう。尠くとも、クレムリンに鎮座する政治家の中には、そんなことを言ひ出す資格を持つた者は一人もゐない筈だ！

さてこれで、ヒットラーは一應安堵の息をホツとついで、早速大統領に「國民及び國家を擁護する緊急令」を出して貰つた。それに依ると、今まで許されたマルキシズムの宣傳は、最早全然その權利を喪失したことになる。換言すれば、新しい國民社會的國家と抗争せんとするすべての團體は、事實上言行の自由を褫奪ちぎつぱつされ、一切のテロリズムに依る犯罪は、死刑に該當し、特に或る政治的目的のために行はるゝ暴力行使は、今迄の刑法に規定したよりも、更に一層嚴峻げんしゅんな刑罰を課することとなつたのである。この緊急令の期限は、三月五日の選挙まで、效力を有することになつてゐたが、その選挙さへ済めば、又それに應ずるヨリ以上の大鐵槌たいてつづみを打ち下す可能はいく

らでもあるので、要するにヒットラーの政權の續く間は、獨逸共產黨は議事堂の赤い焰と共に永久に葬り去られたものと見てもいい。

以上の経緯に依つて、三月五日の總選舉は、ヒットラーの豫想通りの好結果を見た。即ち、彼は國會ライヒスタグに議席二百八十八を獲得したのだ。國會全體の議席は六百四十七であるから、そのうち共產黨の八十八を除外する時は、フリーゲンベルク所屬の「黑白赤戰線同盟」(五十二名)を加へなくつても、過半数に達する譯である。これで愈々成すべきことは勝手に出来る。もう「フリーゲンベルクの船」などに「乗せて貰ふ」必要はない。國民社會主義が厭な奴は、その儘船から放り出して了へばいい。従つてこれから、唯國會に於ける全權の委任さへ貰へば、もう「國民的高揚」などと遠慮しないで、寧ろ堂々と「國民的革命」の第二期に移り得るのだ。

かういふ結果になるだらうといふことは、多少敏感な人間の頭には明かに想像されてゐたものだから、既にこの選舉の直前に於て、脛すねに疵きず持つ連中——疵は持たなくつても、どうせ「ナチス」には睨にらまれるぞ、と怖氣おそついた連中——の間には、まるで一種のバニック状態が演ぜられた。氣の速い奴は、もう着のみ着の儘で外國へ高飛びして了つた。前ブローイセン首相のブラウンがスイスへ、前藏相のクレッパがフィンランドへ雲隠れしたのなどは、その著しい例である。それに續いて、自由主義の學者達や、ユダア人の文士著作家なども、どしどし國境を越えてドイツを見捨

てた。その行先は大抵ベルギー、オランダ、フランス、イギリス等である。それ等の口や筆のやかましい連中のために、ヒットラーは、まるで 帝ネロの如く、自分でベルリン全體を焼き拂ふ計畫だとか、ユダヤ人を毎日十人づつ絞殺してゐるなどと、出鱈目の宣傳をやられたものだから、中立的な外國人の心證を害した點から見ても、ヒットラーは餘程損をした勘定だ。今日ではさうでもないが、その當時のヒットラーは、實際世界一の大馬鹿野郎で、世界一の惡漢みたいに、取扱はれてゐたではないか？

*

*

*

國民的高揚の政府が、選舉後初めて國會を開かうとした時、萬感交々胸に迫つた老大統領のヒンデンブルグは、ヒットラーに向つて二つの感傷的な提議を出した。一つは鉤十字旗と同時に、ビスマルクの功績を表徴する黒白赤の三色旗をも併用して、新しくドイツに二重の「國旗」を制定すること、他は事務的な國會を開くすぐ前に、一度フリードリヒ大王の偉業を偲び得るボッダムに於て、歴史的に記念すべき大儀典を挙げたい、といふのである。

ヒットラーも、この提案には賛成の意を表した。

かくして、國會開催の前日たる三月二十日を、「人民の國祭日」と定め、その日には全國に令して、戸毎に鉤十字及び黒白赤の二旗を掲揚せしめ、自らはヒンデンブルグと共に、ホーエンツァー

ーレルンの家歴代の墓所たるボッダムに乘込み、衛戍教會の式場に於て、神の前に嚴肅なる式典を舉げた。「この歴史的に光榮あるボッダムの地を支配する獨逸魂は、なほ今日の國民の精神的な糧となり、醜惡な利己心と政黨の抗争とを捨て、本來の面目たる統一且つ自由なるドイツ國、世界に誇り得るドイツ國を享受するために、なほ一層我等の國民的自覺を振起させ給へー」といふのが、一同の祈禱の主旨であつた。それからヒットラーは演壇に上つて、滿堂の參會者たる國家の有司百官に向ひ、若きドイツがどうして今日の譽ある日を迎へ得たか、といふ理由を縷述し、更に傍の老大統領ヒンデンブルグに向つて、古き良い精神と新しき強き力とを結合させ得た雅量と、聰明とに對して、熱心な頌徳の辭を呈した。轉て教會の管風琴の音と共に、ヒンデンブルグは國民の元首として、フリードリヒ・ウィルヘルム、及びフリードリヒの諸王を合祀せる御陵に月桂樹の榮冠を横へ、祝砲の殷々たる中に嚴かな式を終つた。

大統領及び宰相のベルリンに歸る沿道には、感激の人民立錐の餘地なく増列し、孰れも大戰以來、初めてホツとした安堵の息をつき…今まで思ひ忘れてゐた本來の「ドイツ」の姿が、再び自分等の胸の底に甦へつてゐるのを發見して、涙ぐましい氣持が抑へきれなかつたといふ。そんな述懐は、勿論平凡な感傷かも知れぬが、眞に「ドイツ民族の歴史」を知つてゐる者にとつてはさもありなん、と同感される。

さて翌二十一日は愈々國會開きの日だ。特にこの日を定めた理由は、かのビスマルクの第二帝國が初めて帝國議會を開いたのも、矢張り三月二十一日であつた、といふ縁起えんぎから來てゐたやうである。然し、ビスマルクの建てた歴史的な議事堂は、つい數週間ばかり前まへ島有に歸したばかりで、使用に堪へないから、新たに場所を國立クローラ歌劇座に選定した。そしてその會議に於て、ヒットラーは、彼の所謂「全權委任」と俗稱さるゝ有名な法案を、無理矢理に通過させて了つたのである！

この法案は、正式に言へば「國民及び國家の急進きんしんを除去する法律」といふのであつて、内容は次の三點に歸着する。曰く—（第一條）國家の法律は憲法に規定さるゝ立法方法以外に、なほ執行政府自身に依つても發布することが出来る…（第二條）執行政府に依りて發布される國法は、ライヒス・グロウ國會及び國評議院ライヒス・レーグの施設が本來の職能を果し得ないやうになつてゐる場合、憲法の手續きを無視して效力を生ずるものである、但し大統領の權利だけは今迄と變ることがない…（第五條）この法律は、一九三七年三月一日まで有效である、尤も現今の政府がその期間内に消滅したなら、勿論それと共にこの法律も消えて了ふ…。

この法律が通過すれば、ヒットラー政府は大手を揮つて獨裁を斷行し、又一方ワイマア憲法は（假令文面には四ヶ年となつてゐるが、四ヶ年が來ればいつでも更新し得るだらうから）事實上

消滅してふこととなるのだ。ヒットラーは、この法案を議員全體の面前へ突付けて叫ぶ―「賛成しようが、反對しようが、それは諸君の御意の儘だが、たゞそれに依つて、諸君は平和か戦争かを決定することになるのだから、氣を付けて票決して頂きたい―」國會を取巻くクロール劇場の廣場には、S・Aの大群が聲を揃へて―「全權委任法を通過させろ!!」―と怒號してゐる。物凄極みだ。これで反對の出来る譯はない。その結果、社會民主黨首のウエルスなどの、蚊の鳴くやうな、抗言があつたにも拘らず、九十四票の反對に對する四百四十一票の大多數で、豫定通りに通過して了つた。これで世は名實共に、ヒットラーのものとなつた譯である―

こゝに一寸可笑しく感ぜられるのは、ヒットラーは何故そんな全權委任などを要求したのであるか？ そんなものを態々國會に要求しないでも、事實上獨裁を斷行し得るではないか？ 彼は元來議會制度否定の強調者である。それなら今自分勝手に獨裁を宣言しておいて、議會を廢して了へばいい譯だ。何を苦しんで、自分が今から叩き潰して了はうといふ現在、その國會に向つて、君達を叩き潰す權利を一つ認めて貰ひたい、と相談する必要があつたか？ そんな滑稽な相談を、眞面目な顔でする方もする方だが、同時に又それを認めてやる國會も、亦變挺なシチュエーションに置かれてあると、いふべきだ。

ところがそこが、又極めてドイツ臭いやり方だと思ふ。由來ドイツ人はどんな滅茶をやる場合

にも、それが法律に叶へりや否やを、すぐ念頭において考へる癖がある。極端に言へば、彼等は「革命」の現象をさへ、法律の辻褄に合せようとする。例へば、大戦の結果、ドイツ國內に渾沌たる革命が起つて、カイゼルは所詮退位しなければ納まらなくなつた。周囲の者がカイゼルに向つて、畏れながら、この際一刻の猶豫もなく御退位を決行されぬと、御身邊がお危うござります、と諫言申上げる。然しカイゼルはいつまでも躊躇して埒が明かない。だつて自分が退位するのは……國民がそれ程希望するなら退位しよう……だがそれぢや、國家の大權を誰に譲渡するのぢや？……誰も對手がないぢやないか？……と、カイゼルは驕に落ちぬ面持である。いや相手は革命の中心勢力たる社會主義者どもの臨時政府で御座ります、と答へると、カイゼルはこゝに初めて安堵して、遂に退位宣言に署名をされ、命からくオランダへ落ち延び給うた。

聯合國の政治家などは、當時その話をきいてみんな腹を抱へて笑つたものである。成程自分がもう追ひ出されさうになつて、然も命の危い危機一髪の間なることはよく分つてゐるのだから、大權が誰の手に落ちるかを詮ぜするのさへ無駄な話だが、更に自分を逮捕しようとする革命の暴徒が、自分の大權を譲渡する相手なることを知り……さうか、俺を殺さうとする奴が大權の譲受人か？……ぢや其奴に大權は慥かに譲渡した、と署名を了へて逃げ出すなどは、話にしても愛嬌がある。それが例へばロシアの革命か何かであつたなら、大權は飽く迄も渡さないか、それとも向う

が暴力で奪ひ取らうとするなら、何もかも拋棄つて了ふかの二つに一つである。合法も非合法もない。向うが革命といふ非合法でやつて来るんだから、此方だつて遁げる積りなら、跡は野となれ山となれの態度で遁げちまへばいい……。

と考へるのは、蓋し几帳面なドイツ人

の社會生活的性格を理解しない人間のいふことだ。ドイツ人も随分破れかぶれはやるやうだが、然し筋道の立たぬ破れかぶれは、彼等の頭に理解されないことである。ヒットラーもこの點では、矢張り純粹のドイツ人に違ひない。合法的に成立した

國會を叩き潰すのが彼の目的であり、そして叩き潰す行爲そのものは、一種の革命に違ひないが、この革命を實行する手段は、對手が合法的に成立してゐるだけに、此方も合法的に撃滅しなければならぬ、と考へることが既にドイツ人らしい頭である。だからヒットラーは、今飛ぶ鳥落す實權を握り、一寸顧^{あと}でしやくれば、血氣盛んな五十萬の突撃隊が喊聲^{かえ}を擧げて、少しでもぐづぐづいふ奴を吹つ飛ばさせて了ふ地位にゐるのに拘らず、國會から全權を認めて貰はうとする。

然し國會がそれを認めたら最後、その瞬間から國會従つて議會制度自身は、それこそ自滅のハラキリだ。それなのに國會は、嘗てカイゼルが大權を自分達に禪讓して安心し、それでホーエンツォーレルン王統が減びて了つたと同じ徑路を辿り、矢張り自分達が「合法的革命」に依つてカイゼルから受取つてゐた政權を、今度は「合法的革命家」たるヒットラーに引渡し、そして自分

は死んだのだ。寔に勘定は能く合つてゐる。然りヒットラアは、精鋭なる武器を持つてゐたに拘らず、決して相手を眞向から叩き斬りはしなかつた。相手が勝手に死んだのだ。それも花々しく拳銃で頭を撃ち碎いて自殺したのではない。ヒットラアに暫く隠退閑居を勧められたので、自分の仕事を一切ヒットラアに任せておいて、その間に自分はヒットラアから睡眠薬を買つて、今後四ケ年間睡つて了つたのである。想ふに今から四年間も睡り續けたら、もう起き上る元氣はあるまい。そのまゝ永遠に彼の世へ旅立つことだらう！

一八、國民的革命時代

全權委任法を通過させて後のヒットラーは、もう一氣呵成の邁進だ。これからは、たゞ法律の名に據つて、革命を斷行することが出来る。今迄のやうに「國民的高揚」などといふ、どんなモザイク的政府にだつて唱へられるやうな標語は拋棄つておいて、堂々と「國民的革命」といふ、ヒットラー黨でなくちや名付けられない目標を指して、駈足することが出来るのだ。

革命といふからには、必ず在來の制度組織を急激に破壊若しくは排棄し、その代り、今迄と全く面目の違つたものを置き換へることでなければならぬ。然らばヒットラーは、その際如何なるものを置き換へようとしたか？

この置き換へは、國內の行政制度にも、經濟及び勞働政策にも、社會教育又は文化藝術宗教の對策にも、總て一樣の且つ同一の型に於て實行され、又今日に於てもなほ引續いて實行されつゝある。一口に言へばその形態は *Gleichschaltung* (總てのものが一樣に統括され、同一の命令系統の下に整然たる服従をなすこと) であり、その目的は *TOTALISATION* (部分的獨立狀態の存在せざる全的歸一の狀態) であり、又その運用方法は *Führerprinzip* (指導者原理) に據るものである。これ

等の言葉には、國民社會黨員に依つてのみ理解さるゝ特別な新意義があるので、これを獨逸語以外の外國語に簡譯することは、不可能であるが、尠くともこの三語には有機的な關係があり、そして右に括弧くわくをつけて説明しておいた私の下手な日本語を、三つともすべて括弧くわくつけて合せて、考へて見れば、讀者は大體それが何であるやを、想像し得ることと信ずる。

(1) 二十世紀の中央集權

この *Gleichschaltung* — グライクスハルトン — については假りに「同時統整」とでも譯しておくは、ヒットラーの好んで使つた言葉であり、従つて一九三三年の前半に於ける、所謂國民的革命期には、ドイツの下を通ずる一種の流行語となつてゐた。そしてこの形態の一番早く現はれた法律は、三月三十一日に、ヒットラーの名に依つて發布された「ライヒス國家と地方國とを同時統整する假法律」であつた。換言すれば、今迄のやうに地方國家の歴史的、封建的な獨自性（強度の自治又は獨立）を排斥して、全然中央國家の命令系統の下に支配せしめることである。即ち完全な中央集權制度だ。

これは考へやうに依つては、別に不思議でも何でもない。英國などが封建制を捨てて、中央集權の實を擧げたのはもう歴史に霧がかゝつた程古い話だ。フランスだつて古い所から言へば、既にフランス一世の時代から近代集中國家の形を整へた。ずつと後れた日本でさへも、「維新革命」

は人間一代以前の昔話となつてゐる。所がドイツでは、二十世紀も然も三十三年の春に於て、初めて事新しく完成されたのである。ドイツにあつてはこの事業は、ビスマルクの如き偉人でさへもが完成し得られなかつた。従つてビスマルクの帝國は、ドイツの各地方國家中オーストリアを除外し、プロイセンを盟主とした聯邦國家であつて、各分子國は軍事外交を除く外、殆ど地方的に獨立し、各自その首府を持ち、又その統治者を戴き、分子國家同志には使節を交換するやうな姿を呈してゐた。その狀態が今度ヒットラーの手をつける迄、そのまゝそつくり存續してゐたのである。文物制度の進歩したドイツともあらうものが、何故、今迄そんな範圍な組織をそのまゝに放つて置いたであらうか？　ビスマルクは、これを統一することの不可能を見、その代り彼はこの狀態を利用して（若しくは逆用じて）獨逸國家を作つたのだが、その事は、敢て茲に論じないこととする。然しそのドイツ帝國が倒れて、自由主義のドイツ共和國が出来た時、何故早くこれを統一しなかつたのであらうか？　自由主義は普遍的なものだから、統一の精神が先づ第一に考へられ、封建的な殘滓などは掃除して了ふのが、彼等の一番重大な使命ではなかつたか？　何故に封建的制度の排撃を、自由主義者がやらないで、反對に自由主義者を排斥するヒットラーがやつて退けたか？

曰く、自由主義者も亦全然それをやらなかつた譯ぢやない……その點に就いては、ワイマアで憲

法を作るとき彼等と雖も大に研究もし、また實際實行する意氣込ではあつた。然し彼等には力が足りなかつた。若しも彼等が力なくして理論だけでそれを實行したとすれば、統一どころか、各分子國は中央の命令などは一つも聽かないで、本當は各自獨立するか、或は最寄の隣國（例へばオーストリアとかフランスなどに）、括着して了つたかも知れない。その傾向は、ライン諸州の分離主義者の運動にもよく見えた。又赤色バイエルンの臨時政府を樹てたアイスナアの政府だつて、一番重要な政策は、バイエルンをベルリンより分離させることだつた。バイエルン社會民主黨出身のホフマン政府でさへ、封建復古を理想とするカール政府と同様に、バイエルンをプロイセンから獨立させることのみを、念願としてゐたのだ。そんな有様だつたから、統一を希望するベルリンの自由主義者政府が、これに手をつけなかつたのは、結局これを敢行し得るだけの力を持つてゐなかつたといふことに歸着する。

だから、統一好きのビスマルクが失敗し、更に統一理論の基礎に依つて立つ自由主義者さへ恐れて斷行の出来なかつた地方と中央との統一を、眞に斷行し得る者があつたとすれば、それは餘程「力」を持つた偉人でなければならぬ筈である。それがヒットラーなのだ。従つてヒットラーのこの法律の實行は、明かに彼の「権力の試験」にパスしてゐたことの證明となる！

尤も私に批評させると、斯様な地方分權的な制度を破壊すること自身が、ドイツのために良か

つたか悪かつたかは、全然別問題である。何故なら、今迄のドイツの眞の底力は、寧ろ地方分權的な所にあつたのだ。

由來ドイツは中都會の恐ろしく發達した國である。それは國內に早くから鐵道網の完成した爲めに、一度大都會に集中した過剩人口くわにんこうでも、バツとその周圍に存在する中都會へ散らさせる便宜があつた爲めでもあるが、同時に中都會自身が大體その周圍の地方國家の首府となつてゐたので、各首府同志の競争意識からして、自分の首府を完全な町にしようといふ、地方國民の努力に俟つ所が多かつた。だからドイツは、例へばあの花の都のバリー一つ取除いて了へば、あとには貧弱な田舎町や、薄穢うすけだい若干の港町だけが残るやうなフランスなどは、全く國柄が異ふ。

又ドイツには、ロンドンやニューヨークの如く、お怪物ばけものみたいな老大な都會はないが、その澤山な中都會をとつて比較して見ると、いづれも小粒ながら町の體裁ていさいでも、教育制度でも、衛生施設でも、寺院の配置でも、博物館や美術館の設備でも、その他音樂美術の分布でも、すべてを總括し網羅もうらして、よくキチンと纏まとまつてゐる。黒煙くもくだけを専門とするマンチェスターや、ギャング専門のシカゴ、映畫だけで膨れたロスアンジュルス、果ては算盤そろばん以外には通用しない大阪……などといふ、そんな片輪の町は非常に多い。だからミュンヘンとか、ドレスデンとか、スツットガルト等の割合小さな町でも、必ずしもその電氣や瓦斯や衛生の施設は、大都會のベルリンに劣つて

ある譯ぢやない……大學だつて、必ずしも大都會にあるベルリン大學だけが、總て良いのぢやなくつて、地方の大學の方が寧ろ高等教育の中心をなしてゐる場合も多い……歌劇やコンサートの如き施設と雖も、却つてベルリン以外の田舎の隅々に、世界的に誇り得るものがある……書物の出版だつて、ライプチヒヤ、コエーニヒスベルグや、フライブルグの田舎町から出版した本でも、内容さへよければ世界的な名著として立派に通用する。

これは單にドイツの都會事情だけを取つて調べて見た一例であるが、要するにドイツの底力は經濟的にも、^{たうち}教智的にも、文化的にも總て工合よく地方に分配されてゐる。それは歴史的に且つ傳統的に、惡く言へば封建的に、沈澱し^{おちどろ}集積した底力なのだ。然もドイツの封建力は、その姿が嘗て他の諸外國に存在してゐた封建のそれと、多少趣を異にしてゐる。昔の諸外國の封建の姿は、單にその地方の大名自身の絶對的な力と、人民を支配する階層的組織とに依つてのみ代表されてゐたが、ドイツのは寧ろ人民それ自身の地方文化に参加する力に依つて表はされてゐたやうである。だから「プロイセン主義^{プロイム}」と言へば、單にプロイセンの王様とその支配組織とに特色があつたばかりでなく、プロイセンの人民全體に依つて形造られた世界觀であつた。又「シュワーベン人」と言へば、その上に王様が居ようが居まいが——或は彼等が故郷を離れて海外に移出してはうが——依然一種の特色ある向上、努力、勤勉、秩序感等を捨てようとしなないのだ。

だからドイツともあらうものが封建的勢力を二十世紀まで持ち越したのは、ドイツ人が文明に後れてゐる證據だなどとするのは、極めて淺薄なアメリカ流の偏見に過ぎない。事實は正にその逆である。そしてヒットラーがその點を迂濶にも見脱す筈はない。ヒットラーが後にも説く如く、ユダヤ人を排斥してゲルマン固有の純性を保ち、地方農民の鞠養を國本の第一と考へて、極端にこれを保護し、又國際的流行を排斥してまるで時代錯誤と笑はれても、平氣で地方々々の方言、服裝、民謡等を復活させる方針を執つたのは、結局この「底力」を失はさせない爲めであらうと思ふ。たと然し、今迄のワイマール共和國が平氣で看過してゐたやうに、中央政府が一定の方針を樹てても、分子國の政府が中央の命令を聽かないで、これに背反するやうな行爲に出ることは、國民社會主義の一黨治國の精神に對する叛逆となるので、この點を一絲紊れず統一するため、今一つは、地方分權のために夥しく濫費せらるゝ無駄な豫算を切詰めるために、所謂「同時統整法」を發布し、虧くとも、形式の上からは完全な中央集權の實を擧げようとしたのである。

で、この法律に依つて、中央國家と地方國とその下に自治團體を布いた市町村とは、ヒットラーに言はせると、一種の「階調」(ドイツ人は物を形容するのにすぐ音楽の術語を使ふ)を保つてそれ／＼勝手な不調和なリズムを交錯させないこととなり、地方政府は中央政府の方針を付度してこれに追隨し、政治的に抵觸する獨自行爲を避け、又地方議會は三月五日の國會議席の割合で

これを指定したから、これ又事實上、中央の意向に反した決議は出来ないこととなつて了つた。唯プロイセンだけは國も大きいし、又その議會は三月に於ては、まだ自立して選舉されてゐたので、この法律で一緒くたに規定が出来なかつた譯だが、四月七日になると、愈々第二回の「中央國家と地方國家を統整するための法律」を發布し、今度はプロイセンをも含めた、所謂「統整」を行つたのである。この第二回統整の法律に據ると、大統領は宰相の提案に基き、全國に十二の統監レグットハルツ（中央より派遣される代官の一種）を任命し、この者をして、それ／＼の地方と中央との聯絡をつけしむることとなつてゐる。例へばバイエルンの統監はフォン・エツプ將軍、バーテンの統監はローベアト・ワグナー、チューリンゲンの統監はフリッツ・ザウケルといふ如きである。勿論その孰れもが錚々たる黨の幹部連だ。又プロイセンの統監としては、初めヒットラー自身が引受けたが、その後ゲーリングがプロイセンの首相となるに及んで、その權利を彼に譲つて了つた。

(2) アリア人條項

以上は統監グライヒヒン・カンツルグの精神を地方行政に應用した法律であるが、それが済むと、今度は國家の執行の基石となる官公吏中の異分子を掃除し、そこに一種の人的規劃統一を計るがために、「職業

官吏制を復活する法律」なるものを出した。これは、從來の官公吏に對する國法的見解からすると、慥かに革命的なラヂカリズムだ。この考へに據ると、ドイツの官公吏は一般の世界觀的な意義（例へば服務規律に對する責任觀）に於て、有機的に結合してゐるばかりではなく、更に國民社會主義の純粹、且つ専門の意力創造をなす團體だと見る。これはフッツィズムにも、また今迄の保守的な官僚制度にも全然ない特殊の考へ方だと思ふ。この法律と共に、所謂「國民的革命」は更に一段の進展を見せて、「國民社會主義的革命」にまで近づいて來た。

何故かといふに、在來世間一般に行はるゝ官吏法に於ては、一定の資格條件を具へて官吏たるの身分を取得した者は、故なくして官吏たるの資格を失ふことなきやうに、その身分が保證されるのを常としてゐる。それは恰も、市民が賣買契約に基き反對給付を提供して買取つた物件には、所有主としての私法上の權利を持つてゐるのと凡そよく似てゐる。だから、この一種の「認められた既得權」を無暗に剝奪するのは、今日の法的觀念よりすれば、慥かに驚くべき革命行爲に違ひない。ヒットラーの法律はそれを承知しつゝ、否、寧ろ内部からの確信を以て、「公民中の一定の人間は、先天的に考へが悪い、又先天的に生れが悪いから、公の勤務奉仕に資格がない者として、最高公民權たる官吏の身分を取得することが出來ない」と運命づけて了つた。

で、この法律と共に、一九一八年十一月五日以來、何等特色なきに拘らず、單にその當時の景氣

のよかつた政黨に籍を置いてゐたといふだけで、官公吏の身分を取得して今日に至れる者、及び假令特技を有すと雖も、國民主義運動に政治的反意ありと認めらるゝ者は、情用捨もなく獻首していつた。尤もそれだけぢや別に不思議はない。ヒットラーの時代にならなくとも、例へば甲政黨の政府が倒れて乙政黨の新政府が樹つた時、甲政黨時代の官吏が獻首さるゝことは、普通の國家に於ても能く起り得ることだ。然るにヒットラーの法律には、それ以上に進んで、更に一種の不思議な條文が附いてゐる。即ち有名な「アリア人條項」である。

「アリア人條項」に據ると、「アリア系出身ならざる官吏は休職を命ず」となつてゐる。勿論これには大戦前より引續き官吏となれる者、大戦に於て戦線闘士たりし者、父若しくは息子の戦死に遭ひし者等は例外としてあるが、要するにユダヤ人の血の混つた官吏は「思想」の如何を問はず、「出生」の正しからざるものとして、之を放逐する主旨なることは言ふまでもない。ドイツ國民中、事實上アリア系ならざる者といふのは、結局はユダヤ人のことで、その範圍は祖父母の一人がユダヤ人なるか、或はユダヤ人の女を妻とする者まで、非アリア人即ちユダヤ人と看做される。で、この條項は更に後に種々の形で敷衍され、今日ではユダヤ人と云へば全然國家の官吏となれないばかりか、醫師、辯護士、新聞記者（多少の例外又は割宛許可があるとしても）等の自由職業にも、事實上就けないことになつてゐる。斯くして、ドイツ國內のユダヤ人は外國人でもな

く、それかとて公民としては權利の極端に制限せられたもの、即ち中世紀式賤奴にされて了つた。

その善惡良否は、こゝに批評しないこととする。たゞヒットラーが、これを斷行した態度に關して、特に二つのことが考へられる。一つは排セミチズムなるものは口では容易に唱へられるが、愈々それを實行することになると、中々困難なものだ。といふのは、ユダヤ人は政治的にも、金融財政的にも、亦文化的にも社會の各層に喰ひ入つた根強い勢力であるから、これを叩き潰すといふことは、餘程の決心と努力とを要するからである。それは大勢の趨向と民衆に迎合する必要からして、嘗てナポレオンに依り、解放せられた以來の世界的な力であつて、この力を阻止するなどといふことは、かのビスマルクにも亦カイゼルにも出来なかつた。所がヒットラーは、矢張り大勢の趨向と民衆に迎合する必要からして、今度は反對に、ナポレオンの解放したユダヤ人を、又もとの鎖に縛いで了つたのだ。だからユダヤ人排斥などといふことは、一寸考へると弱い者窘めの吝くさい些事のやうに見えるが、事實は反對に、驚天動地にも値する歴史的な大事業なのである。

今一つ考へなければならぬのは、この行爲は實にヒットレリズムの徹底化を意味するといふことだ。些かなセンチメンタリズムを顧みないで、大局から洞察すると、所詮ユダヤ人は世界的金融資本主義、世界的リベラリズム、世界的左翼革命思想の擔任者であり、又そのブレイン・ト

ラストを意識的、無意識的に構成し、極端に言へば一國家、一國民の迷惑や責任には、全然關せず焉の行動を執り得る人間の塊りである。彼等に依つて作られたドイツの極權、即ち「ヴェルサイユ」、「ワイマア」、「ウォールストリート」等の効果を打破するために立つたヒットラーが、世界の輿論に反抗しつつも、その工作の根源たるユダヤ民族そのものに、鐵槌を下したといふことは、極めて痛快といふよりは寧ろ極めて自然的な成行だと思ふ。それを斷行しなかつたとすれば、ヒットラー主義は曖昧模糊の謗を免かれない筈だ。世にヒットラーの行爲は淺薄で、いろんな美辭麗句でカモフラージュしてゐるし、その資本主義打破とか、社會主義建設とか、労働者救済等の目標には一つも徹底性がない、と罵るものもあるやうだが、その一々に就いては後に説くこととして、尠くともヒットレリズムの中樞をなす排猶太主義に於ける彼の態度は、徹底も徹底、極端に徹底である！

(3) 五月來れり！

さてその次に、グライヒシャルツング 統 整 の大鉈を揮つたのは、労働組合の革命的改組であつた。

ヒットラーの革命は、國民社會主義的性質を有するのみならず、言葉の固有の意義に基き「社會主義的」國民協同團體を確立することが、その主要なる目的で在つたといふことは、一九三三

年五月一日の所謂「労働祭」に於て、明瞭に證明されてゐる。この晩春の空晴れた一日に於ける労働大衆の集ひは、今迄のマルキシストに依つて習慣づけられた國際的階級争闘のための示威運動とはまるで意味が違つて、ドイツに於ける新しい創造的、生産的な人間が再生するための表徴としての、一種の喜ばしき復活祭であつたのだ。ヒットラーに言はせると、恰も基督教徒が異教徒たるゲルマンの神話からサンタクロースの傳統を取入れて、聖誕節のお祭りをするのを例とするやうに、先代の社會民主黨は、やれ賃銀だの労働時間だのと、殺風景な喧嘩をするのに、多少ロマンチックな氣勢を添へてマテリアリズムを面白く誤魔化すために、古代ゲルマンの民衆が鐏を捨てて「五月來れり」と打ち興じた詩の如き祭典を、「メーデー」といふ形で盛んで了つたのだ。即ち「メーデー」の起源は、ゲルマニズムから來てゐるのだといふ建前になる。

斯くして「メーデー」、即ちドイツ國民労働の名に於て、テンベルホーフの廣場に雲集させた労働者の大群に向つてヒットラーは、労働が商品に非ずして國民的創造の協合力なるを以て、在來の物質的な階級争闘の無意義なる所以を説き、國民社會主義は在來のリベリズムがその社會的構成上寧ろ必要とした失業者狀態の存在を、來るべき四ケ年のうちに必ず克服して見せると約束した。

それから數日を経て、在來の労働組合への大手入を始めた。ドイツの労働組合は、今迄それぞ

れの政黨（社會民主黨又は中央黨等）の行動機關として、事實上それに隷屬したが、その頃はもうこれを支配する政黨そのものが骨抜きとなつて了つたので、各自孤立の姿を示してゐた。それにしても、ドイツ人は労働者である限り、必ず何等かの組合に加入するのが普通であり、従つてその既成組合はその組織も極めて大規模で、又歴史的にも餘程強い傳統を持つてをり、依然として階級争闘の堅壘を形造つてゐたものである。所がヒットラーは右に述べた五月祭で、「ドイツでは今迄のやうに、國民の中から特にプロレタリアーなるものを孤立せしめて階級争闘的組合を作らせておく譯に往かぬ」と斷然宣言したのだから、その言葉に對しても現存の組合組織をそのままに放置しておくことが出来ない。俄然五月三日の「フェルキッシャー・ベオバハター」紙は、ヒットラーの意を承けて、「國民社會主義的革命的革命の第二幕が現はれる……今や、我國の全労働組合は、『労働戦線』の統整下に新しく結合さるべきである」といふ論文を發表した。

それと共に、ベルリン及びその他労働者を中心とする諸工業都市に於て、マルキシズムに據る労働組合の諸事務所は、期せずして姿を現はした突撃隊のために全部占領せられ、これに抗争する者又は突撃隊の黒表ブラックリストに載つてゐた組合幹部の連中は残らず逮捕たいはの厄に逢つた。この一氣呵成いきかぜの運動の指揮の任に當つたのが、當時黨の組織部指導者ローベアト・ライである。ライは斯様にし、何もかも一緒くたに自分の手に收めた全國の労働組合を改組させる仕事を、前にも一寸述べ

ておいた「國民社會主義經營細胞組織」(N・S・B・O)に委任し、更に同細胞組織の提案に基いて、全國の勞働組合を全部總括する「ドイツ勞働戰線」なるものを作つた。その最高攝政はヒットラーで、そして指導者はライ自身である。全部總括と言つても、今迄の傳統その儘の組合を一切合財集めて聯絡をつけたと言ふのではなく、プロレタリアの階級意識で纏まつたり、カトリックの宗教を中心として組織されたり、又は何等かの政黨の色彩を以て動いてゐた多種多様の世界觀を、悉く國民社會主義の一角に塗り潰したのである。これに依つて、勞働界の統整(從つてその全部化及び指導者原則)が完全に行き渡るやうになつた。

勞働組合の統整は更に進んで、手工業者全體の全國組織を見、後一九三四年にはそれと同じやうな方針で、經營企業者又は事業主側の統整を敢行したので、今日のドイツは要するに經濟界の全部が實質のみならず形式に於てさへ、國民社會主義の指導劃一の原理の下に支配されてゐるものと見て差支へない。

(4) 血 と 土

國民社會主義革命の第四の大事業は、農民に對する古代ゲルマン式相續法の適用である。「ドイツ勞働者をマルキシズムの鐵鎖より、ドイツ農民を資本主義の桎梏より解放せよ」といふの

が、ヒットラーの衷心よりの熱望であつた譯で、今その最初の「労働者」をマルキシズムから救済する仕事を完成した以上、今度はその次の「農民」を資本主義から引離す工作にかゝらざるを得ないので。

かくしてプロイセンの司法省は、「農民の土地所有權」に限り、その譲渡移轉を禁止すといふ、まるで今迄に慣行されたドイツ民法では到底解釋し得られない、古代ゲルマン式相續法に據る一種特別の法律を出したのである。これに依つて、ドイツ農民はその相續地と定められた農牧林地を賣却することの出来ない不便もあるが、同時に負債の抵當として他人から兼併^{けんぺい}される心配もなくなつた。由來羅馬法の解釋では、土地はその所有者に依つて賣買の目的物と看做^{みか}されてゐたに反し、古代ゲルマンの慣習では、農耕地は氏族又は家族の相續財産として、子孫に相傳すべき權利（從つて義務）を有するものとなつてゐるので、今や西歐流の個人主義、自由主義を極端に排斥して、純ドイツ式の共同團體主義に歸らうとするヒットラー黨が、この法律を發布したと言つても別に怪しむに足りない。又我々日本人のやうに、既に長子相續の舊慣を持つてゐる國人の眼から見ると、假令法律がそこまで突き進んだとしても、敢てアングロサクソン人や、ラテンの人ほど吃驚^{びっくり}することもない。

が尠くとも、西洋の平均又は平均以上の文明國人であるドイツ人にとつて、かやうに國民中の最

良構成分子たる農民の個人の自由を極端に制限する法律が、妥當性を持つてゐるであらうか？…何故なら西洋の文明は「精化された個人主義」の基礎の上に立つてゐる筈であつて、西洋人と云へば—東洋人と異つて—良い意味に於ても、悪い意味に於ても、インヂヴィデュアルイズムの權化でなければならぬだらうし、それが又今まで歐米人をして世界に覇を唱へしめ得た唯一の強味ではなかつたか？…といふ點に疑問を持つてゐた私は、嘗て或る機會を得て、この法律の「生みの親」たる農相ダレーに向つて、その邊の消息を質問して見たことがある。すると、ダレーは私に對し、寧ろ反駁の形でかう答へた—「貴下は歐米人を個人主義の權化なりと看做されるか？…それは初耳である…私は本來の東洋人の方が、寧ろ個人主義哲學の徹底した擔者であると考へてゐた…その證據にはベルシヤや印度や支那の古代史を調べて見るがいゝ…成程西洋にも個人主義は横溢してゐる…が、その禍源は最初にギリシヤ人の民族的自由解放の偉大な精神を、ローマ人が穿き違へて、法律その他の文物制度の上に一種のエゴイズムを反映させたことに存する…然し貴下は一體古代ローマ史だけが歐洲人の歴史の全部と考へられるか？…それから又十八世紀以降に及んでイギリス人やフランス人が、この穿き違へたエゴイズムの上に立つて、個人の自由や解放の社會革命を斷行し、それを物質文明進展の道具に使つて今日に及んだ事實は、成程否定が出来ないだらう。さりながらさういふ附焼刃の個人主義でさへ、要するに歐洲人の頭をまだ僅かに

二世紀しか支配してやしない……それに私共は、アングロサクソンの一部やラテン系統の國々が西洋の全部とは思はぬし、本當の西洋文明の擔者は全然排個人主義的で、民族共同團體の強化を中心とする北歐的ゲルマニズム、従つてその主義に復活せんことを希望する我が國民社會主義に在り、と確信してゐるのです！」

成程さういふ堅い信念から、古代ゲルマンの慣習に従ひ、百姓の土地を譲渡し得られないことにするのは大變宜しい。經濟的に見ても、さうすれば農民が重い負債に苦しむことも、又土地を失つて、所謂「農業プロレタリアー」となる弊害も失くなるだらう。然し土地を抵當にして金さへも借りられないとなれば、不作又は不景氣に逢つた時に、農民がどうしてその難關を切抜け得るであらうか？

それに關し國民社會黨は、ヒットラーを最高攝政とし、農相ダレーを指導者とする「全國鞠養身分團」なる組織を作り、農産物の價格に對して標準を與へ、投機を取締ることとした。この施設は、然し單に機械的に物價調節の監督をするだけのお役所ではなくつて、今日ではダレーの理想に基いて、更に道義的、精神文化的な職能を有するものとなつてゐる。それは全國の農民の身分を保證する統整のとれた「農民組合」だ。勿論労働者には労働戦線といふ一種の労働組合があるやうに、農民には「全國鞠養身分團」といふ一種の農民組合があると見てしまへば問題は簡單

だが、創設者のダレーに言はせると、その施設には更にかういふ意味がある。

「農耕主義は我等北方人種ノース・アメリカン種の生命の泉である。それから生れる國家は、『血』と『土』ブライト・ランド・ポリシー（この表

現はビスマルクの『鐵と血』といふ言葉に對するものだらう）の上に根を下して樹つ。我等は、

世の淺薄なる經濟史家が、我等の祖先を遊牧業を中心とした『支配種族』ドミナント・レースより出でしものなり、

とする誤謬ミステイクを排撃する。我等の國祖は、徹頭徹尾大地に根の生えた『農耕人種』アグリカルチュラであつた！ 我

等は今、『全國鞠養身分團』ナショナル・フットボール・クラブに依りて農民を保護しようとする。農民の保護は人種の保護だ。國

民社會主義の國家では、農民と人種といふ二つの言葉に同一の意義を考へる。農民の土地は今よ

り生れ出でんとする新しい貴族の『血筋の地』ブルード・ランドであり、又出身の郷里ではあり得るが、斷じて利

潤が亂舞したり、イギリス語の『フアー・マア』と稱する者の精神が躍り狂ふやうな野つ原ぢやな

い！ 世に謂ふ『耕主』フンドレイムトとは、土地そのものに何等相續權的な根を却さないで、たゞ便宜のため

にその土地を利用し、それに依つて貨幣經濟上の利潤を獲ようとする者である。然るに我等の

保護せんと欲する所謂『農民』ファーマーは、その種族より繋がる相續的な根で以て、全然土地に生え着い

たもので、従つてその氏族及び民族の理想に向つて枝を茂らせ、花を咲かすことのためにのみ生

きてゐるのだ。」

(5) 一黨治國

國內行政を中央集權的に統整し、更に労働組合運動を、それから農民を統整したつたヒットラーは、今や國民社會黨自身の強化並びに多數政黨制度の根絶に向つて、大鉈おほなたを揮ひ始めた、換言すれば「政黨政治の統整」に没頭した譯だ。

だがこの統整の過程は、他の統整の場合の如く、さう電光石火的に斷行したのではなく、ヒットラーが政權を取ると同時に、他の過程と平行して、漸次にその効果を収めていつたものであつた。先づ全權委任法を通過させる前に、既に黨の宣傳部指導者ゴエッペルスを登庸して、新設の人民啓蒙及び宣傳省の大臣としたのを手始めに、四月には前にも述べたワルター・ダレーを食糧大臣（即ち農相）として、フーゲンベルクの仕事の半分を黨のために奪ひ返した如き、又四月二十一日には、無任所大臣兼プロイセン内相たるゲーリングをプロイセン首相に任じた如きは、黨強化工作の第一歩である。それから同二十八日「鋼兜團」の團長で、労働大臣たるゼルデをして、國民社會黨に轉向せしめて正黨員となし、その「鋼兜團」をもS・Aの一部に繰入れさせた如きは、その第二歩である。

尤もこの「鋼兜團」に對する處置は、獨逸國粹黨の致命傷であつただけに、聯合内閣内に於

うなつた以上、自分獨りだけ、突つ張つて見た所で意味のないことを覺り、結局は矢張り機關紙「ゲルマニア」に黨解散の宣言を發表して、露の如く消え失せた。

一番厄介だつたのは、矢張り獨逸國粹黨である。何しろこの黨は小さくつても、尠くとも國民社會黨と提携して聯合内閣を作つてゐる形になつてゐるので、叩き殺す譯にも、亦冷淡に自殺を慫慂する譯にも往かぬ。で、ヒットラーは、六月二十七日に同黨幹部の主なる者を呼び集め、統整の原則に従つて同黨と國民社會黨との合併を提唱し、契約の形で同黨を併呑して了つた。勿論それには――「獨逸國粹戰線の前黨員にして、目下政治犯に問はれ監禁中の者は、この際直ちに無罪放免とし、今後亦その事件のために迫害さるゝことなきを約す」といふ條件をつけてやつた。懷ふに、獨逸國粹黨の幹部の中には、もうそれよりすつと以前からこの併合を希望し、そして多分ヒットラーに内應してゐたものがあつたやうである。だが御大のフーゲンベルクは、この契約によつて、自分の椅子を奪はれたばかりか、自分の手足まで斷ち切られたと同じことになつたので、憤然として、經濟大臣の地位を辭職してしまつた。

これでドイツの政界には、ヒットラーの一黨治國の統 ゲライヒレヤルツツ 整が、完全に行はるゝやうになつた。

従つてその時以來、内閣は全然國民社會主義の獨裁で動かされることとなつたのだ。國民社會主義の獨裁と言へば――國民社會主義は指導者原則に準據するのだから――結局、最高指導者ヒッ

トラアの獨裁といふことになる。だからヒットラーが初めて組閣した時は、聯合内閣の中へ自分と一緒に、僅かに三名の黨員しか割込ませることが出来なかつたのに、この時には最早八名の股肱こたうを、各省に配布してゐた（宰相ヒットラーの外に、内相フリック、農相ダレー、宣傳相ゴエツベルス、航空相ゴエーリング、文相ルースト、無任所相ヘッス及びケアル）。勿論ノイラート男の外相、ブロンベルク將軍の國防相、シュミットの經濟相（その後ライヒ銀行總裁シャハトが兼攝けんさつ代理をやり更にフンクとなつた）等その他黨員ならざる名士が、重要な椅子を占めてゐるやうに見えるが、これ等はいづれも、その當時の黨の方針を體得したそれらの専門大臣若しくは技術大臣であるから、フリーゲンベルクが退いた後にも、まだ内閣内に異分子が残つてゐるといふ風に觀る譯には往かぬ。寧ろフリーゲンベルクが没落し、パーベンが後にオーストリア公使に追ひやられて以來の政府部内は、政黨的異分子は全部掃蕩そうたうされたと謂ふべきだ。

(6) 焚書

それからヒットラーが、最後に統グライヒレヒツング整のメスを入れたのは、藝術その他文化一般への領域である――。

この工作は、前の政界等と違つて割合に簡單であつた。何故かといふに、藝術家その他文化の

けるフリーゲンベルクとヒットラーとの感情上の衝突は、そのためにもう避くべからざるものとなつて來た。然し國民社會黨は、フォン・パーベンの額を立てる必要もあるので、當分フリーゲンベルク自身を正面から攻撃することを避け、間接に獨逸國粹黨に威嚇を與へつゝ、同黨が新國家に叛意あること、又同黨が「黑白赤戰線」を組織するに當つて、不正なる賄賂の手段に出たことなどを摘發し始めたので、同黨の院内總務オーバーバッフォーレンの如きは前途を悲觀して、遂に拳銃自殺を遂げるといふやうな悲劇を演じた。

そこで、獨逸國粹黨に對する最後の彈壓は當分時期を延ばせておいて、ヒットラーの鐵腕は、それよりも先づ、マルキシストの政黨解消に向けられた。マルキシズムの政黨と言つても、共產黨は既に名實共に、根絶も同様になつてゐるから問題ぢやない。残るはたゞ社會民主黨の形骸だけである。

社會民主黨は全權委任法の通過以來、實際、生ける屍となつてゐた。言はば身體中に、間斷なき直撃や拘撃を受けて、まるで反抗出來ないやうなグロッキイの状態にヨロついてゐるのだ。^{ストリート} ^{アッパース} その一番大きな打撃は、彼等の力と頼んだ「ライヒスバンナ」隊が、ブラウンシュヴァイク及びベルリンに於て、團長ザルテの言ふことを聞かない一派の鋼兜團の中へ加入して、カモフラージュしてゐるのをS・Aに依つて發見され、それ等の「鋼兜團」は解散されたと共に、舊ライヒ

スペインアの連中も亦、^{たふさ}珠數縛ぎに黨監獄へ叩き込まれたといふ事件であつた。又その次の致命傷は、前にも述べたやうに、マルキシズムの労働組合が跡形もなく斬り崩されたことだ。

かういふ惨めな踏んだり蹴つたりの取扱ひを受けて、最早ドイツ國內では、全然反抗の手段なきを覺つた社會民主黨の幹部連は、外國の社會民主黨の同情と救済を得る目的で、黨大會をひそかにチェコスロヴァキアの首府ブラーグ市に開いたのである。するとその機會を、待つてましたばかりに捉へた内相フリックは、六月二十二日に「爾今ドイツ國內に於ては、社會民主黨の結社、集會、運動の一切を嚴禁する」旨を發表した。それで、永い歴史を持つたドイツ社會民主黨は、永久に息の根を止めて了つたことになる！

ヒットラーは社會民主黨を完全にノックアウトしておいて、今度はブルジョア諸政黨の解消に着手した。然しブルジョア諸政黨はもう見る影もなく瘦せ衰へてゐるので、マルキシズムの政黨に向つてのやうに、無慈悲に撲つたり叩いたりする必要はない。たゞそつと刃物を渡して、一應の暗示を與へておけば、彼等の方で勝手に自刃して消滅してくれるやうな段取となつてゐるのである。

斯くの如くして、先づ獨逸人民黨と經濟黨とが總會を開いて結社を解散し、その他の豆粒のやうな諸政黨も、續々これに相次いだ。中央黨は最後まで難色があつたやうだが、もう世の中がか

うなつた以上、自分獨りだけ、突つ張つて見た所で意味のないことを覺り、結局は矢張り機關紙「ゲルマニア」に黨解散の宣言を發表して、露の如く消え失せた。

一番厄介だつたのは、矢張り獨逸國粹黨である。何しろこの黨は小さくつても、尠くとも國民社會黨と提携して聯合内閣を作つてゐる形になつてゐるので、叩き殺す譯にも、亦冷淡に自殺を慫慂する譯にも往かぬ。で、ヒットラーは、六月二十七日に同黨幹部の主なる者を呼び集め、統整の原則に従つて同黨と國民社會黨との合併を提唱し、契約の形で同黨を併吞して了つた。勿論それには――「獨逸國粹戰線の前黨員にして、目下政治犯に問はれ監禁中の者は、この際直ちに無罪放免とし、今後亦その事件のために迫害さるゝことなきを約す」といふ條件をつけてやつた。懷ふに、獨逸國粹黨の幹部の中には、もうそれよりすつと以前からこの併合を希望し、そして多分ヒットラーに内應してゐたものがあつたやうである。だが御大のフーゲンベルクは、この契約によつて、自分の椅子を奪はれたばかりか、自分の手足まで斷ち切られたと同じことになつたので、憤然として、經濟大臣の地位を辭職してしまつた。

これでドイツの政界には、ヒットラーの一黨治國の統ツライヒ・レナルツ整が、完全に行はるゝやうになつた。

従つてその時以來、内閣は全然國民社會主義の獨裁で動かされることとなつたのだ。國民社會主義の獨裁と言へば――國民社會主義は指導者原則に準據するのだから――結局、最高指導者ヒッ

トラアの獨裁といふことになる。だからヒットラーが初めて組閣した時は、聯合内閣の中へ自分と一緒に、僅かに三名の黨員しか割込ませることが出来なかつたのに、この時には最早八名の股肱^{ここ}を、各省に配布してゐた（宰相ヒットラーの外に、内相フリック、農相ダレー、宣傳相ゴッペルス、航空相ゲーリング、文相ルースト、無任所相ヘッス及びケアル）。勿論ノイラート男の外相、ブロンベルク將軍の國防相、シュミットの經濟相（その後ライヒ銀行總裁シャハトが兼攝^{けんさつ}代理をやり更にフンクとなつた）等その他黨員ならざる名士が、重要な椅子を占めてゐるやうに見えるが、これ等はいづれも、その當時の黨の方針を體得したそれ／＼の専門大臣若しくは技術大臣であるから、フリーゲンベルクが退いた後にも、まだ内閣内に異分子が残つてゐるといふ風に觀る譯には往かぬ。寧ろフリーゲンベルクが没落し、パーベンが後にオーストリア公使に追ひやられて以來の政府部内は、政黨的異分子は全部掃蕩^{そうたう}されたと謂ふべきだ。

(6) 焚書

それからヒットラーが、最後に統^{ツライヒシュルツング}整のメスを入れたのは、藝術その他文化一般への領域である。

この工作は、前の政界等と違つて割合に簡單であつた。何故かといふに、藝術家その他文化の

仕事に携はる者は、根が氣まぐれな個人主義、自由主義の立場に傲然として嘯いてゐるものの如く見えて、その實彼等は、大抵その仕事を中心に、蚊細い飯を喰つてゐる者が多いので、まさかの場合になると、政治に携はる者みたいな骨がない。だから大體に於て、もつと暴力の嚇しが利く。その證據には、あれ程世紀末的な廢種主義と徹底個人主義のシンボリズムの盛んだつたロシアに革命が起つて、世は擧げてポリシェヴィズムの天下になると、米櫃に心配する文學者や、思想投機に思惑上手なユダヤ人の戯作者連が、一遍にこれに迎合し、さて新しい「プロレタリアの現實主義」だの、「マルクスの藝術化」だのと、まるでポリシェヴィズムの爲めなら、いつでも死んで見せるやうな權幕を示し始めた有様を見てもよく分る。従つて國家が斷乎たる文化政策を立てる限り、所謂藝術家などといふものは、さう頑強に抵抗するものではない。

況んやドイツの藝術界に於ては、その共和政治の間、特にユダヤのインテリが跋扈し、新聞界、出版界、音樂、劇場、活動、レビュー界に互つて、殆ど獨占に近い地歩を占めてゐたので、國民社會主義が、アンチセミチズムの方針を執る限り、この世界にも手入があることは誰にも豫期されてゐたのだ。そして戦後のユダヤ人の藝術なるものは大體彼等民族に特有な、國際普遍的觀念に立脚する所の極く機械的なインヂヴィデュアリズムであるか、然らずんば、ソヴィエト文化の影響を受けた態様の模倣に過ぎなかつた。その表現派といひ、新即物主義といひ、或は超現

實思想、又は構成思想と唱へるものも、事實上はもう明かに行き詰つて、何等創造的な新味がなかつた。何故なら彼等は時代に阿諛迎合して、頻りに現實的な市民生活や、唯物史觀などの中に詩を見出さうと努力するけれど、そんな範圍の限られた散文的な世界に詩が落ちてゐる筈はない。従つて彼等の造り得た藝術は、何れも合理の藝術、説明の藝術、頭で判斷する藝術であつて、血潮より湧き出るもの、心臓に脈動するもの、魂に震へるものではなかつた。

そこへ國民社會主義が現はれたのである。が、國民社會主義はそれ自身が既に一つの詩である。創造である。例へば、ヒットラーとマルクスを比較してみるがよい。マルクスは合理的統計と計算が論理だ。それは頭に合點の往く驚くべき體系ではあるが、決して心の琴線に觸れる詩ではない。然るにヒットラーは霧の中の力強い創造であつて、假令腦味噌には理解されなくとも、人間の心臓には滲み渡る。彼の説く所は現代の企業合理化でも、利潤の計算でも、恐慌の運命論でも何でもなく、現代を全然超越した中世のロマンチズムなるか、然らずんば算盤の計算を無視する民族の倫理的意思想の高潮なのだ。で、さういふ態度で、ヒットラーが押出して來たものだから、「國民生活」の何たるかを解するに就いて先天的の無能力者たるユダヤ人は別とするも、純粹のドイツの藝術家がいつ迄も執拗にこれに反抗の氣勢を擧げる譯はない。否、彼等は今迄のやうに散文的なアメリカニズムや、多數決の天秤で物を計る議會制度や、又理性と稱するクルムード

式公式を押賣りするだけのマルキシズムに本當はよく分らないながら迎合して、いつまでもマツチ箱や寄木細工みたいなごまかしの藝術を造るよりも、この際寧ろ中世の英雄詩的なヒットラーのロマンチズムに感激を持つことが遙かに氣易くつて、又遙かに便利である。それだからこそ、ドイツの藝術界からは忽ちにして、所謂現代主義が消え、構成派の劇が失くなり、あれ程盛んだつたレヴェューとジャズ音楽が姿を晦して了つたのだ。その代り再びリアルト・ワグナーが持てはやされ、古典音楽は蘇生し、ハンス・ヨーストの詩が珍重される時代が來た。既にヒットラーが出現したといふ事實だけで、昨日までの藝術品はまるで流行後れの帽子の如く國民生活上の魅力を失つて、もうその儘「消極的な」文化界の「統」が完成した譯である。

尤も、それも全然無爲にして化した次第ではない。寧ろプロパガンダ大臣ゴッベルスの大車輪的な積極の努力が、非常な効果を齎したことは否定出來ない。彼が國民社會主義學生の一團を指揮し、マルキシズムに關係する文獻、又はドイツ國民生活に有害なる書物を、山と積んで焼き拂つた行爲の如きは、決して一片の破壊行爲ではなくつて、彼の演説にも在つたやうに、その灰燼の中から新しいドイツの文化を創始しようといふ誓言のシンボルに過ぎなかつた。世にはそれを「ナチスの焚書」などと唱へて、秦始皇帝の惡逆暴戾な「焚書坑儒」にさへ倣へ、俱に天を戴くべからざる文明の破壊行爲のやうに批評する者もあるやうだが、そんな觀方は正直過ぎるといふ

よりも、寧ろ憫笑^{アハツ}以上に幼稚極まる。一遍ぐらゐ國民社會黨が嫌がる書物を少し焼いたところで、それで世界の洪水の如く氾濫してゐる文獻が無くなる譯ぢやあるまいし——第一あれはゴエッペルスのお芝居であつたのだ。一體國民社會主義の連中は上はヒットラー始め、皆な一樣にお芝居が好きである。その演説といひ、鉤十字旗の示威運動といひ、黨色の制服といひ、「ハイル・ヒットラー」の挨拶といひ、總てが純真で子供らしい一所懸命のお芝居だ。それに依つてもヒットレリズム自身が單なる理窟ではなくつて、一個のロマンチズムで、一個のドラマで、一個の創造で、又一個の詩であることが分る。然り、ゴエッペルスが雨そぼ降る闇夜に「惡魔の書」を燒き拂つて、その火焰に拳を振向けつゝ「ドイツの新文化よ、生れ出でよ」と叫んだ行爲の如きは、慥かに幻想的な「ボエジア」であつた！

＊

＊

＊

以上述べ來つたところに依つて、ヒットラーの「國民主義的革命」は、一先づ完成を告げたことになる。革命は戦ひだ。従つて革命が濟めば、その後には平和が來なければならぬ。

ヒットラー自身もそのことを明瞭に公言してゐる。彼はこの年七月六日の全國統監會議の席上でかう言つた。

「我等の總攻撃の命令は豫期以上の革命的效果を齎した。だが、革命は永久に放置すべきもので

ない。今や迷^{たがひ}り出る革命^{レボリューション}の電流を、靜かな進化^{エボリューション}の寢床へ入れて休憩させる必要があるだらう。これから暫くは、我等の鑄^い型^{がた}に嵌めた國民に磨きをかけて、徐ろに國民社會主義的な人間を教育しなければならぬ……もつとどこかに革命すべき餘地はないかなどと探しまはる秋^{あき}ではない。これから當分、今迄のやうな過激な行動はお互に控へよう……國民社會黨は今や國家それ自身となつたので、もう國內で政黨としての特異性を強調する必要はない……一切の權力は、これから黨に存せずして國家自身の中に横はる！」

一九、A・Sの行方

國民的革命を三十三年の六七月頃、一先づ完成したものとて打ち切つたヒットラーの所謂第三帝國は、それから翌年の同月頃に至るまで約一ケ年間、薄氣味悪い程の沈靜を續けた。列國は疑問の眼をヒットラーの一舉一動に集注し、さういふ定石を外れた彼の素人政治が、近代國家の建設に許容され得るものかどうか多大の興味を寄せた。ヒットラー自身も亦、この際餘り大風呂敷を擴げたまゝで締括りがなければ、必ずどこから破綻の來ることを確信したものだから、今迄の國民的革命期に基礎を据えた項目を、單に充實するだけの法律を出すか、若しくは國內の諸集會を利用して演説をするにしても、成るべく具體的な新計畫の發表を避け、たゞ儀禮的且つ道義的な内容に基いて、獅子吼する以外には殆ど何にも喋べらなかつた。

それだけ又この一ケ年は平凡にも見えたのだ。それだけ又外部から窺ふと、ドイツの國內の事情が薄氣味悪く且つ神祕的に思はれたのだ。然しヒットラーは外部からの毀譽褒貶には、殆ど頓着することなく、只實國民的革命的「消化」といふ消極的な努力にいそしんだ。そしてこの冷靜な一ケ年が、ヒットラーの今日ある確乎不動の基礎を作つたのだと、私は觀察してゐる。

尤も冷静と言つた所で、即ち單に今後は黙つて仕事しろ…革命などといふ過激な華やかな騒ぎは止して「平和」のために貢獻しろ—（因みにこの一年間のヒットラーの演説に「平和」といふ言葉の無かつたことはない！）—と急に鎮撫的な態度を執つて見た所で、今まで激情の波に揉まれ通した國民の頭を急に冷ます譯には往かぬ。そこは又ヒットラーの政治的手腕の揮ひどころでもあつた。彼はその間にいつの間にか、國民の心理を巧みに國際外交の問題に轉換させて了つたのである。

これ迄のドイツの爲政者は、外交問題に對しては慘憺たる利の路を歩んで來た。ウィルトの「充行政策」といひ、クノーの「消極的反抗」といひ、ストレーゼマンの「了解政策」といひ、孰れもその根本は舊聯合國の建前を御無理御尤もと承認し、たゞその實行に關しては、成るべく躊躇逡巡のポイコット策を執つて、對手に已むを得ざる寛容を求めようといふ、極めて消極的な又極めて狡いマキアヴェリズムでしかなかつた。ヒットラーは全然その逆を往つたのだ。彼は表看板に外交上の「自主獨立」を掲げ、國際平等の基礎を認めざる相手に對しては、既成條約もヴェルサイユも糞もあつたものぢやない、といふ態度を明かにした。同時にドイツの外交的自主獨立を尊重する國に對しては、彼は必ず積極的な平和工作の協議に入るであらう、といふことを盛んに強調した。

それに對して二つの批評があり得る。第一はそんな鼻柱の強いことが言へるのは、ドイツ國內の力が充實し、且つ舊聯合國の共同一致性に魅力の缺けた時だからこそ言へること、その十年も前であつたら、いくらヒットラーでも、そんな傲岸な態度は執れなかつた筈だといふこと、第二はドイツの國力の充實は歴代の内閣が漸次に築き上げて來た成果であつて、ヒットラーはこれ等の諸政府が恥を忍び、屈辱に齒を喰ひ縛りつゝ、一步々進めて來た方針を單に集大成したのだから、月桂冠を單にヒットラー一人の頭上に授くべきものではないと見ること。

この兩者の觀察は私も確かに正しいと思ふ。ヒットラーの自由外交原則の成功は、ドイツ人全體の憐み多かりし國民の運命が、等しく享くべき神の祝福であるには違ひない。然し私がこゝに特に考へるのは、尠くとも彼の外交方針が在來の形式を全然打破したといふことだ。即ち今迄は外國の羈絆を「已むを得ざる惡」なりと認めた上で、たゞ實利ばかり收めようとしたのであるが、ヒットラーは斷然その形式を一掃し、實利が有らうが無からうが、自主外交そのものに原則を置いたといふことは、尠くとも戦後のドイツ外交界に於ける革命的な形式だと信ずる。更に今一つ感ぜられるのは、その表看板にヒットラーが背水の陣を布いてゐる意氣を示し、その國運を賭した切札をたつた自主外交といふ一枚に集中した上、列國が軍縮の不調不和に手も足も出なくなつてゐる丁度いゝチャンスを掴んで、その「オールマイティ」を叩きつけた態度が、政治家として

は慥かに満點の成績だつたといふことだ。

尤もそれはヒットラー獨りの腦筋なうじんからのみ絞り出された智恵ちやあるまい。國民社會主義國家の中にも、一種のブレイン・トラストらしいものが出来てゐただらう、といふ者もある。所が當時のドイツ外交のブレイン・トラストらしいものは、(一)國民社會黨員ならざる、専門外交技術家たるノイラート外相を中心とする外務省、(二)ゴッペルスを中心とする宣傳省、(三)黨の外交方針に参考意見を吐くローゼンベルグ、(四)ヒットラーの私使節役のリッペントロップの四團に分れ、且つその經濟的方面に關する限りでは、シャハトの意見に據るといふ鹽梅に、極めて統一がとれてゐなかつたのであつて、本當のイニシアチヴを執つて最後の斷案を下すものは、矢張りヒットラー一人なのである。寧ろ外交のことなんか何一つ分らぬ筈のヒットラーが、たつた一人で積極的な方針を決定し、それを逆に、右のブレイン・トラスト連に實施させるの形になつてゐるのだ。英國外相サイモン卿の訪獨に依つて締結された英獨海軍協定に關して、ドイツ側の提出した要求理由書の如きは、サイモン卿をして、その内容の論理的にして文章の立派なのに一驚を吃せしめたといふが、その文案の如きもヒットラーが自分にペンを執つて、その前の晩に夜も寝ないで書き上げたものであつた。さういふ工合にヒットラーは、ムッソリーニと同じやうに、側に助手がゐようがゐなからうが、結局原則としては、たつた獨りでドイツ外交の衝に當つてゐる

といふ事實は、確かに注目に値することだと思ふ。

で、ドイツは、自分がヴェルサイユ條約に依つて軍備が縮少されてゐるのに拘らず、列強は軍縮の會議だけやつてその實が擧がらず、然も問題をドイツのS・Aに引つけて難題を持ち出すかの如き形勢あるを見て、十月十四日に遂に國際聯盟を脱退して了つた。

*

*

*

S・Aの盛時には、その數實に百萬を超えてゐたことは事實だ（外國での推算では百二十五萬乃至百五十萬）。

然るに、S・Aの使命は革命に對する突撃にある。國民社會主義思想の擔者として、又その擁護者として、且つ示威者として今迄は重要な役割を演出した。

然し國民的革命が完成して見ると、S・Aの使命にも、多少その色彩を變へねばならぬこととなる。それはS・Aばかりぢやない、國民社會黨といふ政黨の組織それ自身が、單に反對黨としての在野的色彩を無くしたのと同じ筆法であらねばならぬ。ヒットラーが國民社會黨は最早政黨ぢやなくつて、今や國家そのものだと言いたのは正にその謂である。だから建設期に入つて後の黨からは有能な士が、どし／＼國內の立法司法等の諸諮問機關又は官公私の行政執行又は諸職業組合、文化施設等に遣入り込んで仕事を仕始めた。

然らば國民的革命を了つて後のS・Aはどういふ仕事に従事すべきか？ 誰にもすぐ考へられるは、これ等鳶色の制服を着用した規律整然たる壯漢の大群は、兵器さへ持たせば立派な軍隊であるから、そのまゝ國防軍に編入すれば一番便利だといふことである。實際S・A參謀長のロエームも亦、さういふ本來の希望を抱いてゐた。

だが、問題はさう簡單ぢやない。假令ヒットラーは意を決して國際聯盟を脱退したとはいふものの、それはドイツの自主的外交の基礎を確定したといふだけの話で、物の順序も立てないでヴェルサイユ條約を無視し、百萬のS・Aを悉くドイツの正規軍に建て直すといふことは、忽ち歐洲に大亂を引起すこととなる。

今一つは一國の強い軍隊には、それに應ずる傳統といふものがある。ドイツの正規國防軍も亦ビスマルク帝國の時代から養成されたプロイセンツームを中心として——假令戰敗後たつた十萬の數に制限されてゐたにも拘らず——依然として、一種の傳統的な魂を持續してゐるので、革命精神に燃ゆる政治軍隊をそのまゝ政争に超然たるべき正規軍に引直すといふことは、彼等國防軍の側から言へば技術的には不可能であり、道義的には許すべからざることなのだ。勿論ドイツの國家が今國民社會主義的なものになつた以上、軍隊がヒットラーに忠誠を誓ふといふこと、及びS・Aの中の舊戰線兵士を何等かの形で軍隊に復舊させるといふことは、考へられもするけれども……

「年齢も出身も不同であり、又もとは共產黨に屬したか、或は中央黨にゐたか分らぬやうな鳥合の衆を、そのまゝ正規國防軍に編入することには、技術専門の大臣たるの自分としては全然不賛成である」といふのが、國防相ブロンベルグの國防軍内全體を代表した意見であつた。

然し、S・A參謀長のロエームに言はせるとまるで違ふ。一體ヒットラーに政權を取らせた者はS・Aの力である。S・Aは國民社會主義國家を建設した股肱だ。それが今國民社會主義國家の國防正規軍となるのに何の不思議があるか？ その數の上から見ても、寧ろS・Aを固有の正規軍として、逆に在來の國防軍をこの中に編入するのが順序でなければならぬ。若しも問題が單に外交上の困難から來るといふなら、それはフランスなりロシアなりと妥協の途を講ずる方法はいくらでもある。それなのに原則上S・Aが正規軍たり得ないと斷定するのは、國內政策上の本末を顛倒するもので、畢竟それは國民的革命の完成と共に、S・Aの不必要を説く國防省と、外交問題を心配する外務省と、國民經濟的な經費の出し惜しみをする經濟省等（孰れも國民社會主義者以外の者が大臣となつてゐる場所）が、我々の存在を眼の上の瘤として、全然解散させてやらうといふ怪しからぬ魂膽から來るのだ。そんな餘計な邪魔物が介在してゐる間は、指導者ヒットラーの謂ふ「國民的革命」は終熄せりとの言葉は間違つてゐる。革命はまだ進行中だ！！

これ等の兩者の間に板挟みとなつて、苦しんだのはヒットラーである。ロエームは働ねて時々バ

イエルンの山莊に歸り、ブロンベルグは時々ヒットラーの前に辭意を洩らす鹽梅だ。そして一方ロエームの傲慢不遜の態度に反感を抱き、且つロエームが何を計畫するか分らぬといふことを薄感付いたゴエーリングは、頻りにヒットラーを説伏して、この際斷乎たる處置を執るべきことを勧めたのである。然し前にも述べたやうに、ヒットラーといふ人間は古い黨人に對しては極端な處分をすることを非常に嫌がる。彼は徹頭徹尾情誼にほだされ易い一個の親分だ。それは彼の長所でもあり、或は短所であるかも知れない。従つて、彼はロエームの考へには絶対に反對であるにも拘らず、一九三四年の三月頃から問題を未然に防ぐことをしないで、そのまゝする／＼に放つてあつた傾きがある。

然しロエームも亦、その際幾らか誇大妄想狂的な態度になり過ぎてゐた。S・A百萬の大軍は、彼の一令に依つていつでも動くものと過信し、同時にヒットラーの優柔不斷はヒットラー自身が國防軍の虜となつてゐる證左で、このまゝにぐづ／＼してゐると、必ずや延いてはS・Aに對する大鐵槌を下さねばならぬ破目に陥るだらう、といふことを餘りにも神經質に考へ過ぎた。その點で、彼は前宰相シュライヘーと同じやうに、「ヒットラー無き國民社會主義」の理想を心の中に描き始めたのである。

ロエームが顎でしやくれば、S・A百萬の軍勢が機械人形の如く動くと思へたのは、勿論彼の

幻想的な自惚に違ひない。然し彼にも亦、多少は生死行動を借にしようと契つた忠實な部下の有つたことは事實だ。それ等の連中は指導者が誰であるかといふことよりも、寧ろ何か事件の發生することをのみ、生命としてゐる舊戦線軍人の徒であつた。トロツキイの言葉を藉りて言ふならば、「久遠の革命」を頼りに生甲斐を感じてゐる徒輩なのだ。もとを質せばカップだつて、エーアハルトだつて、又ヒットラー自身だつて、その初めはかういふ徒輩を運動の原動力として出發してゐたには違ひない。彼等は血に飢ゑた永い間の習ひが性となつて、大戦が済んでも、まだ済んだやうな氣がしてゐないのだ。聯合軍といふ敵がゐなくなつたらポーランド人でも、チエツク人でも、ポリシエヴィキでも、平和論者でも、ユダヤ人でも誰でもいい。：「戦ふ」相手さへあれば、勇敢な活動を續けることが出来る。換言すれば彼等は血腥い戰鬪の存在する場合は、最も勇敢な兵隊である。だから「ゾルダート」といふよりは、「ゾルダートスカ」の精神の權化なのである。S・Aの運動には斯様な「ゾルダートスカ」が澤山ゐた。かういふ連中は、ヒットラーが「革命の終熄」を宣言して以來、不平悶々の情に悩んでゐたことは無理もない。勿論彼等は無賴不逞には違ひない。後にゴエッベルスが惡罵したやうに、同性戀愛や何かに腐り果てた墮落の生活を送つてゐたものかも知れない。然し彼等の輕率な、そして常に流血を希ふ如き行動は、單に私利私慾の動機からであつたと排斥するのは多少酷評に過ぎる。彼等の中でも、例へばベータ

ア・ファン・ハイデベック伯（S・A第二軍ボンメルン師指導者）の如きは、ヒットラーにS・A縮少の意あるを知つて、再革命の必要を信じ、部下のS・Aを武裝させるため、祕かにロエームに請うて金策を依頼した。然るにロエームにもそんな餘計な金がないことを知ると、忽ち自分の財産を全部投げ出して、自分は食ふや食はずでスエーデンから二千挺の機關小銃を購入してゐたといふ。かういふ捨身になつた我武者羅な奴等が、S・A中心の革命帝國を建設しようといふロエームの部下には、相當に多數ゐたことは事實だ。で、全國のS・Aが八個の「軍」に分れてゐたうち、第一（コーニヒスベルグ）、第五（フランクフルト）、第六（ハンノーファー）、第八（オーストリア）の四つは絶対にヒットラーに忠誠を誓ひ、その代り第二（ステッチン）、第三（ベルリン及びブレスラウ）、第四（ドレスデン）、第七（ミュンヘン）はヒットラーの國防軍偏重と「革命の終想」態度に、多少の不滿を抱いてゐたやうな形勢に在つたものだから、漸くとも叛將ロエームがS・A一揆の計畫を立てる限り、ドイツはこゝに未曾有の内亂狀態を示したかも知れなかつた。

そこで、かういふ緊張し逼迫した事情に直面しては、連がのヒットラーも腹に据ゑかねたと見えて、これ等の陰謀計畫者を根こそぎに叩きつける最後の決心をした。彼は六月の末にS・A全體に長期の休暇を與へて、當分その勤務地を退去させ、一方自分の股肱となつてゐる親衛のS・Sには嚴重な武裝を許しておいて、さて自ら少數の幹部を引具し、二十九日の夜中に西獨の一隅から

秘かにミュンヘンに飛行したかと思ふと、ロエーム一味のクーデター嫌疑者連に惨酷な私死刑を
與へたのである。同時にゴエリシグはベルリンその他に於て、國民社會主義の新平和政策を提
亂する者をその場に、或は有無を言はず逮捕して後に銃殺して了つた。その一揆計畫の具體的
内容は永遠の謎であつて誰にもよく分らないが、その遭難犠牲者の中にS・A參謀長ロエームの
外に、參謀部司令ユリウス・ウール、第二軍ボンメルン群指揮ハイデバック伯、第三軍總指揮兼
ベルリン及びプレスラウ群指揮ハイネ、同ベルリン及びブランデンブルグ群指揮エルンスト、同
オストマルク群指揮カッシュ、第四軍中央群指揮シュラーグ・ミュッラー、同ザクセン群指揮ハ
イン、第七軍總指揮シュナイドフリーバア等S・A幹部級の幹部級を網羅し、更にその外に、前宰相
シュライヘフ、カール、グレゴル・シュトラッサ以下數多の名士政客の名前が含まれてゐたと
とは事實であつて、後にヒットラーの發表に據ると、その犠牲者の數實に七十餘名に達してゐる。
この血腥い反クーデターの「蠻行」に依つてヒットラーは、世界の上品な紳士淑女から酷く不
評判な惡名を蒙つた。が然し同時にこれに依つて、(一)黨外の敵のみならず黨内の異分子を徹底
的に掃蕩し得たこと、(二)假令彼自身は優柔不斷の如く見えても、必要に應じてはどんな横紙破
りをやるか分らない、といふ恐喝的な威力を如實に見せたことに依つて、尠くとも國民社會主義
は、その中途の果敢の危機を巧みに脱出し得た譯である。

110. 「指導者」アドルフ・ヒットラー

一九三四年は、實にヒットラーにとつて一番大きな受難の年であつた。不愉快なロエム一揆^{ゾッテ}が鎮定せられて、まだ一ヶ月にもならぬ七月二十五日には、今にも世人の記憶に生々しい、あの獨逸首相ドルフスの暗殺事件が引續いたのだ。

この事件を轉機として、ドイツは當分オーストリアに對する合併の希望を封じられて了つたことになる。獨逸合併の理想は、別にヒットラーが偶然オーストリア人であるといふセンチメンタリズムから生れたものでも何でもない。又第一帝國（神聖羅馬帝國）が獨逸不可分の地域に建設されてゐたといふ歴史を辿る迄もなく、双方は民族的文化的に一身同體であつて、たゞハプスブルグ家末葉のバルカン化方針とビスマルクの西歐進出的な建國方針とが、暫く別々の目標を定め袂を分つてゐたに過ぎない。然るに今やサンジェルメシンの條約に依つて、オーストリアは舊獨逸帝國中の純然たるドイツ民族を包含する地域のみを孤守し、従つて經濟的には獨立不可能の小國に變つて了つたのだから、ヴェルサイユ極密條約に非常な拘束力がない限り、獨逸合併への傾向は如何とも仕難き自然の趨勢である。従つてヒットラー以前の、ワイマア憲法に忠實な政府でさ

へ、既にその實現を試みた程だ（二八年八月）。その頃は然しウルサイユ的拘束力が、まだ絶対に強かつたものだから、フランスの頑強な反抗を受けて、經濟的合同さへ實現の見込がなかつたのである。

そこでヴェルサイユ條約を初めから無視してかゝるヒットラー政府が、この合併問題に力を入れない筈はない。その準備として、勿論ヒットラーは極力、オーストリアの國民社會主義化に努めた。三四年春の形勢から言へば、オーストリア人の七割五分から八割迄は、國民社會黨の自由になると推算せらるゝ迄の情勢にまで漕ぎ付けた。由來オーストリアの戦後の歴史は、いつでも二三年後れてドイツの進む途に追従する形になつてゐたのだから、ドイツが今少し我慢して、對奧政策に慎重な態度を持してゐたなら、或はオーストリアはこの頃にもうドイツの一部分に繰込まれてゐたかも知れない。

勿論オーストリアには、小粒ながらも利かぬ氣の首相ドルフスがゐて、それが基督教社會主義といふハプスブルグ式シヨヴィニズムに燃え、従つて十九世紀式なビスマルク帝國の再來に幻想的な脅威を感じる餘り、頻りにイタリアの援助を受けて、オーストリア・ナチスの彈壓に努力し始めたといふ事實はあつた。それは當然、ドイツ國內のナチス黨員達、殊に血氣に逸るS・Aの連中を切齒扼腕せしめた。S・Aの連中に言はせると、今オーストリアに内亂さへ起せば、オー

ストリアは全部我黨のものだ：然るにヒットラーは優柔不斷で、革命の眞最中に平和を唱へたり、ムッソリニの御機嫌をとつたりなどして、事勿れ主義に終始するものだから、あのやうなドルフス輩に跳梁跋扈の機會を與へるのだと。

だがドイツではその時ヒットラーが、ロエーム一流の不逞の徒に猛然たる一撃を加へて、生々しい血潮が飛び散つてゐる瞬間なのだ。世界は上下を擧げて、ヒットラーの蠻行を攻撃し指彈してゐる。S・Aの中には、この極端な私刑に依り、恨みを吞みながらも眼を瞑つて黙つて了つたものも澤山あるだらう：或はハンノーファー軍のS・Aみたいに、終始一貫して、ヒットラーの一舉一動に絶對の忠誠を誓つたものもあるだらう：又ミュンヘンを中心とするオーストリアのS・Aのやうに、假令ロエーム一派は滅亡しても、なほS・Aの將來に望みを囑し、ヒットラーの次の態度に期待をかけてゐるものもある。さういふ複雑な事情の下に在つて、ヒットラーとしては、それ以上に進んでS・Aの革命氣分的な行動を、一から十まで徹底的に叩き毀す決心はつかないのだ。S・Aは元來ヒットラーの寵兒である。その寵兒に對して、彼は心ならざる鐵拳を加へた直後のことではあり、彼に忠誠を誓ふ一部のS・Aが、昂奮の血氣をドルフスに對する憎惡に集中してゐる意嚮を、頭から叱り飛ばすことの出来ない心境に迷つてゐたものと見なければならぬ。

斯くして事實はオーストリア・ナチスの極めて輕率な一揆となり、ドルフスはその犠牲として、

哀れ幽明その界を異にするし……同時にムッソリーニの豫想以上の嚇怒から、將に國際的な大紛争が起りさうに見えた。その結果ヒットラー政府はおとなしく陳謝的態度に出で、副宰相パーベン駐埃公使として、只管獨埃間の硬化した空氣を緩和することに維れ力めた。それで大勢はヒットラー外交の收拾すべからざる失敗といふことになつてゐる。然し事件はロエーム一揆の直後であり、ヒットラーの懊惱の疵がまだ癒えやらぬ心境の際に起つたことであるといふ、四圍の狀況から判斷して見ると、これはドイツ（従つてヒットラー）の外交懸引上の失敗といふよりも、寧ろS・A中のロエーム式革命一揆の精神が根本的に誤れること、従つて失敗はそこから起つたことを如實に物語るものである。畢竟するにドルフス暗殺事件は、ロエーム一揆の後産の苦しみであつたに過ぎない。ヒットラーも亦一つ非常にいゝ學問をした！

それからたつた八日の日を過ぎた八月の二日といふに、大統領ヒンデンブルグが溘然としてこの世を逝いた。

それは何しろ國家最高の元首の死であり、その上にヒンデンブルグそのものの個人的存在が、大戰以來の惡戰苦闘を共にした全國民の忘れがたない偉人の名であつたので、ドイツ國民は實際上下を擧げて哀悼の意を表し、それがため、つい昨日起つたロエーム事件や、ドルフス事件などは

殆ど忘れられさうな有様に見えた。同時に國民の眼は、一齊に「誰が次期の大統領たるべきや」の問題に向けられた。

内閣は緊急閣議を開いて大統領の後任問題を議したが、その結果、お鉢は宰相ヒットラーに廻つて來なければならなかつた。

かうして、當然ヒットラーはヒンデンブルグ亡き後のドイツ第三國家の最高元首——即ち大統領——となつた。尤も黨は彼を國家最高の裝飾物たる大統領に祭り上げておくのではなく、依然宰相としての國政を見る地位に置きたかつたのである。それでヒットラーは在來の大統領といふ名前を辭退し、「指導者兼宰相」といふ遠慮した名稱を採用したことになつてゐる。でも普通の人口に膾炙さるゝ大統領なる稱號には、僅か數ケ年も経てば又平凡に交代するやうなデモクラチクな觀念が附纏つてゐるのであるが、「指導者」と言へば表面は軽いやうでも、その内容には寧ろオリヴァ・クロムウェルの Lord Protector とか、ナポレオンの終身の Premier consul とも言つたやうな、絶對獨裁的な「鋼鐵の地位」を暗示するものと想像して差支へあるまい。

※

假令ヒットラーは彼の要望したやうに、國家最高の元首になつたとは言へ、一九三四年の後半は世間的な評判からいふと、一番悲觀すべき危機に在つたやうだ。

勿論彼には確信があつた。三三年の初夏に、過激な國民的革命を打ち切つて以來、静くとも二年は華々しい眼先の成功を怠がないで、徐ろに裏面に於て、革命後の消化工作に没頭してゐたのだ。その成績はやつと一九三五年の春頃から一例へば、軍備の整理及び強化といふやうな形で――現はれ始めたことは事實である。然るにその消化工作は極めて内面的で、世人の眼にはよく見えなかつたし、又國內では事實を質問し得る公開の議會もなく、政府の發表する正しい統計も無くなつたものだから、萬事が何となく暗澹で、陰慘で、不愉快に見えた。人工的デフレに依る輸出の減退：自給經濟に基く輸入の阻止：失業者減少率の進行遲緩なること：曰く清掃運動後に於ける黨内の紛争：曰く對境外交の失敗とドイツの孤立：等々種々表面に現はれた悲觀材料に依り、外國の新聞紙上ばかりか、國內の人心さへ恟々として、ヒットラー政府は實際正に累卵の上に立つてゐるのではないかといふ感じさへ懷かせた。一九三四年の十一月又は十二月頃の氣持が、特にさうであつたやうである。

或はヒットラーは故シュライヘー將軍の姪に射撃されて重傷を負うたとか、或はどこそこの會合で爆彈に見舞はれたとか、それが事實なら、ヒットラーの生命なんか疾くの昔に飛んで失くなつてゐるやうな、センサーショナルな報道が眞面目に信じられ、或はヒットラーは今に國防軍に依つて追ひ拂はれるであらうとか、ゴエーリングの野心がどうだとか、又はシャハトが新しく獨

裁の地位に就いて、ヒットラーは今年中にも虚位キョイを擁する飾物になるだらう……などの風評で、山雨將に至らんとする前の暗雲の光景を、世人は益んに描き出してゐたものである。

然るに翌一九三五年一月十三日に於けるザール地方の人民投票は、この疑心暗鬼ウソとカウサの雰圍氣を五月雨の直後の如く、スガ／＼しく霽はられさせ得た。ヒットラー自身も亦、これ等の人心の動搖を轉換するために、特に世人の注目をザール問題に集注させ、宣傳維れ力めた形勢はある。でもザール投票の結果がドイツに幸しなかつたと假定すれば、ヒットラー政府の立場は餘程悪くなつてゐたものと思ふ。運命はザールをフランスの手からドイツに還附せしめたのだ。それに依つて、その前の年のクリスマス頃、極端に不安だつた人心は殆ど眼に見えるやうに安定し、二月三月頃になると、ヒットラーの指導者たる地位は磐石はんよくの基礎に立つものの如く變つて來た。

その權威を利用して、彼は三月十六日には、突然ドイツ再軍備宣言を發表して、ヴェルサイユ軍事條項を事實上廢棄し、四月十一日の英佛伊間のストレーザに於ける對獨共同動作をさへ、物ともせず、又佛露軍事同盟に對抗する外交上の切札を、底氣味悪く振廻ふりまわし始めた。一九三五年六月十八日に於ける英佛海軍協定は、それに依つて獲得した對外的地歩の第一歩である。

二、ザールの勝利へ！

ザール地方の人民投票の壓倒的勝利は、確かにヒットラーにとつて亦ナチス政權にとつて、全く起死回生の効果を與へ、國民の疑惑や不安を拂拭するに充分であり、ナチス政權を不動のものとしたが、それに至る迄は決して天から降つたやうにこの幸運が待つてゐた譯ぢやない。如何にしてこのヴェルサイユ制體の羈絆を打ち破つてゆくべきか、そしてドイツ國民をして對外的に起ち上り得べき自信を持たすべきか、慘憺たる苦心が拂はれてゐる。失敗が繰返されてゐる。その失敗を踏み越えて、初めて到達した第一の福音が、このザールの成功であつた。

抑々、今日のドイツの復興と建設は第一次大戰のコンピエーニュの森に於ける休戰條約當時の決心、即ち「ドイツは戦争には決して負けてゐない：戦争はまだ繼續してゐるのだ」といふ悲壯な國民心理から出發してゐるのである。例へ共産主義や民主主義に毒されてはゐても、霧のやうに國民の心の底には、割り切れない氣持が漂よつてゐた。だからこの國民を率ゐて起ち上つたヒットラーの對外政策は、當然先づドイツの敗戦を烙印したヴェルサイユ條約、及びその體制を徹底的に排撃し、打ちのめす所から始められねばならない譯だ。

ヒットラー外交の出発點は、ヴェルサイユ條約の破棄行爲からである。

然しドイツが、輝かしい歐洲の覇者としての勝利と榮冠を得た今日から見ると、ヴェルサイユ條約の破棄といふことは、まるで簡単に造作なく考へられるが、それは當時としては大變な事柄であつたのである。由來ヒットラーの外交を英佛側では爆彈宣言と稱して、その外交の軌道から外れた横紙破りな點を、極端に嫌惡したものであるが、それは民主主義外交の常道から判斷して言ふに過ぎない言葉である。ヒットラーの爆彈宣言は、決して彼等が言ふやうな、無茶な横紙破りではなく、一步步理詰めに組立てられた周到なもので、正當な理論と理由のもとに、若し罷り間違へば何時でも實力を行使し得る、鐵の如き國民的決意をもつて裏付けられたものである。

ヒットラーが政權掌握後、最初に放つた外交的爆彈は、國際聯盟及び軍縮會議からの脱退であつた。一九三三年の十月、ナチス・ドイツの代表は、先づ國際聯盟の軍縮會議の席上――

「ヴェルサイユ條約でドイツの軍備縮少を規定したのは、列國がドイツの先例に倣つて、一般軍縮を實施する前提であつた筈ではないか。然るに列國はドイツにのみそのことを強ひて、毫も自國には眞面目に軍縮への意思を持つて居らない、従つてドイツ國も、亦當然列國並の軍事平等權を要求する權利がある……」

といふ提案を行つた。所が列國側は、假令ドイツの要求が理窟から言つて正しいと考へても、

今迄の成行から言つて到底その要求に應ずる譯に往かず、當然これを拒絶した。そこでヒットラーは十月十四日、遂に斷乎として、國際聯盟と軍縮會議とに脱退の通告を與へ、直ちに全國民の人民投票を行つて、これが單なるヒットラーだけの突飛な要求ではなく、今や全ドイツ國民の總意たることを世界に宣明した。

が、然しヒットラーは聯盟を脱退し、軍事不平等に挑戦して、最初の試金石に成功したとは言へ、未だヴェルサイユ條約を破棄するまでに機は熟してゐなかつた。従つてその機會が到來するまでは、先づ國內の改革と整備をし、ナチスのイデオロギーに則應した大ドイツ國建設の爲めの對外的工作の準備に没頭した。さうして大ドイツ國建設といふ大目的への行程としては、(一)オーストリアの併合、(二)ポーランドの廻廊地方及びメーメルの復歸、(三)ザール地方のドイツ領への編入、(四)フランスの怒りを避ける爲めにその新國境へ保障を與へる工作、等々當面の方針を確定して、その準備工作に取り掛つた。

ドイツの聯盟脱退は、日本の脱退に倣つたものであるが、日本の脱退によつて、その權威を著しく失墜した聯盟は、更にドイツのこの度の舉によつて、その弱體を暴露し遂には有名無實の存在と化して了つた。

扱てヒットラフは、以上のやうな方針の下に着々準備を進めた譯だが、この大問題が一朝一夕に解決し得るものではない。總ては力の問題である。力と言つてもそれは單なる武装力ばかりではなく、全體的な國力の問題である。國力が充分である限り、その國家の要求、意志の通らぬ筈はない。この意味でオーストリアの合併と、ポーランド廻廊の回收といふ最初の計畫は成功しなかつた。要するにドイツの國力が、それを成功に導くだけの強化發展を遂げてゐなかつたことにもなる。

先づポーランド問題では、ドイツが廻廊及びダンチツヒの回收を爲さんと決心した矢先、ポーランド側に先手を打たれて、却つて一時大讓歩をせねばならなくなつた。一九三四年一月二十六日、ドイツは暫く廻廊問題以下を不問に附して、ポーランドと不可侵條約を結ばざるを得なかつた。そして――

「獨波相互の關係に就いては、如何なる問題に拘らず直接協議し合ふこととし、協議不調の場合には、双方の合意により仲裁々判によつて解決を求むべく、如何なる場合にも武力は行使せず。」

といふのが獨波不可侵條約の内容であつて、その期限は十箇年と定められた。この條約は如何なる意味を持つかといふに、ドイツがこゝ暫くは、大ドイツ國建設の爲めの東方進出を斷念せねばならないといふことになるのだ。これは當時のヒットラフの方針から言へば、明かなドイツ側

の大譲歩である。従つてこの譲歩は當時のドイツにとつて、已を得ざるものであり、必ずしもヒットラー外交の失敗とのみ見ることは出来まい。何故なら、この不可侵條約は一方に於てポーランドへの進駐は阻止されたが、結果としては、他方に於て二つの方面に却つて道が開かれたからである。

その一つは獨逸條約によつてドイツがソ聯からの脅威を免れたことだ。當時のソ聯はナチス・ドイツにとつてまさに不倶戴天の敵であつた。それはナチスのイデオロギーの問題であるばかりでなく、當時のナチスの對外方針は東方進出であり、東歐からソ聯のウクライナに進出したい意思が多分に濃厚であつたからに外ならない。當時のヒットラーの演説は屢々その事を高唱してゐる。だから若しその場合に、ポーランドが廻廊及びダンチヒをドイツに回收される恐怖から、ソ聯と款を通ずるやうなことがあれば、獨逸間に一朝干戈が交へられる場合、ドイツとしては非常な苦境に立たねばならぬこととなる。そこでこの際、一時廻廊及びダンチヒ問題の鋒を収めて、ポーランドとの間に暫定平和を購ひ、それによつて東境からのソ聯の不意打を避けることが出来た譯だ。

その二はオーストリアの問題であるが、ドイツがかうしてポーランドと條約を結んで、東邊に於ける安全を得て置けば、後顧の憂へなく、専心オーストリア合併に没頭出来る、従つて同地方

の合併は比較的容易に成就し得るのではないか、さういふ考へから言へば確かに失敗は轉じて異つた形でドイツに幸すると見えた。

ところが問題は左様に簡單にはゆかなかつた。第一の對ソ聯關係は明かにドイツにとつて悪くはない、然し第二のオーストリア合併の問題は旨くゆかなかつた。それには勿論ドルフス首相暗殺事件といふ突發事件が起つたことも、事態を不利に導く原因ともなつたのだ。

大體オーストリア合併の問題に絡んで、ヒットラーは、それが成功の曉にはどうしても地理的に言つて、イタリアの國防の安穩を脅かす結果になるから、事前に一應イタリアの諒解が絶対に必要だと考へてゐた。だから一九三三年六月に先づ以てゴエーリングにローマを訪問させ、續いて三四年六月には、ヒットラー自身ヴェネチアに行つてムッソリーニと會談を行つた。會談の内容は不明だが、結果から判斷すると、ドイツのオーストリア進出の件に就いては、どうもムッソリーニは判然とした諒解を與へるまでには至つてゐなかつたやうである。

そこへ前にも書いたやうに突如として、ドルフス首相暗殺といふ大事件が起つたのだ。それはヴェネチア會談からまだ一ヶ月も経たない七月二十五日のことで、オーストリア内のナチス黨員がミュンヘンのナチス黨員と聯絡をとつて、ウィーンに於てクーデターを斷行し、反ナチスの首相ドルフスを血祭に上げてしまつたのである。今日では殆ど考へられないことだが、オーストリ

アの背後にあつて注意の目を瞞つてゐたムッソリーニは、この飛報を受けるや否や、直ちに三箇軍團の兵を國境に集結し、ドイツに對して運牒を發した。

「若しもドイツがオーストリアのナチス黨を救援する爲めに兵を出すなら、イタリアも同國內に出兵する用意がある！」と言ふのが、その内容である。

獨伊兩國間には緊迫した空氣が漲つたが、今こゝでこの意味でイタリアと事を構へることの不利を感じたヒットラーは、一時オーストリアの合併を斷念し、却つて暴動の首謀者を處罰して事件を圓滿に解決した。

最初のオーストリア合併の機會は、ムッソリーニの横槍で、かくて逸したが、最早オーストリアの運命は決定してゐた。それはたゞ時間の問題であり、國民の多數は合併を希望してゐたのにも拘らず、オーストリアの獨裁政府がこれを認識しなかつたのである。殊にドルフスの後を襲つて獨裁者の地位に就いた首相シュシュニングは、ドルフスの遺志を嗣ぐと言ふよりも、寧ろ復讐的な心理から、一層ナチス黨の擡頭を憚んで、必要なまでの彈壓をこれに加ふる政策を續けた。それは國內的には、却つてオーストリアの併合に拍車を加へる結果となつたのは當然である。かくして、若しヒットラーがムッソリーニと本當に諒解が成立しさへすれば、オーストリアの運命は最早知るべきのみ、といふ状態になつてゐたのである。

それは兎も角としてヒットラーのオーストリア合併の最初の試みは、かくて見事失敗に歸した。

このやうに、ポーランドの廻廊の回收、オーストリア合併問題と次々に、對外問題で手を焼いたヒットラーが、初めて華々しい成功を収めたのは、ザール地方の復歸問題なのである。

打ち続く對外問題の失敗、國民の間に漲る疑惑、陰鬱な空氣はドイツ國內に激んでゐる、政府としても面目上多少腐つてゐた傾きがあつたが、ザール地方の人民投票の成功……と言ふより幸運……は一舉にこの沈滞不安を拂拭した觀がある。この成功によつて、國民のヒットラー政府への信頼は不動なものとなり、國民の氣力も一氣に回復した。不思議なのはザールの成功後、ヒットラーは何をやつても成功せざるなしである。げに、ザールの勝利はヒットラー外交開運の第一歩とも言ふべき記念すべき出来事であつた。

此處で一寸ザールの問題に就いて説明すると——元來ザール地方といふのは、獨佛兩國境に跨がる面積僅かに約二千方呎の小地域に過ぎないが、良質の石炭を産出するので有名な地方である。前大戰でドイツからアルサス・ローレン地方をドイツから奪つたフランスは、是非ともこのザール地方も一緒に欲しかつたのである。といふのはローレン地方は有名な鐵鑛石の豊富な産出地であるから、その鐵鑛石でフランスが製鐵事業を起す爲めには、どうしてもザール地方の石炭が必要だつたからである。ところがヴェルサイユ條約は、ザール地方は十五箇年間國際聯盟の監理下

に置き、その後は同地方在住の人民投票によつて、同地方の歸屬をドイツなり、フランスなりに、或は現狀維持なり、いづれかに定める規約になつてゐた。そしてその間にドイツのシュトレーズマン外相は、フランスのブリアン外相と協調外交を行つて、ザール炭をフランスに提供する代りに、ザール地方をドイツに歸屬させるといふ諒解が、或る程度まで定められてゐたらしい。然るにドイツにヒットラー政権が成立してから後、フランス側のこれに對する態度は急に硬化して、ザールは絶対にドイツには渡さぬ、といふ態度を漸次濃厚に示して來てゐた。

一九三五年一月十三日が丁度その投票期日だ。ところが投票期日を前にして、俄然ドイツ合併反對論がこの地方に擡頭して來た、といふのは、元來この地方は炭鐵地域であるから住民は勞働者が多く、従つて住民は大體ドイツ人であるとは言ひ條、反ナチスの社會民主黨や共產黨が相當の勢力を占めて居り、加ふるに住民はカトリック教徒が多く、それにドイツ本國を追はれたユダヤ人も相當多く入り込んでゐたから、これらの手合の中から反對論が喧傳されたのである。

事態騒然たるものがあるので、聯盟でも捨て置けぬところから、イギリス、イタリア、スエーデン、オランダの四國より成る國際軍を派遣して、投票を監視することとなり、一方ドイツ側でも反對投票者を迫害せぬといふ公約を與へた有様だつた。

かくて當日人民投票は先づ公平に行はれたのであるが、蓋を開けると、幸運はドイツに微笑み

かけて、ドイツ側は豫期以上の大勝利を占めたが、反對に惨敗を喫したフランス側は豫期を裏切らるゝこと甚だしかつた。

この豫想外のドイツ側の勝利に聯盟も驚いたが、結局ザール地方全部をドイツに歸屬することを公式に承認した―これが若しヴェルサイユ條約締結直後のことであつたなら、假令ドイツ側が投票で勝つたとしても、何とかかとか理窟をつけて、ザールをフランスに歸屬せしめてしまふか、或は上部シレジアの投票の場合のやうに、獨佛兩國に分割せしめるやうな方法を探つたに違ひなかつたらう。然しこの時には最早聯盟には勿論それだけの實力はなく、それだけ反對にドイツの國力が無言の脅威けいゐを示してゐたことになる。

兎に角、ザール地方の歸屬は、ナチス政權を確固不動のものとしたことは事實である。

二二、矢繼早の爆彈宣言

ザールの爭奪戰に大成功を収めたヒットラーは、勢に乗じて矢繼早に得意の積極外交を開始した。先づ二ヶ月後のドイツの再軍備宣言の斷行がそれだ。

急々ヴェルサイユ條約破壊の本格的な爆彈外交が始められた—

一九三五年三月十一日、突如陸軍の再軍備宣言が行はれ、續いて十五日には空相ゴエーリングの名によつて、空軍復活が宣言され、更に翌十六日には宣傳相ゴッペルスの名のもとに、ラヂオを通じて、ドイツの陸海空一般に亙る再軍備が整備せられた旨の説明がなされ、震耳に水の英佛はじめ全歐諸國を驚愕させた。

見よ— ベルリンの蒼空には、いつの間に完成したか知れない六百機から成る堂々たる飛行編隊が、轟々たる爆音を立てて、悠々と飛び交うてゐるではないか！ これらの空の精銳はいつの間に出來上つてゐたのか？ 英佛の新聞記者連が色を失つたのも無理はない。彼等は早速航空省に駆けつけてゴエーリング空相を訪問した。

「一體ドイツはこの再軍備を發表する以前から、祕密に軍事飛行機を匿してあつたのではないの

ですか？　どこか郊外の森の中へでも？」

とせき込んで訊ねれば、ゴエーリング空相はその便々たる腹に波打たせながら、破顔一笑して悠然として答へる――

「冗談言つちや困る。みんな宣言後に新しく作つたのださ。」

「だつて六百機の飛行機を、十日やそこらで新造するのは神様だつて不可能でせう。」

「いや出来る、出来るよ、君達はドイツ工業の運河制度なるものを知らんかね？　運河を掘るのに、河の水を漸次に引きながら掘り進むなんて、そんな馬鹿なことはせんぢやらう。先づ水と水の中間の乾地に運河を掘つておいて、愈々落成となつた時に兩端の堰を切つて一度にとつと水を流し込むだらう。それと同様さ、ドイツ空軍の飛行機だつて、その部分品は皆國土計畫に従つて全國へ系統的に分布してあつたのだ。そして最後の一瞬間にそれを組立てりや宜かつたのだ。今までのドイツの工業潛勢力が、九分九厘九毛までバラ／＼に作り上げておいたものを、さあ再軍備だぞ……といふ瞬間に、その残りの一毛で組立てあげたのが、あの六百の戦闘機さ。どうだ分つたかね？」

「すると今迄のドイツの平和工業の尤大な躍進は、要するに時が來れば、軍需工業へ乗替へるためのものだつたんですね？」

ゴエリリング空相はこの間に對して、傲然と嘯いたものである――

「知れたことさ。これからの戦争は舉國一致の戦争だ。全國民がたとへ女でも子供でも戰士として立てると同様に、ドイツの物資の生産は總て戦争のために、何時でも動員し得るのだ。ドイツには平和工業などといふものは無い。戦争の時に役立たぬ平和工業なんてものは、わが國に於てはその存在が許されぬ。戦はぬ時は平和工業さ。戦ふ時はそれがそのまゝ軍需工業さ――」

*

*

*

かくしてドイツは「即時義務兵役制を復活す」といふ至極簡單な宣言を投げつけて、ヴェルサイユ條約第五編のドイツ軍備制限の規定を破棄して了つた。

この徴兵令によれば、一九一四年生れの男子は總て四月一日を以て徴集の上兵役に編入され、二十歳から二十五歳に至る男子は補充兵、二十五歳から三十歳の男子は豫備役に編入されることと規定されてゐる。その結果ドイツの平時軍隊は十二箇軍團、三十六箇師、兵數五十萬と直ちに發表された。それから數箇年後の今日、ついこの間まで僅か十萬の軍備しか持たなかつたドイツはその常備軍だけでも百萬と云はれ、世界第一流の軍備國、歐洲最強の陸軍と言はれるに至つたのだから非常な躍進と言ふべきである。

然し、ドイツのヒットラーのこのやうな猛烈な起ち上りは、列國に多大な衝擊を與へない譯がな

い。聯盟を脱退してから僅か一ヶ年半の間に、多少の失敗はあつたとしても、兎に角ザールの奪回、再軍備の實施によつて、まさに意氣天を衝く勢を示して來たのだから、ドイツの復興に狼狽し、その傍若無人の行動を憤慨する諸列強の嫉視と、復興ドイツに脅威を感じる諸小邦の恐怖からドイツは暫時憎惡の的となつた。この時程ドイツが四面楚歌の環境に立つた時はない。國際的には全然孤立の地位に立たされて、随分酷い苦汁を嘗めさせられた。この對外的苦境時代こそヒットラー外交にとつては、誠によい試練であつたには相違ないが、當時のヒットラーもその八方塞りの間の中に立つて、相當に悩み苦しんだものである。

國際關係を説明すれば、先づヒットラーがドイツと同様現状打破國なりと見て、最も提携して行きたかつたイタリアが、ドルフス首相暗殺事件以來、冠を枉げてしまつてゐる。一方ソ聯はと見れば、獨波不可侵條約の締結と、ソ聯邦の提案にかゝるバルト諸邦不可侵條約提議をドイツが賛成しなかつたことに原因して、これ亦徹底的な反獨的となつてしまつた。西境フランスは、これは徹頭徹尾ドイツを不倶戴天の敵とみて、折あらばと常に狙つてゐる。一九三四年二月、新たに佛國外相となつたバルトゥーは、東歐ロカルノ體制がドイツの反對に逢つて毀れたのに憤慨して、新たにドイツを包圍する外交態勢を講じ始めた。先づ同年九月、ソ聯を誘つてこれを聯盟に加入させ、その後英佛を誘つて反獨陣を結成しようと努力してゐたが、彼は業半ばにしてマル

セイユで非業の最期を遂げた。ところが彼の遺業を嗣いで立つたのがラヴァルで、彼が三五年一月イタリアとローマ親善條約を結んで、イタリアにエチオピア攻略の默認を與へ、更にイギリスと防空援助條約を締結した矢先、その三月にヒットラーが再軍備の爆彈宣言を行つたのだ。そこでラヴァルは時を移さず英伊を誘うてストレーザに會談し、東方ロカルノを協議した上、オーストリアの獨立保障に關し條約違反者の制裁方法を決議した。

従つて英佛の意を受けた聯盟は、四月十九日對獨經濟制裁案を可決して、ドイツをして重圍の裡に陥らしめたのである。尤もこの制裁案は形式だけのもので實施の方法がなかつたのではあるが。然しそれよりも一段とドイツを苦しめたものは、フランスが更に執拗にドイツを難關に陥れるために、同年五月二日ソ聯との間に相互援助條約を締結して、東西よりドイツ扶撃の態勢をとつたことである。そのソ聯はチュコスロヴァキアとの間に同様の條約を結んで、ドイツを二重に牽制してゐるのだ。

かくして、勇敢にも再軍備の爆彈宣言を投げ付けて起ち上つたヒットラーは、こゝに列國の重圍の中に沈吟せざるを得なくなつた。

三、ライオン進駐

由來ドイツの外交と言へば、昔のプロシアのフリードリッヒ大王やビスマルクの時代はいざ知らず、それ以後舊帝制時代より共和國時代へかけてのドイツの外交とか宣傳は、それこそ拙劣の標本の如く言はれて來たものである。それがナチスが政權を獲得してから後の、所謂ヒットラーの外交なるものは、極めて鮮かであつて、殆ど往く所可ならざるなき成功振りを示すやうになつた。と言つてヒットラーといへども初めから、斯く卓越した外交家であつた譯ではない。追ひ詰められた苦境の中にあつて、如何にしてこの苦境を打開すべきか、幾度かの苦痛と懊惱あうなうの底から鍛へ上げ鍊り上げた結果なのだ。それは自然に創造された外交術である。

さて國際的苦境と列國の重圍の中に立つたヒットラーは、何とかしてこれを突破せねばならぬ、ところが彼は此處で意外な手を打つた。先づ五月二十一日の國會に於て、誠に驚くべき協調的な外交演説を行つたのである。しかも世間が、それをヒットラーの口先だけの平和論だと批評してゐる間に、一月も経たない一九三五年六月十八日には、實際にイギリスと海軍協定を結んで、ドイツは對英三割五分の海軍力しか保有する意思がないと公約して、イギリスを持ち上げて大變

な花を持たせた。

ヒットラーはかうしておいて、歐洲の反獨的武裝諸國に氣拔けの感を與へ、彼等相互の間に辻の探り合ひや、嫉視反目その他一體如何なる作用が起るかを暫く靜視し、その上で好機を擲んでこれを切り崩さうと考へたのだ。同時にヴェルサイユ條約破棄に、最後まで反對を唱へるイギリスに對し、一〇對三・五といふ明かに有利な海軍協定を押しつけて、有耶無耶の間に軍事條項破棄の合法性を、イギリスに認めさせて了はうとしたのである。

ヒットラーの狙つた的は見事に的中した！

佛伊はイギリスのこの態度を見て大いに狼狽し、その裏切的行爲を難詰し始めたのみか、佛伊自體の間にも間隙が出来るといふ有様だ。さすが老獪なる英國もこの有様を見て多少面目なしと感じたものか、自分が完全にドイツの味方となつてゐるのではない、との證據を見せるためと、佛伊の調停を計るために、ドイツの積極行動を抑へるとの口實の下に、東歐ロカルノ條約の締結を慫慂し始めた。「ドイツの現状打破的態度は、歐洲列強の等しく許すべからざる所である：宜しく歐洲列強は、嚴正なる現状維持を必要とする」といふのが、その理由であつた。

こゝに至つてヒットラーは窃かに北叟笑んだ。萬事が想ふ壺に嵌つて來たのだ。イタリアが現状維持に満足してゐないことは、ヒットラーのよく知つてゐる所である。「然り、イタリアをして

エチオピア攻略に向はせるやうにしよう！ さうすれば、西歐は明かに現状の維持と打破との二つの陣營に分裂する……」

一九三五年十月三日を以て、イタリアは愈々エチオピア戦争に乗り出した。ところが、この戦争によつてストレーザ會議の盟友であつたイギリスは、實はイタリアの正面の敵であることが分つたし、暗黙のうちにイタリアのエチオピア攻略に諒解を與へてゐた筈のフランスが、案外煮え切らず、寧ろイギリスの味方であることが判然として來た。

かくて折角舉國的決意を以て、植民地獲得戦に乗り出したに拘らず、イタリアは一切の盟邦から捨てられて、孤立の地位に立つてゐることを自覺した。

この時である。「それ見たことか言はぬことぢあない。現状打破國が現状維持國と手を握つて策動してゐたことが、初めから間違つてゐる……」と許りにヒットラーは、イタリアのエチオピア戦に對し、陰ながらの援助を送つて、ムッソリーニの成功を祈つたが、その時ほどムッソリーニが、ヒットラーに感謝の心持を懷いたことはない。尠くともムッソリーニとしては「結局イタリアの唯一の盟友はドイツである。そのドイツのオーストリア併合に反對したのは誠に相濟まなかつた！」といふ氣にならざるを得なかつた。

エチオピア攻略とともに、歐洲列強はイタリアの横紙破りの行動に憤慨し、その緊張した神経

を地中海の南方に集中し始めた。北の方は全然お留守である。

時分はよしとばかりヒットラーは、一九三六年三月七日、ライランドの進駐とロカルノ條約の破棄といふ殆ど劇的に近い爆彈宣言を行ひ、突風のこれを斷行した。

新しい徵兵令によつて物々しく機械化されたナチスの若き武夫^{いふいふ}たちが、重砲牽引車と重戦車の爆音物凄く、堂々としてライン河橋を西に越えた瞬間に、ヴェルサイユ條約の一切が墓場の中に永遠に葬り去られたのだ！

呆氣^{あき}にとられた英佛が手を施す術もない程の敏速さである。新興ナチス・ドイツの響効^{きうけう}たる氣概と底力に對して、世界は漸く眞面目に目を醒^さり、驚愕し出した。

二四、日獨伊防共協定へ！

最近代の歐洲史の最も悲惨なる頁は、一九三六年七月を以て始まり、四年に亘つて繼續されたスペインの内亂の記述をもつて掩はれるに違ひない。同胞相殺戮して古い歴史を持つた故國スペインの美しい山野を荒廢に歸せしめたこの内亂は、實に歴史の必然が生んだ世界の時代様相の縮圖であり、來るべき世界大動亂の前哨戰でもあつた。それはスペインといふ土地と人民を舞臺にして戦はれた世界の二大陣營の血塗の戦ひでもあつた。この内亂を通じて我々は、行きづつた世界の趨勢が、この後何處に向つて動いて行くか、看取することが出来る。

この内亂の勃發とともに、歐洲政局のコンスタレーションは益々明瞭なものとなつた。先づエチオピア攻略戰を契機として結ばれた獨伊の因縁は、この内亂によつて、スペイン國民革命軍のフランコ將軍を共同で援助することとなつた。

スペイン政府軍は、現状維持を建前とし、國民革命軍は勿論反共產主義的な現状打破に向つて進む。然るに獨伊がその後者を援助し始めたのであるから、ソ聯は躍起となつて政府軍を援助し、英佛も亦ソ聯に倣つて政府軍に物的人的の聲援を與ふることとなつた。斯くの如くしてスペイン

の内亂を契機として、歐洲大陸は完全に現狀維持と現狀打破の兩陣營に分裂した—と言つて現狀打破を國是とするドイツとイタリアとが、エチオピア戰、スペイン内亂を原因として、急激に緊い握手を交した譯ぢやない。それにはもつと深い理由がある。單なる世界情勢的な事件を切掛として、示威的に行はるゝ急激な握手は、割合に毀れやすいものだ。所詮は二つの國家が、その將來の共通した運命を見定めて、相手の立場をよく諒解し合ふ所に、本當の提携がある。この意味から言つて獨伊兩國が肝膽相照の間柄になつたのも、矢張りさうした共通の運命を共感し、必然の筋道によつて到達した結果なのだ。

かうした獨伊兩國の接近を具體的且つ意識的にしたものが、一九三六年七月十一日の獨墺政治協定であつた。これはムッソリーニ首相の斡旋に基いたもので、「獨墺兩國は相互にその獨立を保障し且つ經濟的親善關係に入るべし—」といふ協定であつたから、表面的に見るとドイツには有難迷惑な束縛のやうであるが、實は中々さうでない。要するに今迄オーストリアに實權を握つてゐたイタリアが、全然同國から手を退いて、その覇權を全部ドイツに譲つてやつたこととなる。従つてドイツとしては獨墺合併が却つて可能となり、然も合併後の獨墺の背後には、イタリアがこれを援助する形で控へてゐるといふ形勢となつたので、ドイツの國際的地位は、この獨伊の接近によつて、實に盤石の重味を加へた譯である。

そこで初めて視野の擴大された聰明なるヒットラーの眼光は、東方の曠野に向けられた。そこには共產主義のメッカたる赤都モスコウがある。このモスコウの指令によつて、十數年間ドイツ民族の魂は蝕ばまれ、新たなる友邦イタリヤ民族も亦、その有毒思想に反撥心を起して、ファシズムを樹立したのだ。然もその共產主義者は「ヤヌスの面」の如く、コミンテルンとソ聯外交なる表裏二元の面を持ち、政治思想戦と武力戦との使ひ分けをして、或はドイツの本體背後を威嚇し、或は自らの敵たる自由主義國及び聯盟と結んで、世界の外交界からドイツを放逐せんとし、或はその魔手を遠くスペインの内亂にまで延ばして、人民戦線の普及に力め、世界の民族的覺醒に更生せんとする國家の扼殺を謀つてゐるではないか!!

一九三六年九月、ニルンベルグのナチス黨大會に於て、ヒットラーは全世界に向つて、平時の國際關係では殆ど見られないやうな痛烈な惡罵を以て、ソ聯攻撃の有名な大演説を敢てした。即ちソ聯は新しく立つた民族覺醒の諸國より成る十字軍を以て粉碎されざるべからず……といふのが彼の演説の主旨であつた。

然らば今日の世界に於て、このソ聯を粉碎するに足りる威力―即ち武裝力に於ても、精神力に於ても、共に優秀なる實力―を完備した國家はどこにゐるか? ドイツは勿論自ら起つであらう。而してこれに呼應して起ち得る國は―それは極東の島帝國日本あるのみだ! 然り、この東西の

二大強國が相結んで起ち、ソ聯を東西挾撃によつて、北氷洋の彼方へ追放して了はなければならぬ。かういふ意味で成立したのが、一九三六年十一月二十五日に調印せられた日獨防共協定である。この協定は約一箇年の後、イタリアを加へて日獨伊防共協定の形式となつたが、勿論これは未だ軍事協定的な性質を持つたものではなく、純然たるコミンテルン排撃の國際倫理的文化的な取極めであり、然もその後それが本當の三國同盟の形を執るに至るまでは、三箇年半の迂廻と難航とを續けたものであるが、然し尠くともこの防共協定によつて、ドイツの歐洲に於ける復興戰は一躍世界政策の舞臺に上り、同時に單に「極東を護る」一點に國是の基調を堅持して來たわが日本帝國も亦、より大なる理想と使命のもとに、現状打破の一面を通じて、世界政策への魂の躍動を感じるに至つたのである。東亞新秩序建設がより具體的に東亞共榮圈の確保へと前進したは、この日本の理想實現の筋道に外ならない。

さてこの歴史的な日獨防共協定にイタリアが参加するまでには、多少の波瀾曲折はあつた。何しろ日獨防共協定はたとへ文化協定であるとは言ひ條、それはソ聯にとつては非常な脅威であつたに違ひない。文化協定であるなどと言つても、それは何時軍事的な協定に形を變へるか分らない。文化協定の名のもとにジワリ／＼と締め付けられ／＼と締め付けられるほど薄氣味悪く、その東西からの二大強國の挾撃を避けるためには、ソ聯としては否が應でも英佛の力を利用して、こ

の協定が持つ壓力から脱するより外なかつたと同時に、何よりも先づイタリアをドイツ側から引離さねばならない……そこにソ聯の暗躍が始まつた。一九三七年の冒頭、駐英ソ聯大使マイスキの耳打ちによつて領いたイギリスは、片手に黄金の音をガチャ付かせながら、辭を低うしてイタリアと地中海現狀維持の協定を匂々として取極めて了つた。これによつてイタリアは當時、或はドイツを離れて、その儘イギリスと接近するのではないか、との疑惑の目を以てその動向を云々された。然しそれはイタリアの本質ではなく、スペイン革命軍を援助して意の如くならず、一方軍備擴張とエチオピア戰の傷痕と負擔で、財政的にも不如意となつてゐた爲めの暫時の息繼を必要とした結果であつた。

その邊の消息を洞察したヒットラーは、イタリアのこの一時的な方向轉換を氣に留めず、誰にも頼まれもしないのに、義勇軍と稱して正規兵多數をスペインに送り、又袖珍戰艦を地中海に游弋せしめて、スペイン革命軍に参加せるイタリア軍を鼓舞勇躍せしめ、同時にソ聯のスペイン政府軍援助の軍需輸送船を威嚇するの態度を示したりした。然もその年の五月三日には、外相ノイラート男をムツソリーニ首相の許に派遣して、

「今イタリアは中途半端で疲れてはいけない……イタリアの運命はドイツの運命である……今後獨逸兩國は不干渉委員會を作つて協同動作をとり、お互に相手に通告しない單獨外交は決してやらな

いこと……われ等の共同の敵はソ聯とイギリスとフランスである……そのためにわれ等は車の兩輪を結ぶ樞軸フックの如き聯絡を持つ必要があるだらう」

と説かしめて、遂にムッソリーニ首相の感激的な賛成を得、茲に所謂ベルリン・ローマ樞軸なるその後の歐洲政界に壓倒的な力を振ふ鐵鎖が出来上つた。それが一方日獨防共協定と一脈の關係を保つて、兩々相對しつゝ世界に於ける現状打破國家群を、總括的に吸引するマグネットの役割を果しつゝ、民主々義國家の支配力を次々と壓殺するに至つた。

このやうにスペインの内亂を契機として成立したベルリン・ローマの樞軸と、日獨防共協定との威力は全體主義國家、即ち現状打破主義國家を敵視する民主々義國家、即ち現状維持國家の足並みを酷く亂した。元々民主々義の國家間の關係は、相互に相互の肚はらの中を探り合ふやうな利己的な自分だけを擁護する算段と、自分はなるべく勞せずして、他の友邦をして火中の栗を拾はせるやうな責任轉嫁てんかとにのみ汲々とするのが常態である。だからベルリン・ローマの樞軸が出来て以後、これに對抗するために、ロンドン・パリ樞軸とか、或はパリ・モスクワ樞軸などと新聞報道が書き立てるやうな關係の下に、これ等の民主々義諸邦の政治家の往來や文書の交換は頻繁ひんぱんに行はれたが、勿論彼等の間には、獨伊樞軸の如き判然とした共同の目標などある譯がない。又これに携つた英佛の政治家にしても、チェンバレンにせよ、ダラディエにせよ、油の乗つたヒット

ラアヤムツソリーニ、その他ナチスやファッショの諸外交官に比較すると、到底新時代を背負ふ政治家としての氣魄きはく、潑刺性はくしきがなく、まるで見劣りがする。鋼鐵の意思を以て決然たる態度を執り得る底の人物が、情けないかな見當らない。それは前の歐洲大戰に勝つた所謂「聯合國」側のデカダンを示す以外の何物でもない。

イタリヤが防共協定に参加したのは、一九三七年十一月十八日であつた。

二五、チエコスロヴァキアの潰滅

苦境の中から起ち上つたヒットラーの外交術は、綿密にして周到な用意と、斷乎たる決意と、電撃的な素早さをもつて、相手の意表に出るを得意としてゐる。だから、それは時に所謂外交の常道などを全く無視した天馬空を行くの概を示し、又想像を絶する新^{あらた}手となつて相手の度^{ほど}膽^{だん}を抜いて躍若たらしめる。

苦しい體驗を積んで敵の虚を衝くことの妙味を感得したヒットラーは、一九三八年三月十一日、突如オーストリア政府に對して最後通牒を發して獨逸の合併を要求し、シュシュニツグ獨逸首相がこれを拒絶するや否や、大軍を發して怒濤^{どたう}の如くウィーンに進駐せしめた。否も應もない、シュシュニツグ政府は一瞬にして消え去つた。そして四月十日には、湧き上るハイル・ヒットラーの歡呼^{かんぷ}と鉤十字の旗の波の中で人民投票を行つて、合併が人民の壓倒的な意思であることを中外に宣言した。ヒットラーの年來の宿望^{しゆくぼう}たるドイツ民族統合の巨歩は踏み出されたのである。

抑々^{さうさ}この獨逸合併は大ドイツ國實現の重要な部分であり、ナチス政權獲得以前からの兩國の切實な願望でもあつた。否、オーストリアはドイツ民族の母國であり、同時にヒットラー總統の故

國でもある。従つてこれをドイツ國から分離獨立させておくだけの歴史的理由と、ヴェルサイユ條約の保障とがなくなつた瞬間に於ては、兩國が一に歸することは到底阻止し能はぬ自然の趨勢であつたことを理解しなければならぬ。

かくして最早ナチス・ドイツの前には、大ドイツ國建設の理想へ向つての進撃に次ぐに進撃があるのみだ！

そこで次の問題は？ 當然チェコスロヴァキアといふ無理に捏ち上げられたヴェルサイユ條約の人造國家の崩壊を豫想しない譯に往かない。チェコの問題は、それが單に獨逸合併によつて、チェコ自體がドイツ民族から環狀に包圍される有様となつたので、その存在が不便且つ無意味になつたと言ふばかりではない。寧ろ反對にドイツ側の生死の問題として、その存在が一日も許されなくなつたのだ。といふのは地理的にその頭をドイツの心臟部に突込んだチェコの地形が、その同盟國たるソ聯の空軍基地となつてドイツを脅威し、又聯合國のドイツ侵入にとつて一番都合よい場所に變じて來たからである。然もその國內には純然たるドイツ民族たるズデーテン人が、國際ユダヤ化したチェコスロヴァキアの人民戰線的政府から、酷い虐待を受け始めたのである。最早一刻も猶豫出來ないと見てとつたヒトラーは、ズデーテン人たるヘンラインが率ゐるズデーテン・ナチス黨に指令を發して、ズデーテン地方のドイツ國への合併工作を謀らしめて置い

て、これに反抗の態度を示さうとしたチェコ政府の機先を制し、一九三八年九月、ズデーテン全部の地域の割譲を要求した。

これには流石に英佛は驚いた、呆氣にとられた、ドイツが獨逸合併を行つたのはつい昨日のことだ。時は恰も英佛雙方の間に意思の疏通が不充分であり、然もフランスは人民戦線問題を中心として、國內で盛んに相刻が行はれてゐる場合である。ヒットラーは巧みにその機會を捉へたのである。

そこで英國首相チェンバレンは、兎も角もヒットラーの「餘りにも凄じい積極行動」を遠慮させるため、二回に亘つて單身ドイツにやつて來たが、遂にヒットラーの意を動かすことの不可能なるを覺つた。第二回目のドイツのゴースブルグに於てヒットラー總統と會見した時は、英獨の意見は正面から衝突して、平和は遂に決裂するかの如き状態を示した。その時ムッソリーニ首相がその間に入り調停役を買つて出て、その結果同年九月、英(チェンバレン)佛(ダラディエ)伊(ムッソリーニ)獨(ヒットラー)の四首腦者がミュンヘンに會し、所謂「ミュンヘン會談」が開催されて、歐洲の暫定平和方式が協議された。然も結果はヒットラーの要求通り、ズデーテン地方は正式にドイツの主權内に編入されることが確認され、チェコスロヴァキアはその領土が削られたまゝ犠牲となつて、泣寝入りの形で放置されざるを得なくなつた。

然しチェコスロヴァキアとしても、既にズデーテンをドイツに引渡した以上、もう當分はヒットラーの「積極的進出」がないものと信じてゐただらう。なぜならミュンヘン會議の決議は、英佛がドイツに對して許容し得る最大の最後の限界を示したものである。だから一般には、若し今後ドイツが、その限界を越えてチェコに手を入れるやうなことがあれば、今度こそはイギリスが黙つてゐないのみか、軍事同盟の相手方たるフランスとソ聯とが、東西からドイツを挾撃してくれるだらうと、極く樂觀的に淺薄に考へてゐた。従つてズデーテンをドイツに引渡した後のチェコには、到る所に反ナチ스의空氣が漲り渡つた。が、事態はそんな生易しいものでなかつたのだ。

一方ヒットラーはミュンヘン會議の空氣から推察して、聯合國側の歩調が全然揃つてゐないこと、チェンバレンの鎮撫政策の背後には實力をもつてドイツに當るといふ決意と自信がないこと、反對にドイツ側にはムッソリーニといふ有力な聲援者のゐることを確信してゐたから、辛うじて生き残つたチェコスロヴァキアの思ひ上つた反ナチ스의態度を、そのまゝ放置しておく筈はなかつた。

ミュンヘン會談が終つて約半歳の後、ヒットラー總統は、チェコスロヴァキア共和國内に自治を許されたスロヴァキアの中に、ナチ스의傾向のある政黨を結成せしめ、その勢力を扶けてスロヴァキアを獨立させる計畫をたてた。その情勢を見てとつたチェコスロヴァキアの大統領ハーハ

も、遂に萬事休すと覺悟せざるを得なかつた。スロヴァキアがナチス化され、然もそれが獨立するに至つては、チェコだけ孤立してやつて行かれる筈がない。然も周圍の形勢から判斷するに、英、佛、ソ聯の何れもが、一切の責任をとつてチェコのためにドイツを押へ付けようとして起つ冒険を敢てするとは見えない。

かくしてハーハ大統領は、三月十五日ヒットラー總統と會見し、チェコスロヴァキア共和國一切の處置を、ヒットラー總統に委せた。そこで同日ドイツ軍はチェコ領内に喊聲かんせいを擧げて進駐し、その結果ボヘミア、モラヴィアはドイツの保護州となり、スロヴァキアは自治を許された保護國、ルテニアはハンガリー領といふ工合に、一瞬の間にこれを分割し整理して了つた。要するにヴェルサイユ條約の副産物として、聯合國によつてドイツ民族復興阻止そしのために創立されたチェコスロヴァキア共和國は、二十一歳の齡よはひまだ畢おひらぬうちに、この地上から冷たく死滅したのである。戦争の實力と決意を擁するヒットラーの積極行動は、今や完全に英佛の無力化を白日の下に暴はげ露せしめたのだ。

二六、獨ソ不可侵條約とポーランド殲滅戰

オーストリアの併^{フシユス}合から、ズデーテンの割讓へ、ズデーテンからチエコスロヴァキアの解體へと一舉に進んで、今やドイツにとつて恢復すべき殘る失地は、たゞリトニアに併合されてゐるメーメル地方と、ポーランド領となつてゐるダンチヒ形式上は獨立地域となり國際聯盟の監視下にあつた^{コリヂル}ー及び廻廊地帯とである。

ヒットラー總統は息をもつかず進撃する！

チエコ全體の無血併合を完成した後、まだ一週間も経たないうちに、ドイツ政府は「メーメル地方のドイツ人が、同地方のドイツ本國への復歸を自發的に希望して來てゐる、政府としてこれは棄てて置けぬ」といふ發表をするともに、メーメル^{ヒンタール}の主權國たる弱小リトニア共和國などには勿論文句も言はせず、その儘同地をドイツ國領内に併合して了つた。更に一方、大ドイツ國の後背地を確保強化する意味で、ルーマニアとの間に有利な經濟協定を締結し、軍事上の特權を獲得しておいて、用意はよしとばかり突如ポーランドに向き直つて、先づダンチヒの返還、それから東プロシアの飛び地とドイツ本國とを結ぶ鐵道敷設を要求したのである。この要求は到底

ポーランドにとつて首肯し難いものであることは餘りに明瞭である。なぜと言へば、若しこの要求が容れられれば、ポーランドは地理上から言つて、一國家として實際的な存立の價值を失つて了ふからである。そのポーランドの背後にはイギリスがある。第二次歐洲戦争の危機はポーランドからと言はれる理由が其處にあつた。だから常識としてヒットラーが單に威嚇的要求ではなしに、本當に實力的手段を行使してまでこの要求を貫徹するとは、まさかと考へられてゐた。然しヒットラーの決意は強硬である。

かうなるとさすがのチェンバレンも、事ポーランドの興廢にまで立ち至つては、これをその儘に放置しておく譯にゆかぬ。それは單にポーランドの興廢に關するのみならず、大英帝國の威信の問題である。そこでヒットラーの歐洲制覇の野望を阻止せねばならぬ、とばかり對獨包圍陣が結成された。

即ち、英佛兩國は、即時ポーランドと相互援助の軍事同盟を結び、遠くギリシア、ルーマニアに對する獨立の保障を確約し、更にトルコとこれ亦相互援助の諒解を遂げ、最後にソ聯抱き込み工作にとり掛つた。

然しかうした筋道はヒットラーにとつては覺悟の前である。そこでヒットラーは、これに對抗するために、一九三九年五月イタリアと本格的な攻守軍事同盟を締結し、また一方に日獨伊樞軸

の強化を促進して、英佛ソの對獨共同戰線結成の阻止工作を續けた。

イギリスの對ソ工作は急には進展せず、數箇月にわたつても英ソの對獨政策の交渉は意見の一致を見なかつた。イギリスはソ聯に對して、若しソ聯が共產主義の年來の敵たる獨伊ファシ・國家群との戦ひに参加してくれるなら、資材でも兵器でも何でも、擧げてソ聯を援助しようとするに對して、ソ聯が中々首を縦にふらないのである。然しソ聯としては勿論輕々にイギリスの申出を受け容れられない理由がある。それはこの場合、ソ聯は何も自ら好んで戦争をする必要がない。殊にソ聯の世界政策の建前は、尠くとも資本主義國家同志を戦はせることにある。だから英佛のために對獨戦争に捲込まれるよりは、寧ろドイツの東に向ふ鋒先を西に向けさせ、對英佛の戦争を西部戰線に展開させるべきだとソ聯側は考へてゐた。反對に若しソ聯が英佛と共同して獨伊と戦争を始めると假定するならば、恐らく海軍力の優勢なイギリスは直ちに海上封鎖を斷行して、ドイツの糧道を斷つ作戰に出るだらうから、ドイツは死物狂ひになつて、東の方ソ聯へ殺到して来るだらう。西部戰線に於てフランス陸軍はイタリヤが引受ける、難攻不落のジグフリード線はフランス軍のドイツ國內侵入を堰き止め得るから、この方面はドイツは僅かの守備によつて事足りる譯だ。その結果は、前記のソ聯領ウクライナ穀倉地の攻略に向つて、ドイツは國軍の精銳を集中するに違ひない。その場合ソ聯が蒙る損傷は一通りのものではない。歐洲大戰の血

腥い大殺戮戦はソ聯領土内で展開せられる、しかもドイツ軍の精巧な戦術振りは前大戰以來ソ聯はよく知つてゐる。ソ聯の恐れるものは強大なドイツ國軍である。これに加ふるに、若し東方からその虚を衝いて日本が攻進することでもあつたら、ソ聯は一溜りもなく潰滅するだらう……そんな損な役割を英佛のために演ずる愚は出来ない……。

とクレムリンの政治家達が考へたのは當然過ぎる程當然なことである。軍事使節などをモスコウに送り、荏苒月日を経過して、しかも共同戦線結成に最後の土壇場で背負投げを喫したイギリスの齟齬は其處にあつた。スターリンは一方で英佛側と折衝を続けながら、知らぬ顔で今迄は不倶戴天の仇敵であつた筈のヒットラーに手を差しのべた。そして獨ソ兩國間にはこの危機を逆用すれば、却つて情勢を好轉すべき一つの諒解點のあることを示した。事ここに至つてはヒットラー總統といへども、最早絶體絶命である。ソ聯が英佛と同盟を結んで對獨戦争を起した場合と同様に、このスターリンの向けた水を拒絶してヒットラーが進めば、ドイツは決して樂觀すべき將來を豫期できないことは決つてゐる。恐らくソ聯は英佛と聯合して東西からドイツを挾撃する態勢を本當にとるだらう。その情勢はまさしく前歐洲大戰の形勢を髣髴せしめるものがある。若しもそれにも構はず交戦状態に入ればどうするか。成程ドイツにはイタリヤといふ無二の味方がある。然しそのイタリヤは資源が貧弱であつて、國內には戦時工業の原料や石油などを持たない

國である。だから假令この場合イタリアが参戦してドイツを援けたとしても、ドイツは却つて戦線が擴大する爲めに、兵力と資材を割いて、逆にイタリアを援けなければならぬ結果になつて了ふ。それではこの苦境に立つたドイツにとつて、盟邦日本はどうしてくれるか？ 日本は支那事變といふ總力戰の眞最中である。然も當時の平沼内閣はドイツの提議した軍事同盟締結の取定めを繞つて、七十何回の閣議を開きながら、依然態度は決定しない。とてもものに、この急場には間に合ひさうもない……もう情勢は遂巡を許さない……。

ヒットラーは遂に最後の吐をきめた。愈々英佛を敵に廻して戦争だ！ 背に腹は替へられぬ！ ソ聯の穀物と石油とを確保して、罷り間違へばバリを屠り、ロンドンを灰燼にするまでだ！！

一九三九年八月二十三日、ドイツ政府は、突如獨ソ不可侵條約の締結を發表して世界を驚かせた。

兎に角ヒットラーが百八十度の轉廻をしてソ聯と握手をしたのだから、世界が呆氣にとられたのも無理はない。まさに世界政局は一夜にして轉廻した觀がある。これにはイタリアも暫時開いた口がふさがらなかつた。モスコウに於ける英佛ソ軍事同盟の交渉などは、その一瞬間に立消えとなつて了つたこと勿論であり、小田原會議を繰返してこの不意打を喰つたわが平沼内閣も「複雑怪奇」の言葉を殘し、ドイツのこの豹變に就いて世論轟々たる中に、崩壊し去つたのである。

然しこれはよく考へると決して複雑でも怪奇でもなかつた。世界情勢が一氣に「戦争」といふ、極めて單純な、明瞭な一本の筋道へ突き進んだだけなのであつた。

獨ソ不可侵條約はかくして成立した。ドイツはもう何時でも、その全力を傾倒して英佛を正面の敵として戦ひ得る態勢を完備した。

*

*

*

さてそれでは一方、ドイツのダンチヒの返還要求と廻廊内鐵道敷設權の要求に對するポーランドの態度はどうか？ ポーランドは斷然これを拒絶して、假令國を擧げて焦土と化すともドイツに抗すると息捲いて、その鼻息は豫想以上に荒かつた。勿論その背後にはイギリスがゐて、若しドイツが要求貫徹のため武力的行動をとるなら、即時ドイツに宣戰して、ポーランド救援を斷行するといふ約束が成立してゐたからである。

情勢がかうなると最早ドイツとポーランドの武力的衝突は不可避の状態となつた。獨波國境は一觸即發の危機に曝され、ヒットラー總統の所謂「無血外交」は適用されなくなつたのだ。曩に締結された獨波不可侵條約などは、この危局を迎へては一片の反古と化したのである。事ここに至つて、若しヒットラーが實力行使の擧に出ないで、ポーランドの拒絶に對して怖れをなし、その儘沈黙して了ふやうなことがあれば、ドイツをして英佛と抗爭せしむる目的でドイツと握手

したソ聯を失望させ、果てはドイツ何等爲す無しと見て再び對獨包圍陣が結成されるに違ひない。そんな事にでもなつては取返しがつかない。イギリスは表面ではポーランド救援を廣言してゐるが、果して眞實に實力に訴へる自信はなく、チェンバレンは出来るだけ戦争回避をしたい肚は見えてゐる。英佛兩國の再軍備體制は到底ドイツの比ではない。だからドイツがポーランドに進撃したことを理由として、假令英佛が雄々立ち上つたとしても、直ちにドイツの背後に決定的な大戦争が起るとは考へられない。加ふるにカイテル將軍の計畫する電撃作戰をもつてすれば、一箇月で全ポーランドを壊滅し得る確信がある。水も漏さぬ緻密な作戰と鐵の訓練を與へたナチスの精銳は總統の命令を待つてゐる。だから戰ふなら、時は今だ。とヒットラーは見てとつた。

所でポーランドはこれとは全然反對な計算を立ててゐた。假令ヒットラーが如何な強硬な態度に出ようと、ドイツの弱點は國內經濟にある。だからイギリスが經濟封鎖を斷行すれば一溜りもなく參るに決つてゐる。さうなればポーランドの武力が假りに不充分としても、半年間以上ドイツ軍の進撃を阻止しさえすれば、英佛が必ずドイツの心臟部たるラインランドを占領し、北海海岸を封鎖してくれる。その機に乗じてポーランドは守勢を轉じて反撃を加へ、形勢を逆轉せしめて寧ろ今度はこちらからベルリン進撃に轉じ得る。その場合ドイツに待つてゐるものは全面的な崩壊に次ぐ、新たなドイツ膺懲のヴェルサイユ條約であつて、東プロシアはもとよりのこと、

東南ドイツの地域が轉り込んで、再び往昔の大ポーランドの夢を復活することが出来る……とまことに都合よく考へてゐた。

だが事實は！ 九月一日になつて、最後通牒の期限が切れ、ドイツの機械化大部隊と天を覆ふ銀翼の空軍大編隊が、折重なつてプロシア及びシレジアの國境を東に越え、ドイツ側の豫測はそれこそ測定機で計つたやうに的中し、ポーランド側の豫想は哀れ淡き夢の如く頼りないものであつたことが直ぐ證明された。

ドイツ軍の猛進撃の前に全ポーランドの航空基地は一舉に叩き潰され、ポーランド軍の各戦線の聯絡は瞬く間に遮斷しやだんされた。クロトツシンの戦ーグラウデンツの戦ーオストロレンカの戦と孰れもポーランド側の惨めな敗戦である。そして最後にポーランドの主軍は忽ちクートノ曠野くふよに於て、嘗て帝政ロシアの大軍がタンネンベルグで鏖殺あうそくされたよりも、もつと物凄い螺旋狀大包圍陣らせんじやうの渦巻うずまきの中へ吸ひ寄せられ、杳然たるうちに惨めにも捕虜となつて了つた。參謀總長スミグリ元帥の豪語も何のその、ポーランドは政府も參謀本部も首府ワルシャワを放棄して、東ポーランドの沼澤地方か、それともソ聯の國境内に遁げ込むより外に途のない惨狀である。

所が一方ドイツ軍の餘りの急進撃に不安を感じたソ聯は、急にポロツク及びミンスクの機械化部隊を出動せしめて、ポーランドの東疆一帯に闖入かんにゅうして各地を占領して了つた。もうポーランド

の命數は定まつた。ドイツ進撃の開始から僅か十八日間にして首都ワルシャワは陷落し、一箇月にして二十二箇年間の獨立を保つたポーランド共和國は、世界地圖から抹殺えつさつされて姿を消した。その間九月二十二日には、ブレストリトウスクに交驛かうえきを遂げた獨ソ兩軍は分割協定を作り、全ポーランドの處分問題を議またくうちに取定めて分割した。

この驚くべく敏速なポーランド殲滅戰の勝利によつて、ドイツ軍の聲價は昂まつた。然しその眞價は未だ一般には認識されなかつた、といふのは戦ひの相手が直接ポーランドであつて、英佛でないからだ。

二七、宣戰されたる平和

ドイツの對ポーランド戰の開始と共に、流石にイギリスと雖も默視してゐる譯にはゆかない。九月一日を以て英佛の對獨宣戰布告が行はれ、それと共に、いよいよ第二次歐洲大戰は勃發したることとなつた。この意味でポーランドの悲劇戰は、まさしく歐洲大戰の第一幕を構成した結果となつた。

所で英佛は宣戰だけは布告したものの、肝腎なポーランド救援の軍事行動を起さない。ドイツの背後を衝くべき英佛の動きを豫期したのはあながちポーランドのみではなく、世界全體であつた。然し第二次歐洲大戰は最初から從來とは異ふ様相を示したのである。餘りにも英佛政治家の口先きを信頼し過ぎたポーランドのルッス・スミグリ元帥や外相ベックが、命から／＼ルーマニアに逃げ込んで、切齒扼腕して英佛の騎甲斐なさを恨んだが、後の祭りであろうにもならない。第一その時には既にポーランドといふ國が消滅して了つてゐる、況んやポーランドは最後まで國外にあつても戦ふと言つても何にもならない。或は英佛としても、約束を守つて宣戰布告をしたのであるから援助する意思は充分ありながら、作戰上それが不可能であつたのかも分らぬ。或は又

援助の準備に掛つたが、ドイツ軍の進撃が餘りにも敏速果敢であつたので間に合はなかつたのかも知れぬ。然し孰れにしても結果としては拱手傍觀ポーランドを見殺しにすると同様になつた。

かうして國際的な面目を著しく失墜した英佛に對し、ポーランド戰を完全に勝ち畢つたヒットラー總統は、十月初め和平の提唱をして相手を煙に捲いた。

「ポーランド戰の勝利によつてドイツ民族の生活圏は確保された：残るのは植民地の問題のみだ：英佛は自己の生命線ならざる東歐や中欧の問題を干渉することを止め、全歐洲の幸福と共榮のため、今後ドイツと協力してはどうか：それならドイツとしても、殊更に戰爭を繼續して無事の若人の血を流したくはないのだが：」といふ意味のことが和平提唱の理由であつた。惡くいへば誠に人を食つた話だ。

英佛側がこれを拒絶したのは勿論である。若しこれを認めればドイツの歐洲制覇を認めることになる。チェンバレンは早速これに對し――

「ヒットラー主義が、この地上から拂拭されぬ限り和平交渉は絶対に問題にならぬ――」

と應酬して見榮を切つた。それでは英佛は積極的な武力攻撃を開始するかといふと、さうではない。尤も假令攻撃を企てるとしてもドイツの北海海岸の警備は嚴重を極め、又西部戰線はジグフリード線が難攻不落を誇つて控へてゐる。では逆にドイツ軍が西侵することはないか？否、

それは全然不可能だ。なぜなら、ジークフリード線が難攻不落であると同様に、マジノ要塞線の突破は、到底人間業では出来ない。その僅かな一據點だけを切崩すだけでも、百萬のドイツ兵が三箇月の日子を費し、五十萬の血潮を犠牲にしても、その可能性が危ぶまれる程の堅牢さである。マジノ線が其處にある限り、ロンドンやバリの生活は平常と變る必要はない。この場合ドイツを参らせするには、ドイツの厭がる長期戦を行ひ、海上封鎖によつてその糧道を斷つに限る。ドイツは恐らく第一次大戦と同様に、否もつと早く國內の擾亂を惹起して降伏すること疑なし。といふ常に何物かに頼つて安んずる至極吝氣な、且つ神經の鈍い考へ方で、英佛の爲政者は所謂、「宣戦された平和」を持續する態度であつた。

この膠着状態は半年以上も續いた。我國でもこの宣戦された平和の状態を目して、新歐洲大戦は大なる武力戦が無しに平和に到達するのではないか、などと取沙汰されたことがあつた。だがそれは錯誤であつた。ドイツはその間着々と對英佛の決戦を準備し、その工作を爲し遂げてゐた。即ちイギリスの海上封鎖に對しては、ソ聯との間に獨ソ經濟協定を成立して、それを無力化して了つた。そしてソ聯がバルト諸邦への工作及びフィンランド戦に乗り出した場合には、英米佛がソ聯の行動を手痛く非難したのとは反對に、寧ろソ聯の成功を祈り、或はそれに援助を送つたことさへある。

ソ聯がフィンランド攻撃戦に案外手間取ると見るや、ドイツは一九四〇年の二月、數多の技師と參謀將校をソ聯に送り、難攻不落を以て有名だつたフィンランドのウイボルグ要塞の突撃を助けさせた。このドイツ側の協力でウイボルグ要塞は僅か數日で陥落して了つた。五ヶ月もかゝつて陥落し得なかつたソ聯は、ドイツ側の協力で忽ち破壊し得て、更にその戦勝によつて有利な條件の下に、フィンランドに對して平和條約を締結することが出来たソ聯の感謝はもとより當然であるが、同時にそれはドイツにとつても非常な收穫を齎した。といふのは、元來このウイボルグ要塞は、フランスのマジノ線やベルギーのレオポルド線の要塞と同性質の築構であつたから、ドイツとしては將來マジノ線やレオポルド線を突破するためには、是非ともウイボルグ要塞の構造や堅牢さを實地に研究しておきたかつた。ところがその結果はこの種の要塞は、ドイツ軍にとつて難攻不落でないことが證明されたからである。

ソ聯工作を一段落したヒットラーは、來るべき情勢に備へて、イタリアとの諒解を新にすべく、一九四〇年三月、ムッソリーニ首相とブレンネルに會談し、同首相の絶對的賛成と支持とを得た。

會談の内容はイタリアをして當分好意的中立を守つて貰ふことだつた。この時ヒットラーはイタリアの即時參戰を寧ろ希望しなかつた……といふのは、若しもイタリアがドイツ側に立つて、時期尚早の參戰をすれば、「宣戰された平和」の對峙状態は忽ち破れて、イタリアは英佛の攻撃的

となるのは決つてゐる。フランスの陸軍は全力を擧げてイタリア攻撃に集中し、イギリスの海軍も忽ち地中海を中心としてイタリアを包圍する。その場合ドイツはその擴大された戦線を守るため、有力な援兵をイタリアへ送らねばならない。さうした戦闘状態はドイツには非常な不利益でなければならぬ。イタリアの尙早な参戦は、却つて獨伊兩國を動きのとれない境地に陥し入れる。寧ろドイツとしては英佛の軍事的勢力を本國に釘付けにして置いて、ドイツだけの獨力で、各個に擊破粉砕し、その虚に乗じてイタリアに起つて貰へば、獨伊兩國は共に勝利を博すことが出来るのではないか……といふのが兩巨頭の會談の内容であつた。そしてこのことはその後恰も定石通り事實となつて表はれたのであるが――

誰の力をも藉りず、先づ獨力以て敵を粉砕するのが、この時のヒットラーの決心であつた。そしてその準備は全く成つた。

二八 ノルウェー電撃作戦

滿々たる闘志を秘めて機會を狙ふヒットラーにとつて好機が來た。それはブレンネル會談の翌月、即ち一九四〇年四月九日のこと、イギリスが中立國ノルウェー海岸を封鎖した事實を知ると、ドイツ軍は電撃作戦を以て一氣にデンマークを席捲し、ノルウェー海岸の各要港を占據し、更に四月十六日には、ノルウェー全土を確保するために、イギリスの嚴重な封鎖線を突破して、飛行機と輸送船によつてカデカット海峡を押渡り、意外な大軍を急速にオスローに進駐させた。そしてノルウェー各地にドイツ軍は警戦し、遂に英佛軍をしてノルウェー海岸を放棄せしめて、全部本國へ引上げさせて了つた。デンマーク、ノルウェー全土を含む北歐の要地は旬日にして、ドイツの完全な制壓の下に收められた譯である。

この北歐作戦の成功によつて、ドイツは經濟的、戰略的に非常な優位を獲た。スウェーデンの鐵礦を確保したこと、スカンヂナヴィア諸邦のイギリスに依存した貿易をドイツに振替へたこと、ノルウェー海岸にイギリス本土攻撃のための空軍基地を獲得したことなどが、その主なるものであつた。

思はざりし電撃戦によつて「宣戦なき平和」は、思はざりし方面に於てその平靜が破れたのである。

然るにドイツの北歐へのめざましい進出に辟易したイギリスは、今度は手段を變へてバルカン諸邦への工作を開始して、その方面からドイツ壓迫を企てて來た。そこで舞臺は北歐を離れて、バルカンに移り、世界の視聽は其處に集中された。さてポーランド戦といひ、又ノルウェー電撃戦といひ、ドイツが武力戦では斷然強いことが明瞭であり、反對に英佛側が豫想外に弱いことが暴露されたやうだ、然し戦争は長期戦である、未だ問題は多々殘されてゐる、イギリスの得意の外交手段によつてドイツの後背地バルカンの動向はどうなるか？ かうして複雑微妙なバルカンの外交争鬪戦が俄かに活況を帯びてくると共に、地中海に戦雲が漲つて來た。

武力戦を外交戦の形にして、舞臺をバルカンに移したイギリスの肚はといふと――

(一)イギリスの對獨海上封鎖を一段と強化して、ドイツの後背地たるバルカンのドイツの確保する經濟勢力を擾亂せしめること。(二)バルカン諸小國が列強の板挟みになつてゐるのに乗じ、その中へイタリヤ及びソ聯を各々政治的經濟的に進出させ、その利害を衝突せしめて獨、伊、ソ相互の間に確執を來させること。(三)ドイツが後背地バルカン諸邦を自己の陣營に引入れるために武力を行使せざるを得ない情勢を起し、ために海軍力勘いドイツをして北はスカンヂナヴィア

から南は地中海に至る甚大な戦線に疲勞困憊せしめること。(四)従つてドイツが暫くは西部戦線に勢力を集中する暇なからしむること等であつた。この建前のもとにイギリスのバルカン諸邦への工作は執拗に續けられた。

二九、世界新秩序への巨歩

然しヒットラーはイギリスの擾亂策には乗らなかつた。英佛が盛んにバルカンを掻き亂し、ルーマニア、トルコ、ギリシアに反獨的空氣を煽つて、戦線を南北に擴大させると、彼の烟眼は寧ろ英佛の陰の工作を睨んでゐた。英佛がドイツの關心を南方に向けてゐると信じて、祕かにベルギーとオランダを籠絡して、ベルリン空襲の航空基地の作成を計畫してゐることを探知した。若しもそんなことをされたら、ドイツは機先を制せられて非常な損失を蒙むる。恰もよしイギリスではチェンバレン首相に對し不信任の聲昂く、フランスでは軍の首腦者であるガムランとウエイガン兩將軍の間に確執が生じてゐる。ヒットラーの意は決した！ ナチスの大軍は物凄い勢でオランダとベルギーの國境を突破して西侵した。

時恰も一九四〇年五月十日。歐洲大戰は愈々本格的な争鬭の様相を展開して來た。

オランダ作戦から始まり、遂にフランスの降伏といふ歴史的な場面によつて、一先づ一段落が付いたこの大決戦に關しては、それがつい最近の出來事であり、世界に與へた衝撃が大きかつただけ、一般の記憶は尙新しい筈であるから、細かい説明ははぶかうと思ふ。要するにこの大決戦

は、殆どドイツ軍の無人の境を行く如き一方的な行動によつて終始した。ベルギー國王アルベール三世陛下の悲愴な降伏、フランダースの野に於ける悲惨極まる聯合軍の大敗北、金城鐵壁と頼んだマジノ要塞線の易々たる獨軍の突破——と總ては驚嘆すべきドイツ軍の敏速巧妙な行動のうちに終つた。

ドイツ軍が行動を開始してから僅かに一箇月と四日といふ六月十四日、早くもパリに入城しエトアールの凱旋門上には鉤十字の旗が翻翻と翻へつてゐた。ドイツ軍のバリ開城と共に約束通りイタリアはドイツ側に立つて愈々英佛兩國に宣戰の布告をした。

六月十七日、ポルドウに移つたフランス新首相ベタン元帥は悲愴な對獨降伏を聲明したのである。ヒットラー總統は翌十八日ムッソリーニ首相とミュンヘンに會し、對獨媾和條件を前以て議した後、一九四〇年九月二十二日、コンピエーニュの森に於てフランス代表アンジェ將軍以下の委員を引見して、茲に光榮ある獨佛休戰條約に署名した。その會見の場所こそ、嘗てドイツ自身が二十年前、さきの大戰に敗れ、涙を吞んでフォッシュ元帥の前に屈辱的休戰條約を強制された同じ展望車の中であつた！ ヒットラー總統の得意や思ふべしである。

かくして、北はノルウェーから南はビスカヤ灣に至る歐洲大陸の西海岸線全體を、その掌中に

收めたドイツは、今や歐洲大陸から閉め出されて僅かに一孤島に顛落したイギリスを前にして、おもむろにその上陸作戰を練つてゐる。

ロンドンを初めイギリスの重要都市や軍事施設地には、毎日のやうにドイツ爆撃機の大編隊が姿を表はし、爆弾、焼夷彈の雨を降らせてゐる。英佛海峡には快速艇E・ボートがアルピオン島に突入する日を待つてゐる。然しドイツのこの間斷ない空襲の中に、イギリスも執拗な抵抗を繼續し、時としてはその爆撃機を遠く歐洲大陸の空に飛ばせて、フランダース方面のドイツ軍の基地や、或はベルリン、ラインランド、北海海岸地方に報復的空襲を行つてゐる。

然し孰れにしても、今日では未だ潰滅には至つてゐないが、イギリスは到底昔日の大英帝國の勢威を挽回し得ることは出来ない。それは丁度嘗て歐洲に覇をととなへたポルトガル、スペインが衰退し、海洋の覇權を掌握したオランダが顛落したと同様に、海洋帝國を誇つたイギリスも過去の歴史の中に書き加へられようとしてゐるのである。

顛落せんとするイギリスの最後の足掻きは、希望は大西洋を隔てたアメリカの援助である。アメリカのイギリスへの援助は最近頓に活潑になり、今春のルーズベルト大統領の致書は、アメリカの單なる援助ではなしに參戰を示唆する程のものである。然しそれは結局新大陸の運命を脅かすことになりはすまいか。アメリカが果してそこまで乗り出すかは疑問である。寧ろドイツのイギ

リス本土上陸作戰が敢行せられる前に、アメリカは充分な援助を行ひたいと焦慮してゐるのだ。それに對してヒットラーのイギリス上陸作戰はいつ行はれるか？ それは今春を期して敢行されると言はれる。然し意想外の時と場所を選んで奇襲的な電撃戰を遂行するヒットラーは、又しても如何なる舉に出るか分らない。

今日のドイツはかうした一方で、イギリスの徹底的崩壊などに目もくれず、歐洲新體制への新しい秩序を計畫して、着々としてその歩を進めてゐる。今日世界は獨伊を中軸とする歐洲圈、ソ聯を中軸とするソ聯圈、北米合衆國を中軸とする米洲圈、そしてわが大日本帝國を中軸とする東亞圈の四つの大きな共榮圈に分たれることは恐らく間違ひあるまい。

わが國は滿洲事變以來、より飛躍した國家的な更生が始まつて、國民のイデオロギーの上で、勿論獨伊と肝膽相照のものがあつた。即ち古い個人主義的自由主義的な殻を脱却して、眞の大同民族本來の精神主義的な本元に復歸せんとするには、全體主義的な基礎の上に立つて、英米のデモクラシイ思想を排撃せんとする獨伊と方向、目標を同じくし得たのである。であるからこそ日獨伊防共協定が先づ成立したのである。かうして理想と目標を同じくする日本と獨伊兩國とは、その後種々の曲折を経たが、遂にそれが當然到達すべき、避け難き世界史的絆キツナによつて結合せられたのだ。

昨年九月二十七日に締結をみた日獨伊三國同盟がそれである。

× × × ×

以上で私の「如是我觀」としてのヒットラー傳を終る。

彼の仕事はこれからだ。彼の過去の戦ひは第三帝國建築の地均らしをして、その基礎工事をすることであつた。つい昨日まで建築の下繪を描いて、それに線を引いたり色を塗つたりして生活してゐた彼は、結局その仕事を紙の上でなく、ドイツといふ土地の上に繼續し、ドイツ人といふ血潮の材料で來るべき第三帝國の下繪を立派に描き上げた譯だ。

然し元來、彼は建築の下繪なんか描くのは生活のための戦ひの手段ではなかつたか？ 本來は一個の美術家になるのを理想としてゐたではなかつたか？ それなら彼はその素志を貫くに丁度いい地位にゐる。假令それはカンヴァスの上に色を塗つて書き上げる美術ではなくつても、彼は今迄に國民的革命の地均らしをして完成した基礎工事の上へ、これから愈々本當の大殿堂を建て上げる積りでゐるだらう。

私共はそれが彼の幼少の時の素志であつたやうに、來るべき第三帝國の上部構造が耐久の意味でも調和の意味でも、眞に堂々たる大藝術品であることを期して待たう。――

—
—
—

(外地定價壹圓六拾五錢)

昭和十六年五月十一日印刷
昭和十六年五月十四日發行

定價壹圓五拾錢
郵送料拾錢

著者 黑田禮二

發行兼印刷者 佐藤義亮
東京市牛込區矢來町七十一番地

印刷所 富士印刷株式會社
東京市小石川區西江戸川町

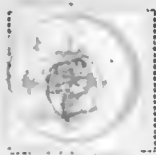
發行所 新潮社
東京市牛込區矢來町

電話牛込

(長)
八八八八八
〇〇〇〇〇六五
九八七六番番番

振替東京八〇八番

アラトッヒ統總



新傳記叢書

一
冊
壹
圓

ペスタロッツチ

田中著
寬一

畏敬すべき教育學の天才の尊き生涯が、平易に、しかも感銘深く展開された。(著者は文壇・文壇大教授)

ミケランジェロ

板垣著
鷹穂

數々の驚嘆すべき作品は如何にして成つたか。不出世の天才の多難にして尊き努力の一生を見よ。

ツエツペリン

隈部著
雄

はじめて硬式飛行船に着手した彼はいかに多くの困難と障害とを突破したか。(著者は工部・帝大助教授)

アムンゼン

山本著
清

著者は全幅の情熱と多年蒐集の資料を傾けてこの偉人の壯舉と全面目を語つた。(著者は理博・三高教授)

パスツール

林著
謙

細菌發見といふ偉大な事實を成して人類を傳染病の暗黒から救つた生涯を叙す。(著者は醫博・慶大助教授)

事變下國民の生活讀本

●生きる力

●向の上の道

●明るい生活

佐藤義亮著

新體制の理論や定義は飽きる程讀んだり聴いたりしたが、それより簡單明瞭で實行し易い此の書が第一である。(今村力三郎氏)

定價各至・50

厚生省保險院編

價一・〇〇

▼結核は必ず癒る

三浦逸雄著(厚生省囑託)價一・三〇

▼新職業讀本